
Demise

メルゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D e m i s e

【Nコード】

N 5 2 3 2 N

【作者名】

メルゼ

【あらすじ】

この物語は日々平凡で詰まらない生活を送ってる何処にでも居る学生と言う学園物の主人公フレーズを持つ人物が主人公……では無い。霊が見える、神剣が喋る、友人は変人、親から勘当されてる、拳句の果てに冒頭で殺される。

たぶんチート。たぶん最強。そんな能力を持つ自称神々の戦いに巻き込まれる主人公のお話。

キーワードとあらすじが符合しないのは気の所為。

プロローグ（前書き）

自己満足の塊のような作品なので合わない方もいるかもしれませんが、暇潰し程度に楽しめたのなら幸いです。
誤字や用法ミス等があればお知らせください。

ブローグ

息も荒く街中を駆け抜ける。

足がぶれ、こけそうになろうと必死に足を動かす。

爆発しそうなくらい心臓が鼓動し、それでも酸素が足りない俺は金魚の様に口をパクパク開く。

「っ！！！」

ブレーキしそこね、階段から真つ逆さまに落下する。

一瞬思考が硬直するが、頭を護るように腕を十字に組み衝撃に備える。

ガンガン体中を打ちつけるが、それでも止まるわけにはいかない。全身打撲となった体に鞭を打ち、すぐさま駆け出す。

詰んでいる。

俺はもう詰んでいる。

それでも無様に逃げるのは生物の本能所以か、俺がただ生き汚い所為か。

街を幾ら駆けずり回ろうとも、目的は無い。

ただ、一分一秒を逃げていたかった。

本懐したビルの跡地。

脇にあった建物が消え、見通し良くなった路地裏通り。そこにアレが現れる。

ゆっくりと、散歩するかのようにこちらに歩いてくる。

一歩一歩確実に死が迫る。

口から零れそうになる悲鳴を、無理やり息を吸い込みねじ伏せ、走り出す。

十字路を左に、交差点を右に、廃墟となった家の跡地を乗り越え、半壊したビルに駆け込む。

撒けたか？

まだ追ってきているか？

それとも……。

「御早い到着で……」

笑うしかなかった。

ジグザグに走り抜けたのに、コレは俺が来るのを解っていたかのよう
うにここで待っていた。

スツとソイツは指を俺に向ける。

俺はいつでも逃げれるよう身構える。

少しでもやばいと思えば飛び出すつもりだった。

「ぐっ！」

視界に長い棒の様なものが見える。

何だ、これは…？

ソイツがいつ動き出さないとも限らないのに、俺はそれが気になっ
て仕方なくなった。

恐る恐る視線を下に向ける。

どうやらその棒はどうやら俺の心臓あたりから生えているみたいだ。
スローモーションで体が傾いていくのがわかる。

今更になって、ああ、俺は棒状の何かで先程既に突き殺されたのだ
と、崩れゆく視界の中、得心した。

なんて間抜け。

なんて呆気ない最後。

視界にソイツの顔が映る。

暗くて表情がよく解らない事がなぜか悔しかった。

溜息と共に走馬灯の様なもの駆け抜ける。

なあ、お前は一体誰なんだ？

なんで、こんな事を……。

薄れゆく意識の中、俺はソイツに声無き問いを投げた。

+

むかしむかし、ある世界が滅びました。

その世界は別段高度な文明を誇っていたわけではありませんが、自
然と共に生きる平和な世界でした。

しかし、滅びは簡単にやってきました。
ほかの世界の神がやってきたからです。
他の世界の神は言いました。

—— 汝ら、他人の自由を愛せ、と。
人々はなる程、と感心しました。

お互いに相手の自由を尊重する事によって衝突を少なくし、より平和な世界が築けると解釈したからです。
もちろん初めからそれが解る人は居ませんでした。
しかし別世界の神様は頑張りました。

無理にそう信じさせようとせず、問題が起きたときだけ登場し、こ
うなることを防ぐために自由を愛さなければならぬと根強く説き
ました。

その甲斐あって世界の多くの人の賛同を得ました。

しかし、世界には相手の自由を望まない者が居ました。

それはもともと自由を持って居ない人達です。

尊重される自由を持っていない彼らは自由を持っている裕福な人々
から迫害を受け始めました。

他人の自由を尊重する事で多かれ少なかれ発生するストレスが彼ら
に向くのは火をみるより明らかでした。

そんな彼らが怒るのも当然で、彼らは人々に復讐しようと思いまし
た。

しかし、数が数なだけに思うようにいきません。
そんなとき新たに別世界の神様が登場しました。
その新たな神様は彼らに言いました。

—— 人は皆平等でなければならぬ、と」
学校の屋上で長い事語っていた彼女は、いったんそこで言葉を切っ
た。

そしてフェンスを越えて吹き抜ける風と共にこちらを向く。
煌びやかな橙色の髪が流れる。
と言っても流れるほどの長さは無い。

そんな感じがしただけだ。

「この後どうなると思う？」

遠い目をしながら彼女は俺に尋ねる。

どうなると聞くのはいいが、こんな長つたらしくてどうでもいい話題を真面目に聞く奴等いるのだろうか？

適当な本を読んで変な電波を受信したのか知らないが、哲学めいた事を論じたいなら命題を簡潔にしてから話せと。

そんな事を思う。

まあ、こいつの事だから『いるじゃん前に』とか返されるから心の中で思うだけにするが。

「滅びるって最初に言っただけだったか？」

俺はそんなこいつの事をちらりと見ると、視線を大空に戻した。

雲ひとつない真つ青な空……と言う訳でもなく、点々と雲があるありきたりな空がそこには広がっていた。

取り敢えず適当に受け流してればいずれ終わるだろうという魂胆だ。夕日が見えるまで永遠と下らない事を喋り続けるイメージが見えるのはきつと気のせいだろ。

そうならない事を空に祈るとしよう。

「いや、そうじゃなくてさ。この後どうやって滅びるに至ったか、って事」

望む回答が得られなかったためか、半眼で睨んでくる彼女。

わざとやってる？とも言いたそうだ。

わざとやっている事が解っているのなら早く帰らせてほしいものだ。

「……はあ」

思わず溜息を吐く。

そもそもどうしてこんな状況になったのかと言うと、授業をサボって屋上で寝ていたらいつの間にかこいつが側にいて、俺が起きたことに気がつくといきなり訳の分かない話を始めた、と言うわけだ。

そうだな、物語風に語るならこんな感じだ。

薄ら開けた瞼に陽光が差し込む。

木のベンチから起き上がると隣には見知らぬ女子が座っていた。
彼女は語る、お伽噺を。

その話は幻想的で、何処か現実味を伴った話だった。

俺はその話を聞いた時、何かが始まる予感が……しねえよ。
何を自分で自分に突っ込み入れているんだろ。

自分のやっている事の愚かさに眩暈がしてくる。

「どうせ、二つの国家が出来てお互いに殺し合って滅びたんだろ？」
俺は適当にやる気のない返事を返す。

こんなどうでもいい事に返事を返すあたり、案外俺はお人好しなの
かもしれない。

自分で言っただけ世話ないけどな。

「おいしい。国家を作るとこまではあってるけど、その後は殺し合っ
たりせず、お互い不干渉を決め込んで平和に暮らしたのよ」

はっずれーと言いながら、こいつは俺の頭をクシャクシャと撫でて
くる。

どうやって滅びるに至ったか、と聞かれて答えたのに解答がこれだ。
ム力つくを通り越して、いい加減付き合いきれない。

「あんたは何が言いたいんだ？」

こいつの手を振り払いながら、大きく溜め息を吐く。

毎度、毎度こいつとの会話は疲れた記憶しかない。

「架音……、いい加減人を代名詞で呼ぶのやめてくれる？ あた
しには小霞紅天って言う立派な名前があるんだけど」

呆れたような目で見てくる紅天。

いや、怒っていると言う方が正しいか。

とにかく冷めてる目線が痛い。

が、している事の酷さなら俺の方が被害者なのだから、これぐらい
はせめてもの抵抗だ。

「俺があんたをなんて呼ぼうが勝手だろ？ 別に嫌みなあだ名で呼
んでる訳でも無いし」

そう言う俺は、立ち上がり無理やり会話を断ち切るべく屋上を後

にする。

これ以上ここにいてもストレスがたまるだけだ。
俺にとっても、こいつにとってもな。

「——っ！——っ！」

閉めたドアの向こうから意味不明な言語が聞こえるが気にしない。
ちょうどチャイムもなつたし戻るか。
俺は一人階段を下りていった。

第一章 『da capo』 その1

「よお、ピッタリな帰りだな」

教室のドアを開けるとクラスメイトが渋く低い声で出迎える。

椅子の背凭れに腰掛け、指輪や髑髏のネックレス、ブレスレット、ピアスと全身銀細工で埋め尽くされている男だ。

うちの学校の校則がいくら緩いとはいえ、ここまでしてくる奴がいるとは誰が思っただろうか？

なぜ注意されないのか未だに不思議だ。

「鬱陶しいのが来たからな。アレに俺の場所を教えたのはお前か？」
ガン飛ばしていると思えない眼つきの悪さの男に、俺は普通に応答する。

信じられないかもしれないが、このそこの不良が道を譲るほど、

ガラの悪いコイツは俺の友人の一人だ。

名は赤城^{あかしろ} 夜行^{やこう}、案外名前が普通な所を見るとそこそ真つ当な人間に育つよう名付けられたようだ。

結果は推して知るべしだが。

「おいおい、俺を疑うのか？ 俺らの中から情報が漏れるのは大抵、沙良紗からだろ？」

「ひどおつ。やつくん私の事そんな風に見てたの？ 同じKY、Sのメンバーだと思ってたのに」

俺が言葉を返す前に後ろから新たな声が割り込んでくる。

二人して声のした方を見ると、柔和な笑みを浮かべた女子が敬礼の様なポーズで立っていた。

「事実だろうが、お前の耳に入れば校内放送になるのと同じくらいダダ漏れするからな。——後その名で呼ぶな、つってるだろうが」

「そんなことないよねえ？ 輪廻くん」

底冷えする赤城のガンを華麗にスルーし、俺に話しかける如月。

流石K Y ' S 一の変人なだけある。

K Y ' S とは如月が勝手に決めた俺たちのグループ名の様なものだ。当然さつき屋上にいた変人もそのうちの一人だ。

今俺に同意を求めたのが如月沙良紗

そして俺が輪廻架音

ここまでくれば勘の良い人なら解るかもしれないが、メンバーの下の名前がKとYとSで構成されている。

だからK Y ' S と言う訳だ。

馬鹿らしくなるほど単純なネーミング。

前述の通り空気読めないやつらのグループだからK Y ' S になったわけではないが、個性的なメンバーの所為か、空気読んでよ的な意味でもK Y ' S と呼ばれたりする。

むしろそつちの方が多いのが現状だな。

「そういえば、さつきから声がしないが、夢渡はどうした？」

如月の問いをスルーし、赤城に問いかける。

アレ？ 輪廻くん？ もしかしてスルー？ とか言う如月の悲痛な声が聞こえるがそれも無視だ。

こう言う時、いの一^{そいつ}番で騒ぎだす、夢渡が静かなのはおかしい。

フルネームは創地夢渡

こいつもK Y ' S の一人で、ある意味一番空気が読めないやつだ。

「んあ……。あいつなら番んとこだろ。——あゝ、しらねえ

か？ 深窓の令嬢な感じの女子を」

「いや、初耳だな」

「輪廻くん、そゝ言うの興味無さそうだったからねえ」

うんうん頷きながら如月が会話に加わる。

流石K Y ' S の一員、立ち直りのスピードが桁違いだ。

「知ってるのか？」

「うーん、顔見知り程度の意味でならねえ」

眉間に皺を寄せ、珍しく如月は曖昧な言い方をする。

先の会話でも解るように如月は知っている事は何でも言う常時自白

剤服用者の様な人物だ。

だから質問に対しては、知っているか知らないかの二通りしかないのが基本なのだが、珍しい事もあるものだ。

「あつ、思い出した」

顎に手を当て何かを悩んでいるような素振りを見せていた如月は突然声を上げる。

「夢渡の彼女の事をか？」

「違う、違う。先輩が輪廻くんを探してた事を伝えるのを忘れてたあゝ。何でも頼みたい事があるとかないとか、かなりしたり顔だったから気をつけてねえ」

冷や汗がたらりと背筋を伝う。

いやな予感しかない。

サボタージュしたいとこだが、先輩の場合そうもいかないだろう。なんせ同業者だ。

姉貴と行動を共にすることが多い所為で、必然的に顔を合わせる事が多い。

「まあ、何とかなるだろ。そう言う事で俺は帰るから」

クラブ活動で残る二人に手を振ると、先輩に用件を聞く旨のメールを送る。

玄関口で靴に履き替えたところで先輩からメールが返ってくる。

下駄箱の無いうちの学校では、玄関口が上履きと靴の境目となっている。

シューズ袋を持ってくる奴もいるが、男子は大抵教室に上履きを置き、登校の際は靴下で教室に来る事になる。

そんなどうでもいい事を考えながら携帯を開ける。

「やつほ（*^^）v ユミでえーす」

今日の放課後実はバイトに行かなきゃいけなかったんだけど、用事で行けなくなっちゃった（^ー^）てへ 悪いんだけどカノン君代わりに行ってくれないかな？ 天羽ちゃんを通学路に待機させているのでお願いしますm（――）m

P.S カノン君の名前って変換されないね（；ー―）
相変わらずのメールのテンションに一瞬本気で無視しようか考える。
取り敢えず『ウザい』と返信しておく。

このぐらいのささやかな反抗は許されるだろう。

だいたい天羽を待機させている時点で脅迫以外の何物でもない。
姉貴と同じで性格の悪い先輩だ。

俺は大きく溜息を吐くと、校門を出た。

+

ここで一つ自分のことでも説明しようと思う。

俺は日々平凡で詰まらない生活を送ってる何処にでも居る学生と言
う学園物の主人公フリーズを持つ人物……では無い、残念ながら
な。

また裏で人々の平和を守っているヒーロー、と言う訳でもない。

家とその家人はよく言えば古風、悪くいえば時代に取り残された一
族で、幸か不幸か今はプチ勘当中で両親とは別居している。

誤解の無いように言っておくが、別に俺は犯罪行為をしてこうなっ
たわけではない。

まあ、お家問題に巻き込まれた、とでも述べておく。

しかし、一番普通じゃないところは霊……いや、大多数の人が見えな
いものが見える、事だ。

これが俺一人だけなら自分は精神異常者で片付けられたのだが、ど
うやら俺の一族はそう言う一族らしく、所謂霊能者とか言うものだ
とか。

ほら、例えばあそこに浮いている無愛想で澄ましている奴がそうだ。
つい、と道端に浮かんでいるソレに目を向ける。

見た事もない、と言うか針金でも入ってそうな形に作られた着物に
身を包んだ少女が、宙を浮きながらこちらを見ていた。

「……………出来損ない」

浮いている少女がこつちを睨みながらポツリと呟く。

これが初対面ならはつきり言つて、第一印象最悪、面接では即アウトだ。

失礼な事この上ない。

いや、決して二回目以降なら言つていいわけではないが。

「神剣様がこの出来損ないの俺に何のようだ？」

俺は苦い顔をし、肩をすくめてみせる。

普段、此奴の様な存在に会つても無視を決め込むのだが、忌々しい事にこの顔馴染みは例外で無視出来ない。

先輩の言っていた天羽とはコイツの事だからだ。

「好きで来てるわけじゃない。カレンがお使いを頼まなければお前になど会いに来たりしない」

と、冷ややかな視線を向けてくるコイツは、俺の双子の姉であるカレンの守護霊。いや、守護神みたいなものだ。

悪く言えば背後霊だがな。

「お前今、私をそこら辺の雑霊と同じ扱いにしただろ？」

天羽はさらに目を細めて俺を睨むとずっと近づいてくる。

こいつは悪意、特に自分と姉貴に向けられる悪意には敏感らしく、邪な事を考えると内容が殆どバレてしまう。

——別にばれても痛くも痒くもないがな。

「いやいや、神剣様を悪霊や背後霊扱いする訳ないだろ？俺はストーカーみたいだなと思っただけだ」

攻撃されないように慎重に距離を取りながら、わざとおどけた口調を取ってみせる。

悪意に満ち溢れた言葉だが、真意が解らなければあまり変わらない。「すとーか？なんだそれは」

すると天羽は澄ました顔を一变させ、眉間にしわを寄せ、間拔けな表情になった。

食べ物だと言えば信じそうな勢いだ。

いや実際こいつなら信じるだろう。

何故ならこいつは横文字音痴だからだ。

「おい、そのすーか、だか、すかーとだか知らないが、絶対悪口だろ？」

と明らかな疑いの目で睨まれる。

まあ、当然の結果なんだが。

「いやスカーカーと言うのは自分にとって大切な人を陰からずっと見守り続けている奴の事を指す意味だ。お前にぴったり過ぎて笑ってしまったが、別に他意はない」

嘘は言っていない。

ただ聞こえがよくなるよう言っただけだ。

「……嘘では無いようだな。だが、真実でも無いな？ 後でカレンに聞くから、覚悟しておけよ」

ぎろりという擬音がしそうなほど冷たく俺をにらむと、天羽は顔を背けた。

スカーカーだとか、背後霊だとかバカにしているが、本人の名誉のため言っておくと、一応コイツはかなり名の知れた剣で銘を『天の尾羽張』と言う。

数千年生きた剣らしいのだが、なぜか姉貴の守護神となっており、姉に天羽と呼ばれている。

ただ略しただけだが。

「で…俺はお前とどこの神社に行けばいいんだ？ 柚美奈先輩からはお前の事とバイトとしか聞いていないんだが」

ずっと脱線していても仕方がないので、とりあえず軌道を修正する。

「……………狼」

天羽は気に食わないのかぶつきらぼうに呟く。

しかしこれだけでは何をすればいいのかわからない。

「最近動物園から脱走した奴か？ それがどうかしたのか。まさか俺に捕縛しろとか言うつもりじゃないだろうな？」

もしそうなら保健所にパスしたいところだ。と言うより依頼内容おかしいだろ。

「最近目撃情報が多く、街で被害者も出たそうだ。だが、誰も襲わ

れた者はいないそうだ」

「矛盾している。もっと詳しく話してくれ」

天羽は目線を俺から逸らすと、暫し思惟にふける。

どうやら天羽も受け売りで訊いただけらしく、あまり整理できていないようだ。

「つまりだ。その狼が人を喰らうのを見た者はいるんだが、その被害者や被害届を出す家族が一人もいないと言う事だ。それを調べるのがお前の役目だ」

この程度なら出来るだろ？ とでも言うように馬鹿にした表情で睨む天羽。

断ればあーだこーだと難癖をつけて愚痴愚痴言ってくるに違いない。そして拳句の果てに姉貴に告げ口して無理やりやらされるのが落ちだ。

「はいはい、了解」

やる気のない返事を返す。

どうせやらなければいけないのなら直ぐの方がいい。

「だが、一つ疑問がある」

「なんだ？ 愚痴なら受け付けないぞ」

「お前がいるのになぜ俺が必要なんだ？」

「愚痴は受け付けないと言っている」

俺は純粹な疑問のつもりで言ったのだが、バツサリと天羽は切り捨てる。

呆れ気味の溜息と共に、これ以上の問答は埒が明かないと判断し、俺は調査に向かう事にする。

と言っても別に俺は専門家でも何でもないので、そこらをぶらぶら見て回るだけだが。

その2

黄昏時。

昼と夜のちょうど境目なる微妙な刻限。

こう言う時刻に出やすいとはあるが、わざわざ俺が調査をする時に限って出なくてもいいだろうと溜息を吐く。

建物を壁にして、臨む視界数十メートル先。

明らかに縮尺がおかしい狼らしき頭部が見える。

人氣が無い場所とは言え、流石にこれは違和感がありすぎる。

遭遇する気も無かったので武器等を持ってこなかったが、これは失敗だ。

いつの間にか消えた天羽は元々当てにできないとしても、徒手空拳であれとやりあうのはいささか億劫になる。

とはいえ億劫になるだけで出来ない事は無い。

一応姉貴たちと同じようにそこそこの修練は積んだつもりだ。

事情により基礎だけだ。

先程からほとんど動かない狼をじつと観察する。

狙うなら後ろからバツサリ一撃。

若しくは鼻等の急所を攻撃したい所。

だが、あれが狼の形をしているからと言って従来通りの急所が弱点とは限らない。

思い込み、慢心が一番足を掬われる原因となる。

かといって慎重になり過ぎると返しの一撃で殺されかねない。

結局ケースバイケースで後から振り返って詮無い事を考えるオチだ。気を引き締めながら、狼の死角になるよう進んでいく。

音はなるべく立てないつもりだが、匂いの方はどうしようもない。

もし、こいつが見かけ通り狼の妖なら、かなりの確率で奇襲前に気付くか、もう既に気付いていると考えておくべきだろう。

故に俺はカウンターを一番警戒しなくてはならない。

その為には位置を正確に悟られては不味い。

「!？」

思考をまとめ、自分なりに気持ちを研ぎ澄ませていると、突然狼が動き出す。

焦れて動き出したのかと、思いきや、狼は俺のいる方向とは別の方向に駆け出す。

しまったと思うが、既に遅く、狼との距離が一気に広がる。

「くそっ！」

すぐさま体に鞭を打ち、跳ねるよう駆け出す。

一番起きてほしくないパターンが起こった。

狼が俺以外の獲物を見つけるパターンだ。

飛び蹴りを食らわすかのように壁を蹴り、直角に方向転換すると、狼の背中が眼に映る。

びしゃっ、と液体の飛び散る音が聞こえ、生臭い鉄の匂いが漂ってくる。

まるで今それをバケツか何かで撒き散らしている様な、そんな音だ。狼は、今俺に気がついたように振り返る。

それにつられて、何かが水たまりに落ちる音がする。

咀嚼音、水の滴り落ちる音、狼の口の間から何本も伸びる黒い糸の様なもの。

理性では動きださなければいけないと解っているながら、俺はその食事をただじっと眺めていた。

広がり続ける血だまりと狼の噛み砕く音が時間の流れを告げている。

恐怖、怒り、絶望、悲しみ、苦しみ。

さまざまな感情がごちゃ混ぜとなって俺の中を渦巻いている。

それは噴火寸前の火山の様。

高まる心臓が凍ってゆき、思考が醒めてくる。

そんな硬直を破ったのは、一閃の鈍く光る刃だった。

天羽の腕から伸びる不可視の刃が一寸の狂い無く狼の首に走る。

飛び散る鮮血と咆哮と共に俺の方へと狼が突進してくる。

「つく…のっ!!」

体を捻りながら狼に蹴りを加え、直撃を避ける。

足に電柱を全力で蹴りつけたような痛みが走り、背中から壁にぶち当たる。

「何を空けている、この出来そこない。あのまま食われるつもりだったのか？」

噓せている所を、天羽に胸倉を掴まれ引き起こされる。

本人は助けられているつもりかも知れないが、もう少し優しく助けてもいいのではないかと、そんな自分勝手な事に思いながら辺りを見渡す。

そこには俺によって進行方向を変えられた狼が壁に減り込んでいた。直撃を受けた場合を思うとぞっとする。

「当る寸前に微妙にずれたか……。中途半端に運がいい奴だな」

不可視の刃に付いた血を振り払い、天羽はそう呟く。

見かけは生意気な餓鬼と変わらないが、曲りにも天羽は神だ。

俺が勝てると思える様な相手など話にもならないだろう。

事実、俺が瞬きする様な間に天羽は狼の頭を刎ね飛ばしていた。

今度は一切の抵抗も許さずに、断頭台の様な鋭さで。

「これだから俺が来る意味があるのかと聞いたんだ」

溜息交じりに愚痴を零すと、俺は未だ狼を見ている天羽の横に並ぶ。

「……華蓮の指示だって言っただろ。弱いから心配されるわけだ。心配されなくなかったらもっと強くなれ」

不機嫌そうな顔で狼を見つめていた天羽は小さな声で言葉を紡いだ。人間離れしている姉貴と比べるのは正直やめてほしい所だが、正論なので黙っている事にする。

俺達が見守る中、狼はあらゆる痕跡を残さず、消滅する。

奴らの様な『幻想』の生き物は、この『現実』に残滓の様な状態でしか干渉する事が出来ない。

故にこの『現実』にとどまるために生き物を食わなければ維持する事が出来ない。

そして力を失うと『現実』と言う名の何かによりこうして消去される。

壊れた壁や食われた人は元に戻らないのにも拘らずだ。

食われた人の事を思い出し、少し遣る瀬無い気持ちになる。

せめて黙祷くらいはしていこうと思い、辺りを見渡す。

「どう言う事だ？」

俺の言葉で天羽も振り返える。

眉を寄せ怪訝な顔で俺を睨んでくるが、俺はそれどころじゃない。

無いのだ。

食われて死んだはずの…、恐らく女性であろう人物の血痕はおるか、服やバッグなどのその他もろもろの痕跡が一切ないのだ。

なんだこれは？

一体どういう事だ？

一人で悩んで答えの出る問題じゃないと判断し、ますます不機嫌になっっている天羽に説明する。

「成程……。理由は解らないが、これで報告と矛盾なく繋がるわけだ」

天羽が学校の近くで言っていた事を思い出す。

『被害者を見た者はいるが、被害届を出した者がいない』

これが今俺達の前で成立したわけだ。

だが、その意味が解らない。

撒き餌や幻覚などの可能性は枚挙に遑が無いが、その必要性が現段階では何も繋がらない。

「兎に角だ。この依頼を出してきた神社に向かうとしよう。この場に留まっても埒が明かない。——何より他人に見つかるとお前は不味いだろ？」

難しい顔をしているであろう俺を鼻で嘲ると、天羽はふわふわ動き出す。

それに追従しようと駆け出すと、急に天羽が止まる。

「この事を華蓮に報告してから行く。なのでお前は先に行ってる」

そう一方的に俺に告げると、天羽は目の前から消えさった。

その3

漆黒を更に塗り潰すかのような黒。

影、闇、暗、裏、黒、夜。

これらの総てを内包した存在が神社の中央に立っている。

『幻想』とは『現実』前には儚いもの。

チョコレートのように柔らかく、甘く、熱するとすぐに溶ける。

本当にそうなのだろうか？

『幻想』とはそんなに脆いモノなのであろうか。

いや違う。

『幻想』は強固で、理不尽で、『現実』と対をなす存在。

故に先程砕けた『幻想』は『幻想』にて『幻想』にあらず。

夢見る人が生み出した『幻想』であるからこそこれも簡単に砕ける

のであって、『彼女』は簡単に砕けはしない。

『彼女』はゆつたりと辺りを見渡すとほう、と息を吐く。

感嘆でも驚愕でも無く、ただ息を吐いただけ。

その瞳には何の感情も映しださない。

『彼女』の辺りにはまるで今絞り出したかのような真っ赤な血が絨

毯のように石畳に広がっている。

つい先ほど街中でも血だまりが出来ていた事から、今この街はろく

でもない事が起きているのが解る。

『彼女』の瞳に光が灯る。

その眼に映る神社に駆け込んでくる青年の姿に『彼女』の口元がつ

り上がる。

これが初めて？

それとも二回目？

もしかしたら最後かもしれない。

そんなこと彼も彼女も知りもしないが、二人が会おう事は必然。

運命の赤い糸に囚われたかのように二人は会合する。

それは恋人の様でもあり、勇者と魔王の様でもあり、また、ねじれの関係でもある。

まずはお試し、これは彼女がどれほどかを知ってもらったための会合。

十

鳥居を潜つたら異界に辿り着いたかのよう。

瘴気などと言つ陳腐な物ではなく、恐怖そのものが漂っているかのような空気。

いや、俺は本当に異界に着いたのではないか？

見慣れた光景のはずが酷く未知感を醸し出し、風景に酔う。

なぜこれにこんなにも近付くまで気づかなかった。

心からここまで踏み込んでしまった自分の数秒前の判断を呪う。

「うっ！」

今もなお肌で感じる空気の重さとは違い、つい先刻も嗅いだような異臭に堪らず鼻を押さえる。

しかし、俺はそれがミスだと気づく。

闇に同化しすぎて気付かなかったが、何か途轍もなくやばいモノが直ぐそこにいる。

直感とか、本能とかそういうその他もろもろが怖いと訴えてきている。

俺は先程漏らした声がソイツに聞こえない事を祈るばかりだった。

だが無情にもその祈りは取り下げられる、うっとりと夕暮れを眺めていたそいつがこちらを向いたのだ。

「お主かや？」

目が合う事すら億劫になる威圧が全身に掛かる。

それでも、吸い込まれるように俺の目はそいつに向かう。

そこには全身漆黒のドレスを着た少女が、不機嫌そうにこちらを見ている。

現代離れしているが姿は人の範疇。

それでもなお一目でヒトではない事を悟る。

「お主が第九神かや？」

ソイツは聞きなれない単語と共に目を細めて俺に問う。

「……………」

俺の口は接着剤でくっ付けたかのように開かない。

「カノン、大丈夫か？」

遅れるように天羽が到着する。

「なっ！？」

そして俺と同じように固まる。

毀れ出る濃密な気配が、一瞬で天羽の纏っていた神気を霧散させられる。

そう、神である天羽でさえソイツと次元が違うのだ。

まるで銀河と日本を比べるが様。

何が優れている劣っているを超越し、何を比べればいいのか解らないレベル。

頭を過るのは、なぜ？ という言葉。

全身の毛がハリネズミのように立つ。

「……………いや、言論で判断するのは無駄じゃったな」

フツと笑うとソイツはこっちに手を向ける。

その光景をスローモーションのように俺は見送る。

好きな子に握手を求められ、硬直する男子の様に。

理性を追い抜いて死を覚悟する。

「カノンッッッ！！！！」

天羽の怒号が耳朵に響く。

俺の思考が回復すると同時に天羽は刀剣化し、滑り込むように俺の手に収まる。

ぐいっと剣に引き摺られるように俺の体が飛ぶ。

肩が脱臼しそうな力に、顔を顰めながら着地する。

その瞬間今まで自分がいた場所が巨大な墨を垂らしたように漆黒に染まる。

僅かに掠った服が、その部分だけ消失する。

「っ！？」

何かは良く解らないが、アレはやばい。
ゲームでよくある一撃必殺のものだ。

何処かに消されるのか、喰われるのか、死因に違いはあれど確実に殺される。

無意識のうちに一步、二歩と足が後ずさる。

なんだこれ？

主人公が町の外に出た途端ラスボスに出会うようなものだろ。

「おい、しっかりしろ。あいつを見る！ あれはそこらの魑魅魍魎とも荒御霊とも次元が違う、瞬きした瞬間殺される存在だぞ！！」
剣を伝い、天羽の声が内側から響く。

普段、姉貴以外が刀剣に触れる事を死ぬほど嫌う天羽が、あまつさえ俺の力を貸せと叫ぶ。

言われなくてもそんな事は解ってる。

解っている事をわざわざ怒鳴られ、俺の頭に血が上る。

「じゃあどうするんだっ？！ どうやったらあれに勝てる？ 姉貴でもお前でも、いやそもそもアレに勝てる奴が存在するのか？！」
じわじわと広がる黄泉の沼と女に意識を集中させながら、叫ぶ。

こんな状況、叫ばずには平静で居られない。

少女の方は今のところ動く様子が無く、じつとこちらの様を見ている。

緊張と焦燥感でいやな汗が背中を流れる。

「戦わずにどうやって勝つつもりだ！？ いいから出し惜しみ無く霊力を剣に注げ。勝てないとわかっていようが一番高い可能性に欠けるしかないだろう！！」

八つ当たり気味の俺の声に感化され、普段は冷静な天羽まで怒鳴る。解っている。

腹を括らなければ、ここで俺たちは死ぬ。

綱渡りだ。

覚悟を決める。

冷静になれ、と頭に刷り込むように呟く。

「ほお……初々しい奴らじゃの。最近は何でも無駄口しか聞かぬから、新鮮じゃの。——ほれ？ 掛かってこぬのか？」

初撃からじつと静観していた少女が嘲るように口を開く。

「っ！……言われなくても」

俺はやけ気味に天の尾羽張を袈裟下に振るう。

両手から霊力が吸い取られるように剣に流れ込むと、剣先から斬撃が飛ぶ。

天の尾羽張は斬る事に特化している神器だ。

それは神として例外ではない。

だが、あれ相手にどれだけのダメージを望めるか。

俺は首を振り、思考の脱線を戻す。

これで倒せるなんて夢みたいなのは思わないが、少なくともわずかな隙を作る事は出来る。

「今のうちに逃げるぞ」

俺は天羽が叫ぶと同時に駆け出した。

天の尾羽張を握っている所為で脚力は人間の限界を軽く突破し、更に加速する。

行ける。

これなら逃げれる。

俺は振り返らず神社を飛び出そうとする。

ただが数メートル、今なら瞬きするより早く駆け抜けれる。

「逃がしてもよいが……、主らが第九神だと後々困るのでな。しばし付き合ってもらおうぞ」

少女の声に惹かれて、一瞬だけ視線を後ろに向ける。

斬撃が迫りくる中、少女は左手を地に翳した。

まるで天の尾羽張の攻撃など存在しないかのように。

「カノン、止まれ」

その声と共に体にあり得ないGが掛かり、ピタッと静止する。

文句を言おうと顔をあげたその瞬間、間欠泉のように辺り一面、囲むように墨の様なものが湧きあがった。

先の黒い物質と同じだ。

これに俺が触れたらその時点でゲームオーバーだ。

そんなレベルの攻撃がこの速度で広範囲で繰り出せるのだ。

笑うしかない。

バックステップですぐさま漆黒の壁から距離をとる。

すぐ女のほうに向きなると、斬撃が流砂のように右腕に飲み込まれていくところだった。

「くそっ、バケモノめ」

退路も断たれ、反撃すら無効にされ、改めて次元の違いを思い知る。かなり詰んでいる状況だ。

先程から一步も動いてない女に向き直る。

「これで詰みかの？」

漆黒よりさらに濃く黒い髪をかき上げ、少女はチェックメイトを宣言する。

「まだだ」

退路を断たれ、攻撃を無力化されるだけでチェックをかけられてはたまらない。

そう言うかのように天羽は一度小さく鳴動する。

そして天の尾羽張は心臓のように鼓動を打つと、俺の頭上限界まで昇る。

それにつられて俺の腕も限界まで引き延ばされる。

瞬時に俺は天羽が鞘を開放するのだと悟る。

「カノン、齒を食いしばって耐えろ」

天羽の冷たく侮蔑する顔が一瞬脳裏に浮かぶ。

地響きが起こり、辺り一帯激しく振動し始める。

『我が神名は天之尾羽張神。その昔、焰の神を切り落とした嘆きの剣。我が刃を以て分化し、新生せよ。我は普くを斬り、化生す刃なり』

天羽の詠唱と共に湯水のように体から霊力が流れ出る。別に天羽は今まで出し惜しみをしていたわけではない。

俺では解放した天の尾羽張を扱えないのだ。

砕けそうになる腰に鞭をうち、無理やり立たせる。

カチン、と何かが外れる音がし、右手にあるものがまるで羽を広げるように流出し始める。

コレになつた天羽は姉貴以外の人は使えない。

冗談ではなく人として扱えるキャパシティを超えているからだ。

いくら霊能力者だと言っても体は人間だ。

過ぎた出力は己が身を破壊する。

「それが主の抜き身か、——綺麗じゃの」

左右対称な二対の日本刀を峰の部分を先端から鏡合わせの様に繋がれた形状になつた天の尾羽振を見て、少女は眼を細めて呟く。

「煽てても何も出ないぞ？——行くぞ、カノン」

「相変わらずスパルタだな。こっちは立っているのがやつとだつてのに」

そう言いながらも俺は正眼に構える。

大量の霊力が現在進行で無くなり、意識は朦朧とするが体自体の体力は残っている。

意識さえ保てれば何とか扱えるか。

所々ぶれる視界を、痛みで無理に覚醒させる。

天羽と完全に繋がれた状態になつた事から脳の演算速度が格段に低下している所為だ。

改めて柄を握りしめる。

先程の状態と比べ、刀剣が驚くほど軽い。

本当に羽根になつたような軽さだ。

それを見た少女は嬉しそうにニヤツと笑う。

——来る。

次の瞬間、足元から無数の鳶の様な墨が貫くように飛び出してくる。無傷で躲せたのは前回と攻撃パターンが同じだったお陰だ。

「ノーモーションか。鬱陶しいっ——」

普段ではありえない速度で鳶を切り捨てると、少女に向かって飛ぶ。

――斬れる、なら本体も……。

足を囚われないように注意しながらジグザグに駆け抜ける。

一瞬で眼前に肉薄しそうな勢いの俺を少女は相も変わらず愉快的な見世物でも見る様な眼で見ている。

それを見て俺は、苛立つように加速する。

「くくつ……オーバーリアクションは嫌いで」

不意に少女は悪戯っぽく笑うと右手を俺に向けて掴むような仕草を見せた。

「ツツツ！！！！」

まずい、まずい。

アレを見てからなら絶対に直撃する。

少女の手の動きを見た瞬間、本能が叫ぶ。

ぞくつと背筋に寒気が走り、無理やり真横に転がる。

間一髪、俺の体をかすめるように電車のような大きさの黒い塊が、通り過ぎて行った。

――腕だ。

一瞬で消えたが巨大な腕が見えた。

俺は呼吸を忘れてそれを見送る。

出鱈目過ぎてこの少女の強さの底がつかめない。

「真正面から突っ込む奴があるか、危うくお前と心中するところだった」

耳鳴りを起こしそうな天羽の声が頭にガンガン響く。

だが、そんな小言を気にしていられるほど俺には余裕がなかった。

さっきまでつい鼻の先にいた少女が消えていた。

どこだ？ どこに行った？

素早く視線を走らせる。

「どうじゃ？ お主の望み通りモーションとやらをつけてやったぞ」

いつの間にか背後に移動した少女がさも愉快に笑う。

少女の行動毎に真白に成りそうになる思考を必死に手繰り寄せる。

まだまだ、まだ俺たちは死んではない。

「心遣い痛み入る。――泣けるほどにな！」

すぐさま体勢を立て直し、少女に斬りかかる。

ここまで追い詰められても出る自分の軽口を表彰したい気分だ。

小細工も、逃げも、コイツには意味がない。

天羽の力を借りて、人間では不可視な速度で斬り付けているにもかかわらず、女はそれを難なくよける。

しかも十数閃、唯闇雲に振るうわけではなくフェイントも織り交ぜ最高速で繰り出される斬撃が、いともたやすく避けられていく。

――不味い。

本格的に手が無くなってきた。

いや、最初から手が無いとでも言うべきか。

俺と天羽が今やっている事はただの再確認だ。

無駄だと解っている事を、一縷の望みにかけて確認しているだけだ。

「くつくつく、愉快じゃ。ここまで地力に差があるのに、お主達の目には負ける恐怖がほとんど映っておらん。――どうしてじゃ？ 若き人間よ」

まるで幼児と遊ぶ親のような足取りで、次々と少女は斬撃をかわす。

「諦めたらお前は助けてくれるのか？ 命乞いをしたらお前は見逃してくれるのか？ 違うだろ。お前は俺たちを逃がさない。なら、

俺たちは勝つしかないだろ、例えば宝くじに当たるより勝率が低くても……ってな事をこの神剣様が言ってるんだ。なら、俺もそうするしかないだろ？」

無駄な軽愚痴を叩きながら、必死に生きて残れるルートを探す。

一か八かで壁を突破して逃げてみるか？

いや、無駄か。

突破しようとはしようとして、俺たちはこいつから逃げる事が出来ない。どうしようもない焦燥感からか、柄を強く握りしめる。

「……………私はそんな言葉使いた覚えがないぞ」

俺の焦りが伝わったのか天羽も軽愚痴を返す。

天羽も十分理解してるのだ。

これは始めから結果が決まっている出来レースだと。
そしてそれでも尚、諦めるわけにはいかない事を。

「成程、道理じゃの」

少女は突然、舞曲の終わった踊り子の様に停止する。

その姿はカーテンフォル中でもアンコールの絶えない人気演奏家の様に美しかった。

一瞬罨かと逡巡するが、いつでも殺せる相手が罨を張る意味は無いと、斬りかかる。

「はあああああッ！！！」

右斜め上から円月を描くように斬り伏せる。

いや、斬り伏せたはずだった。

「——ふむ、悪くない」

女は身じろぎもせず、天の尾羽張を片手で受け止めていた。

「吾はお主らが気に入った。お主らが第九神だろうと最早気にせぬ、どうせそんな事は些細な事にすぎぬしな。——吾は

第二神、パフェヴェディルムⅡヒアスⅡファノレシス。終焉を司る者の一人ぞ」

名乗り上げたその姿は神の名にふさわしく、凜然としていた。

その様に瞬き一つ分心を奪われる。

どうしようもなく美しいと感じてしまったのだ。

生き物として神として、恐らく最高位に位置するであろう彼女が名乗る姿が。

「俺は架音、輪廻架音だ」

思わず名乗りながら俺は有りつ丈の力を天の尾羽張に込める。

壊したかった。

——これを。

——コイツを。

——神を。

「私は天之尾羽張神、普段は天羽と呼ばれている」

天羽も同じ気持ちなのか、マグマの様な脈動を感じる。

「架音に、天羽か……。いい名じゃ、主らの覚悟に免じて今回吾はもうこれ以上せぬ」

パフエは辺りを囲んでいた黒い物質を引っ込めると、敵意がないことを示すようにもう片方の手をひらひら振った。

「そんな都合のいい話を信じると？」

俺は剣にくわえた力を緩めず、パフエと名乗った少女を睨む。

「どちらでもよい、どうせお主らには吾を傷付ける事は出来んのじやから」

そういうとパフエは剣を掴んでいた手を離す。

急に放された俺はそのままパフエに斬りかかる形になってしまふ。

「くっ!？」

鈍い感触と共に切り裂いたという手応えが返ってくる。
だが……。

「これでわかったじゃろ？ 吾は最初から避ける理由すらないのじや」

剣はパフエの体にめり込むように止まっていた。

血はおろか、傷一つ無い様でだ。

まるで泥沼の様なパフエの体から剣を引き抜く。

「カノン、信じるしかないみたいだ」

天羽は刀剣化を解くと、苦虫を噛み潰した様な顔をしていた。

闘いにすらならなかった事にプライドが酷く傷付いたのだろう。

「……………はあ、そのようだな」

俺は冷たく息を吐き出し、若干力を抜く。

とはいえ、完全に信用したわけではないので周囲への警戒は怠らない。

「そんなに怖い顔をするでない。折角の容姿が台無しじゃぞ、カノン？」

スルリとパフエは懐に入ると、猫なで声で俺の頬に手を添え、囁く。
天羽が一瞬睨んだ様に見えたが気のせいだろう。

「元々怖い顔だ、ほっといてくれ」

そういつて払いのけようとするが、雲を捕まえるがごとく避けられる。

本当にこいつは何なんだ？

例え神であろうと易々切り裂く天の尾羽張を容易く受け止め、この神社の……。

そこまで考え、俺は気づく。

「おい、あんた。何でこの神社が血に染まってたんだ？」

「……吾は知らぬ。吾がここに降り立った時には既にああなっていたからの」

だが、誰がやったかはおおそ見当がつく、とパフェは真剣な顔で小さく付け加えた。

「じゃあ、そいつはまだ……」

と言いかけた瞬間、ドンつと突き飛ばされる。

それも車を跳ね飛ばすような力で。

「ツク……いきなり何を……」

そんな状態ですぐに口をきけたのは、スタンバイ状態とはいえ、未だに天羽と繋がっていたお陰だ。

鞠のように地面をごろごろ転がりながら、俺は文句を言おうとパフェを睨んだ。

そこには胸から棒状のものを生やしたパフェが片膝をつき、空を睨んでいた。

「すまんのお、カノン。先程からいるのは解ってたのじゃが、どうも正確な場所の特定が間に合わなくての。取り敢えず吾の近くに主らを置いておけば安心かと思っただのじゃが……くっ」

ぼたぼたとパフェの口の間から血が流れ落ちる。

薄暗くなってきた見えにくい、棒状のものはどうやら槍で、天の尾羽張で傷付かなかったパフェの体を突き刺し、貫いているようだ。

一体どういう事なんだ？

ついさっきまで俺達はこの世で至高の存在と疑わないほど

の圧力を感じていた。

俺達との戦いだって俺達がギリギリ死なないラインまでしか力を出していない事が解るほどパフェには余裕があった。

そんな存在のパフェがどうして…。

「くっく、どうやら裏目に出た様じゃの……」

唇からこぼれる血を袖で拭い、パフェは愉しそうに笑う。

「裏目に出たって…口から血を吐いて大丈夫なのか?！」

「なに、この程度で死ぬほど吾は可愛い存在ではない。今し方己の血が赤いと再認識したくらいじゃ」

パフェは自分を貫いている槍を掴むと引き抜こうとする。

が、触る前にそれは消えた。

「消失系の概念か? …… 思ったより厄介じゃな。——
のう、第九神」

パフェの声につられて、俺と天羽も顔を上げる。

「—— 今日とはとてもついている。夜とは言え、こんなに明るい条件下であなたと戦えるのだから」

日が沈み、やっと輝き始めた満月を背にするように白いスーツ姿の男が血濡れた漆黒の槍を携え、空から見下ろしていた。

その4

——あり得ない。

呆れて乾いた笑いしか出てこない。

パフェと同じクラスの脅威がこんなにも近くに顕現しているなんて……。

今日、この国は、この世界はどうなったんだ？

こんな化け物たちの出現が連続するなんて、狂気の沙汰とは思えない。

まるで俺達だけがパラレルワールドの放り込まれたかの様。

「そんな……天の瓊矛が『神名開放』、されてる？」

さつきから黙っていた天羽が突然声を上げる。

「天の瓊矛つて、国産みに出てくるあれか？ それに『神名開放』つてありえるのか？」

信じられないものを見る様な顔で男を見る天羽に俺は問いかける。

天の尾羽張があるのだから、天の瓊矛も実在することに驚きはしない。

問題はなぜ奴がそれを手にしているかと言う事。

こいつらほどの力があれば奪い取るのは簡単だろう。

神器と言うものは神名を開放しなければそこの名剣名刀とさほど変わりはない。

だが、奴は先程の俺と天羽と同じく神名まで開放して天の瓊矛を操っている。

先程俺は天の尾羽張が人間には扱えないと言ったが、それは神なら扱えると言いたかったわけではない。

天羽の様な神器を扱うには、神器に宿る神格に認めてもらう必要があるのだ。

その上で扱えるだけのスペックが必要となるわけだが、天羽の言った事が本当ならあの男は天の瓊矛に認めてもらったと言う事になる。

何がどうなつて、今この街がこうなり、何処へいこうと言っただよ？

「……そうだ。国産みの際に渾沌の大地をかき混ぜ、オノゴロ島を作った槍だ。それがどう言う訳か完全に『神名開放』されてる」
再び見極めるよう見ていた天羽が返答を返す。

その表情は険しく、一片の余裕も無いことが読み取れる。

「成程の、どおりで吾の体に刺さるわけじゃ。——わざわざ

吾のために混沌殺しを用意するとは、相変わらず臆病じゃの」

パフェは俺達の会話を聞いて得心が行ったように息を吐き出す。

詰まらん、と有らん限りの表現をするように。

その眼は先程俺達に向けた目と違い、底が抜けるような殺気に満ちていた。

自分に向けられていないと解つていても思わず後づさる。

「御冗談を……。あなた相手にこれだけしか用意してない私を誰が臆病と罵りましようか？ いや断じて否。創世の時を生きるあなたに今まで何体の神が狩られた事か、あなた自身が一番よく知っているでしょ？」

大げさな身振りで男は空を仰ぐ。

舞台上観客たちに自分をアピールする悲劇の主演の様に。

同胞を憐ぶような表情を見せた男の眼は愉悦に浸っていた。

「くくつ、何を偉そうにほざいておる。その姿勢が臆病だといったるのじゃ。第九神ティルロイン「コミット」

無音でパフェは立ちあがる。

先程の刺された事が嘘のように。

それはハツタリかもしれない、しかしパフェを見ていると本当に何ともなかったかのように思えてくる。

「これはこれは、私の名前を知って頂いているとは……。光荣ですねえ」

「お主は有名じゃからのお、殿が最もうまい終焉神としての。どうじゃ、吾にも一手御教授してくださらんかの？」

袖で口元を隠しながら嗤うパフェの周りから、黒よりも黒い漆黒が

渦巻き始める。

それも俺達と戦った量とは比べ物にならないほど大量に。まるで世界を包み込むような広さと早さで。

「じつとしておれ。吾の近くがこの世界で一番安全じゃからの」
ぼそつとパフェが振り返らずに俺達に呟く。

『堕ちろ』

呪詛のような言葉がパフェの口から零れ出る。

それと同時に山をも掴める巨大な腕が二本、挟み込むようにティルロインのいる場所ごと粉碎するかのように出現し、激突した。

超速、速いなんてレベルじゃない。

影は光によって自在に形を変え変化する。

ならばこの闇も光速、またはそれに準じる速度であろう。

範囲は対国、威力は一撃必殺。

なんと言う出鱈目。

もし、俺が彼女の敵側で立つなら、どれだけやり直しても埋めることのできない格の差。

「おお怖い……怖いですねえ」

ティルロインはまるで始めからそこにいたかのようにパフェの隣に現れ、嗤っていた。

「どうした？ 避けるだけで攻撃せぬのかや？」

避けられたというのに、パフェは涼しい顔でティルロインを見つめる。

「その槍を離していただけると出来るのですけどねえ」

いつの間にかパフェの後頭部に迫っていた槍の柄に黒い物質が鎖の様に巻き付き、宙に固定していた。

ああ、可笑しい。

こいつらは狂っている。

超速の一撃を避け、あまつさえ繰り出された反撃を互いに攻撃とすらみなしていない。

「ふむ、吾を解凍できるのは穂先だけか……。しかし、混沌を侵す

とな、よくもまあ吾にそんなものを向けたものじゃ、その意味解つておるのか？」

その言葉に呼応するかのように槍がまた消える。

「ええ、ええ、よく解つていますよ。闇夜の姫君」

ティルロインの姿もまた消え、パフェの頭上に現れる。

まるで時間を止めれるかのように男は変幻自在に出現し、消えてゆく。

ティルロインの背後に六つの巨大な魔法円が浮かび上がり、まるで太陽が六つになったかのように辺りを照らしだし始める。

一つ一つの半径がそこのマンションより大きい。

「こんな趣向はどうです？ 昼夜逆転なんて洒落ていませんか？」

昼夜逆転どころではなく、瞼の上から目が焼き切られるような光が放たれ続けている。

ティルロインが右手を鳴らすと、六つの太陽が取り囲むようにパフェに迫る。

あまりの迫力に俺は心臓が攣りそうな位早鐘を打つ。

迫力だけじゃなく、パフェとその周りにある漆黒に守られている俺たち以外が、その太陽によって一瞬で気化する。

「それがルミナの光の代わりかや？ ずいぶんと頼りない光じゃの、魔術師の成り上がり風情が」

それでも尚、空が夜なのは暗幕の様に分厚いパフェの漆黒のせいだろう。

文字通り殺人光線と化した陽光をパフェの周りの漆黒が次々と飲み込んでいく。

「むっ……」

6つの太陽全てを飲み込み、鎮静化させた所でパフェが眉を寄せる。「やはりこの程度しか効きませんか……。彼女に一番に似ている能力を選んで私なりにブレンドしてみた自信作だったんですけどねえ」

ティルロインは残念です、と肩を竦めて見せる。

「手札が多いと言うのは少々厄介じゃのう。参ったの、あんまり愉快な事をせんでくれぬか？鼠駆除のつもりが本気で狩りたくなってしまうじゃろ^{それ}」

「生憎私には手札しか能がないものでしてね。これでしか闘えないんですよ」

再びティルロインの後ろに魔法円が浮かび始める。

疲れなどあり得はしない。

たかがこの程度の攻撃、幾らでも撃てるとも言いたい様に。

「初見は愉快じゃが、二度目は案外詰まらん。リテイクを要求する」
パフェが腕を振るうと一瞬でティルロインの体を漆黒で魔法円ごと包み込む。

『潰れる』

球体となつた漆黒は間髪入れず一瞬で収縮する。

「おやおや、危ないです…ねえっ！！」

初めて男が声を荒げる。

今までどこに移動したのかさっぱり分からなかったが、今度は俺にも解つた。

空間をゆがませるような何かが、男と共に出現した。

『建てっ！』

パフェが叫ぶと同時に、パフェの周りに城門の様な漆黒の壁が建つ。今までの様な墨を垂らしただけのような形状ではなく、中世の王国を思わせるかのような荘厳な門が湧き上がった。

「……………っ！！！！」

その瞬間、凄まじいの一言に尽きる何かが衝突した。

音は無音だが、その振動が空気を伝って爆風の様に俺と天羽にも伝わる。

男の方を見ると、列車大の禍々しい装飾の砲台がそびえ立っており、その先からは紫色の煙が噴き出していた。

パフェや俺達にこそ届かなかったが、先程パフェが出した門から、パラパラと欠片の様な物が零れおちている。

二度目が来れば門も俺達もただでは済まないだろう。

「これはこれは……。『激震』の概念かや、随分と懐かしい物を持ち出してくるもんじゃ。——くつく、なるほどの。お主の概念おおよその見当がついた」

魔界の砲台の様な物を見ながら、パフェは懐かしむよう眼を細める。砲弾を防いだ門が、沼に沈むよう消えてゆく。

「それは困りますねえ。ただでさえ、地力にあるのに概念を見破られては勝ち目はないじゃないですか」

降参を思わせるセリフを口にしながらティルロインは笑う。

まるで自分の勝ち揺るがない結末だと解っているかのように。

何を考えているか解らないその様に、パフェの顔から笑みが消える。ガコンと派手な音を立てて、砲台に次弾が装填される。

桁違いの魔力が砲台に集まり始め、大気が怯える様に超振動し始める。

「…………二度目は詰まらんと云ったのが聞こえておらなかったのか？」

パフェは己に向けられた砲台を冷たく睥睨する。

それを無視するかのように、砲台は震え、再び弾丸が発射される。

しかし、それすらも凌駕する漆黒の天津波が一瞬で弾丸ごと砲台を飲み込む。

意外でも何でもなくそれは当然の帰結。

幾ら威力があろうともパフェの一撃は必殺。

防御に回らなければ彼女が負ける要素は何もないのだ。

「——っ！——っ！——」

呆れるほどに壮絶なる二神の戦いに意識を奪われていた俺は、携帯のバイブによって目が覚める。

「…………姉貴か」

携帯の画面には『輪廻^{りんね} 華蓮^{かれん}』と表示されていた。通話ボタンを押し、耳にあてる。

『もしもし、カー君生きてる？ 生きてるなら大声で『おねえち

「やん愛してるうううう」って言ってみて」

「くたばれ、この糞姉貴」

「ひどーい、折角心配してる愛しのおねえちゃんにその言いぐさは無いんじゃないのかなあ？ でもでもお、おねえちゃんは解ってますよお、カー君がツンデレでシスコンだって事くらい」

「……………」

「あつ、怒った？ 場を和ますおねえちゃん渾身のジョーク滑った？」

「……良いから用件を言え、こっちは今爆心地にいるんだよ」
こんな状況だからなのか、普段通りの華蓮の態度に安堵を覚え、場違いな軽い笑みが浮かぶ。

「あちゃー、やっぱり神社が爆心地になっちゃってるんだ。んー、困ったなあ、今街でも件の狼が大量発生しててね、今通話しながら戦ってるんだけど、どうにも数が多くて被害者が増える一方なんだよ。出来れば来てほしいかなあー、なんて。あー、死にそうなら無茶しないだね。余裕があつたらでいいから」

最早なんとリアクションをとっていいのか解らない。

だんだんこの状況が全て夢に思えてくる。

一難去つてまた一難ならまだしも、雪崩のように難問が降り注いでくる。

あーくそ、神も仏も悪魔もくそつたれだ。

問題しか起こさねえ。

現実逃避したくなる頭をたたき起こし、今できる事を考える。

ちらつとパフェのほうを見る。

パフェは俺達のためか、先程から一切の攻撃を神社の外に逃してはいない。

そうしなければ今頃街は空襲にあつたようになっていただろう。

つまりここさえ脱出できれば街に戻る事は出来ると言う事だ。

パフェは相変わらず嵐の様な攻防の中心にいたが、俺の視線にすぐさま気づくとウィンクして、顎で鳥居を指した。

そこから行けと言う事なのだろうか。

と言うか、あのさなか俺の声が聞こえたのだろうか？

俺の心の声に答えるかのように、鳥居までの道に漆黒の通路が出来る。

迷ってる暇はない。

どうせここにいっても何も出来はしないのだから。

姉貴にすぐ行くと告げ、携帯を切る。

そしてすぐさま仕舞うと、天羽に向き直る。

「おい、しっかりしろ。我が家の神剣様だろ？」

俺は未だに自失している天羽の肩を揺する。

俺が電話で華蓮の事を口にしていたにもかかわらず無反応だったと言う事は、余程ショックだったのだろう。

「あ、ああ……そう、だな」

俺はまだ半分意識を失っている様な天羽の手を強引に掴むと、出口へと駆け出す。

パフェに心の内で礼を言いながら、もう脇目も振らずに鳥居を飛び出した。

その5

「……………珍しいものじゃの」

「あなたと互角に戦えるものがある事ですか？」

大地を震わすほどの激戦をしているのにかかわらず、相変わらずへらへらと第九神は嗤う。

余裕があるのだらう。

現状だけで考えれば当然かもしれない。

爆轟、凍結、衝撃、超重力圧。

ああ、それとあの忌まわしい槍たちが。

一つ一つは弱かるうとも、とつかえひつかえ手札を丁寧に切って戦場をコントロールするのだ。

お陰で針で突かれる様に攻撃を喰らっていくのだから、堪ったものじゃない。

ダメージ的に見れば減ったとは言えないレベルの減少。

しかし、こちらの攻撃は分身しているかのようなスピードで出現し、消えてゆく彼奴には当たらない。

且つ時間が経つにつれて向こうは徐々に火力がレベルアップする仕様。

精神的アドバンテージは圧倒的あちらが有利だらう。

まだ爆心地にいた方が安全だと思えるような大火力戦の中、ぼんやりと考えることをする。

どうにも駄目だ。

自分でも悪い癖だと解ってはいるが、止められないし、止める気も無い。

どうやったら互角になるのだろうか、どうすればもつと戦えるのか。そんな馬鹿げた事を考え始めた時には最早引き返せない。

終焉神の業とも言うべきもの。

殲滅し、粉碎し、圧倒し、滅殺しなければ餓えるのだ。

殺すだけでは物足りない。

その魂の一片にわたる全てを犯し尽くさなければ何も感じないのだ。生き物が生を得るためには何かを殺さなくてはならない。

弱い生き物は食われ、それを食ったものも更に強い物に食われる。ならば食事の概念の無い吾らは一体何を摂取するのか。

なに簡単な問いだ。

自分が頂点だと信じるなら己より少し弱い物を食べればいい。

それは何か？

人間？

精霊？

悪魔、天使？

本当にそれが最上位？

いつの世界にもその上の存在はある。

全知全能、不老不死、永遠の支配者で、至高にして究極の存在。

そう同族である神こそ吾らの至上の獲物。

闘争し、血反吐を吐き、骨肉を削られ、なお食らいつこうとしなければ殺れない、これこそが食事。

口元からだらしなく笑みがこぼれる。

ああ、愉快だ。

——今夜は御馳走じゃ。

迫りくる洪水の様な密度の攻撃を縫い、貫き、弾き飛ばす。

「くつく、吾と互角に戦えるものなど、珍しくもなんともないのは知っておるじゃろ？」

前後上下左右と狂ったように出現しては消える第九神を、漆黒を蜘蛛の巣のように張り巡らせ、徐々に包囲する。

超速で移動するタイプにする常套手。

即ち速度で捕まえないなら網を張って待てばいい。

第九神に気付かれぬように先程までの攻撃と同速、同量、展開する。本来なら最初からこう展開するべきだったが、先程までは受けに回らざる負えない事情があった。

一つはカノンたちを護るためにそこその力を費やしていた事。
一つは先程受けたダメージを修復していた事。

この二つの要因の所為で受け身一方でしか闘えなかったのだ。
つい先程までは。

「では、なにが珍しいのでしょうか？」

彼方此方に出現しすぎて、何人も同時に喋っているかのような錯覚に陥る。

「なに、先程の人間をなぜ盾にしなかったのかと思ってな。――

――そのような事は得意じゃろ？」

己を中心に円を描くように漆黒の杭を出現させる。

それはさながら何かの顎の様。

そんな牙を連弩の様に次々と射出する。

「あなたを前にそんな余裕があるほど私は強くも無謀でもありませんよ」

月明かりがあるとはいえ、視覚情報を殆ど当てにできないであろう漆黒の杭を、この男は会話をしながらいとも簡単に回避する。

ならばこの言葉は謙遜と取るべきだろう。

この回避能力と、先程の丁寧な戦い方を考慮すると、一桁の数字を継承しただけの事はあると思えてくる。

逃げるだけなら終焉神の中でトップクラスだろう。

ほぼゼロ距離で投擲されている彼奴の神器をマントの様に纏った漆黒で防ぐ。

投げてから彼奴が消えたのか、投げた神器が吾の前に出現するのか。最早そんな事は琐事な事柄だ。

銃弾、砲弾、剣、槍、光弾…… e t c。

数えるのも馬鹿らしくなるレベルの神器、魔術が吾と数センチ変わらぬ地点から出現する。

避ける事はおろか、視認すら間に合わない。

亀の様に甲羅に籠り、防戦一方ならいずれ負けるのは目に見えている。

しかし、勇敢に首を出し本体への攻撃を優先すれば、こちらのダメージは増える。

ならばどうするか？

答えは至極簡単であり、当然のことである。

それらすべてを覆い、攻撃も防御もどちらも同時にすればいい。

神器も彼奴も魔術も、普く全て回避できないほど速く絡みつき、削ぎ落とせばいい。

「ああ………そう言えば一つ言い忘れておったな」

吾と彼奴の間の時間が僅かばかり停滞する。

ここまで来るまでに、なぜ気がつかないのか滑稽で仕方ない。

本当に互角に勝負しているように見えたかどうか。

ダメージを受けていたとはいえ、第二神パフェヴェイルム「ヒアス」ファノレシスが本当にこの程度だったかどうか。

「先程の互角に戦えるものといった件、『今の吾』と付け加えるのを忘れておった」

「なっ……に?!」

「概念心具第一契約『ファースト? Set - SIN - 』」

『——喰らい尽くせ』

吾はぱつりと呟くと、周りの景色が時を止めたように止まる。

第一契約。

それは情報世界との契約。

アカシックレコード、無量寿光、集合的無意識。

呼び方は何でもいいしどうでもいい。

所謂それらの情報世界にアクセスし、その自分の項目をこちらの世界へ一時的に具象化する事だ。

こんな事を思った事はないだろうか？

自分はこんなものじゃない。

もつとうまくいくと思っていた。

ナルシスト気味な負け犬のセリフみたいな言葉だが、実は何もおかしいな事はなく事実だ。

アカシックレコードに記載されている自分の設定と現実のスペックは違う。

肉体や血による種族による阻害。

土地や地場、環境から受ける影響。

そして最も大きな壁となるのが世界を循環させる式である「理」

神とは死んでなるものではない。

信仰を集め、なるものではない。

奇跡を起こし、人々を救い、なるものではない。

血も肉も環境も法則さえも振り払い、本来の己の記述を現実に上書き出来るものこそ、神と呼ぶのだ。

それは己を唯一の存在へと昇華させる。

神とは種族の名称ではない。

真実の己に至ったものの呼称だ。

即ちこの第一契約とは今までの種族と離別し、神になるための契約。

景色が砕け、辺りから一斉に咀嚼音が鳴り響く。

煎餅の様にばりばり砕き、嚥下していく。

この闇に触れれば塵ひとつ残りはしない。

「……ぐっ！ ふふ、ふははははははは」

ティルロインの腕から鮮血が華の様に飛び散り、だらりと下がる。

概念心具とは心体魂融合の対神域破壊兵器だ。

コストに己の一部を使うが故、威力はこれらの魔術礼装とは次元が違うが、リスクも大きい。

破壊されればその神器に割いていた量に比例してフィードバックダメージを受ける。

[illegible]

最早その声は狂気じみており、嗤っているのか、怒っているのかさえ分からぬ。

「そうですね、そうですねえ！！ やはりこうで無くては。いやあ、可笑しいと思ったんですよ。こんな簡単に事が運ぶなんて、ははっ、もう少し上手くいっていけば危うく『四帝』もこんな所か、などと恥ずかしいセリフを言ってしまう所でしたよ。出来ればあと少しだけ魔王に挑む少年の気持ちに浸っていたかったですかねえ。いやはや参ったものです。まさか私の第一契約状態と素の能力が互角とは、恐ろしいですねえ」

ティルロインは裂傷の入った腕を、まるで有名スポーツ選手にサインを書いてもらった少年の様に眺める。

その風貌に似合わぬ少年の様な笑顔は、一層不気味さを際立たせていた。

「そうか、そうか…… どうして他人のものである概念心具をここまです使えるのか疑問じゃったが、そういう事か」

吾は笑いながらぼやいてるティルロインを無視し、一人で納得すると宙に浮かび上がる。

「—— 何時まで遊んでおる」

ゆらりと立ち昇る漆黒に男はあわてて反応する。

「ちよっ、ちよっと待ってくださいよ。少しくらい愚痴に付きあってもいいじゃないですか」

ティルロインは両手を使い敵意が無い事を示すように大げさに降ると、再び微笑を浮かべる。

そこには嘘のように腕の裂傷は消え、それどころか血の跡すら残っていないかった。

「今のでいくつ手が消えたのじゃ？」

ゆっくりと目を細め、男の腕をしげしげと眺める。

「はてさて、何のことやら」

男は頭を掻きながらじりじり後退する。

と、途中で何かに突っ掛かるように止まる。

男が振り返ってみるとそこには棒の様な太さの糸が伸びていた。

「あのお……、もしかしてこれは……」

男は糸から離れようとし体を捻るが、固定されているかのように動かない。

「ふむ、適当に張ってあればいつかは当ると思ったが、こんな形で当るとは……。――何はともあれチェックメイトじゃ」

吾はニヤツと笑うと、辺りにあった糸をティルロインへと手繰り寄せた。

+

同時刻、カノンたちは街の中心付近の公園まで戻ってきていた。

わずか数時間にも満たない出来事が二人には一昔のように感じられ、流れ出る汗をぬぐい、ようやく安堵をつく。

とは言え、華蓮の言った通り街中に今日の夕方見た狼が這いずり回っており、あまり安全とは言い難いが、少なくとも先程の異界よりはましな事は、はっきりわかる。

もしあそこにUターンするか、この街の狼を一人で相手にするかどちらかと言われれば、迷わず狼を殺しに行くだろう。

「確か待ち合わせはこのはずだが……………」

無駄にだだっ広く、簡素な公園の入り口で辺りを見渡す。

道は入り口から丁字に分かれており、三方向、或いは公園内からの4パターンある。

どちらから来るのだろうか。

と、辺りをもう一度見渡してみると、左の道から見覚えのある二人がこちらに走ってきていた。

架音の姉である華蓮と、ある意味今日の一番の幸運者ともいえる柚美奈先輩が駆け寄る。

「あの…、カノン君。ごめんね」

到着するや否や、姉貴と一緒に戦っていたと思われるドロドロな出で立ちで、先輩は上目遣いに俺に謝る。

目にはうつすらと涙がたまっており、今日の依頼を変わって貰った事をどれだけ悔やんでいるか、容易に解った。

どんな事があったかなんて一切教えてないが、恐らく神社付近のあ

り様を遠くからでも見たんだろう。

逃げる道中ですら時折爆音や閃光が見え、何度ひやひやした事か。そういう意味では今日、先輩と変わってよかったともいえる。

「……………あゝ」

何と言つていいか解らない。

別に気にしてないとか、大丈夫だったとか言う事は色々ある様な気がするが、いざ口にしようと思うと上手く言葉にならない。

出会ったときから感情の起伏が少ない人だとは思ってたが、こんなに責任感が強い人だとは思わなかった。

「それは天羽に言つてください。俺は何もやってないのに等しいですから、全然気にしてませんし」

やっと出てきたのはこんな言葉。

俺はいいけどあいつに言えよ、俺は気にしてないけどな的なニュアンスにとれる言葉。

最悪だ。

俺って二回言つたし最悪だ。

恐ろしくなる位コミュ力ゼロだ。

こんな時こそ、くさいセリフの一つや二つ出てきてほしいものだ。と自己嫌悪しつつ、横目で天羽を見る。

未だに俯いており、表情はあまり読めない。

どうした？と声をかけようとするが、先に姉貴が駆け寄っていた。天羽を抱きしめ、耳元で何かをぼそぼそと囁く。

ちようどその時だった。

夜空から月が、星が消えたのは。

そして始まる。

終焉の宴が。

+

その祝砲を告げるべく、漆黒の三日月が街を串刺しにした。

街はクッキーの様に粉々に砕け、宙へと放り投げられる。

生きている人間など、確認するまでも無い。

音速旅客機に轢かれて生きている人間がいないように、どれもこれも赤い雨とともに落下するだけ。

そんな光景を私はじっと見つめていた。

人は危険と思われる地帯から離れ、見知った場所に帰ってくると少なからず安堵する。

まるでそこが自分にとっての聖域であるかのように。

どこにもそこが安全と言う保証がないのに、人は簡単にそれに縋る。土地に、地位に、繋がり。

運命の魔女である私はそれを眺める。

何とかなる。

そんな事を思っていたのだろうか。

その結果がこれならば、何と儚い事だろうか。

彼らは一体何のために頑張ったのだろうか。

一体何のために必死に戦おうとしたのだろうか。

少なくともこんな下らない争いに巻き込まれて死ぬためではなかったはずだ。

私は少し物思いに耽りたく、真っ黒な空を見上げる。

少し、お伽噺をしよう。

昔、今はどちらも滅んだが、二つの国があった。

一方の国は自由を愛し、互いの自由を重んじる事を理想としていた。もう一方の国は平等を愛し、家柄も貧困も無く、互いに平等な立場にいられる事を理想としていた。

二つの国は出来たその時から対立した。

どちらが正しいとか、どちらが間違っているとか、そういう事を言いたいのではない。

二つの国は、もとは一つの国だった。

そこには自由が好きだろうが、平等が好きだろうが、一つの国で居られた。

誰かが自由を愛せと言った。

誰かが平等を愛せと言った。

そう言われたから二つに別れた、ただそれだけの事だ。
だから二つの国は本格的には争わなかった。

お互いに理想については不干渉を決め込んだ。
当然摩擦もあつただろう、当然多くの人々が死んだに違いない。
しかし滅びるなどあり得ない。

例えばどちらかの国が片方の国を滅ぼそうとも、相討ちなどあり得ないのだ。

ならどうして滅んだのか。

答えは今さっき見た通りだ。

上から二つの国を破壊できる不可避の爆弾が降ってきた。

ただそれだけ。

つまらない答えだっただろうか。

だが私は思う。

終わりとはこういう事なのだ。

核戦争が起きようとも、地球温暖化で南極の氷が全て解け、殆どが海になろうとも、予想の範囲内だ。

それが起きても大丈夫なよう、それが起きないよう手は各々で色々と打たれているのだ。

だから終わりと言う物はいつも非現実的。

天使が人々を裁断し、竜が暴れまわり、巨人が焼きつくし、善神と邪神が戦争を始める。

そこで滅びようが滅びまいが、終わりであり、滅ばなかったら新たに始まるだけ。

さあ、プロローグは終わりだ。

そして一気にエピソードへ。

この物語は現時点をもって終了する事を宣言する。

この後、神たちによるひと悶着があるのだが、今見たところで何の意味もなさない。

理解などできるはずがない。

どうしてこうなったのか、どうしてこうなるのか。

全ては私にも解らない。

だが少しだけわかる事もある。

この世界は所謂バットエンドで終わると言う事だ。

まだ何も知らないあなたにその一端だけを再び見せよう。

この物語の本質であり、また謎でもある部分を。

この物語はまずエピソードから語らなければならぬのだから。

+

荒廃した街、生きとし生けるものが死に絶えた町。

入り込む朝日だけがその土地の生き物としての動きを見せる。

影は死んだ。

町の中央に黒ずんだ少女とその傍らに青少年が一人、転がっているだけだ。

第二神パフェヴェイルムⅡヒアスⅡファノレシスと輪廻架育。

まだ互いに辛うじて生きてはいるが、それは瀕死で生きていると呼べる状態ではない。

特に彼女の方はそんな次元を超越している。

ならば死んでる？

それは否。

ただ単に彼女に死の概念がないから死なないだけだ。

いや、それもここまでだ。

朝日によって彼女の体は徐々に薄れつつある。

彼女自身命を失う事はないが、やがて体は霧散し、そこらの空気と変わらぬ存在になり果てるだろう。

彼女の目は最早何も映さない。

ただ目の前の一人が背を預けられる程度の小さな壁を見つめるだけ。

そこは唯一この街としてのパーツを感じさせる場所であった。

揺り籠の様にその場所の周りには、彼女が残した漆黒が今も渦巻いていた。

まるでそこに誰かが座っていて、それを護っているかのように。

彼女はもう何も語れない。
体を動かす事も出来ない。

ただただ壁を見つめるだけ。

もう、彼女には壁すら見えないのかもしれない。

それでも彼女は最後に壁を見ていた事は解る。

彼女は何を思いながらそれを見つめていたのだろうか。

この世界に来て間もない彼女が見つめるほどの価値のあったものだろうか。

そこで私は彼女の最後についての思考を止め、今なお死へと進行している彼へと目を向ける。

体はかなり崩れており、容器としての役目を果たせていないほど凄惨な状態だ。

私はそんな彼の体に大きな布の様な物をかぶせる。

意識が戻ったのか、悲しみに彩られたその瞳が私を捉える。

そして自嘲する様に口を歪ませる。

もう良い。

ひと思いに殺してくれ。

その仕草は私にそう言っているように見えた。

私は手に神威の槍を出現させる。

そして彼の心臓の真上に穂先を向ける。

彼はYESとでも言うように安らかに笑い、目を瞑る。

穂先が彼の心臓へと沈みこんでいく。

これにて終幕。

圧倒的な力を持ち、同族の神すらも圧倒した彼女。

その彼女ですらこの劇で生き残る事が出来なかった。

この不条理極まりない劇を。

これは私が用意した劇。

俳優も配役も彼らの自由。

ただ、私一人が観客席にいただけ。

さあ、戻ろう。

再び楽しい時間へ。

私は壁をそつと撫ぜ、空を見上げる。

ああ、今日は雲一つない青空だ。

その5（後書き）

第一章はこれで終わりです。本当は第一章まるまるプロローグにしたかったのですが、思ったよりも長くなってしまう、第一章とさせていただきました。

読んでどうでしたか？ 恐らく意味が解らず、雰囲気を読んでいたと思います。戦闘シーンに関しても最初からクライマックスな勢いで説明もあまりせず、パフェの強さが解るよう書きました。その所為で主人公が後半空気でしたが。

次章からは主人公を活躍させつつ、少しずつ設定の説明と舞台装置の種明かしをしていきたいと思っています。

人物紹介（前書き）

人物紹介です。

読まなくても本編には支障はありませんので、興味が無い、あるいは初見の方は飛ばしてもらっても問題ありません。

ここは名前を忘れた、こいつどんなキャラだったっけ？ と思った時に振りかえる場所です。

一応初見さんが読んでも大丈夫な様には作っていますが、若干登場していない情報などがあるので注意です。

人物紹介

輪廻 りんね 架音 かのん

この物語の主人公。

やる気がありなく面倒くさがりな性格で、よく言えばクール。悪く言えば陰気な青年。

黒髪で長い揉み上げが特徴。

面倒くさがりではあるが怠け者ではなく、言われた事は何だかなだ言いながらもキツチリするところを見るとただのツンデレなのかもしれない。

パフェヴェデイルムⅡヒアスⅡファノレシス

終焉神の第二。

容姿は一言で言うとながが儼なお姫様（黒髪）。

傲慢で不遜でかなり適当に生きている所為か、たまに手痛い失敗を
していて何とも人間臭い神。

と、思いきや意外に思慮深く冷酷な一面もあり、どちらが演技なの
かは解らない。

天羽 あまは

あめのおははりのかみ

天之尾羽張神の御神体。

見かけは10代前半の少女だが実年齢は軽く10世紀は生きており、
博識で神気も強く頼りになる存在。

なのだが、架音曰く完全に時代に取り残されているので、日常生活
ではてんで役に立たない、との事。そんな事を言われている所為か
架音に対しては辛辣な言葉遣いをする。

何故華蓮の守護神になっているのかは不明。

輪廻 りんね 華蓮 かれん

架音の双子の姉。

非常にばやんとして掴みどころが無い性格。一見おっとりしていてもただの天然ぼけの様に見えるが、才色兼備、運動神経抜群とスペックは非常に高い、天才肌な人。

薬師寺 やくしじ 柚美奈 ゆみな

架音が通う学校の先輩。

この国で五指に入る程の治癒術のスペシャリスト。物静かな性格で普段は沈黙を保っている。まじめな優等生と見られがちだが、一生治癒術で食っていけるからか、あまり勉強はせずに妙なクラブを創設し遊んでいるので、学力はいまいちとの事。

小霞 こがすみ 紅天 こうてん

架音のクラスメート。

橙色のショートヘアの女学生。何だかんだと架音の世話を焼いてくれるが、一つ二つ余計な事をする所為で架音自身には煙たがられている。本人はそれを架音の照れ隠しだと認識している様だが、実際は……。

赤城 あかしろ 夜行 やこう

同じくクラスメート。

全身銀細工の装飾品をつけている、見るからに不良な同級生。実際に不良かどうかは定かではないが、限りなく黒に近いグレーな事をしていると言う噂がある。そんな容姿と風評だが、好物はインスタント食品で部室の彼の私物コーナーにはインスタント食品が大量に常駐されている。

如月 き 沙良紗 さらい

同上。

明るくお喋りな女学生。他人がしている世間話、恋話、雑談、猥談

をどこからか聴きつけて記憶しており、しかも口が軽い為ポロつと喋ってしまう傍迷惑な人物。下手に彼女を糾弾するとんでもない秘密を暴露されたりするので誰も強く言えない。架音曰く常時自白剤服用者、との事。

創地 そうち 夢渡 ゆづ

同上。

金髪の元気な少年……に見えるクラスメート。勿論飛び級ではない、れっきとした同級生。身長の低さを地味に気にしている。別の学校に恋人がいるらしい。

人物紹介（後書き）

地味に一周年記念。

……言いたかったです。

第二章 『Notturno capriccioso』 その1

「——ドーン!!」

馬鹿みたいな擬音と共に俺の腹部にボールをぶつけられた様な衝撃が走る。

「おぐう！」

腹から絞り出した声とともに、意識は一瞬で覚醒する。
敵襲警報を聞いたように俺は飛び起きる。

時間は？

目覚ましに使っている電波時計は午前9：30を指している。
今日は？

携帯を開き日曜であることを確認する。

ほつと息を吐き、再びベッドに倒れこむ。

安堵しながら最初から携帯を開けばよかったと少し後悔する。

やはり寝起きは思考速度が鈍くてかなわない。

緊急の事態が終わった事により、思考が安定してくる。

そして、そこで思考が一回転する。

じゃあさっきのは何だ？

ぎぎぎ、と音が出そうなほどぎこちない動きで首を自分の腹部に向ける。

「んん、カー君の匂いがする」

そこには俺の腹部に頬を擦り付けている我が姉様がいた。

「……………何か用か？」

苛立ちを隠さず、我が姉、華蓮の頭を鷲掴みにする。

この姉は毎度毎度俺の理解の超える事しかない。

普段、俺が起こすまで眠りこけていると思えば、俺がゆっくり寝ている休日に限って

起こしに来たりする。

これはもう嫌がらせのレベルだろう。

無自覚の嫌がらせだから尚、性質が悪い。

「用？ んん〜。……………カー君の体をギュツとしに、かな？」

そう言つて頬を押しつけたまま胴体に抱きつく姉。

照れたように言つてもごまかされない。

俺は照れる前に一瞬眉を寄せ、悩んでる素振りをしかと見たぞ。

「明らかに今作つた理由だろ。——起きるから離れろ」

コアラのようにしがみ付く華蓮を頭から引きはがそうとするが、起きたばかりの所為か、うまく力が入らない。

「むふ〜、その程度じゃお姉ちゃんは離れないぞお」

ふつつつつ、と笑いながらますます図に乗る姉。

いい加減鬱陶しくなってくる。

蹴り飛ばそうかと考えているとちょうど良く華蓮のお腹が鳴る。

「あつ、思い出した。お姉ちゃん、カー君に朝御飯を作つてもらつために起こしに来たんだつた」

ぱつと手を離し、華蓮は立ち上がる。

「朝御飯つて……………、姉貴は料理できるだろ？」

「ノンノンノン、カー君は解つてないなあ。他人が苦勞して作るからこそ料理は美味しいんじゃないか」

華蓮は右手を腰に添え、左人差し指を左右に揺らす。

一々芝居が掛かった仕草をする姉だ。

輪廻華蓮^{りんねかれん}、俺が知る限り最高最新ランクの超スペックを搭載する人間。

頭脳明晰、容姿端麗、スポーツ万能などなど最近ではバーゲンセールのように売り出されている能力を持っていると考えてくれればいい。あと、本当に器用で何をやらしても失敗する事がない生物。精密機械人間と言つてもいい。

性格は機械のそれとはまったく逆な、マイペースではちゃめちゃんな性格だが。

その所為か、自分でした成果に飽きてしまった駄目な人だ。何度か聞いた事があるが、姉貴は何も考えずに料理を作ると何度や

つても同じ物が出来上がるらしい。

ハンバーグならハンバーグ、オムレツならオムレツ。

殆ど誤差なくテンプレの様な物を大量生産するのだ。

また、味も食材によほどの事がなければ変わらないらしく、そういう意味では酷く不器用な人でもある。

まあつまりは、自分で料理を作っても美味しいとも不味いとも感じなくなってしまうたわけだ。

「そういう事でおねえちゃんは愛情籠った朝食を所望するのでよろしく」

指をピツと突き出しポーズをとると、華蓮はスリッパを喧しく鳴らしながらリビングにスキップして行った。

下の階の住人にまた文句を言われない事を切に願う瞬間だった。

「俺にとつては姉貴の料理のほうが断然美味いのに……」

俺はぼやきながら伸びをすると、ベッドの乱れを直し、パジャマのままキツチンへ歩き出す。

ここは俺と姉貴の家。

正確には一人暮らしをしている姉貴の家に、実家を追い出された俺が居候している形となるが、そのあたりの事情は割愛させてもらう。駅から徒歩10分、14階建てのマンションの最上階に住んでいる。学校へは俺は30分、姉貴は10分の距離にある。

なぜ姉弟で時間が違うのかと言うと、姉貴は俺とは別の学校に通っているからだ。

所謂そこはお嬢様学校と言われ、そこらのちよつとした金持ちの娘が通っている。

斯く言う我が家も格式だけはある、こうして姉貴が通っているわけだ。

名称は聖樹女学院、当然のように女子校だ。

とまあ、それなりに良い立地条件にある。

ちなみに柚美奈先輩も同じマンションに住んでいる。

内装はマンションなのに5LDKと無駄に広く、二人で住むには少

々部屋が余っているぐらいだ。

そのお陰、と言う訳でもないが人間じゃないのが住みついているが……。

「ふあい、朝餉はまだか？」

ぐくぐしと目を擦りながら下着にワイシャツのみで洗面所から出てくる神剣様。

本当にコイツは剣なのかと疑いたくなる。

どこの世界に顔を洗い、寝ぼけ眼で朝飯を要求する剣がいるのだろうか。

………つか、ズボン穿け。

と言いたいところだが、いつもの事なので注意する気も失せる。

「………前から疑問だったんだが、お前……錆びないのか？」

気分を変えて、もっともらしい事を質問してみる。

勿論錆びないのは知っている。

姉貴と一緒に風呂に入っているくらいだ、プール程度なら全く錆びないだろう。

だから俺は鼻で笑われて『はっ、愚かもの。神剣である私が錆びるわけないだろう？』とか何とか返されるだろうと思ったのだが。

「………」

天羽は答えない。

それどころか急に深刻な顔を始める。

もしかして日々僅かに錆びているのだろうか？

いや、そんな事は無いとすぐにその考えを打ち消す。

と言うか、そもそも天羽の刀剣が鉄でできていない事を知っているので、この質問自体無駄な事ではあるのだが。

「どうした？ 実は女性の美容の様に陰で類稀なる努力をして、美しい刀身を維持しているとか？」

天羽が刀剣化した時の綺麗な抜き身を頭に思い浮かべる。

とても千年の時を経た刃には見えない。

「お前、本当に華蓮の弟か？ 緋ヒレイロカネ緋色金を知らないなんてどうか

しているぞ」

天羽の沈黙は呆れて、だったようだ。

実際、神剣様（笑）が美容を気にしてる所が想像できないしな。あと、俺の名誉のため言っておくが、緋緋色金はさすがに知っている。

ダイヤモンドより固く、永久に錆びない物質だと言われている。有名なオリハルコンの和名の様なものだ。

もはや眉唾だとか野暮な事を言う必要もないだろう、それよりあり得ないものが俺の周りにはうようよしているのだから。

「ところでだ、あゝ……どうだ？」

腰に手を当て、無い胸を突きだすかのようにポーズをとる。

実際は『あゝ』と『どうだ？』の間に『今日は』という文字が小さく入っていたのだが、よく聞こえなかった。

「駄目だな」

天羽の問いを俺は意味も解らず否定する。

真っ向からバツサリと。

その所為か天羽の顔は盥が頭にぶつかったかの様な衝撃を受けている。

酷いと思われるかもしれないが、どうだ、と言われても解るわけがないのだからしょうがない。

そりゃあ突然そんな事を言われた日には、ある程度考えるかもしれないが、この所毎日同じ質問をしてくるのだ。

それでいて何を訊いているのか俺が訊いても、小さな声でぶつぶつ言うだけでさっぱり解らない。

これはまた姉貴の入れ知恵だなと、小さく溜息を吐く。

「ううう……さ、さっきで私の言いたい事が解るのか？ わ、解る物なら答えてみる。ほら、どうした？ 答えられないのか、この出来そこないっ」

天羽は顔を真っ赤にしながらくいぐいとパジャマの袖を引っ張ってくる。

とてもじゃないが神の威厳と言つものを感じられない。

身長の小ささも相まって、意地を張る小学生と言つのが妥当だろう。一体全体姉貴はこいつに何をさせたいのだろう。

「答えてみるって……そもそも俺にはお前が何を聞きたいのか解らないのだが……」

「なっ！ よかった……では無くてっ。じゃ、じゃあなんで駄目だと言ったんだっ」

一瞬笑顔になったと思えば再び一転して睨みつけてくる。朝っぱらから表情豊かな奴だと呆れる。

どうでもいいから早く朝食を作りに行きたい。

「その前に何を聞きたいか、教えてくれ。それを教えてくれるなら俺も教えるから」

「だ、だから、そのだな……。んーと、えーっと、そっそう、ですと？だ。これはですと？と言っ奴だ」

天羽は一人頷き、納得する。

またわけのわからない事を言い出し始めた。

無理に横文字を使おうとしている所為で酷くアホの子にみえる。

「テスト？」

「そうだ、ですとだ。お前もいつか、もしかしたら永遠にあり得ない事かも知れんが万が一私を使う時が来るかもしれない。限りなく

天の尾羽張

零に近い確率なのだが備えあれば憂いなしと言っし、万事が塞翁が馬とも言っし、今ここで私と相性がいいか確かめてやる」

天羽は言い切るとはあはあと肩で息をする。

それも当然だろう。

息継ぎもせずに早口でまくしたてれば誰だってそうなる。

「で、方法は？」

いつまでも廊下でコントをやっているわけにはいけないので、この訳のわからない理論にも納得する事にする。

「ん」

天羽はくると俺の目の前でターンして見せる。

その際ワイシャツがスカートの様に円上にひらく。

下着を隠せていない時点で最早スカートでも何でもないのだが。
そして『どや』と期待に満ちた目線。

何となくこいつが今までしたかった事が解ってきた気がする。

「あゝ、もしかして容姿を確認してほしかったのか？」

天羽は何も言わずにそっぽを向きながらゆっくり頷く。
なら始めから口で言えいいのと思う。

素直になれない癖に、毎日実行していた生真面目な天羽に苦笑する。
こつ、空回りしつつも頑張る姿を見せられると可愛く見えてくるから不思議だ。

俺はフツと笑い、天羽の肩にポンと手を置く。

「寝癖。——アホ毛に寝癖がついて二本に分かれている所為で
触覚みたいになってるぞ」

その瞬間、天羽の口がぽかんと開き、凍結する。

俺は呆気にとられる天羽の横を通り過ぎ、そのままキッチンへと向かう。

「ΣΓηφ???! ε?『く口!!!!!!』」

日本語にならない悲鳴が後ろから聞こえるが、最早俺には聞こえなかった。

俺は今日もいい事したなあ、と思いつつ冷蔵庫を開けるのであった。

+

トースターに食パンを突っ込み、冷蔵庫からトマトとスライスチーズとレタスを取り出す。

食パンが焼きあがるまでにそれらを適度な大きさに切り分け、出来上がったパンで挟みこむ。

と、その前に具と具の間にマヨネーズやらケチャップやらを塗り込む。

これで完成。

何の事は無い、サンドイッチだ。

誰でも作れて美味しく食べられる朝食だ。

その工程を三回繰り返す間に目玉焼き三つとアイスコーヒーを用意する。

目玉焼きの焼き方は当然サニーサイドアップで半熟。
ターンオーバーは見た目的に目玉焼きと言う感じがしないので嫌いだ。

目玉焼きに何をかけるかは三人それぞれ違い、俺は塩胡椒、姉貴はマヨネーズ、天羽は醤油となっている。

あと天羽はコーヒーが大嫌いだ、うちの朝はコーヒーと決まっているのでミルクたぶたぶ、砂糖なみなみに入れて我慢してもらっている。

最早コーヒーと言う名の白濁した甘い液体になっているが、本人がそれでいいのだからいいのだろう。

あとは出来上がったサンドイッチを食べやすいように一口サイズに切り分ければ完了だ。

「ほら、出来たぞ」

テーブルにサンドイッチを載せた皿を持っていくとフォークとナイフとナプキンで完全武装した華蓮が待っていた。

そして何を勘違いしたのか天羽は、どこから持ってきたのか知らないが五徳にスプーンとナイフを立て、白装束姿で椅子に正座していた。

その表情は今にも自殺しそうなほど陰鬱としていた。

一体俺がサンドイッチを作っている間に何があったんだろう。

俺は二人を見ないように淡々と皿を並べてゆく。

ちなみに五徳とは丑の刻参りに使う道具…頭に蠟燭と共につけているあれだ。

今は蠟燭の代わりにナイフとフォークが付いているが。

まあ、どうせ姉貴に碌でもない事を吹き込まれたのだろう。

こんなことは日常茶飯事なので俺はそのままスルーする。

「では、いただきます」

華蓮は俺が席に着いた事を確認すると、流麗なテーブルマナーで食

始める。

ステーキを切り分けるかのようにナイフで切り、フォークで突きさし、口に運ぶ。

サンドイッチを。

一切音をたてず、口に運ぶ様は物凄く絵になるのだが、如何せんシユールとしか言いようがない。

「……………」

一方天羽はと言うと、スプーンとナイフを右手で箸の様に使って口に運んでいる。

これはギャグを通り越して素直に感心する。

家にある食器、スプーンやナイフやフォークは全て銀製品で出来ており、厚みも重さもある所為で普通は上手く使えないのだが……。だてに数千年生きてはいないという事だろう、恰好は白装束だが。そんな異文化コミュニケーションの中、俺はただ黙々と手掴みでサンドイッチを咀嚼する。

俺の食べ方が正しいはずなのに、どうしてか俺の方が野蛮人に見えてしまうのはなぜだろうか？

三者三様首を傾げながら食事の時間は過ぎていった。

その2

食事後の皿を食洗機に突っ込んで後片付けしている間に、姉貴と天羽は何やら外に出かけたらしい。

何か最近不穏な気配を感じるとの事らしいが、俺にとっては出かける際にも白装束だった天羽の方が不穏で仕方がない。

本当に丑の刻参りをする気だろうか？

曲りにも神が人を呪うのに人の呪法を使うのは何か本末転倒な気がするのだが。

俺は頭を搔くと、ソファーに深々と座る。

どうせ姉貴も天羽で遊んでいるだけだし、気にする事は無いなと小説を手取る。

タイトルは『終の天使』紅天に押しつけられ、感想を求められているので読んでいる。

無理やり読まされている感があるが、別に本は嫌いじゃないので逆にありがたかったりする。

内容は主人公の女性が、草原で岩に腰かけている天使に恋をする話だ。

ここに出てくる天使が変な天使で、主人公が『どうしてこんな場所にいるのか？』と問うと『この場所で本を読むのが様になるからだ』と開口一番こんな事を言ったりしている。

主人公もその天使が変だと思っており、なぜそんな事をしているのか知ろうとするうちにどんどん恋に落ちていく話のようだ。

冒頭しか読んでいないが、こうしてまとめて見ると異種族恋愛ものに見える。

実際そうだろう、主人公が天使に恋をしているのは文章で述べられているのだから。

ただ、恋愛ものにしては何かおかしい。

文章は主人公の一人称視点で綴られているのだが、その書き方がま

るで日記の様なのだ。

セピア色に色あせた記憶を語るように淡々と話は進んでいる。

幸せだったあのころを羨む様、嫉む様、物悲しげに。

悲恋物ならこんな書き方はしない。

悲恋物は楽しげで幸せで一杯の二人を絶望の淵に叩き落とすのがいいのであって、最初から絶望している様なものには何も感じない。

俺は紅茶を口に含みながらこの小説について、逐一考察する。

そんな時だ、インターホンが鳴ったのは。

こんな時間に誰だろうと思い、本に筆をはさむと、モニターで顔を確認しようとする。

すると再びインターホンが鳴った。

随分せつかちな奴だなと思いつながら、立ち上がりモニターへ向かう。三度インターホンが鳴る。

「……………わかった、わかった。今出るから」

誰に聞かせるでも無しに一人呟くと、通話のボタンに指をかけ、応答しようとする。

が、ボタンを押した瞬間、モニター越しにいる人物と目が合った気がした。

煌びやかに揺れる橙色のショートヘア。

髪をかき上げ、苛立たしげにこちらを見つめる金色の瞳。

今会いたくない人物ベスト3に入る小霞紅天こがすみ こうてんが立っていた。

ちなみに1位が夢渡で二位が紅天、三位が沙良紗と言う順だ。

赤城の場合はむしろ来れば驚いて茶菓子でも出すかもしれない。

いや、まあそれはいい。

ともかく俺はこいつと今日は会いたくないのだ。

何かいい方法はないかと通話ボタンに指をかけた状態で悩む。

四度目のチャイム。

……………。

「……………このインターホンは現在使われておりません、ピンポーンと言っ音の後に……………」

音の後に…、なんだろ？

何もネタが思い浮かばない。

「あは、それ以上言つと色々ぶっ壊すぞ？」

真似る気も無い俺の留守電応答に、紅天は可愛らしい声色を出しながら玄關のドアを殴りつけてきた。

ドスンと厚い鉄の扉がへこみそうな擬音がインターホンを通して聞こえてくる。

脳筋女め、本当に凹んでたらどうする気だ。

と言つか衝動的にやってしまったが、何してるんだろ俺…。

居留守使つなら出ないのが一番なのに。

思わずネタに走る自分に嘆息する。

まあ、やってしまった事は仕方ないとして、これからどうするか考えよう。

俺は眉間にしわを寄せ、モニターを睨む。

すると十秒すら経っていないのに痺れを切らしたのか、紅天は次の行動に移り始める。

何をする気だろうと見ていると、紅天は青筋立てながらにつこりほほ笑み、画面に向かって手を伸ばしてきた。

がしつと言つ音が聞こえそうになる位インターホンの画面が揺れると、ミシミシと言つ音が本当に聞こえてくる。

ヤバい、本気で壊す気だこいつ。

心なしかモニターの画像の映りが悪くなっていっている気がする。

「——何の用だ」

これ以上無視すると警察沙汰になりそうな雰囲気なので小声で返答する。

小声なのは聞こえなかったらいいなあ、と内心甘い希望を抱いていたりする所為だ。

まあ、そんな甘い事が現実になるわけでもなく。

「用？　へ、用が無きゃあたしは来ちゃいけないわけ？」

インターホンへのブレイク作業を維持したまま、眼を細め、奴はこ

ちらを睨んでくる。

「正直ところ勘弁してほしいな。——つか手を離せ、まず話はそこからだ」

俺の言葉に従ってか、紅天はぱつと手を離す。

何だ、聞き分けがいいじゃないか、と思ったが一瞬で間違いだと言う事に気付く。

あれだけ顔にあった怒りマークは消え、代わりに能面の様な表情でこちらを見ていたからだ。

俺はその時直感した。

何か地雷を踏んだのだと。

見る限りまだ爆発はしていない。

しかし、足をどければ一気にドカンだ。

ここは普段通り慎重に対応せねば。

俺は紅天に聞こえない様、深呼吸をする。

「あんた……今日朝九時から何か予定が入っていたのを覚えてる？」

「いや、全然」

これっぽっちもそんな記憶は無い。

だいたい休日の朝九時に俺が予定を入れるわけがない。

……無いんだが、何だろう、もし約束していたら俺はどうなるんだろうと言う強迫観念に似た思いが、俺の頭の中を駆け巡る。

「ほう、ほう……。つまりあなたは覚えていないとおっしゃるのですね？」

「身に覚えがない、と言う意味ならな」

言っていていやな予感が俺のように流れ落ちてくる。

何がどうなっているのか知らないが、断言できる事は、絶対に面倒な事になると言う事だ。

「もし、あたしがあんたと今日九時に会う予定がある事を立証できればどうする？」

「どうもしないと言いたいところだが、それじゃあ納得しないんだろ？」

「もちろん。取り敢えず中に入れて。——でないと……」
言葉とともに紅天は俯く。

一瞬泣き落としに来たのかと思えるそれは、そんな生易しいものじやなかった。

口元が嗤っているのだ。

三日月のようにザックリと弧を描きながら。

こうなると、でないとの後の…の部分に入る言葉が非常に怖い。

俺は悩む暇もなく折れる事にする。

誰でも自分の命は惜しいのだから仕方ないだろう。

「はあ、開けるからその振り上げた手を下せ」

最初はグーと怨嗟の入った音頭で握りこぶしを頭の横に振り上げ始めた紅天を諭す。

一方的にこちらが被害を受けただけと思い、納得はいかないがしぶしぶ鍵を開け、中に入れる。

その際、玄関のドアの外側を確認する。

直ぐに見なきやよかったと後悔する。

……微妙に拳型に凹んでる。

俺は姉貴になんて説明するんだよこれ、と暫く頭を抱える破目になるのであった。

「どーもー」

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、にこやかな顔で俺の脇を猫のように抜け、勝手に一番手前の部屋である俺の部屋の中に入り込む紅天。

これ以上何をする気だろう、俺のMPはもう殆ど零なのだが。
メンタルポイント

「——荒らしに来たのなら帰ってほしいな」

溜息つきながら俺は脱ぎ散らかされた玄関の靴を揃え、紅天に続く中には俺の携帯を持った紅天がカチカチと弄っていた。

「どう？　これが証拠よ」

そして勝ち誇った笑みでディスプレイをこちらに向けた。

「さてさて、今日は何を奢ってもらおうかな？」

紅天はリビングのソファに我が物顔で腰かけながら、何処から取り出したのか店のチラシを広げる。

「奢るなんて一言も言っていない」

そうは言いながらも、俺は紅天にコーヒーを渡す。

「何よ、約束破ったくせにそのくらいしてもいいんじゃない？」

何度も何度も黒い水面に息を吹きかけると、紅天は時折コーヒーを子猫の様に舐めながら飲む。

重度の猫舌の様だ。

その光景が何とも言えぬ微笑ましさを醸し出していた。

ジツとしている分には、だが。

「覚えのない約束と証拠を提示されて納得できるわけ無いだろう？」

俺は忌々しげに携帯のディスプレイを見つめる。

そこには『日曜日朝九時セントラル広場集合』と先週の金曜日、2

0時の日付で、メモ帳に書き加えられていた。

もちろん俺はこんな事を書いた覚えはない。

時間的に家に帰ってからであり、どう思い返しても携帯に触れた記憶が無い。

俺が記憶喪失になってさえいなければタネがあるはずだ。

横目で美味しそうにコーヒーを舐めている紅天を見る。

あれだけ機嫌が悪かった顔が、今では至福の表情をしている。

まるですべて上手くいった、といった達成感のある顔だ。

「なあ、あんた。ちよつと聞きたいんだがいいか？」

俺はある種の確信を抱き、話しかける。

「ん、なに？ スリーサイズとかなら却下ね」

勢いよく飲み過ぎてやけどしたのか、舌を出して渋い顔をしている紅天が、こちらに向き直る。

「何で俺の携帯に証拠があると確信してたんだ？」

「へ？ そりゃあ…あんたにあたしが金曜日、学校でメモ帳に書きこむように言っただけだよ」

人差し指を立て、空中に円を書く仕草をする紅天。

その眼は俺から斜め上に逸らされており、どう見ても怪しい。

「ほお、じゃあ何でおれはその時に書き込まなかったんだ？ その時書き込まなかったのにも拘らずどうして後々書き込んだんだ？」
「そんなの知らないわよ。気が変わって行きたくなっただけじゃないの？」

「知らない？ いや知ってるだろ。だってあんたさっき俺にメモ帳に書き込むように言ってる俺がその時書き込まなかったのにも拘らず、確信を持ってるだろ」

この時点で矛盾だからだ。

もしこれが噛み合うのだとしたら、勝手に思いこんだ紅天が『偶然正解した』という結末でなければならぬ。

それが普段の俺の通りの行動なら何の違和感もないだろう。

よく自分を知る知人が、普段からの信頼度を示しただけとなる。

だが、俺は朝の九時に予定を入れる事など普段からはありえない。ならば、こいつは普段の俺と別の俺を幻視し、その幻視の通りの行動を俺がしたと言う事になる。

本人も知らないうちにだ。

そんな事が有り得るのだろうか？

「何、推理ごっこがしたいの？ —— なら、あたしはその時、カノンが携帯に書き込んだと思っていた。しかし、カノンはその時書き込まず、帰ってから書き込んだので結果的にあたしは勘違いだが証拠を確信し、偶然にも発見してしまった。これでどう？ 辻褄は合ってると思うけど」

今俺が考えた通りの事を話される。

確率的にゼロでは無いので否定できない。

起きる前ならともかく起こってしまったので、それでも地球は回っていると押し切られるからだ。

「確かに間違っているとは言えないな。だからそこは一旦保留にしよう。—— 次だ。あんた、何で直接俺の家に来た？ 電話やメー

ルで済む話だっただろう？」

これも可笑しな話だ。

出ないならまだしも、俺の着信履歴に一度も紅天かそれ以外が残っていないと言うのはおかしい。

「そうねえ、なんとなく言って言えば済むんだろうけど、それじゃあ詰まらないから。一時間以上待たされて怒り心頭で乗り込んだ、ってのはどう？」

「それじゃあ電話しなかった理由にならない。だいたいセントラル広場はそここの広さがある。俺が約束通りそこにいてもお互いに会えない可能性だってある。なのにあんたは始めからここにしか居ないと決めつけて一直線にここに来た。すれ違いになる可能性だってあるのにな」

「そう？ あなたの性格を考えればすっぱかして家で寝ている、と思う方が自然だと思うけど…。でも、真っ向から反論するなら…：そうね、それだけで私が電話を使わなければならないという理由にもならないはずよ。広場だって一通り見回ったし、広場からカノンの家までの最短ルートを通ってきたし。—— あー、あと電話すれば逃げられそうだったからってのも理由で」

俺の性格の件に関しては、俺自身も同意する。

電話すれば逃げると言うのは実際にはないが、あり得そうと思われている自覚はあるので、論ずる気はない。

だが、本当に携帯を使う必要が無かったのだろうか？

偶然携帯を使わなかった。

あり得なくはない。

が、もし俺が紅天の立場なら何をしているのか訊く旨のメールを送る。

それならすれ違いも防げるし、逃げられることも無い。

寝ていれば帰ってこないだけだし、デメリットが無いからだ。

ならどうして使わなかったのだろうか？

その事に気付かなかっただけ？

それもまた十分あり得る。

しかし、使えなかったという選択肢もあり得るのではないか？

「――概ね同意する。じゃあ次だ。あんたは俺の家に来て証拠を見せると言って携帯を見せたが、本当にこれは確かな証拠か？」

「あたしの言った通り九時に予定が入っていたでしょ。どこが十分なのよ」

「何日、午前か午後か、誰と……が書かれていない」

「それがどうしたのよ」

そんなの当たり前でしょ、とでも言いたげな顔で俺に視線を送る紅天。

こいつにとってこういう文章は当然なのだ。

俺は携帯のメモ帳を起動し、過去に書かれた事を紅天に見せてやる。

「俺はメモ帳に書き込むときにな、午前午後はともかく日付と誰との用事かは書き込むようにしている……、ほら、こんな風にな。そして休日のこんな時間に予定を入れる事は無い。即ち、これは俺じゃない人物が書き込んだ可能性が高いと言っわけだ」

これがそもその違和感。

長々と俺が屁理屈を並べる理由。

これは俺じゃないという確信。

となると、問題は時間と言う訳だ。

俺は携帯を手元に戻し、色々と設定をいじる。

「へー、当然そこであたしに容疑が掛かるわけか、でも、残念ながらこの時間帯はあたしは部活で学校にいたわよ？ 本格ミステリーみたいにアリバイ調査してもらってもかまわない」

「そんな必要はない。あんたのその時のアリバイを俺が保証できるからな」

紅天は怪訝な表情で俺を見る。

それは当然の顔だろう。

何せ自分でこいつの無実を保証しようと言っている様な物だから。

「じゃあ誰が？ あたしがあんたのキョウダイに頼んでカノンの携

帯を操作させたとしても言うつもり？」

「ああ、俺も最初はそう思った。それが一番単純で簡単な方法だからな。――だが、姉貴はその日午後10時まで帰ってきていない。そしてそれまで家の鍵は掛けられたままだった」

このメモ帳に関する事以外の記憶ならそこそこ正確に記憶している。少なくともその日の姉貴の帰宅時間は正確に覚えていて、それまで姉貴が帰ってきてない事は知っている。

こいつには言えないが、その日姉貴は他県での重要な依頼を片付けるために朝から用事で出ているのだ。

これが依頼で無いのなら勝手に切り上げる事も疑うが、こんな下らない事をする為に依頼を切り上げるメリットが無いので信用する事にする。

これは俺が姉貴の帰宅音を見逃す可能性の低さも含めてだ。

「じゃあ、カノン以外不可能じゃない」

記された時間帯に限定すると一見不可能に見える。

と言うより、魔法や犯罪行為を行わない限り、この記された時間に俺以外の人間が書き込むのは不可能だろう。

時間と書き込み、ここでネックになっているのは先程から言っているように時間だ。

どうすれば金曜日の20時として書き込む事が出来るのだろうか。

俺は先程からずっとその方法を考えていた。

ああ、実は案外難しい事じゃない。

所詮は設定をいじれる機械もの、信用する方が間違いなのだ。

「そうでも無い。確かにこの記された時間に書き込むことは不可能だが、この時間としてメモ帳に残すことは可能だ」

俺は携帯のメモ帳に金曜20時の日付で『テスト』と書き込んだ一文を紅天に見せる。

「……………む」

「携帯自体の時間を変更してメモ帳に書き込めばその時間になるかな。あとは携帯の時間を戻せば工作終了だ。あんたは電話やメー

ルを忘れてたわけじゃない、出来なかったんだ。まだその時にはメモ帳にメモが無いんだからな。そしてメモ帳の内容が不自然なものも当然だ。ギリギリで文章を打つ時間すら惜しかったくらいだからな」

違うか？ と俺は紅天に意地の悪い笑みを向ける。

仮に昨日、紅天がこの仕事をすれば発見し次第、俺は断っていただろう。

『悪い、明日用事が出来た』とでもいう風に。

だから断られない為にもこいつは今日午前9時過ぎ以降に工作をしなければならぬのだ。

まさか、遊びの約束を結び付けるためにこんなむちゃくちゃな事をする奴などいまい。

しかし、だからこそ真つ当な神経の持ち主なら不服ながらも付いていくだろう。

「なっ、なるほどなるほど、それなら理論として可能かもしれないでも、それはおかしくない？ その理論はあたしの出来る可能性を話しているだけで、計画を立てる段階では結構破綻してる理論よ。

失敗する可能性が高すぎるし、第一たかが奢って貰う為だけにそこまでの？ こうして付き合ってるあたしが言うのもなんだけど、ほんつとどうでもいい事だと思うんだけど」

「確かにどうでもいい、と言うのには同意する。だが、そう言ったところであんたは帰らないだろ？ だから納得させる兼、暇潰しをしている訳だ。頑なに拒絶するより効果がありそうだしな」

嫌がらせと気付いているなら、素直に帰ってほしいものだ。

こちらとこれ以上被害を出さないために頑張った様なものなのだ。

とは言え、自分の推理はおおよそ間違っていないはずだ。

玄関でのブレイク作業も、靴を脱ぎ散らかしたのも、時間稼ぎと思えば筋が通る。

だが、紅天の言うように絵に描いた餅のような計画なのは、言っている俺が一番理解している。

なら、なぜこんなに自信があるのか。

ネタばれするとだな、そもそも俺は昨日の時点でメモ帳にこの件が書かれていない事を知っているからだ。

言わば過程は解らないが、犯人は始めから知っている様なものだ。反則だつて？

俺は探偵でも何でもないのでから、そんなこと言われる筋合いはない。

「そ、そんなことないわよ。……………たぶん」

明らかに紅天の眼が泳ぐ。

もつと演技が上手ければ騙せたかも知れないのに、残念な奴だ。

「で、続きだが、これは寧ろどうでもいいからこそできる計画だ。

と言つのもあんたは証拠を見せると言っただけで携帯に証拠があるとは言っていない。つまり、携帯が間に合わなければ『これじゃなかった』と言い、第二、第三の計画に行けばいい。全部失敗しても見つからなかったで済むからな」

この俺の考えが正しければ、こいつはとんでもない奴だ。

天に運を任せ、それを連発する事で完全なアリバイを作ろうとしたのだ。

正直この行動力には感服する。

「……………あゝ、もう…わかった、わかったから。降参、あたしの負けでいいから」

諸手を上げ、紅天が降参の意を示す。

俺の考えが正しかったかどうかは解らないが、帰ってくれるのならどうでもいいことだろう。

「そうか、それはよかった。早くお引き取り願おうか…、俺はこれから昼飯の献立を考えなくちゃならないからな」

そう言つと俺は冷蔵庫を開け、中に何があつたか確認する。

ほうれん草、挽肉、玉葱、エリンギ、アボガド……………。

簡単にパスタでいいか。

「あの、カノン君。モノは相談なんだけど、これからあたしとどっか食べにいかない？ 奢るからさあ」

おずおずとそんな俺の背に紅天は話しかける。

「――断ると言ったら？」

俺は振り向かずに答えを返す。

そもそもこいつを中に入れた時点である程度覚悟はしていた。

俺は結局こいつと外へ行く運命になるだろうと言っ事を。

「末代から並行世界まで崇めてやる」

涙声に成りながら呪いの言葉をかける紅天に溜息を吐きながら、俺は外へ行く支度を始めるのであった。

その3

死んだ魚の様な眼をしながら俺は人通りを眺める。

俺の前にはニコニコしながらパフェをつつく紅天がいる。

やはりというか、何と云うか結局俺は紅天に連れ出されていた。

時刻はちょうどお昼過ぎ、オシャレなオープンテラスで昼食中、いや食後の余韻をデザートとコーヒーで楽しんでいる。

紅天がお勧めするここは若者に人気らしく、内外ともに俺達と同じような年齢層の客で賑わっている。

正直人混みは苦手だ。

特に椅子取りゲームをしている様な混雑具合の飲食店は、どれだけ美味しかろうとも進んで行こうとは思わない。

食事と言うものはゆっくり落ち着いて食べるものであり、騒音の中前の客のごみを気にしながら急かされる様に食べるものではない。そんな俺の心情を鑑みたのか、紅天はピーク時を外してくれたようだ。

その代わり、この時間になるまでウィンドウショッピングに付き合われる羽目になったが、不思議と不愉快には思わなかった。

買う気も無い物の永遠と見続け、意見を言い合う。

ちよつと前までは時間の無駄だと即座に断じていただろう。

元々雑多な場所は人が多くて好きではない、一人身が好きな自分としては当然の帰結だ。

しかし、まあ、なんだ。

言うほど居心地の悪い雰囲気ではなかった。

店に並んでる商品についてあれこれ言うだけでなく、店の雰囲気を作るために置かれた置物がどこに売っているのか、とか、実はオーダーメイドで作られているんじゃないだろうか、とか、色々下らない事を言い合っているおかげで話題は尽きなかった。

その時俺は、ああそうかと得心したのを覚えている。

ウィンドウショッピングとは共通の話題を作るためにする物なのかと妙に納得したのだ。

ここで終われば『いい話』で終わるはずだった。

何を思ったのか紅天は女物の呉服屋に俺を引っ張って行った。

紅天が言うには、なんでも服を買いたいのでどれが似合うか決めてほしいとの事だった。

まあ、時間潰しのついでだと思って快く返事をしたのがまずかった。俺は女の買物物が何で長いのか全然理解してなかったのだ。

数十着の服を片手に試着室へ向かっている紅天の後ろ姿を呆然と見ていたときから何かがおかしい気がした。

あれ、もしかしてこれは凄くやばい状況なのでは？ と頭が理解を始める。

待つこと数分、俺は女物の呉服屋の試着室の前で手持ち無沙汰にしている男、と言う何とも怪しい男を演出する羽目になった。

店員が明らかに敵意のある目でこっちを見ている、他の客が俺を見てひそひそ何かを言い合っている。

そんな状況下、紅天を置いて外に出るわけにもいかず、かと言ってこの環境にいるのは地獄で、完全に八方塞になってしまったわけだ。どうする？ どうすればいい？

俺の脳内に人生カードがぐるぐると回る。

当然俺のとるべき道は試着し終えた紅天をべた褒めする事だった。

俺が今まで学んだ語学の全てを駆使して褒めた、とにかく褒めた。だが、悲しいかな、紅天の反応は意外と淡泊で次の試着に向かってしまう。

試着室のカーテンを監獄の扉の様な気持で見送る事になるうとは思わなかった。

しかし、絶望してはいられない。

次こそ紅天に気に入ってもらえるような褒め言葉を、携帯をフル活用して検索する。

今から考えると本末転倒だが、その時の俺にはそんな余裕はなかつ

た。

次こそ、次こそ……、と回数を続けているうちに俺はある事に気付いた。

こいつは俺の意見など始めから聞いちゃいないんじゃないのかと、本当はどれを買うか、若しくは買わないか既に決まっ^ていて確認しているだけではないのかと。

憐れむような、可哀そうな奴を見る様な視線が俺に突き刺さる。

後で紅天に聞いたのだが、この視線は『自分^{こいつ}に振りまわされているの彼氏（誤解）が可哀そう』と言う同情の類だったらしい。

そんなことも知らずに俺は一時間針の筵状態で過ごしたわけだ。

その後、水着や下着を見に行こうと言われたが、もう俺は限界で、こうして休憩がてらこっちに帰ってきたという訳だ。

先程の事ながら振り返ってみると振りまわすだけ振り回された感が否めない。

次こいつとウィンドウショッピングする機会があるのなら二度と付いていかないでおこうと心に決める俺であった。

「——結局一着も買わなかったな、あんた……」

口から魂が出そうな勢いだった俺とは対照的に心なしか肌が艶々になっている紅天は、美味しそうにスプーンを口に運んでいる。

「ん、元々あんまり買う気じゃなかったしね。それにカノンの反応もいまいちだったし」

パフェの容器の縁に付いたクリームをスプーンでかき集めながら、紅天はつい先ほどの事を想起しているみたいだった。

その言論と行動にも早突っ込む気も失せ、改めて紅天の手にしているパフェに目を落とす。

「ん？」

なんだあれ？

先程まで精神的にゆとりがなかったから気にしなかったが、紅天が美味しそうにつづいているパフェが普通じゃない。

お約束なら超巨大パフェを一人で全部食べるみたいな展開なのだろ

うけど、この不景気にそんな巨大なパフェは普通売り出さない。
即ち大きさは普通なのだ。

だが、色が何と言うか、個人的にはあまり食べたいと思う色ではないのだ。

何色だと思う？

茶色や黄土色など濁色を想像したかも知れないが、外れだ。

茶色はソフトクリームでもあるしな。

引っ張ってもあれなんで答えを言うと、パフェが上から下まですべて水色で統一されているのだ。

別に可笑しくない？

そんなはずはないだろう。

クリーム白玉餡蜜パフェが水色なのだ。

餡やクリームに何を混ぜたのか解らないが、見事な水色に染まっている。

微妙に染まっている白玉と相まって水玉模様に見える所為か、紅天は水玉パフェと呼んでいた。

……これ無理に水色に染めて何がしたいんだろう。

まさか本当に水玉に見せるために染めたのだろうか。

世の中よく解らない事だらけだ。

「どうしたの？ 折角奢るって言ってるんだからデザートとか頼まないの？」

「いや、俺はいい」

コーヒーを口に運ぶ。

不味い普通のインスタントコーヒーの味が口の中に広がる。

コーヒー専門店のコーヒーでも無いのだから当然なのだが、舌が肥えるとロクな事が無いなと心の中で悪態をつく。

「そう？ 別に遠慮しなくていいのよ？」

そう言いながら次々と着色料の塊であろう水色の物体を口に運ぶ紅天。

正直な所見ているだけで胸やけしそうだ。

俺が道端に視線を落としていると、紅天が何かに気付いたように立ち上がる。

「どうした？ その水玉パフェにあったのか？」

俺が冗談めかしてそう言うと、紅天は取りだした携帯を耳に当てて、手で謝る仕草をすると店内のお手洗いの方に走って行った。

どうやら電話の様だ。

別に盗み聞きする気もないし、そのまま取ればいいのにと思う。

それとも何か聞かれなくなかった話だったのだろうか？

そんな事を考えながら再び美味しくも無いコーヒーを啜る。

何度飲もうがやっぱり美味しくない。

俺は再び意識を外へと向ける。

「なあなあ、ベイグ。このパフェ美味しそうと思わん？」

そんな時だった、こんな関西弁が聞こえたのは。

店内なら聞こえはしなかっただろうが、俺が座っているのは先程も言ったように、通りに面しているオープンテラス。

こちらの会話も外の喧噪も集中して聞けば聞き取れる。

しかし何だこれは？

辺りの気温が5度以上下がった様な濃密な気配を声のする方から感じる。

気になって視線と意識をそちらに向けると、俺達とそう年齢が変わらないであろう少女がサンプルの水玉パフェを指さしていた。

薄氷色アイスクリームの髪の少女、目を見張るのはその服装と言つか帽子一点。

ウサギのロップイヤーの様な垂れ下がった耳の形をしている帽子を着けているのだ。

気配はいたって普通。

違う、コイツじゃない。

俺はその近くに視線をずらそうとすると、濃密な気配其の者から声が聞こえる。

「ああー？ んなこと知るかよ。そこらの食ってるやつにでも聞け、馬鹿が」

少女の横にいたベイグと呼ばれた長身の男が、獲物を探す猛禽類の様な眼を辺りに向ける。

ゆっくり、ゆっくりと、舐るように動いている視線が俺の近くへさしかかる。

どくと心臓が高鳴り、目線は男に固定されたまま。

このままでは視線が交差する。

「
」
かすかに脳にノイズが走る。

それに伴い脳内に聞いたこともない言語が、情報として流し込まれる。

なんだ？

「
」
なんで俺はこいつとぶつかった先の結果が解るんだ？

なんで俺はこのままいくとこいつに敗北する事が解るんだ？

何か電波を受信したかのように漠然と浮かんだ言葉が胸の中にスツと下りてくる。

相手はただの人間かもしれない、若しくは俺と同じ霊能力者かもしれない。

起こる前は万事が杞憂で収まらせる。

だが、なんと言つか違うのだ。

言葉では言い表せない既知感があるのだ。

寸前で俺は天啓に従い二人から目線を逸らす。

それにワンテンポ遅れる形で背筋がぞつとする視線を感じた。

まるで刃物を背中当てられてるかのような、そんな類の視線だ。明らかに真つ当な生き方をしていないものの気配。

だが、次の瞬間その視線は消える。

どうやら直ぐに興味を失ったようだ。

無意識に握りしめていた手を開き、小さく溜息を吐く。

「うちはベイグに聞いているね。会話のキャッチボールも出来んやつやなあ」

俺の緊張をよそに少女は友人と下らない世間話をするかのようにベ
イグと呼ばれた男に話しかける。

パタパタ揺れる着け耳とアイスブルーの髪が少女が動くたびにペチ
ペチと男の背中に当たる。

その行為は一層男をいらつかせていたが、少女は一向に気にした様
子ではない。

俺には少女からは男の様な狂気は感じられず、そのアンバランスさ
が逆にその少女を不気味にさせていた。

狼と羊が添い寝をしているような違和感。

少しも雰囲気は穏やかに成らず、むしろ際立たせている組み合わせ
の悪さ。

「っ——！！」

その思考を遮るように耳鳴りがし、急に電波の悪くなったテレビの
様に視界が歪む。

二人の会話が擦り切れたカセットテープの様にブツ切りになり、言
語として聞こえなくなる。

全てをシャットアウトするかにように俺の思考は一旦そこで停止し
た。

その4

痛い。

頭蓋骨を内側から木槌で叩かれている様な激痛がする。

痛い、どうしようもなく痛い。

あつさりした感想に聞こえるかもしれないが、喉から血がほとばしろうが構わないくらいの勢いで叫びたい。

ああ、くそっ！！ 冗談じゃ無く痛い。

なんだ？

俺に何があつた？

内への問いかけに対して返答はない。

つまり俺は答えを知らない。

『――』

痛みの度合いが比例して大きくなるにつれてこのノイズも大きくなってきている。

…逆か。

ノイズが大きくなるから、痛みが増しているのか。

いや、そんな事はどうでもいい。

これを止める。

脳髓に直接電極をぶつ刺し、電流を流しこまれている様な、言いようのない気持ち悪さが脳内を駆け巡る。

『――？』

不意に聞こえた。

微かだが、明らかに今までのノイズと種類の違う波長が。不明瞭かつ意味不明。

同義の言葉を並べても物足りないほど理解しえない言語。しかし、今までと違い言語だと認識できる。

誰だ？

俺に――して、――を――るのは？

つ？ そ か や ？

体中から汗が噴き出してきて、呼吸が乱れる。はっはっはっ、と短く息を吸い込み吐き出す。

吸い込み、吐き出す。

吸い込み吐き出し、吐き出し吸い込み、吸い込み吸い込む。

ノイズに汚染されたのか、自分の言語すら解読不能になってくる。

いや、そもそも俺は何を口に出したのだ？

足を得るために声を差し出した人魚のように、俺の口は吐息しか毀れ出ない。

それどころか自分が立っているのか座っているのか解らなくなる。

俺は地上にいるのか？ それとも空にいるのか？

体がぐるぐると回りだし、堪らないほどの吐き気を催す。

気持ち悪い。

気持ち悪い気持ち悪いキモチワルイ。

一体何分こうしていればいい？

十分？ 二十分？ それとも一時間？

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

今何分たつた？

俺はいつからここにいます？

まだか？
まだ終わらないのか？

つ！

○

時間が……、解らない。

なら、今から、数える……か？

1…2…3…4…5…。

。

1 4 5…1 4 4…1 4 5…1 4 6…。

1 4 7…1 4 6…1 4 7…1 4 8…。

まだ二分……？

たった二分……？

ナンデ…、ドウシテ……ニフン？

1 2 0 ビ ヨ ウ ガ 2 フ ン デ ア リ、サ ッ キ 1 4 8 ビ ヨ ウ マ デ カ ゾ エ タ カ
ラ、セ イ カ ク ニ ハ 2 フ ン ト 2 8 ビ ヨ ウ デ ア リ、オ レ ガ カ ゾ エ ハ ジ メ
タ ノ ガ 1 2 0 ビ ヨ ウ デ ア リ、ソ レ イ ゼ ン ニ 1 4 8 ビ ヨ ウ ア ッ テ、2
8 ビ ヨ ウ ガ ケ イ カ シ t a カ ラ、ラ？ ラ ラ ラ ラ ラ ラ？ ツ マ リ 1
4 8 ビ ヨ ウ ト イ ウ コ ト ハ、2 8 ビ ヨ ウ オ オ ク カ ゾ エ テ イ ル コ ト デ ア
リ、ソ レ ハ 2 フ ン ニ イ ハ ン ス ル コ ウ イ デ？

「……………」

ふと、チューニングが合ったかのように鮮明な光景が眼に映る。

——ナンダ？

闇より黒い髪、それと対照的に輝く真白の肌、物憂げな瞳で君臨する絶対者。

そんな、この世の何と並べてもくすまない様な少女がいた。

その瞬間、俺の中で荒れ狂っていた嵐がピタリと制止する。

——才前力。

現代離れた漆黒の衣を身に纏い、地平線を見る様な眼で睥睨している。

それが今、俺の数メートル先を通り過ぎようとしていた。

『血塗れた神社、世界を包む漆黒の闇、それを貫く天の瓊矛、そして街を貫く漆黒の月牙』

■ ■ が俺へそつと囁く。

あれを野放しにすればどうなるかを。

結末の断片を垣間見る。

その瞬間、俺の意識が完全に覚醒する。

「パ…フエ…っ?!」

俺の口から何の意味もない音が漏れる。

俺は知らない。

コイツの事など何も知りはない!!

コイツト●シアッタコトナド…知りはない。

「ん? どうしたの、カノン? カノンもこの水玉パフェが食べた
くなった…って、顔色真っ青じゃない!」

いつの間に戻ったのか、紅天が心配そうにこちらを見ていた。

だが、俺はそれどころじゃない。

全ての神経があいつに向けられてるかのようで、まともな思考さえ
おぼつかない。

「……悪、い。気持ち、悪くな…ったから、帰ら…せても、らう」
財布から適当に2枚、お札を出すと、ふらふらと通りに入る。

一分一秒たりとも待てない。

今の俺にとって全てはあいつであり、それ以外のモノなど雑音にし
かなり得ない。

「ちよつと、カノン。本当に大丈夫なの?」

そんな言葉を投げかける紅天に軽く手を振り、心なしか駆け足気味
で進み始める。

頭はぐらぐらし、口からは荒い呼吸音が聞こえるのに、体は普段と
変わらぬ足取りで進む。

何だ?

俺はいったい何をしようとしているんだ?

自分で自分じゃ無い感覚を理解しながら俺の行動は一切揺るがない。
ぎりつと歯を食いしばり、しっかり前を見据える。
理性と本能が激突し、体中の反応が活性化し始める。

——才前力? ソレトモ才前力?

粗暴に視線を巡らし、塵チリの中から彼女を探す。

どこだ？ どこに行った？

人混みが壁となって、遠くが見通せない。

――邪魔ダ、消ソウカ。

無理やり体をねじ込んでいき、人混みから出る。

そこには路地裏に通じる横道に曲がる黒髪の少女の姿が見えた。

――見ツケタ！

――速ク、速ク、速ク。

俺は最早駆け出しそうなスピードで横道を曲がる。

――速ク、速ク、速ク。

少女の背中がどんどん近付いてくる。

ぜー、ぜー、と荒く息を吐きながら近づく俺を不審に思ったのか、少女は止まり、こちらを振り返る。

冷たくも温かくも無い、感情の灯らない瞳。

目に映る全てが取るに足りない。

そう体現しているかのよう。

まだ昼だと言うのに路地裏はすでに常夜と化している。

それこそが彼女の力であり、本質。

たとえどんな事があるうと照らされない闇夜の姫。

その瞬間、俺はスイッチが入ったかのように完全に人智の速度を超え駆け出していた。

――才前ダ。キット才前ダ。

――俺ヲ――ルノハ。

だが、そんな様子の俺に怯えるどころか、少女は眉を潜め、見下すように見つめる。

それどころか、口元にうつすら苦笑を浮かべる。

痴れ者、とでも言うように。

――アリガトウ、許サン、殺ス、感謝スル。

俺の指が少女に触れるか触れないかの刹那。

そこで俺の指が止まる。

「かつはっ！！！！！」

俺が視認する暇もなく腹部に漆黒の杭が突き刺さっていた。杭は両手で余る程太い、それが串刺し刑のように俺を宙へと磔ている。

——痛い、いたい、イタイ、遺体、板井、異体、射たい、入たい。視界が赤と白で点滅する。

先程の頭痛とは毛色の違った痛み。

例えるならミキサ―に磨り潰される痛みか、壁に押しつぶされる痛み程度の違い。

違いはあれど、結局どちらも痛すぎて耐えれないから変わりはない。

脳内で神経物質が放出され過ぎて意識が焼き切れそうになる。

「なんじゃ、この程度すら見えんのか。誰の差し金かは知らぬが、随分と弱い奴を向けたものじゃの」

少女は興味を無くしたように、俺に背を向けると再び歩き始める。明かなる力の差。

止めを刺すまでもなく、俺が死ぬ事を確信出来るほどの実力差。

いや、例え俺が何度挑もうが、驚異成り得ないと自惚れる程の存在差。

——才前ガ、才前ガッ！！

俺は吼える様に力を振り絞ると漆黒の杭を左手で握りしめる。

ぶちつと嫌な音がし、左指に激痛が走る。

「くうツツツ！！！」

見ると左指五本全て、第二関節から先が消えて無くなっていた。

この漆黒の杭が俺の指を食いやがったんだ。

少しずつ体重で裂けていく腹部は、意識が飛びそうなレベルの痛みを与えてくれる。

競り上がってきた血で口の中がいつぱいになる。

杭を自ら触る事すら許されず、ただゆっくりと臓器が圧迫されるのを待つのみ。

死ぬ……、冗談じゃなく死ぬ。

内臓の損傷具合は最早移植なしでは復元できないレベルまで破壊されている。

何より脱出手段が存在しない。

宙に浮く足を伝い、俺の足下に血だまりが出来る。

失血多量によるショック死が先か、口内の血による窒息が先か。

どちらにせよ長くはもつまい。

どうしてこんな事に？

なぜ俺は彼女を襲った？

なぜ彼女は俺をこうも虫けらの様に殺せる？

俺はこの程度だったのか？

そして俺は死ぬのか？

——アア、死ヌダロウ。コンナ状態デ生キテイラレル人間ガイルトデモ？

俺はこいつに勝てない。

ならなぜ襲った？

死にたかったから？

「……………」

——速ク、速ク。

ああ、さっきから同じ言葉ばかりで五月蠅い。

今一度、俺に問う。

俺は本当にこの程度だったのか、と。

いや、もつとはつきりとした確信。

俺は今までこんな所で死んだ事などあったのか、と。

答えなど最初から俺の中にしかない。

なぜ襲ったのか、なぜ挑むのか、なぜ死なないのか。

そんなの簡単だろう？

全てを——の——に。

——だから、早く殺サナイト。

中途半端に開いていたスイッチが、今重い音を立ててONになる。

濁流をせき止めていた堤防が決壊するように情報世界へマナが流し込まれる。

ああ、そうだ、知っている。

この感覚を、この興奮を。

流れ込む情報の奔流の中、今、バチツと繋がる。

その瞬間、今までノイズとして流れ込んでいた情報を臙げながら理解する。

「概念心具第一契約」ファースト「? Set - SIN -」

詠う様、宣言する様、冷たく声を出す。

刹那、右手が純白に染まり、有機と無機の入り混じった異形の形に変わる。

曰く、天使の腕。

人間の腕と似通った点を残しながら、全く別の存在であるように白い装飾が纏わりついている。

縁代わりに彩られた金字は幻想的な模様を浮かび上がらせている。それで漆黒の杭を容易く切断する。

「ん？」

何か違和感を感じ取ったかのように少女は振り向く。

少女は遠く離れ、磔られた俺を想像しただろう。

その判断が彼女の反応を数瞬遅らせた。

一瞬で眼前に迫った俺を確認すると、初めて驚いた表情をとる。

すぐさま己を囲むように漆黒の物体を発生させるが、既に遅すぎる。

「———— あっ———！」

心臓一直線へと右腕が刺さり、少女が声なき悲鳴を上げる。

そのまま腕ごと彼女を持ち上げ、横のビルへと叩きつける。

壁に墨の塊をぶつけた様な、そんな紋様が壁に広がる。

瀕死になったから覚醒。

怒りによって秘められた力の開放。

バトルモノの王道ならばそうなれば圧倒するのが定石。

ほぼ互角の敵ならば十倍、一桁力が違う敵ならば百倍以上になれば

圧倒できる。

なんにせよ桁違いの上昇を見せ、敵を打ち滅ぼす。

そう言った意味では俺は普段の千倍以上の力を出しているだろう。
だが…。

「……………死の概念が無いのか、あんた。体を却^かえしているのに殆ど変化が見られないのだが」

飛び散った彼女の体は、未だ大半がまとわりついている俺の腕の周りを中心にスライムのように集まり、再生した。

当然ダメージなど皆無。

恐らく、音速の何千倍もの速度で攻撃しようとも彼女は同じように再生するに違いない。

よって物理攻撃は無意味という訳だ。

人間なら瀕死に近いダメージを負っているのにも拘らず、俺は何事も無く少女を見据える。

これは体内が従来ではありえないスピードで再生を始めているお陰だ。

この分だと一日寝れば全快する勢いだ。

「くつく、お主、吾を知らずに攻撃してきたのかや？ 随分と狂気なものに目をつけられてしまったものじゃのう」

それでも尚、彼女の優位は揺るがない。

それはなぜか？

俺は千倍以上になってはじめて彼女とまともに戦えるステージに到達したのだ。

しかし、互角にはまだ届かない。

彼女を圧倒しようものなら優に万倍を超え無ければ到底追いつけないほどの隔絶があるからだ。

少女は自分の胸に腕を突っ込まれているのにも拘らず、俺めがけて右手をゆっくり伸ばす。

それと同時に再び少女の足下から漆黒の杭が伸びる気配がする。

すぐさま右腕を引き抜き、俺は距離を取ろうとする。

「ちっ！」

だが、先程と反して腕はコンクリートに入れて固められたかのように動かず、指一本動かす事が出来なくなっていた。

逆に地面であるコンクリートが圧力で煎餅のように罅割れ、足が減り込んでゆく。

「どうしたんじゃ？ 吾の中がそんなに気持ちいいか？ んん？」
少女はゆつくりと伸ばしていた右手を俺の頬に添える。

そして愛おしそうに、擦ったそうに、そっと撫ぜる。

まるで恋人同士で睦言を囁いているかのように。

湧き出た漆黒の杭が、檻のように俺と彼女を取り囲んで聳え立つ。

「死ぬ間際の生き物との会話が楽しいか？ 趣味が悪いな、あんた」

俺は右腕が抜けないと判断すると、間髪いれず、その直ぐ隣に指の無くなつた左腕を擦じり込んだ。

そう、これでいい。

もとよりこうするしか勝ち目など無い。

契約を結んでいない彼女と契約を結んでいる俺が拮抗どころか、負けているのだ。

彼女を本気にさせた瞬間俺の死は決定する。

だから、ピンチこそが俺の唯一の勝機なのだ

「くつくつく、心外じゃの。折角死の間際の相手に花を持たせる為の時間を与えておるのに。——それとも諦めて吾の腕の中で安らかに逝くか？ それはそれで雄として本望じゃろ」

どうする？ と厭らしく笑いながら俺の瞳の奥を見るように覗き込む。

どちらを答えてもそれは終了の合図となるだろう。

俺は左腕の入れた事により、僅かにできた隙間から右腕を引き抜く。その際隙間の確保のため、左手の半分の肉が削り飛ぶ。

「——左腕は、やる。後は……どちらがしぶといか、だ」

俺は自由になつた右腕で、左肘から先を斬り飛ばす。

「っ！！」

再び激痛。

最早飛び出るだけの血が残っていないのか、血はあまり出ない。

代償は高くついたが、これで自由になれた。

「……………他人に何かを決められるのはあまり好かん。くつく、そうじゃの吾に貢物を捧げると言うのであれば主の両足をくりやれ？

ならばそこから上を優しくいつまでも愛でてやるぞ。———も

ちろん生かしたまま、の」

少女がそう言うや否や、足元より巨大な顎が現れ、太腿に鋭い牙が減り込む感触がする。

俺は避ける動作すらしなかった。

避けられなかった、ではない。

避ければ完全に俺の勝機が途絶えるからよけなかったのだ。

俺の攻撃は右腕のみの徒手空拳。

ひとたび距離を取れば、二度と彼女に接近できる機会はないだろう。

故に次こそが俺にできる最初で最後の全力攻撃。

「ぐう！！」

歯を食いしばっても、ぐもった声が外に漏れ出す。

体内の自己治癒が増加しているおかげで、急所をやられない限り即死はしないが、問題はそこじゃない。

さつき気付いたが、厄介な事にコイツは食った部分の概念すらも壊してやがる。

つまり俺は生命維持のための別の組織を作り出せても、こいつに食われた部分をそのまま蘇生する事が出来ないのだ。

だから俺の体は勝っても人として生きて帰える事は出来ないだろう。

そしてこの契約を解けばその瞬間、マナとともに命が尽きる事も。

結局何も残りはしない、か。

斬り飛ばした左腕を掴み、右腕に纏わり付いていた純白の物体を左腕へと浸蝕させる。

———虚しい。

片隅に残った人としての理性がぼつりと告げる。

だって、そうだろ？

この戦いで何も得る物など無い。

コイツに勝とうが、日常へ帰ることなどできない。
ならばなぜ戦う？

人間のまま無理に契約まで結び、なけなしの勝機を手に入れて何がしたい？

こんな痛くてしんどい事はもうやめにしよう。

俺はヒーローじゃない。

どうでもいい街の奴らの命と、今受けている苦痛からの解放、どっちを取るか考えるまでもないだろ？

心の片隅にいる俺の目がゆっくりと閉じる。

さあ、もう諦めよう、と。

「――生き物が死ぬには二つ方法がある。一つは己の死の概念に

アポトーシス

による自滅死、これはその生物に設定されている死亡条件を満たす事

で発現する。あんたはこっちは無いみたいだがな」

左腕を押さえながら、現実の俺はしっかりと彼女を見据える。

己の死の概念が無い。

それはつまり死亡条件が一切無いと言う事。

俺が挑んでいるのはそういう次元の化け物。

恐らく並行世界全てを探してもコイツにまともに勝つなどという未来は存在しないだろう。

ならばなぜ闘う？

「そうじゃな、今まで一度も死んでおらぬのじゃからそういう事じやろ」

さも当然、とでも言うように彼女は笑う。

そう、それはこいつにとって当たり前。

こんなふざけた『幻想』がこいつにとって当たり前なのだ。

なぜ闘うだと？

闘わなかった結末が『漆黒^{アレ}の月牙』なのだ。

冗談じゃない。

あんな結末はいらない。

街の人々にもそれぞれ物語があっただろう。

昨日と殆ど変らぬ物語、昨日より少し幸せだった物語、昨日より少し悲しかった物語。

三流ドラマにもならない、取るに足らない出来事だったかもしれない。

そうさ、きっと俺にとってもどうでもいいことだろう。

だが、こいつら『幻想』はそれらを全て薙ぎ払い、数多の記憶に残らずめでたしめでたしとでも言うように消えていく。

憎しみも怒りも喜びも悲しみも無く、一切の感情抜きで姉貴も天羽も紅天も先輩も赤城も如月も全て、そんなお伽噺のように殺さるのだ。

そんな理不尽と今の苦痛を天秤にかけるれば、どちらをとるか決まっている。

ああ、そうだ、最初から決まっている。

俺は理不尽、嫌いなんだよ。

だから…。

「そしてもう一つは——」

だから、そんな結末、俺は…拒否するっ！！

奥へ奥へ、真白に染まった左腕を少女の体の中に押し込む。

「ほお？ もう一つとは初耳じゃの」

「なら、今からあんたに身をもつて体験させてやる。——もう

一つ、それは死と対である概念、生の概念を無くす事だ」

ぶちつと嫌な音がし、ぐらりと体が崩れ、俺は地面に落下する。

完全に太腿から下が噛み切られたようだ。

体中が痛くて痛くて、どうしようもないほど痛い、そのお陰か、切断された痛みはあまり感じなかった。

そして、俺は間に合った。

俺の全力の一撃は、もう入った。

「何をわけのわからん事を……。うぐう、な、なんじゃ？」

突然、少女はちょうど左手が飲み込まれた辺りを押さえ、苦しみ始める。

俺が彼女に勝つ方法など始めから一つしかない。
何度繰り返そうがこれしか彼女を殺す手段がない事を魂が知っているのだ。

「くくつ、そうか……。吾の■を奪ったのか。確かにこの方法なら流石の吾も死ぬのう」

膝を尽き、俯けになりながらも、少女はケタケタ笑う。

だが、本当は苦しいのだろう。

体は、笑って起こる震動とは別にガタガタ震えている。

「ここは、敵役らしく。……激昂、するところだろ？」

残った右腕でするすると体を引きずる。

先程貫かれた腹部の皮膚がごんごん裂けていく。

まだやれる、まだいける。

己を叱咤激励しながら少しずつ進んでいく。

「激昂じゃと？ くくくくくくく、こんなに油断してやられた吾がか？ そこまで吾の肝は小さくありません」

ごろんと、体を反転させ、少女は仰向けになる。

くくく、昼の空のくせに綺麗じゃのお。

少女はそう言いながらぼうと空を見つめる。

威風のあるその様に一瞬見惚れる。

その姿は苦しんでいる今であっても先刻と遜色なく美しかった。

「そうじゃ、お主の名は？」

ふと思い出したように少女は俺に目線を向ける。

とてもつい先ほどまで殺しあってきた様な口調ではなく、旧来の友人に接する様に問いかけてきた。

「カノン。——あんたは？」

「パフェじゃ。本当はもうちつと長い名前なのじゃが、思いつくのが遅かったようじゃ、勘弁してくれの」

最早指一本動かせないのか、パフェと名乗った少女は身動きせず俺

を見つめる。

そこにやっどこさ辿り着いた俺は、乱暴にパフェの首を掴む。
肘から先が無い左手で上体を起こしつつ、息が触れそうなほど近くに彼女を引き寄せる。

「最後に何かあるか？」

「初めてじゃから、優しくしてくれの？」

俯き加減で、はにかみながらパフェはそういつてのけた。
こんな状況で。

そしてすぐにやにや笑いに変わる。

俺はそんなパフェに向けて、苦笑いを浮かべると。

「無理だな。そんな甲斐性、生憎俺は持ってないんだ」
と真っ直ぐパフェの顔面に右腕を突き刺した。

その5

遡ること少し、カノン達が位置する路地裏脇の建物の屋上にひと組の男女の姿が見える。

男の方はスラリとした長身の体格に胸まで伸びる黄褐色の長髪、猛禽類の様な鋭い眼をしてイライラしながら下を睨んでいる。

対照的に少女は薄氷色の髪に、ロップイヤーの帽子を着け冷めた表情で下を見つめる。

彼らの眼下には目を覆う様な人外の殺し合いが繰り広げられている。とはいっても第二神パフェにとっては、鬨り殺しのような粗末な殺し合いだと感じるだろうが。

しかしそれでも彼らが常人であれば、昏睡する様な瘴気と夥しい血の臭いで昏睡するか、狂うかの二択を迫られる程の異界にすぐさま飲み込まれていただろう。

そんな状況下で別の要因でイライラ出来る男と超然と冷たい眼差しで眼下を見下ろしている少女は、間違っても普通の枠内に収まるものではないだろう。

事実彼らは真つ当な存在ではない。

彼らは下にいる彼女と同胞なのだから当然だろう。

とは言え、こうしてのんびりとしている所を見ると、結果がどうなるうと手を出すつもりはない様だ。

そういう意味で彼らは現時点では人畜無害といえる。

「はっん、馬鹿らしい。こんなもん三文芝居じゃねーか」

砂糖菓子のように屋上のコンクリートをガリガリ靴で削りながらベイグは地ではなく、天を見上げる。

下の闘いに驚くどころか、この程度見るに堪えないと断じるのだ。この男がどういう生き方をしてきたのか、想像に難くないだろう。その言葉を受け、相方の少女が冷静な反応を返す。

「…まあ、そうやな。あの子も人間で第一契約結べるなんて、かな

りの天才やと思うけども相手が悪いなあ。パフェに引つ張られて契約結べたんか、己の実力やったんかは知らんけど、ほんまに勿体ないなあ」

至極残念そうな口調で述べているが、少女は顔色一つ変えない。そういう意味では彼女はベイグと呼ばれる男より異質だろう。

人間にとって日常であろうと非日常であろうと少女は平常を保ち続ける。

それは彼女にとってはどちらも日常と何ら差異が無いことを意味するのだ。

戦がないと日常と思えない男と、戦も含めてすべてが日常と諦観する少女。

どちらの方が厄介な存在だろうか？

「なあよう、フレイズヴァール。昔っから気にはなっていたんだが……。第二神^{アイツ}の死亡条件って何だ？」

少しパフェに興味を持ったのか、ベイグは体を少女の方へ向けると屋上の縁に腰かけ、彼女に問いかける。

「さあ？ ルミナの概念以外で恐らく死なんのちゃう？ あゝ、第十三神は別な、あれはうちの例外やし。そもそも死亡条件以前にダメージの条件が概念による浸蝕のみやから相手に干渉できへん概念やったら詰んでるしな。—— もっとも、それはうちらにはあんまり関係ないけどな」

そこで初めてフレイズヴァールと呼ばれた少女はにこつと微笑んだ。恐らく道行く人々が見れば天使や精霊の様と持て囃すだろう。

そんな賛辞を送りたくなるほど微笑んだ少女の表情は美しかった。

ベイグは心の内で少女の名を呟く、第三神ミュールヒル・ドレイクラン・フレイズヴァール。

最も慈悲深い破壊の君主。

そう揶揄される程彼女は戦に似つかわしくない風貌をしていた。三という数字を背負っている以上実力とそれはまた別だが。

「—— 決着が付いたようだな」

先程から傾けていた神経が、路地裏の結末を瞬時に伝える。

—— 相討ち、だと。

「おいおい、こりゃあひょっとすると第二神様死んだんじゃないか？」

心なしか楽しそうに、ベイグは下を覗き込む。

「あほか、アレがちょっとやそつとで死ぬんやったらうちがとつくに殺しとる。—— うちの獲物も来ないみたいやし、もう行くで」

ベイグとは最初と同じで対照的にミュールヒルは、路地裏を一瞥すらせずに消える。

舌打ちし、ベイグは八つ当たり気味に屋上に足で穴をあけると、眼下をもう一度見る。

「アレで死なない、か。はっ上等だ。—— 次会う時が楽しみだなあ、おい」

挑むような眼つきで下を睨みつけると、ミュールヒルと同じように男は姿を消した。

+

場面は再び路地裏、相討ち後へ移る。

僅かに彼の右手に残った純白の輝きが、今、塗装の様にはがれおちてゆく。

最早契約はおろか、概念心具すら保つことが出来ないのだろう。

やがてゆっくりと彼の体が重力に引かれ傾いてゆき、パフェの体の上に崩れ込んでしまった。

「……………」

私はすぐ近くにいた規格外共に死角になる様な場所でそれを呆然と眺めていた。

彼は『彼女』に一矢報いるどころか、相討つたのだ。

成果としては大金星だろう。

規格外共はそれを一切評価しなかったが、私は彼の結果を評価する。ここまでしてもまだ『彼女』は死んではない、としてもだ。

たん、と小気味よく音を響かせ、彼らの傍へ着地する。

私がここまで『彼女』に接近していると言うのに『彼女』は一向に動く気配はない。

「流石に、第二神様でも昼にここまでの瀕死を耐える事は出来ない……か」

何を馬鹿な、と自分でも思う。

彼女の消滅など今までの結末^{せかい}呆れるほどに見てきたというのに。

それでも尚、未だに私は信じられないと言うのか。

これは己の認識能力が衰退している所為なのか、学習能力が欠如している所為なのか、どっちなのだろう。

「……どちらでもいいか」

音も無く右手を翳すと、神威の神槍が現出する。

私自身が意識せずとも槍はすべる様に手の中で円を描き、目標へと振りしぼられる。

幾度となく繰り返してきた行為だ。

外すなど当然有り得ない事柄であり、放つ行為に対して是非もない。

「……………」

よって今、私の手を止めるものは別の要因であり、それが私の意識を奪うに足り得たと言う事だ。

彼と彼女を包み込むようにシャボン玉の様な漆黒の泡が湧き出る。

これは私という脅威を察知した彼女の防衛機構、といったところだろう。

「——無駄だ」

ひゅん、と軽く槍を払うだけで泡は弾け飛ぶ。

それと同時に、散弾銃のように漆黒の槍が次々と飛び出てくる。

私はこれを半歩体を引き、柄で軽く弾くだけで回避する。

速度的にも威力的にも防御不能の一撃必殺のはずだろうが、残念ながら相性が悪い。

こういうものは私には絶対に当らないのだから。

私の避けた先にあった建物が漆黒の槍と接触した瞬間、まるで火を

つけられた羊皮紙のように黒く染まって行き、1秒待たずに消えうせた。

そんな光景、気にも留めずに再び槍を向ける。相変わらず彼らは彫像のように動かないが、彼女が彼を中心に護るように漆黒の膜を展開していた。

それはまるで揺り籠のよう。

彼に殺されかけた彼女が彼を護ると言うのだ。どういう心境なら至れるのだろうか。

私はゆつくりと槍を下げる。

「…それが今回のあなたの答え？」

返答が貰えるとは思ってない。

これは私が私へ送る確認。

ゆつくりと目を閉じ、息を吐き出す。

もう少し、終幕まで猶予があるようだ。

膝を折り、そつと彼女へ触れる。

ならば見せてもらおう。

舞台を踊る主演に相応しいかどうかを。

立ち上がり彼らに背を向ける。

そつと後ろを振り返ると、彼と同じ学園に通う少女が、駆けつけてくる結末が視えた。

その6

目が覚める。

ゆっくり瞼が開いてゆき、徐々に覚醒するのではなく、スイッチをオンにされた様にバチツと目が覚める。

何か、やらなければならぬ事があつた気がするが、思い出せない。二、三瞬きをすると辺りをぐるりと見渡す。

見慣れた天井、いつも使っている洋服棚に、パソコンラック、そして使い慣れたベッド。

部屋はカーテンが閉まつている所為か、真っ暗で殆ど見えないが、見慣れた家具の存在により、ここが自分の部屋だと言う事が解る。

……………今何時だ？

反射的に現時刻を確認しようとして、目覚まし代わりの電波時計に手を伸ばそうとする。

「痛っ！！」

その瞬間、筋肉痛の何倍もの痛みが腕に走った。

なんだこれ？

俺は先輩の依頼で失敗して大怪我を負つたんだっけ？

ふと先輩にメールで依頼を頼まれた情景が浮かぶ。

依頼の内容は思い出せないがそんな事があつた気もする。

首を少し傾け、己の体を確認する。見た所、暗がりで見りにくい、大怪我を負つた訳ではなさそうだ。

精々骨が折れた程度だろう。

俺は体をほぐすように末端から少しずつ動かしてゆく。

「参ったな、殆ど…動かない」

全身金縛りにあつたように体が硬直しており、無理にでも動かそうとすると攣つた様な激痛が走る。

腕の骨折程度だと思っていたが、全身すべての個所が動かそうとすると軋む。

まさか、起き上がる事はおろか、手を伸ばす事すらできないとは思わなかった。

本当に俺は何をしていたんだ？

必死に朝からの記憶を手繰る。

その間、少しずつ時計に腕を這わせていく。

今朝は姉貴に起こされて、朝飯を作って……。

激痛を思考する事により誤魔化しながら、頭上へと移動させる。定位置にある時計をやっとこさ掴み、慎重に眼前に持ってくる。

冗談じゃ無く痛い。

だが、お陰で思考が覚めてくる。

そうだ、確か紅天に呼ばれて……。

そこで俺の視野に時計が入ってくる。

18:30 (月)

時計にはそう書かれていた。

あれ？ 確か俺が紅天と出かけたのは日曜日で……。

その後何をしたんだっけ？

今朝どころか昨日の夜の記憶すらない。

「——」

こめかみに刺すような痛みが走る。

なんだ？ 俺は頭もやられたのか？

訳が分からない事だらけだ。

のろのろと時計を元の位置に戻すと一気に脱力し、腕を重力に任せ
る。

その際激痛が走ったが後の祭りだった。

「んっ」

ベッドに吸い込まれるはずだった腕は乾いた音を立て止まり、温かい何かに当たった。

温度はちょうど人肌くらいで、柔らかさはゼリーの様。

なんだろう、こんなものベッドに置いた覚えはないのだが。

訝しがりながら首を横に向ける。

黒い瞳とばつちり目が合う。

眼前30?もない距離で少女がこちらを見つめていた。

「遅い目覚めじゃのう、調子はとうじゃ? 吾の愛しの主様」

光沢すら一切許さぬ漆黒の黒髪に、傲慢さとそこはかとなく気品を醸し出す表情。

そこには相も変わらず意地の悪い笑みを浮かべたパフェがいた。

悲鳴を上げなかったのはパフェのその様があまりに型にはまっ
て目を奪われたからだ。

おまけに俺の腕がパフェの控えめな頂の片方に突っ掛かり止まっ
ている。

何か未知なる物体に当たったと思ったらこれが、と妙に納得した。

「――っ!!」

その瞬間頭痛と共に痛みと殺しあいの映像がフラッシュバックする。
左腕を切り、両足を無くし、腹部を貫通され、それでも俺はこいつ
を殺す事を選択した。

そして俺はこいつに、こいつは俺に殺されたはずだ。

じゃあ、なんだ?

今俺は死後の世界にいるのか?

いや、それよりも今俺は絶体絶命の状況じゃないか。

パフェにとって己の敵討(?)するには絶好の機会だろう。

ぎゅっと、俺の手がパフェに、握られる。

俺は再び死を覚悟する。

死後の世界で再び死ねるのかどうか知らないが、それでも俺はこい
つに殺されるであらう覚悟をした。

俺はそれだけの事をした、という事を理解しているつもりだ。

「抵抗はしない、というか出来ないだろうな。まあ、好きにしてく
れ」

完全に投げやりな言葉で、俺は溜息を吐く。

これから煮たり焼かれたりするかと思うとぞっとする思いだ。
それを見て、パフェは鼻で笑う。

「そうか、ならば吾の好きにさせてもらおう。——主様の事が好きじゃ、吾と番いになつてくりやれ」

「……………は？」

その瞬間、俺の思考の全てが吹っ飛ぶ。

微分積分、歴史の偉人、元素記号やその他もろもろの公式が記憶から抹消される。

今の俺はおそらく小学校低学年まで知力が低下しているだろう。

なんて言つたこいつ？

梅い？ 何だそれ、何処かの高原の名前？

なんで殺しあつたから愛が目覚めるとか、どう言つ話？

いや待て、こいつが本気かどうかすらも決まつた訳ではない。

そうだ、焦る事はない。

理性的に、論理的に思考すれば答えは見えてくるはずだ。

だから焦るな、落ち着け俺。

パフエに解らない程度に深呼吸する。

まずは相手の観察だ。

嘘や冗談の場合は態度に表れる。

ジツとパフエを見つめる。

真白の肌が、ほんのり紅色に染まり、照れる様に目を逸らされる。

なんで恥ずかしがるんですか…、あんた神でしょ。

手に汗を握りながら、視線を下げていく。

細く、手で締めれば壊れてしまいそうな首、肉付きの薄い身体つき、肋が浮き出る様な脂肪の無さなのに、俺の手の近くには小さいながらも主張する……………ん？

そう言えばなんで俺、肋骨とかコイツの肉付きとかが解るんだ？

「……………」

なんでコイツ服着てないんだ？

後ずさるうと体を動かして、妙に自分の皮膚に当る感触が今更ながら生々しい事に気付く。

もしかして…。

恐る恐る、自分の身体の状態を確認する。

「……………」

なんで俺も下着以外穿いてないんだよ…。

気が付くの遅過ぎだろ。

これじゃあまるで事後の様な…。

いやいやいや、そんなはずはない。

「駄目、かの？」

俺が返答しないのを焦れたのか、パフェが捨てられた子犬の様な眼で俺を見つめてくる。

やめろ、これ以上俺を混乱させる行動はやめてくれ。

「いや、ダメというか。あんたを殺そうとした俺がそれを受けるとでも？」

常識に照らし合わせていいのかどうか、不明だが少なくとも俺とこいつが恋仲になる要素はあの殺しあいではなかったはずだ。

「——初めての吾の中に太い物を一本づつ入れた拳句『やる』と言われて無理やり白い物を流しこまれ、それで尚、吾が優しくしてくれと懇願したのにも拘らず強引にもう一本突っ込んで傷物にしたのに、主様は責任を取らぬと言うのかの？」

目尻に涙を浮かべ、体を震わせながら上目でこちらを見てくるパフェ。

言ってることは間違ってる。

傷物にしたのは事実だし、間違ってるはいないんだが。

なんだろう、この悪徳商法に引っかけた様な遣る瀬無さは。

「あの、代わりに左腕と両足をあげたので、チャラには…成りませんか？」

思わず敬語で、超弱腰。

状況は一変し、死を覚悟した状態から、よく解らん混沌とした状態に変わってしまった。

するとパフェは表情を一変させ、俺に馬乗りになるよう乗りかかってくる。

「ならんの、あれっぽっちじゃ吾の虫がくうくう鳴きよる」

先程見せた涙など何処へやら、犬歯を見せ、息がかかる距離まで顔を寄せる。

漆黒の髪が流れ落ちて俺の体に掛かる。

お腹には薄い肉厚を感じる。

不思議と重さは感じなかった。

「吾はな、主様のすべてが欲しいんじゃ」

爪を俺の胸板に突き立てると、文字を刻むように引っ掻き始める。

痛すぎず、弱すぎず、絶妙な力加減で擬れるそれは、痛痒い痺れをもたらす。

「……………」

俺は何も言わず、ぼけっとそれを見ているだけしかできなかった。俺が何も抵抗しないことを認めると、パフェはさらに顔を近づけていき…。

「なぐんての、冗談じゃ」

こつんと額に頭突きした。

啞然としている俺から離れると、再びベッドへ寝そべり悪戯っぽく笑う。

そこでやっと俺は先程までのパフェのそれが演技だったと言う事に気付く。

薄々そんな気はしていたが、少し残念な気もする。

いや、そんなことより話を戻そう。

最も重要な事が全然解決していない。

「いまさら聞くのもあれだが、なんで生きてんだあんた？ いや、

俺自身が生きているのが一番おかしいんだが」

俺は溜息を吐くと、一番の疑問点を切り出した。

一応心中覚悟でやった事だ。

あわよくば生き残っても左腕や両足は無いものだと思っていた。だが、現実俺の体は五体満足で存在する。

こいつはともかく、俺が生きているのは偶然じゃないだろう。

「くつく、主様が中途半端にやるからじゃ、お陰で生きているのか死んでいるのかわからん状態になるとこじゃった」

パフェは愛おしそうに俺の腕をひと撫でし、お陰でこんな事になっ
てしまったんじゃからの、と笑う。

主様という呼び名は続行される様だ。

…ちよつと嬉しい、気もする。

「それと俺が生きている事にどういった関係が？」

お陰での件に一抹の疑問を感じつつ、俺は話を続ける。

「簡単じゃ、吾の肉体には損傷はなかったが、生概念を消失した
所為で生命を維持出来なくなっていた。このままでも死ぬ事は無か
ったが、主様たちで言う植物状態になるのは嫌だったのでな、死に
逝く主様に肉体を貸して、代わりに生概念を無理やり主様から共
有する事で、互いに生命を維持したわけじゃ」

何かさらつとんでもない事を言っている気がするが、この際よし
としておこう。

「文脈から読み取るに、俺達は共生してやっと生きている、って事
でいいんだよな？」

「ああ、それで構わぬ。主様の左腕と両足が存在することが何より
の証じゃ」

パフェに言われて、改めて左手を見る。

手を開いたり閉じたりして調子確かめてみる。

若干ぐにやつとしているが、まあ正常だ。

「あんまり手を動かさん方がよいぞ、まだ馴染みきれておらんから
融ける可能性がある」

パフェがそう言った瞬間、左手が逆関節に270度くらい曲がる。

「……………みたいだな」

痛みは無いが、あまりいい気分じゃない。

左手が軟体動物になつては困るので意識を会話に戻す。

「さて、お互いに色々聞きたい事があると思うが、次は吾から聞
いてよいかや？」

「構わない。――趣味でも言えいいのか？」

俺の冗談めかした口調を意に介せず、彼女は言葉を続ける。

「なぜ吾を襲ったのか、いや、もっと具体的に言ってやろう。なぜ吾を殺そうとしたのか」

鬱陶しそうに髪を耳へ掻き上げ、静かな眼光が俺を射抜く。

先程の緩んだ空気とは一変し、刃物の様な鋭く触れると切れそうな空気が満ちてくる。

それは一握りの者が持てるカリスマの魔力。

その者の感情に反応し、辺りがそれに合わせて感情を変えざる負えなくなる魔力。

才能のみを必要とする魔法と言うべきだろうか、この空気の前で誤魔化しなど効きはしない。

どうしたものかと思案する。

半端な嘘では直ぐに見抜かれてしまうだろう。

かと言って信用して全て話すモノどうかと思う。

俺はこいつに街を壊させないがために命をかけたのだ。

再び俺が原因で街が壊れる事態になるのは避けたい。

だが、もう契約が途絶えている所為か、ノイズから読み取った情報も、その他契約に関する情報も思い出す事が出来ない。

街を壊す話だって、字面の通りの意味しか解らない。

光景や恐怖がそれに付随しているならまだしも、街を壊すという不確定な結果しか今の俺には解らないのだ。

信用するのはともかく、あれ程まで彼女の邪魔を進んでしようとは思わないのだ。

ならば、彼女と友好的に接して、街を破壊しないよう懇願する方が得策ではないだろうか。

パフェの言葉を信じるなら、俺とパフェは運命共同体だろう。

即ち俺が死ねばパフェもそれに準じる状態になるはずだ。

交渉としては悪くない手札。

ならやはりここはパフェに従って信用を得る方がいいと俺は判断す

る。

「——声が聞こえたんだ。あんたがこの街を破壊するって言ってる。いや、正確には声なんて生易しいものじゃなかった。直接脳内に情報を流しこんでる様な、そんなノイズが聞こえたんだ。それで本能的にあんたを止めなくてはと思い、ノイズに導かれるままに第一契約を結んだ。後はあんたの知つての通りだ」

今でこそなんで信じたのか、解らない胡散臭さだが、その時は100%信用できると言う確信があつた。

その時の状況についてパフエに思い出せる限り説明する。

「……………」

パフエは暫く考える素振りを見せた。

俺はそつと待ち、静かにそれを見守る。

「干渉…、それもかなり強力な干渉じやの。汎用性の高い魔術とは違う、専用の概念による直接的な干渉じやの」

「干渉、つまり俺にあのノイズをおくつた奴がいるってことか」

俺の独白に近い問いかけにパフエは頷く。

何のために？

俺の取つたその後の行動を見れば一目瞭然か。

「動機はあんたの排除つてどこか？」

「いや恐らく違うの、寧ろそやつと言つた事は正しい。吾は主様に殺されなければ遅かれ速かれこの街を破壊していた可能性が高いから」

今はそんな気はないがの、と付け加える。

現状パフエは嘘を吐いている様には見えない。

一応街の安全は確保されたわけだ。

ならば、今は俺にノイズをおくつた人物像を考えた方がいいだろう。

「……………」

瞑想する様に目をつぶる。

そいつにはどんなメリットがある？

パフエを殺す以外のメリットがどこに？

単なるお遊びか？

引きとめ、警告、囃。

目的はいろいろ考えられ、現時点では考えるだけ詮無い事の気もする。

だが、動機としてはパフエに怨恨を懷いた可能性が一番高いのではないだろうか

パフエは違うと言ったが、俺にはそんな気がしてならない。

向こうはどんな理由かは分からないがパフエが邪魔だった。

だから事実を知ればパフエを排除せざる負えなかった俺を利用した？否、と自分の考えを否定する。

仮にパフエが壊すとしてもだ、普段の俺はあんな直接的な方法は取らなかっただろう。

ふっ、と息を吐き、頭を振り考えをリセットする。

いずれにせよ情報が少なすぎる。

今の段階では可能性程度に色々考えておくのがベストか。

俺の沈黙をどう取ったのか、パフエはバツが悪そうにこちらを睨む。「き、気を悪くしたのなら済まん。じゃが、一つ勘違いしてほしくない。吾は別に街を破壊するためにここへ来た訳ではない。吾の素性は後で詳しく話すから省くとして、結果としてこの街を破壊せざる負えない事態になる可能性が高いからこう言った訳じゃ。じゃから……」

珍しく口数多くパフエは捲し立てる。

眉に皺をよせ、どう言えば自分を解って貰えるか、見かけ相応の乙女のように悩んでいるようだった。

なんだろう、俺に悪い印象を持つてほしくない？

人類をはるかに凌駕したこの神のごとき存在が？

「ぶっ」

思わず噴き出す。

だって信じられるか？

あんな人を殺すのをなんの躊躇もしない奴が、人間の顔色を窺うん

だぞ？

パフエの人となりが少しわかった気もする。

パフエは嘖き出した俺を訝しげにじろじろとこちらを見てくる。

「本気出せば、余波でこの街吹っ飛ぶんだろ？ あんたの力の底は解らないが、それが簡単に来る存在だと理解しているつもりだ」

昨日戦って思ったが、こいつは相手が自分に勝てる上限ギリギリ位の力しか出さなかった。

それが制約なのかただの趣味なのか驕りなのか解らないが、無意味に破壊行為を繰り返す奴ではないだろう。

「いいのかや？ そんなに物わかりのいい体で信じても」

「違うのか？ こちらとしては街を破壊する事を目的に来る程度の強さならありがたいんだが」

ちょうど目線が斬り結ばれる。

互いにフツと笑みがこぼれる。

「くつく、主様と話すのは楽しいの。こんなにも己の感情が制御できんでありんす」

じとつと熱のこもった眼で俺を見る。

流石にこれは演技だと解るが、やはり恥ずかしいので目線を逸らす。この様子だと、当面パフエの事は信用してもいいかもしれない。

半分程度は、だが。

「二つ目の質問、よいかや？」

「どうぞ」

そつぽを向いたまま首肯する。

「主様は人か？ それとも神なのかや？」

一瞬間の意図を掴みかねて、人間だと即答しそうになる。

だが、こいつはそういう事を聞きたいのではないはずだ。

俺がこいつを化物扱いしたように、当然こいつも俺が普通の人間とは思えない、つまりそのあたりの事を説明してほしいのだろう。

まあ、その読みは当たりだが。

「一族が有名な霊能力者集団で、何処かの神の血族と言われている

が、一応は人間だ。何割か混じってるって姉貴が言ってたから完全な、とは言えないがな」

当然と言えば当然だろう。

混じってもいない純粹な人間、っていうのは進化した猿人だ。

こいつら神からすれば家畜と変わらないだろう。

幾ら姉貴が天才だからとはいえ、そんなものに天の尾羽張が扱えるわけが無い。

普通の一般市民では『現実』に毒されている、という言い方はおかしいが、『現実』の支配下にあり過ぎなのだ。

だから魔術師や俺たちみたいな霊能力者はまず『現実』から脱却することを第一目標とする。

『現実』から離れば離れるほど、日常生活を送ることは不可能になるが、それに比例して自身の能力も跳ね上がる。

しかし、言葉にすれば簡単なように見えて意外と『現実』から離れるのは難しい。

拷問、殺害、共食い、人体解体。

どれもおぞましいものばかりだが、これを行っても当然のことながら『現実』の範疇。

歴史を紐解けば、こんな物ごろごろと出てくるような事柄だ。

もつと言つと、真つ当な史書に残っている事柄を試したところで『現実』から外れる事は難しい。

ならば、どうすればいいのか。

やるべきことはいったって簡潔だ。

質がダメなら量を試せばいい。

一人殺した程度なら探せば刑務所に掃いて捨てるほどいる。

ならば十人は？ 百人は？ 千人は？

素手で万人殺した人物は歴史上にいたのだろうか？

重火器で国中の人々を皆殺しに出来た人物はいたのだろうか？

大事なのは殺した数ではなく殺し終えるのにかかった時間とプロセス。

膨大な時間と常軌を逸した方法を持つてやつと『現実』は超えられる。

しかし、そんな面倒くさい事をやる奴など殆どいないだろう。

完全に、ではないが、もつと簡単に『現実』を脱却する方法があるからだ。

その方法の一つが異種交配。

動物などではなく、神や精霊、悪魔や妖怪と言われる人外との間に子を儲け、『幻想』の血を取り入れるのだ。

選民思想、純血至上主義、貴族主義。

これらすべての発端と言えばこの方法がいかに流行つて満盈したか解るだろう。

要するに、現在神器だの呪物だのを扱っている輩は、少なからず人外の血が混じっている事が殆どだと言う事だ。

勿論先程とは別に自ら人間をやめて至る事も出来る。

その方法は様々だが、大抵は悪魔などと契約して何らかのものを生贄とし、その悪魔の力を己の体に取り込むパターンがオーソドックスだ。

だからと言うか、当然なのだが俺にも人外の血が流れている。

「ふむ、主様のマナの量を見てもそんな感じじゃの。じゃが、それじゃと納得できん事がある」

「人間如きが自分を殺すなど？」

パフェはすぐには答えず、飽きたとでも言うように俺の腕を離してベッドから体を起こし、視線だけこちらに向ける。

足元まで届きそうな見事な黒髪が、広がり背中を覆う。

何か真意をはかっている様な、そんな眼だ。

「そうじゃの、結論からいえばその通りじゃ。吾を殺すには神であることが最低条件じゃからの。だから、主様の力は在り得ないんじや」

「有り得ない？ そりゃあ、あんたとは格が違つかもしいないが、神を殺した人間なら幾らでもいると思うぞ。それを有り得ないと言

う事はどう言う事なんだ？」

パフェは半眼で溜息をもらす。

若干呆れているようだ。

「そやつらは己の体一つで神を殺したのかや？ 違うじやろ。必ず神器や宝具と言った類の武器や装飾品に頼っていたはずじや。人の世界でも同じじや、幾ら格闘技のチャンピオンでも重火器を持てば女子供に殺されるのと同じじや」

「なら、俺がそれ、もしくはそれに準ずるものを持っていないとたどりついた理由は？」

「くくつ、理由じやと？ 持っていないも何も、主様は第一契約を結び、己の創りだした神器で吾を殺そうとしたではないか」

先程から会話に違和感を感じる。

まるで俺が正解を口にするまでのらりくらりと会話を引き延ばしている様な。

胸中に少し苛立ちが芽生える。

「さっき言った通り、俺はあの時変なノイズに……」

「よく聞け主様よ。主様は覚えておらぬかも知れぬが、主様が結んだ第一契約は神でしか結べん、いや、逆じやの。第一契約を結べる事が神としての証なのじや」

「だから俺はノイズに操られて……」

「よく聞けと言っておるじやろ、例えどれほど強い神であろうと、第一契約を結べない者を無理やり結ぶことなぞ無理なのじや」

深く暗い瞳で俺の中を覗き込むようにパフェはこちらを睨んでいる。その様に俺はえも言われぬ焦りを感じた。

「……………俺に何を言わせたい」

眩暈がする。

この先をこいつに言わせてはいけない気がする。

途端頭痛が酷くなる。

「くくつ、解りにくかったのなら解りやすく言ってやろう。人の身でありながら第一契約を結んだ主様はいったい何モノじや、とな」

その7

少し昔話、いや愚痴の様な物を喋らせてほしい。

例えば、生まれた時から自分は他の生き物と違うものだと思いが付いていたとしよう。

羊の中に自分一人だけが人間としている様な、そんな情景。

ずれとも、異常とも、超越とも、自惚れともとれるそんな不思議な感覚。

あなたは持ったことが無いだろうか？

友人に訊いてみればそんな感覚は持ったことが無いらしい。

斯く言う俺もそんな感覚は持ったことが無い。

ならなぜこんな話を？

とあなたは思いかもしれない。

そう思うならば逆を考えてほしい。

自分を含め周りが羊だらけの中で、一人だけ人間がいる。

そんな感覚ならば持ったことはないだろうか？

テレビや新聞、ネットなどを見ている人間は恐らくあるだろう。

学業の成績、スポーツテストの結果や、大会の順位、コンクールなどの受賞者。

自分に出来ない事をいとも簡単にやってのける人物は山ほどいるのだから。

ちよつと齧れば解るそいつと自分を分け隔つ天賦の差。

『天才』

都合のいい言葉だ。

自分に出来ないことを正当化するのに使う、至極使い勝手のいい言葉。

俺はそんな『天才』の姉の双子の弟として生まれてきた。

別に姉貴を羨んだことはない。

ただただ自分とは別の生き物だと受け止めていた。

それ故か、俺は普通の人間とは違つと両親に教えられた時も、幼いながらに理解できた。

俺と姉貴が違つように、俺と普通の人間も『違つた』からだ。

俺の能力的な立ち位置は一般人とはかけ離れていたが、霊能力者としては名家の上の下、と言う位置にいた。

失望されるレベルでも無く、かと言って期待するレベルでも無い。

いかに普通の人間として逸脱していようが、同胞の中で普通の範疇では、結局は同じことなのだ。

蛙の子は蛙、鳶の子も鳶。

それなりに修業して、それなりの生活を送り、親と同じ程度の人生を送るはずだった。

だが、三年前のあの日、普通じゃない……つまり異常の刻印を押され、俺は羊から弾き出された。

実家からはほぼ勘当に近い物を言い渡され、今こうして姉貴の庇護が無いと生きていけないありさまだ。

俺は何を間違えたのだろうか。

パフェの言うとおり、俺は何者なのだろうか。

三年前の光景の断片が、セピア色に映し出される。

今もはつきりとは思いつけない、俺が勘当される原因となつた出来事。

何処かの橋の上で、血まみれの俺が誰かと対峙してるのだ。

辺りも一面血の海で、どれが誰の血か解らないレベルで夥しく散乱している。

そしてソイツと何かを話し、それから俺は……。

その後の事は何も知らない。

気が付いたら病院のベッドの上だった。

あの時の事を誰も語ってはくれない。

俺が思い出さない限りすべては霧に包まれたままだ。

「……俺が何者、か」

俺が知りたい位だ、という言葉を飲み込む。

泣き言を言った所で何も解決はしないし、これは俺と想い出せない
そいつとの問題だからだ。

閉じて居た瞼を開ける。

そこには人のワイシャツとジーンズを素肌にそのまま着たパフェが、
体を捻りながら己の様子を確かめていた。

あの質問の後、沈黙する俺に飽きたのか、パフェは『悪いが着物を
貸してくりゃれ』と、俺の返事も聞かずに洋服棚をあさり始めた。
ただの時間稼ぎかと思いきや適当に着ては『どうじゃ、似合ってお
るか？』と訊いてくる始末。

ちよつと前までシリアスな様子で話していたかと思えば直ぐにこれ
だ。

パフェの事、少しは理解出来た気がしたが、それが気のせいに思え
てきた。

「あんたのその表情、何処までが冗談なんだ？」

思わず思ったことが声に出てしまう。

失言かと思ひ、苦い顔になった己の眉間を指で小突く。

しかし、パフェはそんな俺を気にも留めず、律義に返答を返してき
た。

「ふふん。基本的に吾は全て本気じゃ。裏も表も無く常に自然体、
それが吾のモットーじゃからの」

パフェは何処から持ち出したのか、ヘアゴムで長すぎる髪を括り、
ポニーテールにしながら答える。

何と言つか、自由気まますぎる。

先程の質問に真剣に悩んでいた自分が馬鹿に思えてくる。

「で、己が何者か思ひだした、或いは己の素性を喋る気になったか
や？ 主様」

着替えに満足したのか、パフェは再び無遠慮にベッドに腰を下ろす
と踏ん返り返った。

俺の心情で少し増されてる気もするが、パフェのやたらと偉そうな
態度が眼に付く。

「さあな、例えそんなものがあつたとしても、あんたに話す必要ないだろ？」

少し苛立って答える。

素直に知らないと言えればいいのに、少し利己的になっている自分に気付く。

パフェとしてもしつこく聞くのは得体の知れない相手と運命共同体になるのは避けたいだけなのかもしれない。

理論ではそうだと解っていても、心がこれ以上踏み込まれたくないと拒絶する。

まるでお前は化物で生きていてはいけないと言われてる気がして、居た堪れない孤独を感じる。

被害妄想だとは分かっているけど、それを一笑する事が出来ない。

そんな心情の板挟みから、俺はばつが悪くなつて、そっぽを向いた。

「むむつ、先程からどうして隠すのじゃ。そんなに吾が信用できぬか？ 吾は別に主様が化物だろうと神であろうと気にはせぬ。大方主様はこの惑星の代行意思、または霊長類の守護者であろう？ 吾は主様からみれば脅威でしかないのかもしれぬ、じゃが今は違う」顔を背けているとフワツと体が浮き上がる感覚がする。

みると体にパフェの漆黒で抱き抱えるかのように纏わり付いていた。そのまま引き寄せられ、ぐっとパフェとの距離が縮まる。

目線だけパフェに向けると、熱の籠った優しい目がじっとこちらを見つめていた。

お互いの吐息が掛かり、俺はその眼から視線を外せなくなる。

魅了の魔眼に掛かった様にその瞳をただただ呆然と見つめる。

「吾は主様に恋をした。主様の全てが欲しい。主様に脅威が迫ると言うのであれば、全力を以て排除することを第二神の称号にかけて約束する。——ここまで言わせておいて信用せぬとは言わんじやろうな？」

騎士の様なセリフを吐きながら、瞳は変わらず表情だけ偉そうに俺を覗き込む。

「……………なぜ、そこまで俺の事を？」

違う、そうじゃない。

俺はそんな大層なものじゃない。

そう否定しようとした喉からは別の音が絞り出された。

パフエから今まで感じ取れなかった、いや感じ取ろうとしなかった
気迫を感じる。

だから俺はそう聞かずには居られなかった。

「吾は…可笑しい言い方かもしれないが、今までで一度も死んだことが無い。終焉神、言わば吾は戦の神の様なものじゃ。主様が数え切れぬほどの年月を生きてきたし、主様が呼吸した回数より多く殺し合いをした。振り返れば当然敗北もあり、辛酸を嘗めさせられたことも多い、決してシミ一つ無い戦績と言う訳ではなかった。そんな中、殺しあった連中と妙な友愛に目覚める事もある。時には共に戦い、時には互いに殺しあった。じゃがな、そやつらと何度殺しあおうが吾は死ぬことはなかった。何人で来ようが、負けようが吾だけは決して死ぬことだけは無かった。逆にそやつらは吾や別の終焉神に殺され消えてゆく。まあ当然じゃ、完全な不死などこの世にはおらん。ただ吾は周りより死ぬ条件が厳しかっただけじゃ。じゃからどれだけ仲がよくなるうとも吾は最後には一人になるのじゃ。主様にはまだ解らんじやろうな、残されるという気分がどれほど切ないかを。自分で矛盾している事を言っておるのは解っておる。しかしな、戦の神に戦いをやめろと言うのも残酷なものも解ってほしい。一人は飽いた、跡形すら残っておらん友人の亡骸を見るのも飽いた。じゃから吾は探した。己を殺せる存在を、共に果てる事の出来るパートナーを。そして主様を見つけた。互いに殺し殺される様なケンカが出来、人や神も関係なく対等な関係で何時でもいちゃつける、そんな恋愛が出来る相手を。だから吾は主様に恋をした。どうか吾と殺し相手になつてくりやれ？」

熱烈で血生臭い愛の告白。

しかしどこか胸が熱くなる。

生まれてから今までここまで感情を贈られたことがあっただろうか。もしこいつの言葉が嘘でも怨まない、そんな正気を疑うような考えまで出てくる。

だが、俺はこいつが思っている様な大層な存在じゃない。

こいつと対のピースに成れる様な大きな破片ではないのだ。

「悪いが…ッ」

断ろうと口を開くと人差し指を唇にあてられ、強制的に口を閉ざされる。

つくづく今日は言葉を遮られる日だ。

「疑問形で聞いという悪いが、答えは今出さなくてよい。生き残れたらでよい、どうせ今から数週間の間、嫌でもこの街は地獄に成るのじゃからの」

「……ちよつと待て、あんたが街を破壊する原因だったんだろ？」

そのあんたがこの街を破壊しないと云った今、誰がこの街を地獄に変えるって言うんだ」

「その訳は主様の姉弟を交えて説明する。吾らの事、主様が結んだ契約の正体、などなどをの」

パフェは漆黒でゆっくりと俺をカーペットの上に立たせると、ドアの方へ向ってすたすた歩き出す。

そして一度視線を俺に向け、くすりと笑うとドアを閉めて出ていった。しまった。

先に行っていると言う事なのだろうか、俺も後に続こうとゆっくり一歩を踏み出した所でパフェが出る前に笑った理由に気付く。

俺はまだ下着一枚だった…。

大急ぎで着替えて、俺も後に続くのだった。

その7（後書き）

その7、どうでしたか？

シリアスな話を作っていたらいつの間にか恋愛（？）ものになっていました。

この時点で愚痴の様な物ですが、この先は完全に愚痴なので興味の無い方は次話へ。

何度書き直してもパフェとカノンが喧嘩して大変でした。

喧嘩しないと思ったら話しが噛み合ってなかったり（今現在も半分そうですが）、永遠とベッドの上で話をつづける破目になったり、で二転三転しました。

それでも自分では詰め込みたい物をだいたい詰め込んだと思うので満足です。

ここまで下らない愚痴及び本編を読んでくださり、ありがとうございます。

その8

リビングには姉貴と天羽、そして先輩がいた。

二人は俺が重傷で寝込んでいたにもかかわらず、暢気にバラエティ番組を見ている。

眼の下に隈を作って身代金を要求されている家族的なノリを期待した訳じゃないが、流石にこれは酷いだろ。

ほんと、俺の存在価値って何なんだろうなと、アイデンティティが揺らぎそうになる。

というかぶっちゃけ崩壊寸前だ…。

視線を姉貴と天羽が座っているソファから対面のソファへ移す。姉貴らとは対照に先輩は蓑虫の様に毛布に包まってすーすー寝ていた。

こんな状況で寝れるのだから相変わらずマイペースな先輩だ。姉貴らに聞こえない様小さく嘆息する。

まあ、恐らくみんな俺のために色々として疲れたんだと思うから、後で礼を言っておこう。

ジツとしててもしょうがないので再び歩を進める。

「あつ、カー君、起きたんだ。体は大丈夫？」

ゆっくりとリビングに足を踏み入れると、いち早く華蓮が反応した。全容が見えた俺はリビングをぐるりと見渡す。

不思議な事に先に出ていったはずのパフェが見当たらない。

何処へ行ったのだろうか。

「大丈夫と言いたくないが、多分大丈夫だ。——ところで、ここに黒髪でポニーテイルの女が来なかったか？」

体の方は突然融解しそうで怖いが、大丈夫だろう。

そんな事よりも今はパフェの行方の方が重要だ。

問題でも起こされたら嫌でもこっちが面倒を見なければならぬ。

「ん？ パフェちゃんの事？ それなら…」

姉貴は首を傾けながらついつと俺を指差す。

指先はどうやら俺の腹部辺りを指しており、つられる様に腹部に視線を下ろす。

当然の事ながら何もない。

一瞬どう言う意味だかわからず、呆けていると誰かに後ろからギュッと抱きつかれる。

腹部を見ていた俺には真白の腕がにゅっと生えるところが見えた。

一種のホラーだ。

姉貴に後ろに誰かいると言われなければの話だが。

いや、誰かも何もパフェに決まっている。

「吾を呼んだか？ 主様」

「先に出ていって、なんであとから来るんだ…」

ぐりぐりと背中に額を押しつけられる。

筋肉痛と相まって物凄く痛い。

そんな俺の様子を知ってか知らずか、ますます腕に力を込めてくるパフェ。

「いやすまぬの、ゆく途中にあったトイレというものが気になっての…、知識としては知っているが物珍しくてついつい見てしもうた。許してくりやれ」

優しく俺の臍のあたりを撫ぜながら、甘くパフェは囁く。

その仕草も当然気にはなった。

が、それよりも俺はなぜにトイレと突っ込みたくて仕方がなかった。腹筋が筋肉痛でなければ、叫んでいたかもしれない。

今は声を出す事さえ億劫だが。

一応神様と同居している事から、神が排泄はおろか代謝機能すらない事は知っている。

その割に家にいる奴は風呂へ入ったり、歯を磨いたり飯を食ったりしているが。

我が家の神剣様に視線を向ける。

ぱっちり目が合う。

というより天羽は先程から氷の様な冷たい眼差しでこちらを睨んでいたようだ。

なぜかよく解らないがあれは怒っている顔だ。

出来れば逆鱗に触れたくないので流れに逆らわず視線をスライドさせていく。

「へー、パフェちゃんのいた所にはトイレがなかったんだ」

姉貴は姉貴で頓珍漢な応答をパフェに返す。

先程からちゃん付けで呼んでいるが、いったいいつの間に親しくなったのだろう。

「まあ、そんなところじゃ、お義姉様」

俺に抱きついたまま、腰の横からひょこつと顔を出すと、とんでもない事をのたまうパフェ。

今何て言ったこいつ…オネイサマ、だと？

姉貴の横にいる天羽の機嫌が眼に見えて悪くなっていく。

一方姉貴は姉貴で。

「あはっ、カー君おねえちゃんに妹が出来たよ」

とか気にしてない様子。

姉さん、あんたに新しく出来た妹は爺婆と孫とかそういうレベルじゃない位年齢が離れていますよ。

「カノン、その影女にされた傷は本当に大丈夫なんだな？」

天羽は影女の部分をパフェを睨みながら強調しておれに尋ねる。

姉貴がいなければ今にも斬りかかろうとする勢いだ。

恐らく姉貴をお義姉様と呼んだ事により、完全に堪忍袋の緒が切れたのだろう。

だが、姉貴が直ぐに認めてしまつて直接糾弾出来ないから俺をだしに使ったと言う所か。

解りやすいまでに単純だがそれを指摘すると、矛先が俺へと向かいと血を見るので黙っている事にする。

「吾とこのユミナと言うものが二人掛かりで修復したのじゃ。大丈夫に決まつておるじゃろ、のう主様」

パフェは天羽には一瞥すらせず、抱きついたまま腰のあたりから俺を見上げてくる。

もともと俺が襲いかかった、自業自得その物から出来た怪我だ。例えば大丈夫じゃなかるうと俺には全く以外の選択肢がない。

天羽の顔を見ないようにながらゆつくり頷く。

「ほれ見ろ、主様も問題ないと言っておるだろうが。——
これじゃから無機物は困る」

ピキツと言う音がし、天羽の額に青筋が立つ。

顔は冷静な体を装っているが、若干引き攣っていた。

天羽の斜め後ろ辺りにある観賞用の植物の葉が一枚、細切れにされる。

……見なかった事にしよう。
即座に俺は記憶にふたをする。

「お前が傷付けたくせに、その言いぐさ……。反省の色が無いのか？」
ぼんやりと二人の喧嘩を眺めながら、案外神も子供っぽいんだなと口にはしないが思った。

再び観賞用の植物の葉が切り刻まれ宙へと舞う。

口論の内容は子供っぽかるうが、でる弊害は人間の比じゃないのがネックだ。

何処か他人行儀に二人を分析する自分がいる。

早くも現実逃避を始める脳に嫌気がさす。

ずるずるとパフェを引き摺りながら少しずつ前進する。

パフェが先輩の名前を知っている辺り、やはり俺の知らないうちに大方自己紹介を済ませたのだろう。

「反省ならしておる。これからは吾が主様の手となり足となり支えていくと決めておる」

と手足を絡みつかせ更に密着してくるパフェ。

柔らかい肌が少し気持ちいいが、その代わりに体がさらに重くなった。

手と足の代わりと言うか、これでは重石にしかっていない。

取り敢えずパフェが飽きるまでされるがままにされる事にする。

彼女が命の恩人で被害者な事には変わりないのだから無下に扱うことも無いだろう。

と、さつきまで思っていたのだがいい加減振り離してもいいじゃないだろうかと思えてくる。

なんで筋肉痛の俺がこいつを引きずらにやらんのだ。

はあ、と疲れと共に溜息が出てくる。

「なっ、何を言っている。敵であるお前にそんなことされる必要はない。治したのならとつと謝って帰れ」

「なんじゃ、吾に居られて困ることでもあるのかや？」

「あるに決まっている。華蓮、やっぱりこんな危険な奴を家に置く事は、私は反対だ」

天羽はパフェを指差しながら華蓮に危険性を訴えかける。

客観的に見れば身内（俺）がパフェによって殺されかけたのだから危険だと言うのは間違いではない。

パフェの意思はともかくとして、能力的には核爆弾を自宅に持ち込んだに等しい状況なのだから。

なら追い出せばいいと言うが、パフェと共生している身にとってはそういう訳にもいかない。

ここは姉貴の判断次第だ。

俺達三人の視線が姉貴に集められる。

「ん、一先ずご飯にしようか。まずは親睦を深めないと」

パンと手を打つと、華蓮は有無を言わせず食事の準備に取り掛かる。まだ、判断はできないと言うことだろうか。

姉貴の表情からは一切の思惑が読めない。

考えている様に見えて考えてない、考えていない様に見えて考えている。

輪廻華蓮とはそんな人物だ。

「だが、華蓮…」

天羽が苦い顔で華蓮に訴える。

天羽にとっては姉貴の命とは言えパフェと親睦を深めるなどと真っ平御免だろう。

「流石お義姉様じゃ、その無機物と違って情勢がよく解っておる」「ぐぬぬ」

歯を食いしばって天羽はパフェを睨む。

天羽とてこれ以上揉めたくないのと、華蓮の意見に従わなければいけない思いがあるのだろう。

今回は血の涙を流し引きさがっていった。

「じゃじゃーん!!」

いつの間に用意したのか、華蓮は夕食をテーブルに並べていた。

天羽はまだ睨んでいたが、パフェは俺からぱっと離れると気にすることなく席に着いた。

最近俺が用意していたから、見る機会は無かったが、コレは……。

「美味しそうだね」

思わず腹の虫が鳴りそうなくらいいい香りが鼻腔から入り込んでくる。

もちろん香りだけじゃなく見かけも十分食欲をそそる。

これだけで今日は気合が入っているのが解る。

と言うか、俺が起きる時間が解っていてこれを作ったんだろうか？ そうだとしたら末恐ろしい姉である。

姉貴の場合、味はいつもどこかの有名料理店の様な味付けで美味しいが、見かけが適当な事が多いのだ。

鍋など入れてかき混ぜる系はいいのだが、盛り付けるタイプになると悲惨だ。

サラダは野菜ジュースになる事があるし、ハンバーグなどは外に盛り付ける野菜まで、そのまま中に入れられる始末だ。

一番ひどかったのはオムライスだった記憶がある。

全て同時進行させようとしたのか、卵とチキンライスがぐちゃぐちゃになっていて言葉には表現できない感じになった。

料理とは化学反応だと誰かが言っていたが、それは味的な問題だけ

の話だと言っのがよく解る。

姉貴はテキパキと五人前用意した。

うちのテーブルは一家に三人しかないのに6人、無理すれば8人テーブルに着けるようになってる。

五人各々が席に着く。

俺の横にパフエ、その前に天羽が座っている。

姉貴は一番動きやすい天羽の横の席に座り、俺の前の席も埋まる。

「いただきます」

手を合わせ、ふと前を見る。

先輩がナチュラルに箸をご飯に伸ばしていた。

余りもその仕草が自然過ぎて俺は驚くに驚けなくなってしまった。

幻覚かと思い、先程まで寝ていたソファーに視線を向けると毛布が丁寧に折りたたまれていた。

呆れるくらい高い隠密スキルだ。

「——先輩、よく眠れましたか？」

で、つい出た言葉がこれ。

「……………そこそこ」

先輩は一瞬こちらを一瞥すると、特に気にした風もなく焼き鮭の切り身を口に入れる。

俺も真似して一口サイズに切り分けた鮭をご飯と一緒に頬張る。

出来たて熱々のご飯と、焼き立ての魚を口に運ぶ瞬間は、日本人に生まれてよかったと思える瞬間だ。

「カノン君、体、大丈夫……だった？」

ふと思い出したように先輩は顔を上げ、箸を銜えたまま上目遣いで此方を見つめる。

一般的に銜え箸はマナー違反とされているが、今の先輩の仕草で気分を害する人が居ない位、とても自然に見えた。

「お陰様で生きて戻る事が出来ました。ありがとうございます」

こう見えて、この人は治癒術の事なら日本で十指に入る位すごいらしく、俺や姉貴はたびたび利用させてもらっている。

「そう、ならいいの」

それだけ言っと、興味を無くしたのか再び箸を伸ばし始めた。

俺は今度は隣にいるパフエに目を向ける。

てつきり先割れスプーンやフォークで食べているかと思いきや綺麗に箸を使っている。

流麗な箸使いに暫し目を奪われているとパフエがこちらに気付く。

「どうしたのかや？ 吾のスモークサーモンが欲しいのかや主様。主様が欲しいのならいつでもあーんを…」

と、桜チップで燻製にされたサーモンを危なげなく箸で俺の口の前まで持ってくる。

ここでふと思う。

ちよつと待てと。

初めて会ったときから何か違和感があつた気がしたが、その正体が今わかった。

漫画や映画でそういう光景に慣れ過ぎた所為かも知れない。

「あなた、その知識と技術どうやって修得したんだ？ 見るからにこの国の神、いや…この世界の神と言う気がしないんだが」

普通に始めから日本語を話し、衣服の着方や、髪留めの使い方、そして現在箸の使い方やスモークサーモンの存在まで知っている。

いや、そう言えばこいつ、このリビングの品を見て何一つ驚いたと言う顔をしなかった。

ここまで来ると日本古来の神と言われても流石に胡散臭い次第だ。

「ん、なんじゃ、今更な質問じゃのう。まあよい」

もぐもぐとスモークサーモンを食べながらパフエは箸を置く。

「神と言う生き物には様々な特典とでも言うべきものが付くが、その中に『神域言語』と言うものがある。ルビは各々自由に振ってくれ。で、じゃ、字の通りなのじゃがこれは神が使う言語、と言うよりは言葉が存在しない時代に使われた意思伝達技法じゃな。これを使えば他の世界の言語だろうが、他の動物、植物、果ては惑星とまで会話することが出来る。詳しいシステムは省くが、要するに主様

らの様な音を利用して意思疎通を図るのではなく、直接相手に思いや感情を伝達又は受信する訳じゃ。まあ、送受信共に伝わり過ぎたり伝わらな過ぎたりする所為で加減が難しく、それを相手が受け取るかどうかは相手次第なので今ではあまり使われんかの」
「なるほど」

得意げに語るパフエを尻目に一応納得した素振りを見せる。

こんな話を聞くと詳しい機構が聞きたくて仕方がないが、今は必要な事だけ聞こう。

「では、その箸使い等の知識と技術は？」

パフエは一瞬目を逸らし、答えるべきか答えないべきか、そんな悩む素振りを見せる。

それは疑心からくる表情ではなく、今それを話すべきかどうか、そんな事を考えている表情に見えた。

「……吾にはその土地の歴史や技術を習得する能力がある。ただそれだけじゃ」

先程の説明に比べるとかなり短めな回答が返ってくる。

その表情からはこの件についてはこれ以上は述べないと明確な拒絶の意思が表れていた。

なので、話したくなくてこんな文章になったのか、最大限話せる文章を話してこうなったのか、俺には判断が付かなかった。

「済まぬ、別に主様に隠し事をしたい訳ではないのじゃ。じゃが、状況が解らぬ以上、今これ以上は話しようない」

俺の表情を察してか、ばつが悪そうにパフエは謝る。

誰だって言いたくない事の一つや二つはあるだろう。

俺はそれで十分だと礼を言い、食事に戻った。

その9

食事も殆ど終わりにさしかかった頃、微妙な顔して食べていた姉貴が、口を開く。

「んー、そろそろいいかな？ パフェちゃんの事教えてもらっても」
「なんじゃ？ 好みの雄でも言えばよいのかの？ ならば当然主様じゃ」

『だいちゆき、LOVE』と言いながら抱きついてくるパフェ。

本当に大丈夫なのだろうか、こいつは。

本気で眩暈がしてくる。

どんな顔をしているのだろうと思いパフェの表情に目を向けると。
にやり、と俺にだけ表情が見える位置から意地の悪い表情を浮かべていた。

当て付けた…。

これは絶対俺がパフェに返した回答に対してのあてつけた。

何ともブルーな気分になった俺は、八つ当たり気味にくしゃくしゃとパフェの髪をなでる。

パフェは戸惑った顔を一瞬見せたが、抵抗はしなかった。

しつとりとした質感の髪が妙に心地いい。

「っ…!!」

俺がパフェの髪を撫ぜていると悟りを得た僧の様な表情をしていた天羽の眉がピクリと動く。

天羽の瞼がゆっくり開き、レーザーでも出しそうな勢いで俺を睨んでくる。

あゝ、ヤバいなと思いつつも横のパフェは一向に気にした素振りを見せず、むしろ自ら頭を俺の掌に押し付けてきた。

「……………」

この心地よさは名残惜しいが、今は断念する事にしよう。

思考すること数秒、べたべたひつつこうとするパフェを無理やり引

きはがして会話に戻らせる。

パフェは口を尖らせぶーぶー言っているが、俺が天羽を顎で指すとやれやれと言った風に座りなおした。

「――冗談じゃ。そう睨むな、怖くて吾が申せなくなってしまうではないか」

「……………くっ」

天羽は暫らく苦虫を噛み潰したかのような顔をして睨んでいたが、渋々そっぽを向く。

これは流石に俺も同情したくなる。

俺も片棒を担いでいたような物なのでなおさらだ。

が、それをここで言うことややこしくなるので天羽には悪いがスルーさせてもらおう。

「つと、その前に大事な事を聞くのを忘れてた」

手をぽんと打つと、華蓮は俺へと向き直る。

何事だろう、と俺とパフェの頭の上に？がでる。

「昨日何があつたかをカー君の口から全部聞かせて、その間悪いけどパフェちゃんには黙つといてほしいかな」

真面目な顔で姉貴は俺とパフェを見比べる。

「了承した。答え合わせなり間違い探しなり好きにすればよい」

パフェは静かにお茶をすすりながら答える。

恐らくは俺が起きる前にパフェは俺達の間で起きた事を話したのだろう。

ちらりとパフェに視線を向ける。

静かに座すパフェからはなんの感情も感じ取ることが出来なかった。

視線を姉貴に戻す。

姉貴と視線が交差する。

言葉は悪いが尋問の正誤を姉貴は知りたいのだろう。

「……………わかった」

俺はあの日パフェとあつた辺りから出来る限り覚えていた事を姉貴に説明した。

ノイズや契約、神の力に関してはかなりあやふやに言ったが、そこは最早覚えていないのだからしょうがない。

「ふむ、ふむ、主観の差異はあれど、パフェちゃんとだいたい一緒だね」

「そりゃあのお、吾は主らを騙すつもりはないからのお」

パフェは手の上で湯呑をくるくる回しながらだるそうに答える。

アレは疑われて少しショックを受けている顔だ。

意外とナイーブなのかもしれない。

「さて、本題だけど。まず、もう一回確認したいんだけど、パフェちゃんはカー君と影と体で繋がっていて、離れられないんだよね？」
姉貴は唇に人差し指を添えて、考え込むような素振りで見せる。

体はともかく、影で繋がっている事は初耳だったが、円滑に進めるため今は黙る事にする。

「うむ、間違いないぞ。確かに吾は主様に体を提供したが、体と一体となっていてはいちやいちゃ…こほん、色々と疎外が生まれるのでこうして多少の部分を本体として残させてもらった。じゃが、吾のみではどうしても体を維持出来ん状態じゃったのでこうして影と言う形で繋がりを作らせてもらった。まあ、言うなれば是は吾と主様の臍の緒と言うところじゃの」

と、俺とパフェ足の間に出た影を足でちょんちょんとつつくパフェ。

助かったのは事実だが、コレはいち早く俺に言うべき事柄ではなかったのだろうか？

目線でパフェに無言の圧力をかけるが、素知らぬ顔で無視される。随分と面の皮の厚い神だ。

今に始まった事ではないがな。

……まあ、良いだろう。

形はどうであれ、共生している事は伝えられていたのだから。今日何度目か知らぬ溜息を吐く。

「まずは吾の事からじゃの。————吾は終焉の神が一、第二神

パフェヴェデイルムⅡヒアスⅡファノレシス。終焉神などと大層な名で呼ばれておるが、何の事はない。ただの呪われた愚かな神じゃよ」

ふぁつと欠伸をしながらパフェは眠そうに己の名を告げる。

「吾ら終焉神はその称号を授かった時に呪いを一つもらう。その呪いは生き物が呼吸するように、食事をするように、睡眠するように日常、非日常問わず吾らの身にのしかかる。まあ、それをしなければ死ぬ、なんて呪いではないかの」

眼を細め、パフェは窓の外を見る。

ちょうど夕日が沈むところであり、それを見てパフェは忌々しげに舌打ちした。

「…その呪いとは？」

続きを促す意味も含めてパフェに質問する。

「魂を求めるのじゃ。生きとし生けるものそれぞれに備わっている魂に触れたくて触れたくて仕方なくなる。——————解りやすく言うとな、生き物を殺したくなる訳じゃ」

酷くつまらなそうにパフェは語る。

まるでやりたくも無い授業を無理やりやらされてるかのよう。

さつと血の気が引くようにパフェの周りから空気が静止していった。かく言う俺もどう反応していいか解らなかった。

恐怖とは違う、感情。

言うなれば理解できない物に遭遇した様な、そういう類の感情が占めていた。

「……言い方が悪いけど、それって逃げなんじゃない？」

先程から一切口を出してなかった先輩が静かに呟く。

眼を睨り一見冷静に見えるが、膝もとに置いた手は微かに震えていた。

「ほお………」

パフェは肯定も否定もせず先輩を流し見る。

どうやら続きを促しているようだ。

「……だってそうじゃないの。曲がりなりにも神様……なんでしょ、生き物を殺すのに精神病みたいになんて理由をつける必要がどこにあるのかな？———もっとはつきり『生き物を虐殺したいです』って言えばいいのに」

口調は淡々としていたが、明らかに敵意を持った眼差しで先輩はパフエを睨む。

その瞳の奥には炎の様に怒りが渦巻いて見えた。

「先輩……」

先輩は治療者だ。

ヒーラーと言えば聞こえはいいかもしれないが、実際はそんないいものじゃない。

治療者とは最も多くの直接的な死を見る職だ。

銃やナイフによる死など結果死んだだけにすぎない。

トリガーを引くだけ、心臓にまっすぐ突き刺すだけ、あまりにも簡単すぎて二度目からは何の感慨も浮かばなくなる。

それはそうだ。

なぜならそいつはトリガーを引いただけなのだから。

トリガーを引くだけなら子供だってできる。

その先に何があるうとも、行為に変わりはない。

言ってしまうえば心のあり様次第だ。

だが、治療者はそうもいかない。

生きてるのか死んでるのかすらわからない物体を蘇らさなければならぬのだ。

お伽噺の様に誰もかれも生還できればいいが、現実そうはいかない。無理やり生かそうとしている人間がむなしく死んでいく。

彼らはいったいどんな気持ちでそれを見送っているのだろうか。

一度先輩にそれを聞いたことがある。

その時先輩は。

『精密機械のリサイクル工場と同じ。ガチャガチャ弄って治すだけ、治らないならダメになるまで弄るだけ。———そう思わないと、

私は耐えれなかった』

と、寂しそうな眼をして言っていた。

だから許せないのだろう。

詰まらなそうに生き物を殺す正当性を話すパフエが。

「ああ、すまぬ。呪いと言う言い方がまずかったかの、性質とでも置き換えてほしい。——それと、何か勘違いしておる様じゃが、一つ訂正させてもらう」

髪の毛を指に絡みつけながら、溜息をつく、パフエは真っ直ぐ先輩を見つめる。

「正直な話、吾を含め神は、『人間を殺した』などと思う奴などおらぬ。お主らが普段、羽虫をいつの間にか殺しても気がつかぬように、吾らとしても邪魔な何かを振り払った、程度にしか感慨を感じぬ。言うなればとるに足らない事なのじゃ、特に信仰の力を源としない吾の様な肉体を持つ神にとってはの」

頬杖を付きながら嫌そうに語るパフエ。

だが、何となくパフエの言いたい事が見えてきた。

「……………へー」

今にも凍結しそうな冷たさで先輩がパフエを睨む。

先輩だけじゃない、考え込んでる素振りの姉貴の心象も穏やかではないだろう。

天羽に至っては言わずもがなだ。

これ以上パフエが主導権を握ったまま会話しても、状況は悪化するだけだろう。

「すみません先輩、今は話を先に進めさせてもらいます。——

——回りくどいのはなしにしないか？ 生き物を殺すのにためらいがないんだろ？ ならなんでそんな話を話すのに嫌そうな顔をするんだ」

解りやすいほどにだるそうなスタンスでパフエは語っている。

パフエが語った内容を要約するところだ。

神は生き物を殺すのに何も感じないが、終焉神は生き物を殺したく

なる。

且つパフェ自身は何も感じないと言う。

何も感じない、むしろどうでもいい事を呪いとして表現したのだ。つまりはそこがパフェにとって一番言いたくない部分なのだろう。ジツとパフェに視線を送る。

パフェは深く溜息をつくと肩をすくめた。

「吾らが生き物…神を含めての、を殺すのは生き物の数を調整する為じゃ。いや、殺すと言うより間引くと言った方が適切じゃの」

「じゃあ、あんたはその間引く選別を半ば己の意思を無視して行わされているから嫌なのか？」

言っては悪いが、俺はこいつの事を何を殺してもケロッとしてる奴だと思っていた。

俺や姉貴だって妖魔の類と対峙するときはそのうものだと割り切つて殺している。

だから、こいつも仕事だ使命だと割り切つて、あるいは端から気にせず殺しているのだと思っていた。

「同然じゃろ。主様は、庭にいる虫をわざわざ素手で殺せと強制されて嫌にならぬのかや？——— 例えその虫が将来自分の家を破壊する原因になるとしても」

だが、俺の思惑に反して、冗談めかして語りかけるパフェの目は笑っていないかった。

その眼は俺に伸ばした黒い布のように深い漆黒が広がっていた。

ここでやつと俺はパフェが何でこれを話すのがいやなのか解った。

例え通り、虫ならばいい。

ためらわずに殺すだろう。

妖魔のように。

それが将来自分に仇なす害虫ならなおさらだ。

だが、それが猫や犬、果ては人間と変えられればどうだろう。

いつか、自分に仇なす人間がいるからそいつを殺せと言われた時、どうするか。

更にそれが家族や恋人、親友ならどうするか。

こいつはその時どうしたか。

生き物を間引くとはそういう意味なのだろう。

やっと繋がった。

それらを殺してきた結果、こいつは独りになったのだ。

「——確かに、それはいやだな」

俺はそう答える事しかできなかった。

「じゃろ？ これでも吾は位の高い神なのになんでこんな事をと、今更ながら思う訳じゃ」

こうやってパフェだって冗談みたいに済まそうとしているのだ。今なら表面上は笑える。

パフェだってこんな事を長々言いたい訳ではないのだろう。

「主様よ、なんで吾らが終焉神と呼ばれておるか解るか？」

「多くの生き物を虐殺……いや間引きか。それをするからだろ？」

ただの人間でもその気になれば何十人、何百人と言う人が殺せるのだ。

神ならば国、果ては大陸中の生き物を根絶させることもできるだろう。

こいつらのノルマがいくらかは知らないが、上限を満たせないと言う事はないだろう。

「違う、結果は同じであれ、過程は全然違うのじゃ」

首を振り、パフェは俺の答えを否定する。

「終焉神とは、終焉神同士が戦う余波で世界が滅びるから終焉神と呼ばれるのじゃ」

パフェは真面目な顔をして答える。

その言葉に俺は。

——戦慄。

したかったのは山々なんだが、なんだ。

ここへきて一気にスケールがでかくなりすぎて共感できる限界を超えた。

世界が滅びる？

わざわざ『この世』とルビを振った位なんだから地球じゃなく全宇宙を指してのことだろう、恐らく。

ギャグじゃないのはまあ、解るんだがなんかこう、ぱつとしない。

これでもお伽噺の様な環境で生きてきたつもりだが、全宇宙レベルの話はなあ…。

事柄が大きすぎて実感がないと言うのが本音だ。

だいたい終焉神とやらはこの街にはパフエしかない訳だし。

こいつが今、こんな状態なのだから何ら脅威ではないのではないだろうか。

と、根拠も無い事を考えながら俺はパフエを真剣に見ていた。

「……………」

俺達の間には痛い沈黙が訪れる。

誰も何も発しない。

パフエは眼をぱちくりさせる。

「驚かんのかや？」

「いや、驚いてる」

驚いてはいるんだが、国外についてのニュースと同じで感情の籠らない感嘆詞しか、口から出てこない。

俺だけじゃなく姉貴たちも同じように皆目が据わっている。

パフエは再び目をぱちくりさせる。

「ふむ、みな肝が据わってる様じゃの。これなら安心して全てを話せる。実は吾以外にも終焉神が来ている、そやつが宝具、神器の類の物を狙ってる。特にその小娘の様な物をな。吾はそれを阻止するためではないが、そやつを殺す為にこの世界へ来たわけじゃまあ、それを主様に邪魔された訳じゃが、その件に関しては気にする事はない」

「ふーん」

皆いつの間にか姉貴に並べられた茶菓子と茶を飲み食いしながらふんふんと頷きながら聞く。

だが、ちよつと待て。

今こいつ重要な事をさらつと言わなかったか？

終焉神がもう来ているとか、天羽がそいつに狙われているとか。

当の本人は一仕事終えた、という顔をしてお茶を啜っている。

この辺りからもしかするとやばいんじゃないのか、という思いが心の隅に表れ始める。

「えーつと、つまり俺たちにその終焉神とやらがこれから襲いに来
るって事か？」

俺は中身の無くなった湯呑を握りしめて、恐る恐る尋ねる。

「お主だけが標的ではないが、まあそうじゃの。この国の神器や
宝具くらいは大方回収するんじゃないじゃろうかの」

俺の質問に、お淑やかに茶菓子をつまみながらパフェは何でもな
いように答える。

何の脅威でも無い様に、あつさり。

「それは雑魚だから簡単に処理できるってことだよな？」

「まあ、終焉神の中では弱い方じゃの」

ほつと一安心する。

よく考えれば何も安心できる要素など何一つとしてないが、パフェ
の口振りに思わず安心してしまった。

「じゃが、今の吾ではどうあがいても勝てんぞ？ —— 吾は今

普段の1割の力も出せんからの」

勝てない？ 一割も出せない？

つまり、どう言う事だ…。

暑くも無いのに全身から汗が出てくる。

「これで対岸の火事を体験してる脳も危機感を覚えたかや。吾らが
どれだけ危ない所にいるかを。 —— 現にもう既にこの街で

おかしな事が起こり始めとるのではないかの？」

ニヤツと笑いパフェは俺達を見渡す。

そこで華蓮が手をあげる。

「ねーねーパフェちゃん。悪いんだけど今ここで出来る全力を見せ

てもらえないかな？　その襲ってくる終焉神さんはそれより強いってことだよな？　でも、私たちはパフェちゃんの力をその目でちゃんと確認した訳じゃないし、いまいち脅威の度合いが解らないんだよな」

先程から無言だった華蓮がニコニコしながらパフェに言った。それは至極まっとうな意見だろう。

戦った俺はともかく、姉貴らは聞いていただけのはずだ。

聞くのと見て感じるのでは認識の度合いが全然違ってくる。

「良いじゃろう」

パフェはこくりと頷くと、掌を上、胸の前に右手を持つてくる。

パフェの髪がフワツと巻き上がり、瞬時にその右腕にエネルギーが集められていくのが解る。

その手のひらの先に黒い球体が出る。

あれがパフェの言う概念心具と言う奴なのだろうか。

そう思っていた次の瞬間パリンと音がし、空間が割れた。

硝子のように黒い線を幾つも走らせて。

——いや、違う。

破片の縁に見えた黒い線は幾重にも張り巡らされたパフェの漆黒の杭だった。

俺達や家具を避ける様にだが、それでも残りの空間にびっしりと張り巡らされていた。

ここにいる誰もがそれに反応する事すらできなかった。

「——天羽、抜って」

華蓮が指示を聞くと、ろくに構えもせず天羽は無造作に二、三腕を振る。

パラパラと音がして切り落とされた枝先がフローリングの床に落ちる。

「ふざけるな、これが全力……」

「ストップ！」

パフェに文句言おうと一歩足を踏み出そうとした天羽に華蓮が静止

の声をかける。

「これが、パフェちゃん的能力ってわけ？」

フローリングに突き刺さった漆黒の枝を注意深く眺めながら、姉貴はパフェに尋ねる。

「吾だけではない、肉体を持つ総ての神に備わっている能力、心具……正式名称心象具現礼装じゃ。字の通り心象風景を具現化し、武器として使う事の出来る技法じゃ」

床に突き刺さっていた漆黒の枝と残った枝が一瞬で分化し、ナイフを模って天羽と華蓮に付きつけられる。

「特徴としては物理、霊体、魔術など全ての物に接触が可能だと言う事」

「それは霊力を込めた武器や神器とどう違うの？」

本来人間であれば、天羽などには見る事も触ることも許されない。

俺達はそれを無理やり目や手に霊力を灯す事により、見たり触ったりしている訳だ。

天羽はその逆で、触りたい物に自ら神気を通し、触れるようにしている。

つまり姉貴が言いたい事は霊力を灯せばどんなものでも触る事が出来るのに、特徴としてそんな物をあげたのかという事だろう。

「神器はともかくとして、マナ……いや霊力かや？ そんな物をなぜ武器に通す。霊力自体が霊体に触れる事の出来るものじゃろ？ 宙にその武器状の霊力の塊を作ればよい話じゃろ」

「それは………」

俺も姉貴も言葉を濁す。

出来ない事はない。

が、メリットデメリットが釣り合わない。

空中に霊力の武器を作ろうと思うのなら霊力の固定をする必要が出てくる。

でないと、すぐに霧散してしまうからだ。

それに加えて空気は伝導率が悪い。

この二点により、この方法は非常に燃費が悪い。

しかも得られるメリットが、武器が無くても戦えるという点のみだ。これならば徒手空拳で闘う方がましなレベルだ。

「まあ、無理じゃろうな。そんな事が出来るのなら魔術師は呪具や魔具を必要としなかったじゃろうし」

「という事はその心具は霊力を必要とせず、霊体などと接触が可能だつて事？」

「その通りじゃ、付け加えるならその霊力の伝導率も100%じゃ、いや蛇足じゃったな。——本題はここからじゃ」

左手をギュツと握ると、辺りに散らばっていた心具がパフェの右手の上に集まる。

「ここまでは別に神じゃなくてもできるし、別に大した脅威でも無い。脅威となるのは、ここに概念…法則を捻じ曲げたルールをひとつ加えられる事にある。——概念心具第一契約『^{ファースト}Set-SIN

」

ぼそりと呟くと、見かけ上変化がないが、超然とした神気がパフェから放たれはじめる。

パフェはそのまま右手を湯呑の上にかぶせ、押しつぶすように降下させる。

まるでブラックホールでもあるかのように、黒い物質の中へ湯呑が取り込まれていく。

俺達は固唾をのんでそれを見守る。

「それが、私のコレクション一本ダメにしちゃった能力の正体か」

姉貴は何所からか柄だけになったひと振りの刀を取り出すと、残念そうに欠けた部分を触っていた。

本当に俺が寝ている間に何があつたのだろうか。

だんだん聞きたくなってきた。

「まあ……そういう事じゃ。吾の概念^{ルール}については詳しくは話せぬが、見たままのルールだと思ってくれてよい。なお、この概念は神それぞれ固有のものであり、例えば『^{ルール}燃烧』と言う概念を持つ物は

その心具に触れる物を『燃焼させる』と言うルールが付加される。もし今吾の心具に『燃焼』が加わっていたのならこの湯呑は燃えていたじやろう」

パフエは残った湯呑をぐちゃっと概念心具で握りつぶす。

「ちなみに概念^{ルール}に対しては別の概念^{ルール}でしか対抗できん。抗したいのなら魔術なり神器なりを使え、間違ってもただの霊力だけの攻撃で防ごうと思うな」

すうっとパフエは息を吸うと、掌の概念心具を解除する。

そして天羽を見ながら『まあ、その小娘でも焼け石に水じやろうけどな』と呟く。

「なら私たちにどうしろというのだ。戦いもせず逃げ回れと？」

ゆらりと天羽がパフエに近づき、右手をパフエの首先へと向ける。

「そうは言っておらん。まあ、吾に考えがある」

パフエは不敵に笑うと、俺達を手招きすのであった。

その9（後書き）

どうでしたでしょうか、その9。

色々と説明を省いてしまったので『？』な事おきたかも知れませんが、筆者自身伝えたのか、伝えてないのか、伝わるのか、伝わらないのか、だんだん解らなくなってきました。

出来れば感想の方で何らかのコメントを頂けるとより読みやすく執筆するようになるかもしれませんが（現時点で自分設定全開でアレですが…）

どうぞよろしくお願いします。

その10

頼りない電灯が照らす夜道をパフェと二人で歩いていた。

辺りは、最近巷を騒がせている狼事件の所為か、殆ど人とすれ違わない。

若しかしなくてもこれがパフェの言っていた別の終焉神による出来事なのだろう。

横に並んで歩いているパフェを盗み見ると、妙に上機嫌で鼻歌を歌っていた。

鼻歌のくせに妙に綺麗な調べが出ている所がム力つく。

有利な状況でも無いのにこの余裕は何所からくるのだろうか。

そもそも、こいつが出した案からして欠陥だらけなのだが。

パフェが俺達に出した提案はこうだ。

まず、姉貴たちで出来うる限りの結界を我が家に張り、立て籠もる。次に俺とパフェが奇兵として外へ出て、天羽を探している終焉神を攻撃する。

上手い事ダメージを負わせられたら向こうは自然に撤退する。というものだ。

最早作戦とかそう言うレベルじゃない。

壁に描いた餅よりも酷い作戦だ。

だが、俺も姉貴もこの作戦を取らざる負えない理由があった。

一つは相手が天羽を見つけれない場合、強硬手段で街を破壊される可能性があると言う事。

魔術で陣や結界を作る時に一番重要なのはその場所だ。

竜脈や方角の要素を地盤ごと破壊されると、いかに強力な結界でも無効となってしまう。

また、縦しんば結界が壊れなかったとしても自分たちだけ安全な場所において、街の人を犠牲にするというやり方を姉貴が許容しない。逃げるに関しても同じ理由で、追ってこなければいいが、追ってこ

られた時被害が拡大するだけだから廃案となった。

二つ目はどれだけ精度の高い結界を張ろうとも突破される可能性がかなり高いと言う事だ。

これについてはパフェの情報だよりなので真偽が定かではないが、対峙した時のパフェの力から考えると、場所がバレれたら突破されと考えるといった方がいいだろう。

これにより、人気のない場所で完全に籠城すると言う選択肢も消えてしまった。

以上より姉貴たちは現在結界作り、俺は病み(?)上がりなのにパフェと奇兵として外へ繰り出されている訳だ。

奇兵と言えば聞こえはいいが、敵の場所が解らない以上殆ど囷だ。なんでもパフェ曰く終焉神は強い生き物ほど殺したくなるらしく、弱った自分は格好の餌になるらしい。

綱渡りどころか糸の上をバイクで走り抜ける位無謀な賭けをしている。

俺達が上手く深手を負わせれば街も天羽も助かって万々歳。

なのだが…なあ。

『「で、あんたがそいつに深手を負わせれる成功率はどのくらいなんだ?」

「主様が今の吾に深手を負わせれる数値と同じじゃ」

「いや、それは限りなく零じゃないか? あの時の俺ならともかく、今の俺は常人に毛が生えた程度だぞ?」

「くつく、ならばあの時の主様になるしかあるまい。主役が覚醒して悪役を倒す。王道パターンではないか、吾の時と同じように主様のカッコいいところを見せてくりゃれ?」
『

という風な回答が返ってきたのだ。

レベル1で魔王に挑まされる勇者の心境が解った。

どこの世界に覚醒だよりに戦う奴がいるのだろうか…。

もしいるなら言わせてくれ。

お前は馬鹿だ、と。

脳内会議全会一致で即否決された。
少なくとも今日中は絶対に無理だ。

一人納得する俺にパフェが振り返る。

「次も何もまだ中に入っとらんじゃろ」

「……………はあ」

勘弁してくれよと思いつながら、俺は門に向かう。

パフェのいる門前を超え、そして校舎口へと歩き出す。

「主様、まつ待ってくりやれ！」

後ろから悲痛な叫びが聞こえる。

振り向くとパフェがパントマイムをするように校門の前に張り付いていた。

まるでそこに見えない壁でもあるかのように。

当然俺は先程通れたわけだから、そんなものは無い。

また悪ふざけかと、溜息を吐く。

ふざけるなら帰るぞ、と言おうとして視界の違和感に言葉が止まる。
その違和感を確かめる様に俺とパフェの間に何度も視線を走らせる。

—— 無い。

さっきまでそこにある事が違和感だったそれが無い。

そう、黒く鮮明な影だった俺の影が殆ど無い。

時間が時間とは言え、光源があるのに影がほぼなくなるなんて。

いや、そもそもこの影は光源と関係なく俺とパフェの足を繋げていたはずだ。

そしてこの影は俺とパフェを結ぶ生命線だと言っていた。

即ちこれが薄くなると言う事は…………。

脳裏に影が無くなった瞬間人形の様に崩れ落ちる自分の様が浮かぶ。
ゆっくりと汗が額から流れていく。

「……………」

すぐさまパフェの許へ戻るとしよう。

焦っているのがばれない様、若干早歩き気味で校門を超えると磁石の様に俺とパフェの影が繋がった。

内心ほつとする。

「……どうなっているんだ？」

「誰かが無意味なほど強固な結界をこの学校に張っておる。しかもある一定のランク以上の神性の持ち主だけを通さないよう設定されておるみたいじゃ」

流石のコイツも焦ったのか、紅潮した顔を隠すようにパタパタと扇子を扇いでいる。

どうでもいいがその扇子、どこから出したのだろう。

まあ、本当にどうでもいい事なんだが。

「——何か通る手段は無いのか？」

あの概念心具の黒い布で壊すとか、何らかの方法ではれない様すり抜けるとか、色々とはある様な気がする。

しかしパフェは首を振る。

「本来の力じゃつたら或いは……、と言いたいところじゃが、恐らく無理じゃ。これを創ったものは最低三人以上、六人未満、それも吾と同格の力を持っておる。これに干渉するだけで彼奴らが飛んで来て、壊すどこじゃなくなるじゃろう。しかし、なぜこんな事をするのか解らん」

「どう言う事だ？」

「護りたいのなら隠せば良いのじゃ、宝なり、人なり、土地なり、化物なりの。しかしこれは隠すどころか、ここに大切なものがあるとアピールしておる様なものじゃ。一体何の意図があつてこんな事をしとるんじやろうな？」

にやーつと厭らしい笑みを浮かべると、パフェは俺の事を覗き込む。
「自慢してるだけじゃないのか？ それで失ったら本末転倒、ただの馬鹿だな」

「くつく、そうかもの。一つ言える事はこれを創ったのが吾らの追っている神で無い事じゃの」

「なぜ解る？」

「そんなの決まっておろう。彼奴が嫌われておるからじゃ」

侮蔑するようにパフエは鼻で笑う。

流石にその理由は冗談だろうが、パフエがそいつを嫌っている事は解った。

会った事はないはずなのだが、なぜか俺は少し同意していた。

「と言うのは冗談じゃ。3人集められないと言う時点であながち冗談でも無いが、彼奴がこんな事をする意味が無いのが本当の理由じやの。彼奴はちゃんと宝物庫を持っておる。それも難攻不落の要塞付きでな」

「難攻不落？ 何であんたがそんな事を知っているんだ。隠してあれば解らないんじゃないのか？」

「言ったじやろ？ 吾が彼奴を追ってここへ来たと。その道中、彼奴を追っているうちに辿り着いただけじゃ。二度とあんな所行きとくない」

機嫌が悪くなった猫の様にパフエは顔を背けると、再び校門を眺める。

余程嫌な目にあつたのだろうか、その目は若干疲れた色を醸し出していた。

「さて、今から中を調べるわけじゃが、注意点がいくつかある」

扇子を勢いよく閉じると、パフエは頭を切り替えたように真面目な顔でこちらを振り返る。

「言うか待て、調べる？」

「調べるって、その神と関係ないと踏んでるんじゃないのか？」

「だいたい、それ以前に入る手段は無いんだろ？」

「コイツ自身さつき口から無理と言う言葉を出している。」

そんな、メリットが解らず、デメリットだけが数えるほどある案件は合理的にも心情的にも遠慮願いたい。

「確かに、直接的な関係はないが、よく考えて見れば解るじやろ？ 彼奴は神器や宝具蒐集家じゃ、こんなあからさまに何かあると教えてる場所を見て、狙わんとは考えにくい。それどころか、彼奴はここが目的でこの世界に来た可能性だって考えられる。ならば奴

も同じように何らかの方法で侵入している可能性が高いはずじゃ」
やや、興奮気味に語るパフェを見て、俺は何か引っかけかりを覚える。
俺がその神なら宝があるかどうか解らない場所を、それも自分と同
格の神三体以上が守る場所を狙うだろうか？

確かにそれだけの神が守っている場所なのだ、それに見合うだけの
ものがある可能性は高い。

だが、それがそいつにとって見合うかどうかはまた別の話だ。
ならパフェはなぜその神がここを狙うと結構な確信を持っているの
だろうか。

ちらっとパフェを見る。

顔をほんのり赤らめながらちらちらと校舎の方を見ている。

まるでクラスの気になる異性を見つめる乙女の様だ。

……もしかしてこいつ、自分がそれを欲しいだけじゃないのだろ
うか。

「可能性の話をするのはいいが、入る手段はどうなんだ？ 本来の
力のあんたでも無理なんだろう？」

思考を一旦切り替え、一先ずパフェの様子を見る事にする。

「うむ、吾の力ではここに入る手段は無い。吾一人だけではの」

「俺一人だけ探らせるつもりか？ 確かに俺だけなら潜れると思う
が……」

と言つて俺は視線を自分の影に向ける。

これがある限り、俺は紐を結びつけられた飼い犬と同じだ。

ある一定の半径内しか進めない。

「安心せい、吾も主様を一人で行かせるつもりは無い。まあ、しか
し、主様一人で探らなければならないのは正しいがの。」

——要はじゃの、吾は一時的に主様の中で完全に眠る、その間吾は
一時的にじゃが主様と同体になる。時間は……そうじゃの、一時間
もあれば十分じゃろ？ それ以内に校内を探し、再びここへ戻って
くるのじゃ。吾は一時間後きっかりに眼が覚める様眠る。何か質問
はあるかや？」

有無を言わず俺が行くみたいなの雰囲気になっている。

俺は頭の中に校舎の地図を思い浮かべる。

二十分あれば一通り見て回れる。

まあ、確かに自分の学校の安全を確認するのは悪くない、か。

取り敢えず前向きに考える事にする。

「もし、一時間以内に出れなかった場合。どうなるか解るか？」

「瞬時に吾だけはじき出されるか、内から押しつぶされるか、最悪捕まり厄介な奴らが飛んでくるじゃろう」

どちらにせよそんな状況になるのは避けたいの、とパフエは言う。

それは俺もごめんだ。

だいたい十分前には出れるよう、余裕をもって回る事にしよう。

俺はパフエに了解、と頷く。

パフエは一瞬何か言いたそうな顔をしたが、結局何も言わず、ずるずると俺の足下へ溶けていった。

その11

仄かな月の光が教室に差し込む中、俺は一つ一つ教室を見て回る。
本来なら部活動や居残りやらでここまで閑散としている事は無いが、
最近脱走した狼の所為で下校時間が早められており、特別な理由が
無い限り残る事が出来ない。

下校時間を早めた所でどうこうなる問題なのかと言う疑問を飲み込み、
守衛に見つからない様、慎重に進んでいく。

無意識のうちに左の腰辺りにしまい込んだ物に手が伸びる。
家を出てすぐにパフエが俺に創ったものだ。

心象具現礼装。

本来は他人が使ってもあまり意味がないものらしいが、肉体を共用
している俺は多少なりとも扱えるらしい。

直接触れてもないのにソレの鼓動が伝わってくる。

心具と言うものは己の心を削って創り出すもの。

故に破壊されると精神にダメージが行き、それに連動している魂と
体にダメージがいくらしい。

あれからパフエに色々教えてもらったが、未だに色々と了承しか
ねない内容ばかりだ。

従来、神の強さはその身に刻まれた歴史の数で強さが決まる。

存在した年数ではなくその神が歴史に起こした出来事の数が多けれ
ば多いほど強い。

それは真偽問わず、如何に知られているかによって決定する。

つまり、その神が実際に起こした出来事で無くとも、その神が『し
た』と信じられれば、その神にそれが出来るだけの能力が備わるこ
ととなる。

勿論その神が元々持つ力も消えず、それと統合する形で残る。

が、それは言ってしまうえば元が雑霊だろうと、妖魔であろうと信仰
はそれを神として捻じ曲げるだけの力があるという事だ。

パフェはその人々の信仰の力こそが心具の基盤なのだろうと言っていた。

これが俺の知っている肉体を持たない、この世界の神の定義の様なものだ。

だが、パフェは、自分たちの事を信仰を糧としない肉体を持つ神だと表現した。

この際詳しい話は省いて簡単に説明してもらったが、なんでも肉体を持つ神の体は生きる歴史そのものらしい。

どうにもピンとこないのは今更なので、何も言つまり。

そこは置いといてだ。

まず一つわかった事。

こいつらはこの地上で用意できるいかなる手段でも死なないと言う事だ。

核兵器だろうと、対惑星兵器だろうと作動させるものが人間であれば、確かに脅威だがそいつを殺せば済む話だ。

妖魔であろうともそれは変わらない。

武器があれば殺せるのなら、人によって難易度が変わるだけで誰にでも戦えるチャンスはある。

パフェからすれば契約を結んでない状態の神など、人間と生物的にあまり変わらないとのことだ。

首を刎ねれば死ぬ奴もいるし、一般人が使う重火器なども一応喰らう、らしい。

ならばチャンスはあるのか、と言うと答えはNOだ。

ここで問題だったのはその体に内包する密度が違うとの事だった。

総量大体大陸並み。

大陸大の人間がもし存在可能だったとして一体誰が殺せると言うのか。

それが俺達と等身大で闊歩するのだ。

いや、ここで言いたいのはそう言う事じゃない。

こいつらは変な話だが『法則』を捻じ曲げずにこの密度で存在して

いる事だった。

なんて性質の悪さだろう。

仮に捕獲して無防備な状態に出来たとしても殺すのに核兵器が必要なのだ。

まず不可能だろう。

そして契約。

俺が結べたことから、そんな大したものではないと思っていたが、こっちはもつと最悪だった。

まず、身体能力の強化。

これの上昇率は個体差だそうで、契約に慣れればなれるほど元の体が強化されるので強い奴ほど上昇しないらしい。

次に法則の改竄。

前にも言ったと思うが世界の法則…俺の言葉で言うところ『現実』とは俺達すべてに掛かっているプログラムの様なものだ。

それぞれに此処まで出来る、此処まで出来ないなどの式が課されており、エラーを故意に起こせば修正され、上書きされてしまう。

俺は前に『現実』を霊能力者や魔術師は脱却している的な事を言っていたが、あれはただ人間としての上限を100とすると130や150程度出せるようにしただけだ。

飽くまで本質は人間であると言う所に変わりはない。

だが、こいつらは違う。

こいつらは設定されている上限を解除し、剩えほかのプログラムからの干渉をシャットアウトできると言うのだ。

己の記述についてはよく解らなかったが、大体こんな所だろう。

要するに契約を結ぶと概念心具による攻撃以外殆ど喰らわないに等しいらしい。

それに加えてパフェは…。

ちょうど二階を見て回り、端の踊り場に差し掛かった辺りで俺は思考を一時停止し、足を止める。

上の階から足音が聞こえる。

自然と腰に手を伸ばしそうになるのを無理やり堪える。
リズムは酔っぱらいの様に不規則で、だらしなく階段を下りている
のが解る。

—— 大丈夫だ、恐らく学校関連の誰かだろう。
まさかゾンビが下りてくる展開ではあるまい。

こう言う時、変な足音の方が逆に人間味がある。

しかし、不味いな、このまま1階まで下りていくならいいが、二階
で止まられると鉢合わせするしかない。

どうする、隠れるか？

それとも適当な言い訳でごまかすか？

教室のドアや窓があかないのは確認済みだ。

ならば無理に隠れようとせず、普通に忘れ物を取りに来るよう装う
のがベストか？

俺はゆっくり体を後退させると、何気ない風を装って歩き始める。

足音が踊り場辺りで止まる。

この階が目的か？

神経だけを踊り場へと集中させる。

すると突き当たりから、ひょこつと頭が出てくる。

「あゝっ！ 輪廻くん。こんな時間にどうしたの？ もしかして登
校時間間違った？ 残し念、学校は朝8時40分からだよ」

馴れ馴れしい口調とともに現れた女子は、よく見知った顔…と言う
か、歩く校内放送と呼び名の高い如月沙良紗だった。

どうやら酔っ払いの様に階段を下りていたのはこいつだったようだ。
心の内でそつと溜息を吐く。

「勝手にHRすつとばすなよ、だいたい何でこんな時間まで残って
いるんだ」

自分の事は棚に上げ、思わずそんな事を口にする。

「もち、忘れもん。あ、宿題とかじゃないよ？ ちょっとゲーム機
忘れてさあ。食料とかお菓子とか飲み物とか食べ物とか整えて、い
ざ徹夜でやろうって時に計画が破綻している事に気付いてすぐさま

リターンしたわけ」

でへへ、と如月は悪びれもせず笑いながら、恐らくうちの教室のであろう鍵をブンブン振りまわす。

誰だ、こんな奴に鍵貸した職員は…。

あと準備は一言で済んだだろ。

今までの緊張と打って変わって別の汗が出てくる。

拍子抜けもいいところだ。

「輪廻くんも忘れ物？　うちの教室目当てなら鍵はここにあるよ？

——はっ！それとももしや誰かのリコーダーに口づけを……」

『キヤー、お勧めは一番左の列の前から三番目』と訳の解らない事を叫びながらのた打ち回る馬鹿がいる。

だいたいリコーダーってネタ古いし誰が持って来てるんだ。

何処の小学生だ。

あと、この学校に音楽の授業は無いんだ？

「下らないこと言っていないでとっとと鍵を渡せ。それと、今この街は危ないんだから用事が済んだのなら早く帰れ」

突っ込むのは心の中だけにして、さっさと話を切り上げる事にする。だが、ここで鍵が手に入るのは大きい。

搜索範囲拡大と、職員室に行くのが一回で済むのだから。

非常事態に鍵を返せなくなって色々厄介な事になりそうなデメリツトもあるんだが。

まあ、それは如月の所為にすればいいか。

「なにになに？　心配してくれるの、なら家まで送ってやるくらい言わないと駄目だよ。それなら私へのフラグも十分たつのに」

口を尖らせ、鍵で頬を突いてくる如月に、いい加減付き合いきれなくなる。

どうして俺の周りにはこんな電波が飛んでいるような女子しかいないのだろうか。

無理やり鍵を奪うと、如月をほって教室に行く事にする。

フラグ云々抜きに送らないのはやや心残りだが、パフェと共同体になっっている今は、俺という方が危険は大きいだろう。

暫らく進んだところで振り返る。

なんやかんやで如月も追ってくる気配は無い。

いつもの冗談だったのだろう。

三階、廊下、自分のクラス。

緩んだ気を再び締めなおして、点検していく。

自分のクラスを点検する際、ふと左側の前から三番目の席が眼に入る。

如月の席だ。

机の中の乱雑さから一目でわかった。

明らかに学校に必要なモノが所狭しと詰め込まれている。

こいつ学校に何しに来ているんだろうか。

当然の疑問を感じつつ次の机に行こうとすると、スティックのりサイズの褐色色の小瓶が如月の机からはみ出しているのが見えた。

「なんだこれ？」

悪いと思いつつ手に取ってしまう。

中にあるよく解らない色の液体が揺れる。

どろり、どろりと言った感じで。

何だろう、物凄く危険なものに見える。

俺は其のバンドラの小瓶をそつと如月の机の中に戻した。

この件に関してこれ以上余計な詮索は止めようと心に誓う。

本当にコイツは何しに学校に来ているんだろう。

俺はそつと溜息をついた。

俺は職員室に鍵を返すいい訳のため、自分の机の中のプリントを適当に抜き出し、もと来た道を戻り始める。

何かを期待する訳ではないが、パフェと関連ありそうなものは見事に何も無い。

見回りの先生に会う訳でも守衛に見つかるわけでもなく、誰もいない校舎をただひたすら歩いているだけだ。

静かすぎる、と言えはそうなのだろうし、こんなものと言えはそんなような気もする。

そして今更ながらなんだが、探せと言われてルートや方法に頭がいくばかりに『何を』を訊くのを忘れていた。

神器や魔具、宝具と言っけれど、そんなものが見える場所に安置されているなら普段から気付くはずだ。

逆を言えば、普段はいかない場所や隠すスペースが作れる場所にある可能性の方が高いと言う訳だ。

あくまで隠されているものがその類の場合はな。別の視点で考えてみる。

パフェは見せびらかしていると言っていた。

そうだな、ピッキング不能な箱と考えるか。

それを道端に置くと仮定しよう。

それは強固で特定の人物ではどうあつても開けられない。

そんなものがある時俺なら何を入れる？

お金や貴重品の類を入れるだろうか？

自宅にそんな金庫を置くならありかも知れない。

しかしここでいくつかの疑問が出てくる。

まず、なぜ目のつく様な所にそんな物を置いているのか。

二つ目、箱と言う表現を使ったせいで少しおかしくなっているが、

なぜ普通の生き物は箱の中に入れるのか。

そして、三つ目、それに賛同する奴が最低二人もいるのかと言う事だ。

仲間内で集めた財宝なら箱を埋めるなり、して隠せばいい。

幾ら箱の強度に自信があろうとも中に入れるものがいるのだから、取られても文句は言えないだろう。

その条件下での協力者の存在。

パフェの言葉を信じるならパフェと同じような神がこの学校に三人も関係している事になる。

先程の会話でそいつらはこの校舎内に入れる可能性が高い事をパフ

エは口になっている。

それぞれがこの箱に入れる場合、内容物は一つ、或いは共通で保管する物体である可能性が高い。

なぜなら別々の物を入れると横取りされる危険があるからだ。

とはいえ、有り得ないわけでもない。

信頼における者同士なら十分辻褄が合う、か？

少し別の視点に移ろう。

なぜそいつらはここに結界を張ったのか。

ただの気まぐれと言われれば、そこで終了だが、少し考えてみる。

例えばそう、ここでなければいけない理由があるでしょう。

校舎にしか隠せないものとはなんだろうか。

いや、何も隠すだけが能じゃない、保護すると言う選択肢もあり得るはずだ。

それなら生徒が出入りできるのも考えられる。

生徒を保護する……、いや、環境を保護か。

この学校と言う環境を護っているのなら、生徒が出入りできるのも理由がつく。

学校と言う環境にとってパフェは異物と判断され、排除されたと見るべきか。

髪の毛をがしと掻きながら思考を中断し、立ち止まる。

本音を言うパフェから聞いた時から何となくこれじゃないかと思う推論がある。

この結界の条件。

1、一定以上の能力を持つ者の入場を拒否。

2、学生やそれらの関係者の入場を許可。

3、3人以上6人未満で作られている。

4、触れるまでその存在に気付く事はない。

4の条件はパフェが学校を見て普通だと言っていた事と、壁にぶつかるまで何も言わなかった事からの推論だ。

パフェはあたかも一面ガラス張りの部屋に宝を置いているかのごと

く喋っていたが、4の条件を見る限り最低限は隠している事が解る。最低限なのは恐らく2の為だろう。

ではなぜそこまでして2を許可するのか、学校でこの条件を適用するのだから生徒が必要なのだろう。

もしくはさっき考えた通り、学校と言う環境が重要なのかだ。

しかし、外に出れば結界の保護から外れるように、生徒を護っている、とは違うみたいだ。

学校と言う土地を護るのであれば、それでいいが、環境を護るのであれば少しおかしい気もする。

例えば外でここを狙うものが待ち受けており、出てくる生徒を皆殺しにするでしょう。

そうすると学校はどうなるか？

生徒が次々と殺される学校が学校として機能するだろうか。

それとも新しく生徒を補充すれば有効となるだろうか。

そういう人寄せの魔術が掛かっているのならありだ。

パフェが言っていたようにいかれた魔術師が夜な夜な生徒を実験材料に遊んでいるのだろう。

だが、恐らく違うはずだ。

そこまでして得るメリットが少なすぎる。

そんな事をする位なら完全に結界を隠し、攫ってくるか、不可逆性の結界を作ればいい。

人寄せの魔術があるならなおさらだ。

大量に材料が必要にしたって、別に学校じゃなくてもマンションや住宅地でいいはずだ。

そもそもこんな変な結界を用意する意味がない。

実験用のアリーナに犬小屋を用意するかのような不自然さだ。

ならば土地を護っているだけなのだろうか。

むしろ俺は逆にこう考えたい。

蟻の巣に犬が混じっているから犬小屋を建てた。

そんな気がしてならない。

化物が学校に通いたいと言ったから、それを外に逃がさない為に首輪をつけた。

つまりこれは檻なんじゃないかと思う訳だ。

いや、化物じゃなくてもいい、何処かのお姫様でもいい。

命を狙われているが、学校に通わせたい、とか。

案外この結界を作った奴らが学園関係者で学校生活を壊されたくない、とか。

そんな存在がいるかどうかはパフェに訊かないと解らないが。

「ふう……」

思案しながら適当に見回っていたせい、いつの間にか我が部室の前に着いていた。

オカルト研究部だか占い部だかミステリーサークルだが忘れたが、うちの先輩が立ち上げたいろんな意味でイタイ部だ。

よくもまあ部室が割り振られたなと思う。

部室の鍵を持って来てないので中は確認できないのだが、まあダメもとで扉に手を掛けて引いてみる。

あっ、開いた。

と意識の内で呟いていると同時に自分の体感時間が引き延ばされ始める。

思考は未だ認識できていないが、眼球めがけて何かが迫っているのを視界に収める。

思考はそのまま扉の開閉に向いたまま、反射だけで首が傾き直撃を避ける。

通過していく銀の鎖の付いたナイフを流れ見ながら思考の処理はまだ追いつかない。

迫る第二撃を察知し、体は横に飛ぶ。

それと同時にナイフを投げた奴が俺のいた地点を手刀で薙ぎ払った。流れる様な追撃。

もし防ぐなり喰らうなりしていたら完全に入っていただろう。スリった？

——いや違う。

無駄な思考をシャットダウンし、目の前の相手に思考処理を集中させる。

初撃に投擲されたナイフが鎖によってしなり、鞭のように迫ってくる。

空中により回避不能。

先に右腕を伸ばし自ら当りに行く事でダメージ軽減。
手に幾らかのダメージがあるが戦闘続行可能。

鎖を握りしめ、手繰り寄せて攻めに転じようとする。

手応えが……ない？

気付いた時にはもう遅かった。

相手は始めから俺が鎖を手繰る事までを読んでいた。
手繰ると同時に手を離し、俺へ迫る。

俺は全力で手繰り、空を切った事により完全にバランスが崩れていく。

何とか体を動かそうとするが、間に合わない。

衝撃に備えて体を固くすると同時に相手が止まる。

「あ？ カノンか？」

何処かで聞いた事ある声が聞こえる。

顔を上げ、よく見ると知っている顔と言うか、部員の一人だ。

というか、赤城だ。

「っと、……殺す気か」

不自然な体制から体を痛めない様着地すると、辺りに腰を下ろす。

どっと汗が噴き出てくる。

何で部室のドアを開けるだけでこんな目に合わなければならぬのだろう。

「なんだよ、気配消してドア開けようとしてる奴がいるからてつきり俺を殺りに来たのかと勘違いしたじゃねーか」

先程手放したシルバーチェーンを回収すると、赤城は俺の横に座り込む。

部室がすぐ傍にあるんだからそこで話せばいいのと思うが、もう腰を上げる気にならなかった。

というか、その全身の銀細工、護身用だったのか。

真剣にこいつが校則違反にならないか生徒指導に尋ねてみたくなかった。

「んで？ どうしたんだ今日は。お前休みだったろ、何でわざわざ今部室に来るんだ？」

「忘れ物取りに来たついでにダメもとで部室覗いたら襲われた」

咄嗟に出たいいい訳にしては上出来な部類だと思う。

実際嘘は言っていない。

「そいつは悪かったな。あゝ、実はな昨日の事なんだが、コンビニ前に屯っている奴らを少し撫でつけちまって、今日報復にやってくるんじゃないかとびくびくしてたわけだ」

そう言いながら赤城は指をぽきぽき鳴らす。

その眼は瞳孔が開いてぎらつき、完全に野獣の眼になっていた。

こいつ…なんか違うぞ、絶対こいつ違うものにびびっている。

俺じゃ無くても十人が十人そう思うだろ。

「撫でつけ？ びくびく？」

俺は胡散臭そうに赤城を見る。

実際胡散臭いし。

「詳しく言つとだな、昨日の夕方、急にインスタント食品が食いたなくなった、それもいつも非常食として常備してある人気メニューじやなしに、期間限定とか、地方限定とか、新商品とか、そういう未知の奴が食いたくなったんだ。あるだろ、そういう時？ あ？ ない？ いや俺はあるんだよ。でだ、原付に乗って近くの店へ行くわけだ。選択肢は二つ、2、3分で行けるコンビニと7分かかかる代わりに品ぞろえのいいスーパー。どっちを選ぶか解るだろ？ 俺はすぐインスタント食品が食いたいんだ。当然コンビニをチョイスしたわけだが、目的のコンビニの前には肥溜みてえな連中がうじゃうじゃといたわけだ。まだ日も落ちてねえのに湧いてきやがって糞ども

がと思ったが、今騒ぎを起こせばインスタント食品が買えなくなる
と思い、眼を合わせずにコンビ二へ入るわけだ。中には店員以外誰
も居ず、俺は晴れやかな気持ちでインスタント食品コーナーへ向か
った。中に客がいないのは外の連中のおかげかもしれないとちよっ
と思ったが、最早そんな事はどうでもいい。見るとそこにはうつち
やり味とさば折り味のカップラーメンが置いてあったんだ。なんだ、
うつちやりって…決まり缶ジュースのあれか、螺旋缶ジュースの
あれなのか？ と訳のわからない事を思いつつもこれは買うしかな
いと思い、二つをそれぞれ一つづつ買う訳だ。この時点で俺のボル
テージはマックスでフルスロットルに解放されてる訳だ。そんな俺
を肥溜の連中が『あつ、あいつうつちやり味のカップラーメン買っ
てきましたよ。ぷっ（笑）』って言うって爆笑しやがった。ま、俺も
おかしなもん買ってるって自覚してるからな、この程度の暴言許して
やろうと思った訳だ。ところがだな、奴ら何を思ったのか、俺へ向
かって唾吐きやがった。あろうことかそれが俺のカップめんにかか
りやがった。その瞬間一番近くにいた奴の顔面を減り込むくらい…
いや実際にり込んだな…、蹴飛ばし、近くにいた奴らを俺の腕が奴
らの血で染まるまで殴り始めたわけだ。当然数で勝ってるやつらは
俺を後ろから羽交い絞めにしたり、蹴りかかってくる奴らもいたが、
どてっばらにナイフぶっ刺してやったら大人しくなった。んで、気
がつくと辺りはそいつらの唾やら血やら吐瀉物やらでどろどろにな
ってて、俺のカップラーメンも奴らに踏まれてぐちゃぐちゃになっ
てたわけだ。仕方ねえからそいつらの財布から金とつてもう一個買
いに行こうかと思ったが、コンビ二の店長が何処かに電話かけてん
だよ。これはやべえと思い、急いで原チャリに乗り、トンズラした
と言う訳だ。ん？ どうしたカノン」

長い、と言うかこの人真剣にやばい。

どれだけインスタント食品好きなんだよこいつ…。

インスタント食品が原因で流血沙汰なんて聞いた事無いぞ。

なんでこんな奴が普通に学校通えているのか甚だ不思議だ。

「……………いや、何でも無い。取り敢えずお前からインスタント食品をもらうのは未来永劫しないことを誓う」

「なんだそりゃ。まあ、という訳で俺は昨日カップラーメンを食い損ねた訳だ。だからな」

だから？

猛烈にいやな予感がする。

「今度そいつらにあつたら真剣で殺さないかびくびくしてる訳だ」
何言ってるんだこの人。

血走った眼でこっち見て何言っちゃってるんだ。

俺は自分でもどうやったか解らない技術で座ったまま後退する。
それくらい今のコイツから離れたかった。

「……取り敢えず、俺はもう行くから。これ以上変な事件は起こすなよ」

俺は立ち上がり、汚れてもない裾を叩くと、赤城に背を向ける。

「はっ！ 起こすかバーカ」

赤城も立ち上がると俺とは逆方向に歩きだす。

正直に言おう、俺は絶対無理だと言う確信がある。

こんな奴が問題起こさないなんてありえない。

今後友人としての身の振り方に考えた方がいいだろう。

「架音」

数歩歩いたところで赤城は振り向き、俺を呼ぶ。

反射的に俺は立ち止まった。

「———気をつけるよ」

聞きとれるか聞き取れないかギリギリの声が俺の耳に届く。

すぐさま振りむき、意味を尋ねようとするが、既にそこには赤城はいなかった。

「どう言う意味だよ、それ……」

俺の呟きは人気のない校舎に吸収されていった。

その11（後書き）

久しぶりに夜行と沙良紗が出てきました。

え？新キャラと思った方は第一章その1へどうぞ。

さて、どうでしたでしょうかその11・

この世界での神の定義などちょこちょこ設定を出していきたいのですが、なかなかうまくいきません（ぐだぐだになるので）。

そろそろ戦闘シーンに行ける…はず。

………たぶん。

その12

あらかた校舎の見回りを終えた俺は、踵を返し職員室へと向かう。予想通り何も見つからなかった。

まあ、隠し扉や幻術などを見破る気も技術も無いので当然と言えば当然なのだが。

ふと窓から中庭にある銅像に目が付く。

うちの学校のデザインの制服を着た少女が建っている。

何でも平和を祈願した像で、ご丁寧にネームプレートに『平和を願う像』とある。

この学校は爆心地か何かだよ。

と、独り語ちながら窓辺により、窓を開ける。

像も像で平和を願う割に少女は苦々しい表情をして俯いている。

そう言えば如月辺りから聞いたことがある。

うちの学園の七不思議のひとつで、この像は世界が平和でないから俯いてるそうだ。

世界が平和になれば笑顔になるらしい。

残り6つは、まあ、ありきたりな奴なので割愛させてもらっ。

「しかし、こうしてみるとあれだな。なぜか親近感が湧くと思ったら、うちの神剣様に似てるんだな」

窓から半ば身を乗り出し平和の像を眺める。

髪の毛はちょうど同じくらいの長さだし、何より苦々しい表情具合が何とも似ている。

「もしかしたらこれが隠している物だったりしてな」
はんっ、と鼻で笑い考えを一蹴する。

こんな不愛想な像、何の価値もありはしない。

「おい、そこで何をしている」

突然、隣から声が掛かる。

窓から一瞬逃げようかと考えるが、もう遅い。

しびしび体を起こし声のした方を見ると、うちの担任が立っていた。
「あゝ、ちよつと明日の授業に必要な物を取りに来て、職員室へ鍵を返す途中で黄昏てただけです」

手に持ったプリントと鍵をひらひらさせながら、嘘ではない事を訴える。

担任は訝しむようにジロジロと俺を見る。

昔から教師に良いイメージをもたれた記憶がない。

この担任も例に洩れずそうだ。

「ふん、まあいい。ところで輪廻、お前薬師寺と知り合いらしいな？」

薬師寺？

ああ、先輩の事が。

久しぶりに先輩の名字を聞いたものだから対応に僅かな間が空く。
その不自然な間でますます担任が俺を疑っている度合いが増す。

「——ええ、一応部活の先輩後輩という関係ですけど、それがどうかしましたか？」

「最近生徒指導室に彼女を深夜に目撃したと言う情報が幾つも届いている。何か知らないか？」

じとつと被害妄想じゃなく明らかに悪意の籠った眼で睨まれる。
なにが何か知らないか、だ。

そう言うのは本人がクラスメートに聞けばいい話だ。

仮に俺が話したところで信用する気なんかさらさなくせに。

「さあ？ 俺は別に先輩の家族じゃありませんから解りかねます。

そう言うのは俺なんかじゃなくご家族の方にご連絡なさった方がよろしいのではないだろうか？」

本当は知っている、あの人が夜な夜な本業バイトをしている事に。

だが、それを俺にどう説明しろというのだ。

それは妖魔と戦っているからです、とでも言えいいのか？

ふざけるなと怒鳴られるか、精神疾患と判断されるかの二つに一つだろう。

「ああ、そうだな。彼女の親族には当然連絡をする。しかし私はてつきりお前がまた彼女を連れだしているんじゃないかと思ってな」
思わず舌打ちしそうになる。

姉貴の手伝いの関係上俺は深夜に徘徊する事は少ない。

本来なら本家から学校へ事情説明等があるのだが、俺は今勘当なのでそういう後ろ盾すらない。

担任が先輩の事を直接注意出来ないのはそう言う為だ。

要するに八つ当たりがしたいだけか。

下らない。

「何の事が解りかねます。俺と彼女が一緒にいた目撃情報でもあったんでしょうか？」

「……………いや、それはなかったが」

隠そうともせずに担任は残念そうな顔をする。

これ以上コイツと話しをしても不愉快でしかない。

とつと切り上げよう。

「話しはそれだけですか？　俺は鍵を職員室へ返さなければいけないのでこれで…」

と、担任の右脇を通り抜けようとする。

「待て、鍵は私が返しておこう。うん？　輪廻、お前その左手どうした」

背筋が一瞬で凍りつく。

今何て言った？

左手…だと。

こいつは何を言ってるんだ。

俺は家を出る前にこの左手が見かけ上一切普通の手と違和感がないのを確認して出たはずだ。

左手に素早く視線を送る。

赤城と揉めた時に何か汚れてもついた可能性も瞬時に考慮する。

瞬き程の間に己の手を確認する。

汚れなどの特徴は見受けられない。

「ふん、光の加減による見間違いだったようだ。忘れてくれ」

俺から鍵をひったくると担任はすたすた歩いて行ってしまった。

本当に見間違いだったのだろうか。

もし見間違いなどではなく俺の反応を見てこの左手が異質なものと判断したのなら。

もし奴がこの結界を張った奴の一員か俺達が追っている終焉神だとしたら。

これが致命的なミスにつながる可能性がある。

可能性は低いだろうが、考慮したほうがいい。

いや、今俺の一存だけで考えても仕方がない。

パフェの考えを聞くために取り敢えず学校から出る事にしよう。

俺は監視されていても不自然に見えない様学校を出た。

十

「くつく、ビンゴじゃ。主様よ」

俺の校内での出来事を聞くとパフェは愉快に笑う。

学校を出てパフェとの約束の時間から10分ほど余っていた俺は取り敢えず学校から直接見えない位置まで避難した。

あまり自信はないが尾行もされていないはずだ。

「どう言う事だ？」

「吾は主様と一体になる際に左手だけ僅かに力を宿して眠ったのじゃ。つまりじゃ、もし吾の神気を知る者なら僅かばかりの違和感を感じ反応する訳じゃ。もちろん微弱過ぎて警戒する気すら起きないレベルじゃから安心するが良い」

「……………」

「主様が校内であつたと言う三人は怪しいのう。特に最後の担任とやらは殆ど黒じゃ。残りの二人はまあ、灰色つてところじゃの」

ああ、そう言う事が。

今更ながら納得する。

始めから俺を囷として校内に入れさせたな、この野郎。
こいつ、いや俺達の目的は始めから敵さんを釣る事だ。

なので説明がないのは当然と言えば当然だ。
始めから囿として中に入っていれば会う奴会う奴俺は警戒したらう。

百歩譲ってそこはいいとしよう。

問題なのはこいつが校内に入る前に宝があるなど興味がある素振りを散々しといて結局演技だったってことだ。

……………。

ん？

自分で言ってて少し矛盾している事に気付く。

なんだ？

俺は納得してたはずだ。

なのになんでこんなに胸がム力つくのだろう。

パフェの手の上で踊らされていたからだろうか。

「——むきゅ！」

俺は無言でパフェの頭をチョップする。

突然の出来事にパフェは目を白黒させ、痛くも無いであろう頭を抱えた。

これで少しは胸のム力つきが晴れると思ったが、どうやらそういう問題じゃないらしい。

「囿で潜入させるなら始めからそう言え」

取り敢えず本音と八つ当たりのいい訳が混同する台詞でも吐いてみる。

己の未熟さゆえ頼られないのは仕方ないとしてもだ。

知らないうちに命の危険に晒されて黙っていられるはずがない。

勿論その場ではあれが正しかったのかもしれないが、その後文句を言う位は許されるはずだ。

チョップしたのはただの憂さ晴らしに近いが…。

「いや、出来れば隠された財宝も欲しかったり……むきゅ！」

再びチョップするとパフェの頭はゴム鞠の様に凹んだ。

痛くも無いくせに目尻に涙を浮かべてこっちを睨むパフェ。

これは冗談……だよな？

だんだん演技と思えた校門でのやり取りも怪しくなってくる。

そんな雰囲気の所為だろうか。

俺はすっかり自分でも気付かない振りをしていた本音を漏らしてしまったのは。

「取り敢えず、俺達は運命共同体なんだろう？　なら、命をかける局面でさっきの様な事はなしにしよう。――一応俺はあんたの相方のつもりなんだから」

自分で言ってて恥ずかしくなり、最後の一文はそっぽを向きぼそぼそしゃべる形になってしまう。

ああ、失態だ。

数秒前をやり直したい。

横目でちらりと見ると、獲物を見つけた肉食獣の様な厭らしい笑みでパフェはこっちを見ていた。

「そうか、そうかあ、主様は吾に騙されたと思って悲しかったと、もっと頼ってほしかったかと」

「主様それは勘違いじゃ。吾は主様を騙してなどおらぬ。何故ならわざわざそこで言葉を切り、俺に抱きつくパフェ。

何となく展開が読めた。

「吾は主様を愛しているからの。アレくらい何も言わなくても主様には脅威足りえんと信じておるからじゃ」

（キリッ、とか付きそんな言葉を俺の耳元で囁く。

カッコいい事を言ってるつもりかも知れないが、結構ハチャメチャな理論だ。

声の質からパフェは恐らくは満面の笑みで笑っている事だろう。

その声を聞いているとどうでもよくなってきた。

諦めとも自嘲ともとれる溜息を吐く。

我ながら振り回されっぱなしで情けなく思う。

「愛って言えば何でも許されると思ってるだろ？」

「当然じゃ、愛とは未知で千差万別で不定形じゃ。じゃから『愛ゆ

えに』とか、『愛なら仕方ない』などという言葉で全て解決する事が出来るものじゃ」

ここへきて愛万能説を唱え始めるパフエ。

その言う『愛』は人を傷付け、拳句殺している所しか見た事がない。今、『愛などいらぬ』とかいって拒否すれば間違いなく殺されるだろうな。

などと考えフツと微笑を浮かべる。

無論試さないが。

「ところで主様よ」

「……どうした？」

「主様は友人が多い方かや？」

「……… 傲慢じゃないが2桁切る」

「じゃあ、これは主様の友人希望者かや？」

パフエはぐるりと辺りを見渡す。

「違うな、恐らくは俺の馬鹿野郎の友人希望者だ」

俺もうつざりした表情で辺りを見渡す。

体中に生傷の絶えない連中がぞろぞろと俺達の周りを囲んでいた。数にして数十人。

どいつもこいつもへらへら笑っていて気持ち悪いことこの上ない。赤城が最後に言った言葉はこう言う意味か。

本当、なんで俺はあいつと友人やってるのだろうか。

心底うんざりする。

「ねえ、君。中葉学園の生徒？」

金髪でピアスで耳を穴だらけにしている如何にも不良って感じの男が俺の制服を見ながら話しかけてくる。

口から洩れる煙草の臭いが臭くて吐き気がする。

「まあ、そうですけど」

「へー、じゃあ赤城夜行って知ってる？俺らそいつに用あるから、ちよっと呼んできてほしいんだけど」

俺が敬語使った事に優位性を見出したのか、接近しつつ高圧的な態

度で見下してくる。

俺はこいつらの馬鹿さ加減より赤城の傍迷惑さ加減で頭を抱えなくなった。

よりにもよって学校で籠城するなよ、俺以外の奴らがこいつらに捕まったらどうするんだ。

「さあ？ クラスか学年が違うから知らないですね」

「あ？ 君が知っていると知らないとか関係ないんだけど？ 呼んで来いっつてるのわからない？」

つかつか近づいてきて胸倉を掴み上げる不良A。

口臭が直に伝わってきてますます気分が悪くなる。

「あゝ、はいはい、呼んでくればいいんですね？」

不良Aの手を振りほどくと、パフェを連れてこの場を去ろうとする。正直このままトズラしてもいいが、ほかの学生の迷惑になるので赤城を呼んでかたづけさせよう。

あの赤城夜行が万に一つもこいつらに負ける事など無いのだから。

「おい、待てよ」

まだ何かあるのかと思い、振り返るとにやにや笑いに変わった不良Aがパフェの手を掴んでいた。

パフェは一瞬キョトンとするが、すぐにその腕を振り払い、俺の後ろへと隠れる。

俺はパフェがこいつらを殺してしまうのではないかと思ったが、杞憂だったようだ。

「——何か？」

小動物を彷彿させる仕草で、俺の袖をギュツと掴むパフェを視界の隅に収めながら不良Aと向き直る。

「その彼女は置きなよ。君に逃げられたら俺ら困るでしょ、心配しなくてもいいよ、ただの保険だから何もしないって」

下卑た笑いを浮かべながら周りの奴らも同調する。

ちよつと意外だ。

逃げられるかもしれない、と考えられる脳はあるのか。

或いは下半身直結の本能故にかもしれない。

メモっておこう。

それにしても、何だ？

俺がお使いに行ってる間に告白でもするのか？

終焉神相手に？

思わずお好きにどうぞと出かかった声をそのまま飲み込む。

一瞬でもその光景を想像してしまうととてもじゃないがそんな事は言えなかった。

嫉妬心とかじゃなく流石に死傷沙汰にしなければならないからだ。

「主様よ、吾は主様と離れとうない」

パフェを再び見ると上目遣いでこちらを見上げていた。

さつきから大人しくしていると思ったら、無力な少女を演じているつものようだ。

それを見た周りの奴らがますます盛り上がる。

下手に反抗するより煽ってるこいつは間違いなく確信犯だろう。

前言撤回、やっぱり置いていきたい。

「いいからさあ、とっとと彼女置いて行ってきたよ。君もさあ、彼女の前でぼこぼこにされたくないでしょ？ その彼女も彼氏がぼこぼこにされるのみたい？ 見たくないで、しょッ！」

不良Aが喋りながら近づいてくるとそのまま俺に膝蹴りを入れた。

つもりなんだろうが、正直全然痛くない。

まあ、所詮はそこのチンピラ以下なので当然と言えば当然なんだが、友人関係で明らかにおかしい奴らがいるので感覚がおかしくなっってしまったようだ。

「もう一発食らいたいのか？ とっとと行けよ」

反撃も何も俺がしない事をいい事にますます調子付く。

パフェは俺の後ろに隠れて傍観（野次）を決めるみたいだし、この際こいつらでパフェからもらった心具を実験してもいいんじゃないかと思ってきた。

そんな時だった。

「ストップ、ストップ、ストップ……ッ！」

そこへ颯爽と小柄な少年が飛び込んでくる。

お互い言葉があるんだから話し合いで解決しようぜ」

色合いで無く綺麗なブロードヘア。

「げっ」

パフエが何に驚いたか気にはなるが、今は乱入者の方が重要だ。

よりもよってこいつに会うとは思わなかった。

KY、Sが一人、創地夢渡と会う事になるとは。

その13

「何なの君？ 他人が首突っ込まないでくれる？」

明らかに邪魔されて苛ついている様子の不良A。

今にも殴りかかりそうな勢いで小柄な夢渡の胸倉を掴み上げる。

「他人じゃねーぞ、カノンは俺の友達だ。な？！」

そんな状態になりながらも、にかっと思持ちいい笑顔をしながら俺に同意を求めてくる夢渡。

そしてさらっと個人情報流しやがった。

これで以後俺もこいつらに付きまとわれたらどうしてくれるんだ。ますます教師の評価が悪くなる。

「いや、人違いです」

「ひでえっ！！」

俺が真顔ですぐさま否定すると明らかに肩を落とし落ち込んだ。

根は悪い奴どころかいいい奴なんだが、本当にこう言う空気読めない所は何とかしてほしい。

「なあ、嘘だと言ってくれよカノン。この前飯奢ってやったじゃんか。えーと、あれはいつだったっけ？ 確か…」

と、本人すら何時かも解らない話しを持ち出してくる。

ほんと、空気読んでくれ。

「何、無視してんだよ、てめえ！！」

遂にキレたのか、夢渡を掴んだまま、不良Aは振りかぶる。

「っ！！」

そしてそのまま不良の右手が上の空だった夢渡の顔面に綺麗に入る。思わず左手が反射的に動くが、パフェに止められる。

視線をパフェへと走らせると小さく首を振った。

こんな奴らに使うなという事が。

それならそれで構わない。

右手一本だろうが脚一本だろうが、こいつらを這い蹲らせるのには

十分すぎるほどのスペックはある。

「痛つてえ…。なんだよ、なんでいきなり殴るんだよ。話し合いで解決しようって言うてるじゃないか」

「あ？ ごちゃごちゃウルせえんだよ。話し合いで許してほしかったら土下座しながら金でも出せよ」

無抵抗な振りしてなあなあで済ませようと思ったが、これ以上は流石に限界だ。

ここで友人を見捨てられるほど、人間皮肉れてはいない。

俺は足を踏み出した。

いや正確には踏み出そうとした。

言葉では理解できないが、何らかの違和感を感じ取って俺の足は自然に止まっていた。

まるで地震の前触れのような、ごく僅かな違和感。

夢渡を知らない人間ならば声を小さくしただけに感じる程度の違和感。

感じたのは恐怖とかそういう感情じゃない。

言うならばそう、諦観と言うべきだろうか。

夢渡から先程とは違う、小さいがはっきりと聞こえる声が出る。

「――嫌だ」

それは明確な拒否の意思表示。

それ以上踏み込む事を許さない境界線。

「……なんだって？」

夢渡の妙な雰囲気には一切気付かず、不良は不機嫌そうに唾を吐き捨てる。

「そんな事をする必要はないと言ったんだ、加害者のためになぜ被害者が謝る必要がある。俺がそんな事すれば被害者はみんな加害者に泣き寝入りしなければならんだろ？」

顔つきが鋭くなるとか、怒りの形相をしているとか、そんな素振りを一切見せず、夢渡は真面目な表情で不良Aに問いかける。

能面の様に薄っぺらい表情ではなく、夢渡は本当に真面目に不良A

に尋ねているのだ。

何処かデジャブを感じる。

この場合普通は憤慨するなり恐怖するなりする。

普通とは然る時然る反応をするから普通なのであって、どんな時でも通常と同じ反応をする奴を普通とは言わない。

今の夢渡には姉貴やパフエに通ずる異常性を感じる。

「何気取ってんの？ 恐怖で電波でも受診したか？ 弱い奴が何言っても同じなんだよっ！！」

何所から取り出したのか、不良Aは木刀の様な物を取り出すと、思いつき振りかぶった。

本当なら駆け出して不良を蹴り飛ばすべきだろうが、俺はそんな気分になれなかった。

何故ならば、どうあっても今の夢渡がそれを喰らうヴィジョンが見えなかったからだ。

昔、と言ってもそんな何年も前の事じゃないが、赤城が言っていた事を思い出す。

『お前、喧嘩に強い奴ってどんな奴か知ってるか？ 腕つぶしが強いとか、タフとか、がたいがいいとか、武道経験者とかそういう事を言いたいんじゃない。そーいうのは前提条件だ、貧弱な奴が喧嘩するんじゃないって話だ。じゃあ、どーいうのが強いかって？ 心が強い奴って言やあ熱い青春話になるんだが、生憎そうじゃねえ。むしろ逆だ、心が冷てえ奴の強い。喧嘩にルールがない以上どんな手段でも相手を倒せばいいからな。お前も喧嘩するなら最悪殺さなきゃ何してもいい覚悟で行きやいい、っとこれはお前に言うべき言葉じゃないな、お前は極限まで平気で痛めつけれそうなタイプだからな。まあ、要するに手段を選ばないって事だが、勘違いしてほしくないのが、それは単に相手の人体を無差別に破壊するって意味だけじゃねえって事だ。例えばだが、そこらに沸いてるチンピラどもに囲まれたとする。人間ってのはどれだけ個が強くて、耐久力が変わらない時点で数に負ける生き物なんだよ。囲まれて、改造

エアガンなんかで遠くからぼこやられたら、俺だってたまらねえ。だからまず、喧嘩するときは負ける場所で戦わねえ。囲まれたとしてもいったん引いてタイマン状態に持ち込んでから確実に殺して冷静さがいる』

俺はなんのリアクションもせずにラジオの様に右から左へ聞き流していた。

俺が当たり前だと思っている事を思っていない事を前提で話してくるのだ。

これ程煩わしい事はないだろう。

『とまあ、これが賢いやり方だと、ここに来る前は考えてたわけだ。今でもそっちの方が賢いとは思ってるがな』

俺の沈黙は意に介さないのか、そのまま話を続ける赤城。

『でもな、本当に強え奴はそんな事しねえんだよ。本当の強者ってのはな、いつでも、どこでも、どんな条件でも勝者なんだよ。それ以外は有象無象の弱者でしかねえんだ。ってな暴論をこっちに來た時間聞いたんだよ。なあ、誰に聞いたと思う？』

『……………』

俺は無言のまま背後で如月と馬鹿騒ぎしている紅天に視線を向ける。こんな変な事を云うのは十中八九あいつだろう。

『よく解ってんなあ、流石というべきか、何と言つべきか。まあ、その通り紅の奴が言い出した事だ』

話しは終わりかと、見返す。

『まあそう急かすな、紅はあれで文武両道、容姿端麗の完璧超人の様な女だ。そこらの男なら腕相撲で勝つ事すら出来ないだろうよ。なら、この紅の言葉は自分を指した言葉か？ いや違うな、それなら強者は自分の様な人間だと言えがいい。あいつならそれくらい言うだろう？ だからな、これはあいつがそいつに完全敗北したからこそ出る言葉なんだよ。一体誰に負けたんだろうなあ』

にやにや笑いながら赤城はその先へ視線を送る。
俺もつられ視線を送る。

はつきりとその時の光景が脳裏に浮かぶ。

追憶と現実の視線の先の人物が重なる。

一切音も立てずに木刀が夢渡の手に吸い込まれる様収まる。

「はあ、なんで話し合いで解決できないんだろうな。」

俺、弱い者いじめは嫌いなんだけど」

溜息と共に夢渡の拳が不良の腹に入っていた。

そのまま崩れ落ちる不良A。

ああ、今思い出した。

普段馬鹿なことばかりやってそんな素振りを一切見せないが、そう言えばこいつ。

赤城や紅天より色んな意味で強いんだった。

反応が遅れて啞然としている不良たちを見てちよいちよいと手招きをする夢渡。

ご丁寧に木刀まで放り投げて丸腰をアピールしての挑発だ。

安い挑発に乗せられ、襲いかかってくる不良たち。

夢渡は構えもせずにもう然とそれを見送っている。

先手を譲ってやるとでも言っているかのように。

不良たちの先頭にいた奴が夢渡を殴れる距離まで接近した事によって、その勢いのまま振りかぶる。

その瞬間事が切れた様にそいつは走った勢いのまま夢渡の横を滑って行った。

少なくとも俺とパフェ以外はそう見えただろう。

あまりにも夢渡の手刀と足運びが鮮やかすぎたから。

呆気にとられているうちに二人、三人と昏睡させられていく。

夢渡は一切自分から先に手を出す事はない。

攻撃するのは明確に攻撃しようとして走ってきた奴らだけだ。

それすら気付かず、不良たちは手に手に武器をとり、囲んで襲いかかってくるだけ。

結果など言うまでも無いだろ。

相手が振りかぶるのを見てから手刀を叩きこめる奴が近距離戦で負

けるわけがないのだ。

「ぐえ！！」

斜め後ろから苦痛の聲が上がる。

見るとパフェの後ろに奴らの仲間が一人胸を押さえて転がっていた。俺がやったのでないなら犯人は一人しかない。

おびえた表情で俺にしがみつくパフェに呆れる。

さつきからコイツの演技にはいったい何の意味があるのだろうか。

「猫被る必要あるのか？」

パフェとほぼ変わらぬタイミングで迫ってきた不良の腕を擦じり、地面へ這い蹲らせる。

普通に脱臼しただろうが、知ったこっちゃない。

それより、パフェがやった奴の方が呼吸困難で今にも死にそうだ。口から血を吐き出してるあたり、折れた肋骨が肺にでも刺さったのではないだろうか。

流石にそっちは同情しないことも無い。

同情するだけで助ける気など毛頭ないが。

「随分酷い事を言うもんじゃな、こんなか弱い乙女を捕まえて。疵物にされたらどうし……いや、既に疵物じゃったか、主様に無理やり初めてを奪われてしまったからの」

と、自称か弱い乙女は下に転がってる不良を軽く蹴り飛ばす。

俺すら見えぬスピードで攻撃した奴が何をぬかしているんだろう。

パフェによって手持ち無沙汰になった俺は、蹴り飛ばされたそいつを視線で追う。

本人はそこらの小石をちゃんと蹴る感覚だったのだろうが、夢渡の足元までごろごろ転がっていった。

「あれ？ まだ残ってたつけ。——まあ、いいや」

俺がちよつと目を離れたときに夢渡の周りには死屍累々していた。やっと終わったと肩の力を抜く。

「こんな所に何の用じゃ？ 第六神様、最後の英雄と謳われたそなたがこんな辺境の世界の治安維持とは精が出るのう」

先程までの猫被りの雰囲気は何所へやら、俺の前へ出て夢渡と対峙する。

まるでここからが本番とでも言う様に。

ただならぬ雰囲気は俺は口を噤む。

明らかに旧知の間柄に見える二人に嫌な予感が溢れてくる。

というか、今普通に第六神って言ったよな？

パフェが自分の事を第二神と呼んでる所からこいつも終焉神なのか？

まあ、パフェに校内で出会った人物が怪しいと言われた時から、その可能性は考えてなかった訳じゃない。

むしろ俺の周りの友人全てが人間じゃないと言われても、ああそう、で納得できるくらい人間すれすれの奴が殆どだ。

が、心の方は思ったよりシヨックだったのかもしれない。

何処か気落ちしている体をなぜか冷めた目で見つめた。

「それ、恥ずかしいからやめてほしいな。あと治安維持は人間創地夢渡としての役割だからな」

「ならば、もう役割は終わりじゃ。吾と主様はここを離れてもかまわんよな？」

「もう一個だけあるんだ。悪いんだけど、ちょっとカノンと話させてもらってかまわないか？」

「断ると言ったら？」

パフェがその言葉を発した瞬間、夢渡から発せられる気配ががらりと変わる。

背筋がぞくぞく震えあがり、知らず知らずのうちに後ずさる。

刃物を見ると感じる恐怖。

あれを極限まで研ぎ澄ませればこんな感じになるだろう。

目の前の存在の殺傷能力に自らが既にビビってしまっているのだ。

その様は普段から見る夢渡からはかけ離れており、だからこそ今の夢渡がパフェと同じべつの生き物なんだって事がゆっくり理解出来た。

「終焉の第六神としてその質問に対する回答を拒否する…事になる

かな」

顔は笑っているが、目は本気だ。

夢渡は俺達に主導権を握る事を一切許さず、YES or NOの二択以外の問いは全てNOと見なす意気込みだ。

「……………こんな所で…本気かや？」

己の足下の影を伝い、震動が伝わってくる。

威圧？ 地震？ 歓喜？

いや、違う。

恐怖している。

パフェも俺と同じでこいつに恐怖しているのだ。

まだ戦ってすらいらないのにパフェは俺の前で虚勢を張るだけで精いつばいなのだ。

そんな馬鹿なと否定したくなる。

だが、この左腕と背中にあるアレに伝わってくるものはまぎれもなく恐怖。

「……………」

パフェの質問に夢渡は答えない。

恐らく次似たような事を聞けば即決裂するだろう。

交渉の余地など無いと言う事か。

「———わかった。話を聞こう」

パフェの肩に手を置き、警戒を形だけとってもらう。

それを見て、夢渡はありがとうと言うと、にへらと笑った。

「あー、突然で何言ってるか解らないと思うけど、カノン…俺と一緒に来ないか？」

フツと、真剣の様な気配を解き、俺へと向き直る。

「まだ、その第二神以外の終焉神にあってないから解らないんだと思うけど、終焉神はカノンが考えてるほどまともじゃない」

「そんな事はこいつ見た時十分思い知った。これは俺の手に負えるものじゃないってな。だが、俺にも守るべき家族がいる。その家族が終焉神に狙われてるんだ、逃げる訳にはいかないだろ」

俺がそう言つと、すぐさま反論しようとした夢渡が口を閉じ、考え込むような素振りを見せた。

「えと、家族つて妹さんだっけ？ それならまとめて俺が保護するけど」

思わぬところで宝くじ一等当たり確定くじのような選択肢を出される。

俺がパフェと外に出ざる負えないのは待ちだと決定的に詰むからだ。だが、こいつらが守ってくれると言つのなら話は別だ。

夢渡かパフェ、どちらかを攻防に回せる。

これなら十分に勝機が見える。

話しがうま過ぎて思わず尻込みしてしまう。

「その代わり、吾と離れる。という事じゃな」

俺がどう答えようか考えているとパフェは苦笑いしながら口をはさむ。

そうなのかと、夢渡に視線を送ると重々しく頷いた。

流石にそこまで美味しい話ではなかったか。

むしろ一変して不味い選択肢の様な気もする。

「それは……」

何故ならそれはパフェにとって死を意味するのではないだろうか。

いや、そもそもそれは俺の死も意味するのではないだろうか。

俺はパフェと運命共同体と聞いた。

だったらこの選択は端から論外だ。

「案ずるな主様、例え吾と離れたからと言って直ぐに死ぬような事はない。そやつらの治療術なら恐らく半年以内には前と変わらぬ体に成れる筈じゃ」

俺がNOと答える前にパフェが口を開く。

目を瞑り、息を吐き出すと、パフェは淡々と語る。

俺の心内は簡単に見透かされているようだ。

「どうしてそれを……」

思わず心の声が出た。

どう考えてもこれはパフェが不利にしかない。

俺が逆の立場なら最後まで茶を濁したいはずだ。

これによって客観的に見れば俺がパフェを手放さないメリットが見えなくなった。

ここで俺がパフェを取れば夢渡たちを敵に回し、更には天羽を狙う終焉神とも激突する羽目になる。

ただでさえ生き残る道が少ないのにこれ以上生存率を下げてなんになるのだろう。

だから、自ら不利になると知ってこの事を俺に伝えたパフェの回答には興味があった。

「言っただじやろ？ 吾と主様はパートナーじゃと。一方への依存を吾は望まぬ。例えば己が不利になるうとも主様とは対等で居たいのじや。先程の件で吾が選ばれ難くなったことなど重々承知しとる。じやが、これでもし主様が吾を選んでくれるのなら」

パフェは眼を開くと見かけ相当の少女の顔で優しく笑う。

「それは神や利害など関係なく吾その者を選んでくれたってことじやろ」

俺はその様に忘我し、ただただ見つめていた。

何か言葉を返さないといけないと解っていても、声が出ない。

言葉が考えられない。

夢を見過ぎだと、断ずることもできた。

パフェが言ってるのはただの感情論だ。

人はだれしも損得勘定、いやもつと言ってしまえば苦か楽かでしか選択できない。

そして大半の人間は楽を択ぶ。

だから、良心の呵責さえ降り切れれば夢渡を選んだほうが楽に決まってる。

決まってるんだが…。

あー、くそ。

あんな顔で笑っている奴を振り切れる訳がない。

後頭部をがしがしと搔くと、俺は盛大に溜息をついた。

「悪いな。——コイツには貸しがある。だからお前たちの所へは行けない」

パフェはその言葉を聞いてむっとしていたが、頭をくしゃくしゃ撫でて黙らせた。

夢渡は俺の言葉に反対せずに、そうか、と呟くと祈る様に目を瞑った。

「なら、人間創地夢渡の要件は終わりだ。これからは第六神として要件を伝える」

スウと目を開いた時には、もう俺の知ってる夢渡の気配はなかった。「これ以上あの学園を探るのはやめろ。そっちの第二神の目的が何だか知らないが、素直にこの世界から退け」

月明かりを受けて黄金の髪が瞬く。

深碧の目が刃の様に細められる。

ばれていないと思って抜け出てきたが、向こうにしてみればどうやらバレバレだったようだ。

「探るも何も、俺は学校に忘れ物取りに行ったただけ。確かに警備まがいの事はやったかもしれないが、職業柄許してくれてもいいだろう？」

無駄な足掻きだとしてもやらないよりましと思っていい訳でもしてみろ。

「これは最終警告だ。それでも尚この世界に残り、害を及ぼすと言うのであれば——」

無造作に突き出した右手に身の丈より大きい大剣が出現する。

その切っ先がそのままパフェへ向けられる。

「排除させてもらう。——はたして今の力で俺とともに戦えるか？」

パフェが歯ぎしりし、夢渡を睨みつける。

勝算が無いのか、それともプライドが傷付けられたのか、今の俺にパフェの心境は解らない。

俺にとって一番の問題は今ここで戦いを起こさないようにする事だ。

勝てるとか勝てないとかそういう問題じゃなく、今戦ってはいいない気がする。

「待て、俺達は今ここで闘う気は……」

「いや、それも悪くはない……か。理解しているつもりではないカノンに何に挑もうとしているのか、思い知らせるのも悪くない。その上で答えが変わらないかどうか……いいよな？ 試しても」

俺の声を無視しながら視線を天に向け、夢渡は俺たち以外の誰かに語る様に独白する。

その様を見てパフェが舌打ちする。

もう無駄じゃ、という声が虚しく響いた。

どうやら本格的にまずい方向へ向かっているようだ。

『概念心具第一契約？ ^{ファースト}Set - SIN - 』

パフェと夢渡の声によって戦いの火蓋は落とされた。

その14

「主様っ！」

パフェの掛け声と共に後ろへ跳躍する。

パフェがそれに追従するように滑り、俺左手と両足を影で繋げ、衣の様に俺の全身を黒い布で覆った。

一言で言うとお人形。

パフェの下半身は半分以上俺に溶け込んでいるので、必然的に宙へ浮く形となる。

その下に黒い布で結びつけられた俺がいるのだから間違った表現ではないだろう。

それを見て夢渡が鼻で笑う。

確かに素っ頓狂な状態かもしれないが、これが俺とパフェが共に闘う為に考えた方法だ。

俺とパフェが戦うに当たってまず一番最初に何とかしなければならぬのが俺の弱さだった。

そこらの妖魔なら問題ないが相手は神。

まず俺では戦闘に付いて行くことも出来ない。

それどころか運命共同体である俺は言わばパフェの心臓の様なものだ。

パフェ自身の耐久力がいかに優れていても俺が死んだらそこで終わり、ゲームオーバーだ。

俺とパフェの生命線カゲが短い以上俺は隠れてパフェだけ戦うと言う選択肢も無い。

だったらこうするしかない。

パフェが俺を護り、俺が敵を倒す。

という共に闘うという方法が最善に決まっている。

左足で着地し、再び力を入れる。

ぐん、と地面が俯瞰できるほど遠ざかり、ビルの屋上の高さまで跳

ぶと言うより飛翔する。

パフェの概念心具が俺の脚に纏わり付いているおかげで俺の動きに合わせてパフェが跳躍させてくれてるのだ。

そしてこれがパフェの授けてくれた牙。

俺は滑空しながら腰にあったアレを引き抜き、夢渡へ向ける。

大きさは手に平二つ程度。

機能的よりも儀礼的を意識した重厚な漆黒のフォルム。

リボルバー式の拳銃、銘を『ナハト』（パフェ命名）

鋼鉄で出来ていたのなら重いだろが、重量は羽根より軽く、やや暖かい。

そのまま空中でトリガーに指をかけると夢渡へ連射する。

本物の銃と違い、反動も少なく、狙った通り飛んでいく。

数にして十数発。

俺の霊力を弾丸に変え、飛ばしているのでリロードする必要がない。パフェの説明通り心具は魔術礼装としても優秀だ。

使い手を極端に制限される分適合した時の能力の上昇は他の追従を許さない。

そんな状態で俺は本気の霊力弾を撃ち込んだ。

言わばこれは俺があいつを終焉神と認めたくない最後の悪あがきの様なものだ。

最早最高レベルといっても過言ではないほどの神器での攻撃だ。

普通の魔術師はおるか、神に近い生き物でさえ耐えるのが困難だろう。

だが……。

スツと空間が裂ける様に線が入る。

ただそれだけで俺の霊力弾は霧散した。

何の感慨も無く夢渡が袈裟懸に振るった大剣が音も反動もなく消し飛ばした。

ああ、やっぱり人間じゃないんだな、と俺の心の奥底にあった最後の防波堤が崩れる。

数十メートルの高さから音も無く着地する。
痛みなど無い。

「どうした？　それで終わりか？」

大剣を肩に引っさげ、不動の体勢で、夢渡は問う。
俺は無言でシリンドーに黒い弾丸を詰めていく。

カシャンと音を立ててセットすると再びナハトを左手に構える。

「そう思うか？」

「……………有り得んの」

パフェと視線を交わす。

それにこたえる様にパフェが腕を振るうと、夢渡の周り四方八方から漆黒の杭が出現する。

概念心具がどういう原理なのかはいまいちわからないが、パフェは闇があれば概念心具を創る事が出来る。

パフェはすぐさま外へ出ようと提案したのはこの為だ。

夜こそが全力で戦える時間であるがゆえに。

コンマ一秒置かずその全てで夢渡を串刺しにする。

「……………どうだ?!」

目を細め、夢渡を見据える。

びちゃ、という音と共に辺りの壁に液体が叩きつけられる。

夢渡の位置は変わらず不動。

刺傷どころか、衣類にすら損傷がない。

片手で大剣を振りまわすだけでそれら全てを裁き切ったのだ。

防御不能の漆黒の杭を弾き飛ばした神速の剣技は正しく神技と言っべきものだ。

だが、こっちもそんなもので倒せるとは思っていない。
なにしろ相手は神なのだ。

出来て当然。

『……………閉じる』

パフェは呟くように呪詛を紡ぐと、荒々しく合掌した。
すると夢渡の前後に巨大な腕が出現し、そのままパフェの手を模倣

する様に迫る。

少し横に飛ばせば避けれるはずだが、夢渡は変わらず不動。

真っ向から受け止める気だ。

ちらりとパフェを盗み見る。

先程から何の驚きも無くパフェの行動を見れるのには理由がある。

事前にパフェとの完璧な作戦会議が…あつたらちよつとカッコいいかもしれないが、学校までの道中でそんな時間は無かった。

なのでパフェに重要な所は教えてもらったが、如何せん数が多すぎて細かいところには手が回っていない。

俺はその時こんなので大丈夫なのかと思つたが、パフェが『その時になれば解る』と意味深な事を云っていたので引き下がったのだ。

…ぶつちゃけ面倒くさくなっただけだが。

それはまあいいとして、種明かしをすると、左手や両足から繋がっている影のパスによつて漠然とだがパフェが今何をしようとしているとかこの概念心具の知識とかが頭に流れ込んでくるのだ。

ただ、それはパフェが自由にシャットアウトしたりできるらしく次の行動と概念心具の特徴くらいしか今のところ伝わってこない。

足は影となり、昔の幽霊みたいな状態になっているが、パフェは一歩前に出る。

「ちと、嘗めすぎじゃなかるうか？ 第六神よ」

パフェの問いに夢渡は答えない。

が、ここへ来て初めて夢渡は切っ先を目の前の腕に向け、上段で構える。

嘗めすぎかどうかは態度で示すと言う事が。

迫りくる両腕に夢渡は精神を研ぎ澄ませるように息を吐く。

前後を一太刀でかたずけるならば円月を描くしかない。

しかし、それでは両腕を弾き飛ばすのは不可能に近い。

その理由はパフェの概念にある。

概念『浸蝕』

それはパフェの闇に触れる物ありとあらゆるモノを侵す絶対のル―

ル。

触れれば最後、それは対象全てを喰らい尽くす。
それ故防御不能。

そしてそれは相手の攻撃を浸蝕する事によって攻守万能の盾となる。
唯一の例外というか、この世の法則を超越している神器『概念心具』
によるルールの相殺でなければ攻撃する事も防御する事も許さない。
先程の杭による全包围攻撃は数こそ多いが、概念心具の密度と量は
大したことはない。

だが、今回の腕は違う。

これ一発分でそこらの山を一瞬で食いつぶせる量がある。

俺はナハトを構えたまま、夢渡の動向を見守る。

さあ、どう出る。

夢渡の大剣にマナが集約され、びりびりとした波動が伝わってくる。
そしてそのまま最大限に引絞り……。

「——セイツー!!」

腕と大剣が刹那の間に衝突した。

拮抗すらせずに円錐状の穴を穿ち、弾き飛ばされていく腕。

その余波で辺りの建物が崩壊し、吹き飛ばされる。

此処までも十分驚くべき事だが、驚愕するのはむしろここからだ
った。

最大限に突き出した大剣がまるで時間を巻き戻すかのように刺突と
同速で戻り始める。

そのまま片足を軸に駒の様に回転すると、背後に迫った二つ目の腕
に大剣を叩きつけた。

「——っ!!!!」

先程を超える衝撃波。

崩壊し吹き飛ばされた建物の破片が更に粉碎する。

パフェがマントの様に闇を展開し、衝撃波を吸収する。

マントを振り払った時には相も変わらぬ位置で夢渡が立っていた。

「何なんだ、あれ。どんな概念^ルだったらあんな事が出来るんだ」

俺は騒めく心を落ち着けながら冷静を装ってパフェに尋ねる。
どんな手品にも種がある様に、原理さえ解れば対処できる。
裏を返せば種の解らない手品は魔法と同じで対処し様がない。

「……………」

パフェは眼を伏せ、俺の質問に答えない。

「知らないのか？ はつきり言って原理が解らなければ対処しようがないレベルだろ、アレは」

「いや、原理は解っておる」

「なら…」

「あれは…ただ自身の能力を高めただけじゃ。アレが何で最後の英雄と言われているか解るか？ アレはその概念により神すら届かぬ遠い未来に到達するであろう境地に既に到達しておるからじゃ。アレの使う剣技は様々な流派の最終到達領域。アレの使う魔術は現代では再現不能な古代魔術のアレンジ版。——つまり、奴のルールは自身を最強にするタイプじゃ。じゃから対処も対策も無い…」

パフェは明らかに気落ちした声で返答を返す。

だが、俺はむしろこれを聞いて安心した。
漫画やゲームの様に時を止めるルールや因果律の逆転、事象の改竄、並行世界の干渉。

そんなレベルのルールが来ればどうしようもなかったが、相手が強くなるだけならまだ戦える。

倒せる希望がある。

「相談は終わりか？」

夢渡が初めて前進する。

俺とパフェははっ、として夢渡を見る。

——来る。

パフェは舌打ちするとすぐさま飛び散った闇を再構成すると、夢渡の元へ向かわせる。

が、それよりも早く夢渡は接近した。

迫りくる杭を景色に置き去りにして、ぐんぐん加速する。

堪らず俺は霊力弾を撃ち込む。

大剣を使わずに左手で軽く叩き落とされる。

足止めにすらならない。

後退しようと両足に力を込めるが、既に夢渡は眼前に。

——ヤバイ、間に合わ……

『——建て』

間一髪、パフェの呼んだ漆黒の門が両者の間に顕現する。

「……助かった」

全力で後ろに飛ぶと見る見るうちに門が小さくなっていく。
体にかかるGまで浸食している所為か、妙に現実感がない。

「油断するなよ主様。あの程度では……」

パフェが言い終わるよりも早く、門を切り捨て夢渡がこちらへ跳躍する。

これはいくらなんでも速過ぎだろ。

そう愚痴りたくもなる程、夢渡の動きは化物めいていた。

大して狙いも付けずにナハトを乱射する。

ブースターでも付いているのかというほど弾を避けながら加速してくる。

俺は闇を足場に更に跳躍する。

轟と風を吹き飛ばしながら、更に更に上昇する。

それに合わせて辺りの闇が針のように突き出て夢渡を攻撃する。

斬、斬、斬、斬、斬、斬。

ほぼ不可視の刃のはずなのにいと容易く切り裂かれ、どろりと崩れ落ちる。

「ふう、ここなら多少の事があっても街への被害は少ないかな」

空中で何も無い足場に当たり前の様に着地すると、夢渡は街を見下ろしながら呟く。

何らかの魔術で宙に足場を創ったのだろう。

距離にして数十メートル。

再び向かい合い対峙する俺達。

互いに無傷に見えるがそれは外面だけだ。

心象具現礼装は己の精神を材料に創り出している。

その上位互換ともいえる概念心具は己の肉体、魂、心の三つを材料に創り出されている。

即ち防御に回しているパフエの闇の布が切られれば切られる程こちらにはダメージが行っていると言う事だ。

幸いパフエの概念心具は不定形故、破壊される、という事はない。

だがそれでも夢渡の概念心具と接触するたびに少しずつではあるが削られて行っている。

考えなしの攻撃じゃすぐさま間合いを詰められて殺される。

かと言って遠距離からちまちまやったところで夢渡にダメージが行かないのは先程の様子から一目瞭然だ。

ならば…。

思いつきり足場を蹴り、初めて夢渡に接近する。

パフエは俺の行動を見ると、微かに笑い、接近戦用に己へと概念心具を凝縮させる。

リボルバーの位置を確認すると夢渡めがけて発砲する。

1 発、2 発、3 発、4 発…！

夢渡は左手で銃弾を弾きながら右手で迎撃用に大剣を構える。

「っ！」

初めの2発を弾いたところで夢渡は初めて表情を変え、迎撃用に構えた大剣を振るう。

今まで音も無く霧散した弾丸が初めて音を立てて大剣に弾かれています。

内心俺は勘付いたかと舌打ちする。

俺が途中で詰めた漆黒の弾丸。

あれはパフエが概念心具を圧縮させ創った弾丸だ。

それを左手で弾かざる負えない状況を作り、霊力弾を囫にダメージを与えようとしたのだが、未来予知でも出来るのか、夢渡はそれを察知した。

続く4発目も夢渡は左手を使わず大剣で弾く。

どうやら偶然ではなく完全に読まれているらしい。

だが、それでも迎撃用の大剣を振るった事によりまだこちらのターンだ。

4発目を弾いた事によりわずかだが、一瞬の隙が生まれる。

始めからその隙を待っていたパフェが袈裟懸に引つ掻く様に腕を振るうと、それに追従するように漆黒の爪が夢渡を襲う。

「はっ!!!」

体を掠り、無理やり避けながら夢渡は上段回し蹴りを放つ。

吸い込まれる様に俺の顎へと向かう。

首を逸らし避け様とするが、生憎ここは生身の部分で間に合わない。
「クッ!!!!」

寸前のところでパフェが俺を闇の衣内で移動させ、躲す。

掠つてもいないのに頬が裂け、血が出る。

その勢いのまま夢渡はサマーソルト気味に宙返りすると宙を蹴り、今度は向こうから接近する。

が、それよりも速く避けながら俺が撃った弾丸が夢渡を襲う。

霊力弾、漆黒弾、霊力弾、漆黒弾。

夢渡は剣先で弾丸の軌道を逸らしながら最小限の動きで肉迫する。

パフェは先程の爪をバラバラにし、針鼠の様に突き出す。

髪を掠り、服を掠り、剣を掠り、されど夢渡にはただ一つも当らない。

本能的な恐怖に囚われ、ナハトを乱射する。

躲す、斬、弾く、外れる、斬、躲す、弾く。

一発でも当たれば勝機はあるはずなのにその一発が果てしなく遠い。
パフェの闇がマントの様に俺達を包む。

――斬。

だが、夢渡は紙切れの様にあっさりと切り裂くと俺へと振りかぶる。
「主様っ!!!!!!」

パフェの悲鳴を耳にしながら本能的に迫りくる刃に左手のナハトの

銃口を太刀筋に合わせた。

トリガーなんて引く余裕はない。

ナハトが俺と大剣の盾になり、鏢是り合う。

というのを俺は心のどこかで期待していた。

しかし、現実にはバターの様にナハトは切り裂かれ、それを握る左手にも裂け目が広がっていく。

カチリと音がし、ナハトが爆発する。

「がああっあ！！！」

左手と心臓辺りに激痛が走る。

これが心具を破壊される痛みか。

比喩じゃなくて神経が焼き切れる。

視界が白と赤で混濁する。

だが、お陰で夢渡に左腕を切り裂かれなくて済んだ。

手首まで裂けた左手を右手で握りしめる。

ゆっくりとだが、目に見えるスピードで繋がりは始める。

ナハトが爆発したのは最後に残った漆黒の弾丸を切り裂かれた所為だな。

「ぐううう！」

立ち替わり、俺の代わりに刃を受け止めているパフエに意識を戻す。夢渡が片手に対して、パフエは全身を使いあの太剣を受け止めている。

「あああああ…っ！」

パフエの声がどんどん弱弱しくなっていく。

じりじりと均衡が崩れ始める。

拙いと思った時には均衡は完全に崩れていた。

太剣がパフエを切り裂き、そのまま地上へ叩き落とされる。

背中にすさまじいGを感じる。

拙い拙い拙いマズイマズイマズイ。

パフエの意識が混濁しているのか、俺の周りの闇の衣が薄れていつている。

このまま地面に衝突すればお陀仏だ。

不格好だが、左手と両足を接触させ、緩衝材として着地するか？

今の状態でどこまで耐えられるか不明だがやらないよりはましだ。

俺は軋む体に鞭をうち、空中で体制を変えようとする。

が、その前にパフェがギュツと俺を抱きしめた。

「なっ！！」

そのまま地面へ激突する。

俺に衝撃は無い。

パフェは俺を抱きしめるとすぐさま俺と自分の位置を入れ替え、自ら緩衝材になったのだ。

肩で息をしながらパフェは落下の衝撃の際に飛び散った闇をかき集める。

ここへきて己の認識がいかにかい思い知らされる。

倒せる希望がある？

何を馬鹿な…。

パフェは空を見上げ、瞳孔が限界まで開く。

『た…建て…っ』

現出した門を貫通し、それはパフェを磔の様に地へ繋ぎ止めた。

「あ……か……く、そ……っ」

奇しくもそれはパフェと俺が出会った時と同じ光景だった。

夢渡が放った大剣はパフェの腹部を貫通し、地へ突き刺さっていた。

パフェはもがくが動けない。

啞然とそれを見つめる俺の横に夢渡が立つ。

「まだ……これでもまだ挑むか？」

冷たい瞳が俺を見据える。

心臓が激しく鼓動を震わせ、俺は夢渡から目を離せない。

無理だ。

こんな奴に勝てるわけがない。

『概……念……心……具……ぐっ、第二……っ』

息も絶え絶えにパフェは契約の呪文を詠いあげようとする。

「第二契約を結べばそれこそ容赦はしない」

夢渡の殺気で大気が震える。

パフエは悔しそうに歯噛みすると、がくつと脱力した。

第二契約？

何を言っているんだ？

まさか、これ以上があると言うのか。

第一契約の時点で核を使わなければダメージを与えない連中が、だぞ？

この時点で都市一つ壊滅させるのに対して時間のかからない連中が、もう一段階成長すればどうなるか考えたくも無い。

だってこれじゃあ、どうやったって俺達に勝ち目はないじゃないか。パフエが幾ら強くなるうとも俺が変わらない以上、戦闘のランク上げはこちらが不利になるだけだ。

「なあ、カノン。悪い事はいわねーよ、俺達と一緒に来いよ。今はまだ第一契約だからこの程度ですんでるけど第二契約を結べばこんなもんじゃ済まないんだよ。そんな争いの中でカノンが第二神と共に戦って何になるんだよ。無駄死にしかない。——だから……」

夢渡はパフエから左手で大剣を抜き、何も無い虚空へそれをしまうと、俺と同じ視線で何時もの人懐っこい笑みを浮かべる。

そんな夢渡を無視して俺は急いでパフエを抱きかかえた。

死んではいないが、明らかに衰弱している。

このままではパフエが死んでしまう。

全ては俺がパフエを襲ったせいだ。

あの時素直に俺が死んでいればこんな事にはならなかっただろう。

いや、こんな後悔は何の意味も無いと知っている。

そんな事よりパフエを先輩の所へ。

無駄かもしれないが試さないよりましだろう。

だが、その為には夢渡から逃げ切らなくてはならない。

パフエ抜きでも戦わなければならぬ。

無理に決まっている。

ならば、夢渡に見逃してもらおうように頼むか？

俺は夢渡に向き直り、命乞いをしようと口を開く。

「——だからその第二神は諦めてくれ。そいつはこの世界を喰らう悪魔だ。現に今も第一契約如きじゃあ全然死ぬ気がないだろ？第二神が完全になってからじゃ遅いんだ、そいつが完全になればこの世界は終わる。悪いけど俺はそれをみすみす見逃せない」
完全な拒絶。

俺が諦めたら一切のためらいも無くパフェを殺すと言う意志表示。どうすればいい？

カルネアデスの板だ。

己が生き残るためなら、家族が生き残るためならばパフェを見捨てていい？

家族どころか友人ですらないこいつなら見捨ててもいい？
将来世界を滅ぼすかもしれない悪魔なら見捨ててもいい？

——いい訳ないだろっ！

こいつは気絶するその時までその無理を通そうとしていた。
勝てないのを解っていないながら戦うのを選んだ。

いや、今も戦っている。

闇の衣が薄れず確かに俺の周りで存在感を示している。

奥歯が砕けそうになる位強く噛みしめる。

でもこれでどうしろと。

悔しさで視界がにじむ。

結局俺じゃあ何も出来ないのか？

与えられた選択肢を享受するしかないのか？

俺の思考は最早パンク寸前だ。

模索する思考が全て八方塞で堂々巡りする。

全ての条件が枷の様に俺に食い込み、肉を食る。

勝てない、絶望、パフェを捨てる、捨てれない、戦う、勝てない、逃げる、逃げれない、家族を捨てる、捨てれない、戦う、勝てない、どうする、どうもできない。

俺はこの声、この気配、何処かで訊いた事ある様な…。

ぐらりと視界が傾いて行つた。

安堵か安心か疲労か恐怖か…何れにせよ俺はもう意識を保って居られなかった。

夢と現の間で彼らの声を聞く。

もう…何も…。

「そこまでつて、別に俺は何も……」

「今回その彼はこっちに来ないみたいね。だからそれ以上は無駄」
「だけだよ……」

「それよりあなたの力が奴らに感知された方が厄介。第三神、第七神。この場に彼らが来ればどうなるか解っているでしょ？」

「……………わかった」

「じゃあ、私はその二人を届けるから後処理よろしくね」

自分の脇に誰かが降り立つ音を聞くと、優しく抱き起こされる感触を感じながら俺の意識は途絶えた。

+

カノンを抱きかかえようとして女は夢渡に視線を送る。

女の姿は黒いベールに包まれているようで酷く不明瞭だ。

「ところで……………ソレ、痛くないの？」

女は夢渡の右手を見ながら嘲笑の意味を込めて口を歪める。

月明かりに口元だけがスポットライトの様に照らしだされて途轍もなく印象に残る笑み。

されど顔の全体像が解らないので本当に笑っているのか解らない。

「痛くねえ訳ないだろ。これ、第二神の概念だぞ？」

顔を顰めながら夢渡は左手で右手の手首を握りしめる。

そこには黒い斑点模様が呪いの様にこびり付いていた。

加え、それぞれが意思を持つように微かに鳴動している。

「へー、そりゃあ大変ね。でも、あなたの概念ならどうにでも対処できたのに。——平和ボケして鈍ってるんじゃないの？」

「俺達終焉神に平和ボケはありえねえよ……………どれだけ頑張ってもな。」

だいたいお前のルールだったらなんで俺が食らったか解るだろ？

わざわざ聞くなよそんな事」

「ふふつ、何の事か私にはさっぱり。概念を正しく理解出来るのは本人のみ、あなたがそうだと思っている私のルールは実は違うルールかもしれない。同じ様に私が思っているあなたのルールも違うかもしれない。だから私には解らない」

「あー、もう降参だ。言えはいいんだろ、言え。これが最善手だったんだよ。あの時カノンの銃を切り裂かなければ一発もらってたし、それを弾いてもこんど第二神の攻撃から逃げられなかった。だからこれがダメージを最少に抑える方法だったんだよ。これで満足か？」

「ええ、とても」

その言葉を境に女はカノン達を連れて消える。

一人取り残された夢渡は黙って右手を見つめる。

が、深い彩りを見せるその瞳に右手は映っていなかった。

彼は第二神とカノンを倒して何を思っているのだろうか。

友人に攻撃した事による罪悪感かそれとも致し方ないと割り切っているのだろうか。

何れにせよ、カノン達がこの英雄に一発当てた事は紛れもない事実だ。

相手を傷付ける事が出来ると言う事は即ち勝利できる可能性がある事を意味する。

空気が微かに振動する。

まるで嗤っているかのように。

逃げられやしない、逃がしはしない、必ずこの舞台を壊してやる、と。

風と共にノイズは消えていく。

その14（後書き）

久々のバトルシーンは如何だったでしょうか？

現在のパフエの限界を見せつつ、カノンとパフエのペアの初バトルを飾るに夢渡は色々と便利なキャラでした。強いが安易に主人公を殺さない。けれど主人公と戦う理由はある。といった事から主人公補正を自然に出せたと思います。初バトルが敗北ってどうなのよ、と思うかもしれませんが筆者としては噛ませ犬をあまりだしたく無く、かと言って本来勝てないキャラに無理やり勝たせる様な事もあまりしたくないのでこうなりました。

この件に関してでもいいですし、作品に対して何か些細な感想があれば励みになりますのでどうかよろしくお願いします。

その15

夢を見ていた。

何処か遠く遙か果ての光景。

俺の知らない、見たことも無い光景。

影さえ明るいと感じる闇の中、ポツンと立っていた。

いや、もしかしたら座っているのかもしれない。

ひよっとすると寝ているかもしれない。

自分も周りも何も見えず感じないのだから確かめようがない。

そもそもこれは俺なのか？

自分で自分に疑問を抱かずにはいられない。

それほどまでに俺の周りは混沌としていて何もわからないのだから。

闇が身動きする。

のっそりと、這う様な速度で。

が、確かにそれは動いている。

あまりにも闇が濃すぎて景観から浮いているのだ。

この蠢く闇は一体…。

俺がしばらく見つめていると闇はピタリと制止する。

「……………そなたは誰じゃ？」

品定めでもするように闇はこちらをじいっと見ると、俺に問いかけた。

「——ッ」

口を開くが声が出ない。

陸に上がった魚の様に口をパクパク開く。

「くつく、なんじゃ。この程度の環境で話せんのか、随分と愛い奴が来たのう」

笑い声と共に闇が凝縮すると、女の姿を模り始める。

長い黒髪に真珠の様な白い肌。

辺りに光源がないのだから女の色など見えるはずも無いのだが、そ

の女はまるで自らが光放つ様にくつきりと見えた。

深淵の瞳で小動物を愛でる様に俺を見つめるその様は…。

——パ…フェ？

相も変わらず声は出ないので口ばくで尋ねる事になる。

他にもつと言い尋ね方があったかもしれないが、思わずそう尋ねたくなるほど目の前の人物はパフェに似ていた。

しかし、断言できないと言うか、微妙に違うのだ。

何と言うか、その…体形が結構違う。

パフェが成長すればこんな感じだろうか。

モデルの様に長い手脚。

胸は…呪いでも掛かっているのか大して変わらない控えめな普通サイズくらいなのでボンキュボンとは行かないが、プロポーションのとれたスレンダーな体系。

何より意地の悪い笑みがパフェとそっくりだ。

「ふむ、^{アレ}吾の知り合いか。だとしたら随分と^{アレ}吾に好かれておるの、そなたは。吾に^{わたし}会える何ぞ、^{アレ}吾の懐刀でも数えるほどしかないからの」

パフェ？がぱちんと指を鳴らすと、星明かり程度の光が灯る。

そのお陰で己の体が認識できるようになる。

左手がまだ裂けたままである事から、俺はあの後すぐの状態で此処にいる事になる。

ならばここは死にかけたパフェの精神世界なのだろうか？

事故に会い意識不明となったキャラを共通の精神世界で救うと言うアニメのワンシーンが脳裏に過る。

となると差し詰めこいつはパフェの心の闇、という訳か。

パフェらしき女に気付かれぬよう自嘲すると、馬鹿な考えを追い出す。

「——あんたは一体なんだ？」

己を認識できたおかげか、普通に声が出る。

「何だ、か。的を得ているようでその実得ていない。^{わたし}吾はパフェヴ

エディルム「ヒアス」ファノレシス、終焉を司る神の第二神じゃ」
女は自分はパフェであると答えた。

しかし、微妙に会話に齟齬を感じる。

「？」

「^{アレ}吾^{わたし}であるが、^{わたし}吾^{アレ}でない。つまり、^{あれ}吾^{わたし}は吾の一部、という訳じゃ」

尊大な態度でもう一人のパフェは俺を見下ろす。

明らかにコイツはパフェと己を分けて俺に話しかけている。

「要するにお前はあいつの何なんだ？」

「一言で言つと……そうじゃの、本体……いや魂と言つた所じゃの。」

「^{アレ}吾^{わたし}は吾^{わたし}の意思。吾^{アレ}は吾^{わたし}の力を使い、^{わたし}吾^{アレ}は吾^{わたし}の思い通りに動く。そして吾^{アレ}が折れた時、新たな吾^{いし}を創り出すモノ。区別がしたいのなら……

……差し詰め『混沌の闇』といった所か。ルビは……そうじゃな『無限の中核に棲む原初の混沌』のアザトースでどうじゃ。概念的には違

えど人からすれば大して違いはあるまい」

パフェ、いや混沌^{アザトース}の闇はそう言つて得意気にこちらを見つめる。

「——好きにすればいい」

「^{わたし}吾^{わたし}の事はいい。そなたの事を聞かせてくれ。どうしてこんな所に迷い込んできたのじゃ。死ぬ直前という訳でもあるまい、そもそも先の戦闘での負傷など無いに等しいじゃろ。何か悩みでもあるのかや？」

「その口ぶりだと俺が無理やりここへ来たみたいない方だな」

「違うのか？ 本当にそなたは何も悩んでおらぬのか？ 秘めたる思いを処理できずに抱えておらなんだか？」

「それは……」

俺は逡巡する。

そんなものはないと即座に反論できなかった。

それは即ち自ら何か悩みがあると言っている様なもの。

俺はアザトースに言われて初めて自分が悩みを抱えていた事を自覚した。

それはあまりにも情けない話。

力も無いくせに選択するのがいやだと言う負け犬の戯言。

努力もせずに力が欲しいと希う自分勝手な理論。

無理だと諦め、それでも現状を拒否し、都合のいい奇跡を願う心。

それら全てが楔のように俺に打ち込まれ、俺を蝕んでいる、否いた。

アザトースは全てお見通しとでも言う様に笑って俺の目を覗き込む。深く深く心の奥底まで覗きこまれているような感覚がする。

咄嗟に目を逸らそうとするが、やめた。

黙っていても何も変わらない。

俺が黙っている限り永遠にこのままだろう。

「俺は、何処かで樂觀視していた。敵がパフェと同じ終焉神なら苦労はするけど何とか勝てるだろうと心の隅で思っていた。だが、現実はどうだ、明らかに手加減をしている夢渡に傷一つ負わす事も出来ずに惨敗だ」

「それはそなたの責任ではないじやろ。吾が弱いのが悪い。如何なる脅威からもしそなたを護ると大見得を切りながらこの様じゃ。吾が意思ながら何とも不甲斐ない事よ」

何も無い部屋で窓でもある様に遠くを見る様な眼をする。

だが、鼻で笑いながらもその眼には慈しみがほんの僅かに感じられた。

不甲斐ないと言いながらもパフェの事を気に入っているのかもしれない。

「しかし、元を正せばパフェがそんな風になつたのも俺の所為だ」

「そなた、少し被害妄想が激しいのではないか？ 吾はそなたの事を一切恨んだりしてはおらん。寧ろ殺されて感謝している様な変態じゃ。吾を思っ^{アレ}てやるのはいいが同情して後悔するのは止せ、それにソレはただの愚痴^{わたし}じゃ。自ら悩みの答えを探そうとしない者の愚痴を聞いてやる程、吾は暇ではないのだが？」

皮肉めいた表情を一転させ、ぞっとするような作り笑いをする。そこで気付く。

アザトースが聞いているのは過程じゃない。

結論、そして変化への渴望だろう。

「――力が欲しい」

俺はいくつか口にするべき言葉を考え、これを選んだ。

今まで俺は力なんぞ望んだ事はなかった。

適当に修行し、適当に戦い、適当に逃げていれば事足りたからだ。

親に勘当された時でさえ、生きるのに困ったがこう言う力を求めたりはしなかった。

今になって思えばそれは守るべきものが無いゆえの甘さだったのだろう。

いや、違うな。

今も昔も俺が失いたくない者は血の繋がった双子の片割れだけだ。

姉貴はちよつと特殊だったから危機に陥る事が無かったが、今回は違う。

今回こそ逃げれない唯一の闘いなんだ。

アザトースは俺の言葉を噛みしめるかのように瞬きすると、次の質問の為に口を開いた。

「何のために？」

「生きるために、選択する為に、そして二度と自分の為に他人を犠牲にするという考えが浮かばぬように」

「何ともまあ、心地いいまでの偽善じゃの」

嫌いではないがの、と付け加えアザトースは背を向ける。

長い黒髪がそれに追従して揺れ、扇の様にふわりと広がる。

「それで？」

アザトースは背を向けたまま続きを促す。

「力を貸してほしい」

「くつく、断る」

振り返って俺を見るアザトースの唇は三日月の様に裂け、愉悦の表情を浮かべていた。

にやにや笑い出した辺りから何となくそんな気がしたが、こう、一

刀両断に断られると流石にくるものがある。

「そこは、空気読んで俺に力を授ける場面ではないのか？」

「はあ……、授けるも何もそなたは『力』を持っておるじゃろ」

俺の当て付けがましい言葉に呆れたように溜息を返す。

その仕草がまるで駄々をこねる子供にどうやって聞き分けさせるか悩む母親のそれであり、内心笑いを誘った。

顔の筋肉を変化させたつもりはないが、コイツには俺が何を考えているか解つたらしく、じろりと睨んできた。

こほんと咳払いして誤魔化す。

「俺が…力？ それは契約の事か？」

「そうじゃ、こうして吾とそなたが会話できるのも吾の意思もあるがそなたの力によるものが大きい」

「だが、あれは…」

「あれは自分の意志ではないと？ 欺瞞じゃな。友人が殺された事により覚醒する主人公くらい嘘くさい。意識的であれ、無意識であれ、そんな力を出せるのなら始めから出せば良い。それならば何かを犠牲にする事も無かうて。そなたの言っている事はそう言う事だぞ、全力を出してもいない癖に出せないから力を貸せと。吾が断るのも当然じゃろ」

アザトースの言葉にぐうの音も出なくなる。

アザトースが言っている事は暴論ではあるが正論だ。

誰もが全力を、限界まで出せる訳じゃない。

が、だからといって全力を出せなくて出た結果を甘受出来ないのはただの我が儘だ。

何も努力しない、何も理解しようとはしない、自分の知らない力は使いたくない。

ああ、結局俺はあの時の力に怯えていただけなんだな。

そんな場合じゃないって解っていたのにな。

右手と左手、左右から万力の様な力で引つ張られて、助かりたいならどちらか手を捨てると言われて、でもどちらも手放せないなら結

局己を引き裂くしかない。

「100年」

「？」

「凡人が契約を結べる領域になる為に鍛錬して到達できる平均時間じゃ。100年間飲まず食わず休まずぶっ続けでその領域に到達できる。結べるかどうかは本人の才能次第じゃが」

突然、話題が別方向へとシフトする。

関係あるかと言われれば、どちらかと言えばあるかもしれないが、今突然する話ではないだろう。

「何が言いたい」

「そなたはそんな難解な契約を努力や気合や根性で結べるのかや？」

「結べるか結べないかじゃない、結ばなければいけない」

「そうやってギリギリまで延ばして死にかけて覚醒、の。出来なければ出来ないで死ぬだけ。やはり夢を見過ぎじゃ。守りたいんじやろ？ 力が欲しいのじゃろ？ ならばその為に何を捨てれる、何を捧げれる。吾が見たいのはそう言う覚悟じゃ」

いつの間にか出現した刃が俺の心臓辺りにつきつけられる。

「俺が何かを捧げたら力でも与えてくれるのか？」

漆黒の刃を一瞥すると肩を竦めて見せる。

「吾が望む事は吾と同じじゃ。望むのは対等、望むのは相棒、望むのは恋人、望むのは番、結ぶは契約。そなたが吾に何かを捧げるならばそれ相応の物を返さねばならん」

「なら、俺は俺の意思以外の全てをあんたにやる。どうせあんたに拾われた命だ、下僕なり奴隷なり好きに使えばいい。それともこれっぽっちじゃ足りないか？」

「自虐はやめよ、言っただじゃろ？ 吾の望む事は対等だと。ならばその言葉は対等の吾らまでも貶める」

「…以後気を付ける」

「一応吾らとの契約後どうなるかも教える。肉体も魂も捧げると言う事は永遠に吾らに取り込まれ、不老不死の化物になる事を意味す

る。——ああ、そんな顔をするな、無粋なのは解っておるがなにぶんクーリングオフ不可なのでな」

俺の顔を見て、アザトースは溜息をつきながら付け加える。

自分では少し苦い顔をした程度の認識なのだが、そんなにもげんなりとした表情をしていたのであるうか。

眉間をこつこつ叩き、凝り固まった皺を緩める。

「無粋だと思うのなら、俺からも一つ無粋な質問をさせてくれ。もし、俺が夢渡との戦いで第一契約を結んでいたならば俺達は勝てたのか？」

「無理じゃ、あれはそういう事で勝てる相手ではない。因みに吾らと契約を結んでもあれは無理じゃ。引き分けるのは簡単じゃが、勝つ事は難しい。これは彼奴に限らず他の終焉神にも言える事じゃの。相性が良くないと終焉神など倒せるものではないからの」

「そうか」

内心に動揺は無く、ただ単純な感嘆詞を吐きだす。

「絶望したか？ 勝てる見込みがないと諦めたか？ 吾らにあった事を後悔しておるか？」

自虐じみた笑みを顔に張り付けると、パフェは前髪を揺らす。

「自ら望んで棘の道へ行くと言っただ。あとは檻褻切れになるまで進むだけだ。絶望や後悔しながらな」

絶望や後悔という言葉を口にしながら、決意を固める。

勝つために。

切り開くために。

守るために。

二度と道を迷わない為に。

「いいじやろう、ならば再び誓いの言葉^{のちい}をそなたに送ろう。吾はそなたに恋をした。そなたの全てが欲しい。そなたに脅威が迫ると言うのであれば、全力を以て排除することを第二神『混沌の闇』の称号にかけて約束する」

ぐっと顔が近づき、自然とアザトースと抱き合っている様な形にな

る。

耳元でそつと吐息が零れる。

「そなたの意思が、潰えるまでの」

とん、俺は肩を押され、重心が傾いていく。

俺の心臓を根に首を垂れる様に漆黒の花が開花する。

刺されたことも抜き取られたことも感じず、真黒の血が心臓から流れ出る。

アザトースが俺に接近した折にそのまま刺したのだろう。

体内から流れ出る血液が俺を包み込むように漂う。

――進化。

――神化。

――深化。

――真価。

深く、塗りつぶす様に体が変色して行く。

「現は眠る事で夢となる。夢もまた、眠る事で現となる。さあ、戻るのがいい、そなたの世界へと」

眠る様に、覚醒する様に、俺の意識は浮上しているのだが、落下しているのだが、解らないまま混濁して行った。

その16

窓を開けると外は銀世界だった。

トンネルを抜けるとそこは雪国だった。

そんな突然の情景が似合う位俺が目を開けた先の光景も吃驚だった。瞼をひらくと不愛想な神剣が俺を覗き込んでいた。

距離にして数センチ。

天羽の鼻がもう少し高ければ鼻と鼻がくっ付きそうになるくらいの距離。

そんな距離で瞬きもせずじっと俺を見つめている。

俺も無言で見つめ返す。

向こうも俺が眼を覚ました事に気が付いたのか、ぱちくりと瞬きする。

心なしが顔が赤らんでいる様な気もする。

突然俺が眼を開けて思考回路が停止したということだろうか。

そのまま見つめ続けていると視線をぎこちなく左右に動かし始める。何をしているんだらう、こいつは。

そのまま観察を続けていると視線が上下にも行き始めてぐるぐる回転し始める。

それを追う様に俺も眼球をぐるぐる時計回りに回転させる。ぐるぐるぐるぐる。

飽きもせずに俺も目を回し続ける。

起きて早々何してるんだらう、とも思うが気にしない。

暫らく回転が続いていると天羽の目がピタリと止まる。

飽きたのかと思って観察を続けると両手で俺の頭を掴み、がっちり固定した。

「？」

不思議そうに天羽を見つめていると天羽の頭が海老反りに引き絞られる。

なぜ引き絞られると言っ言葉を使っ たかというと、さながら引き絞られた弓の様に見えたからだ。

「ふんっ!!」

気合いと共に迫り来る投石機の様な頭。

俺が一体何をしたのだろう。

回避行動を封殺されたままスローモーションで迫りくる頭を眺める。ごん、という音と共に脳に意識が遠退きそうな震動が伝わる。

痛いのは確かに痛い、それよりも先に意識が飛びそうだ。

寝起きの怪我人？相手にヘッドバットをかますのがコイツ流の看病なのだろうか。

若しくは起きたら無理やり寝かせると言っ主命でも貰ったのだろうか。

焦点が定まらなくなっ てきている俺の視界に薄ら止めを刺そうと振りかぶる天羽の頭が見える。

明らかにオーバーキルだ。

……鬼だろ、こいつ。

死ねえええ、と叫びそうな形相で振り下ろされた頭を右手が受け止める。

「え？」

誰の右手かと言われれば俺の右手だ。

起きて初めて見る右手は何の冗談か、墨でいたずらされたかのように紋様が所狭しと描かれていた。

何だこれ…。

他人がこれと同じ事を刺青などでしていたら確実にイタイ奴だと思っ たことだろう。

いや、認めよう。

確実に今俺の右腕はイタイ事になっている。

「それ以上吾の主様^{っれ}にちよっ かい掛けるのはやめてもらおうか、無機物」

耳元でやけに幼い声がする。

口調からしてパフェ何だろうが、どこにいるのか解らない。
体を起こし、布団をめくってみる。

「…………ふむ」

潜り込んでいる訳ではなかったようだ。

が、その代わりに自分が真黒な服を着ている事が分かった。

「っ！！」

天羽は弾かれる様に後ろへ跳躍すると、ひどく狼狽した顔でこちらを見つめる。

「何をそんなに狼狽しておる。主様の顔をじつと眺めていたら突然目が空いて、見詰め合っていたら吾に還り、証拠隠滅しようと頭突きで主様を失神させようとしたなどと言う厚顔無恥で恥知らずな無機物であろうとも、ここまで驚く事はあるまい」

「み、見ていたのかっ?!」

「それはもう確りと、な」

天羽そっちのけできよるきよると辺りを見渡すが、パフェがどこにいるのか見つからない。

妖魔の様に影の中に隠れているのか。

ゴミ箱の中を覗き込んで見るがやはりいない。

「——殺す」

天羽は辺りにあったものを適当を手当たりしだいに投げ始める。

これが子供の喧嘩の様に山なりに低速で飛んでくれば可愛い冗談、とても流せるが。

天羽は腐っても神であり、そんな生ぬるい事をする訳無く。

シャーペンやらボールペンやら定規やらが俺の右肩やや上目掛けて手裏剣の様に飛んで来る。

その精度と速度は神剣改め忍者と呼ぶにふさわしい妙技だった。

右肩やや上に俺の体は無いので避ける必要も無いのだが、なぜか俺の右腕はそれらを残らず受け止めた。

「カノン、なぜ邪魔をする。影女なんぞに籠絡されたかっ?!」

「いや、別に邪魔するつもりはないんだが……」

俺の言葉とは裏腹に右手は中指を立てて天羽を挑発する。

「吾と主様は最早一心同体じゃ、体と魂を交わした間柄じゃ。諦めの悪い女は見苦しいだけじゃぞ」

テニスボール位のサイズの人形がパフェの声で喋り、ふわふわと飛んで俺の右腕に抱きつく。

先程からの声の発信源はどうやらこれだったらしい。

「どうか何だこれ？」

左手でつまみあげて、じっと観察してみる。

漆黒の黒髪に真珠の肌。

意地の悪いにやにや笑いに扇子。

「な、何じゃ主様？ あつ、やめい。首を首……？ げる？ げる？ げるっ！！」

デフォルメ化されているが、どうやらパフェらしい。

試しに胴体を固定して首を摘んだからゴムの様に伸びた。

「悪いな、影女、籠絡などと言って。籠絡どころかまともに意思伝達すら出来ていなかったんだな」

天羽はそれまでの焦った顔を一变させ、嘲笑する。

「くつく、愚かな。これは夫婦漫才と言ってな。息のあった夫婦にしか出来んまんざ……ぐぎやあつ！！」

パフェを握りつぶしてみると一昔にあった握ると部位が飛び出る人形の様に指の間からはみ出した。

ひんやりしているが、触感のマシユマロの様でずっと握りつぶして居たくなるほど気持ちいい。

「ちょ……っ、主様？ 本気で……っ、やめ……むきゅっ」

成程、確かにこれは籠絡されてしまうかもしれない。

天羽の馬鹿にしたような視線を一身に受けながらも俺はにぎにぎし続けた。

「いい加減にせんかつ！」

パフェの声で左手を俺の右手が止める。

先程から右腕が勝手に動くと思っていたら、こいつの仕業か。

指の間から這い出てきたパフェを右手の上に乗せる。

「で、今度のこれは何だ？」

両手をつき、ゼーゼーと息を吐き出しているパフェを指で突きながら尋ねる。

突くたびにぴくぴく反応してまた面白い。

これとは俺の右腕に走ってる模様の事でもあり、今のパフェの形態の事でもあり、いつの間にか着替えさせられた見知らぬ服の事でもある。

最近いろいろな事があり過ぎてちよつとやそつとのことで驚かなくなった自分を、褒めるべきなのか、嘆くべきなのか、判断に苦しむところだ。

ジェノサイド
「戦闘形態じゃ」

幾分か説明を省略して、胸を張って答えるパフェにデコピンを入れる。

「むぎやつ！」

ピンポン玉の如く面白い様にドアの方へ飛んでいく。
そしてスライムの様にドアにベチャリと張り付いた。

「ジェノサイドがなんだって？」

「主様、何処か吾の扱いが悪くないかや？」

「対等で扱えと言うから敬いを無くしたただけだ」

「いや、対等どころかぞんざいな扱いを受けておるのじゃが」

パフェは体をよじり、ドアから離れようともがいている。

言っちゃ悪いが、その様がゴキブリホイホイに捕まったアレに見える。

「遠慮が無くなり、俺達の間にあつた壁が取り払われたただけだろ」

「寧ろかえって壁が出来ておる気がするのじゃが、気の所為かや？」

すぽんと言つ小気味のいい音と共に張り付けられていたドアから転げ落ちる。

「……………お前たち、それより先に私達へ何か報告する事があるのではなからうか？」

眉を片方だけつり上げ、目覚まし時計を減り込む様に掴んでいる天羽が、時計の針へと指を指す。

——深夜2時。

「「あつ」」

パフェと同時に時計へと視線を向けるとそろって間抜けな声を上げる。

「言われてみれば、どうやって帰ってきたんだ俺達？」

ぴよんとジャンプしてきたパフェを肩に載せながら尋ねる。

「吾も気が付いたらこの部屋におったから知らぬ」

「と言うか、お前怪我は大丈夫なのか？ あいつの剣でぶつ刺されただろ」

「あー、あれは違うのじゃ。彼奴の概念心具によるダメージで気を失ったのではなく、第二契約を結ぼうとし、それを自ら無理やり止めた事によるフィードバックにより一時的に意識不明になっただけじゃ。安心するがいい。それでもまあ、ダメージが無いと言えば嘘じゃがな」

大したダメージを負っていない事をアピールしたいのか、俺の眼前まで浮遊すると、くるりと体を回転させて見せた。

デフォルメされている所為か、お腹に白い布でボタンがされている。

絆創膏……なのか？

これがパフェの冗談による演出なのか、デフォルメされたから怪我の表示がこうなったのか判断に苦しみむところだ。

「そうか……………なら、あまり無理はするなよ」

と、そっけなくいい渡す。

どちらにせよ、こうして普通に会話できている所を見る限り、大した事はない、と見るべきか。

「ならば握りつぶそうとしたり、指で弾いたりせん事じゃ。——

全く、パートナーを何じゃと思っておるんじゃ」

ふよふよと俺の耳元まで来ると、ぶつくさ言いながら耳たぶをギョ

ツと引つ張った。

地味に痛い。

片方だけ福耳になっただろうするつもりだ。

「おい！！　な・に・か・報・告・が・あ・る・の・じゃ・な・い・
かつ？！」

だん、と床を踏みならすと怒り心頭で天羽が俺達を睨みつける。

「さて、その前に俺達がどうやってこの部屋に戻ったのか、知っている限り教えてくれ。それによって話しが少し変わってくる」

鼻息荒く近寄ってくる天羽をどうとんだめる。

最近コイツのキャラが変わってきた気がする。

こんな騒がしい奴じゃなかったはずなんだが。

若しかしなくてもパフェの影響だろうなあ。

はあ、と溜息を吐く。

だが不思議と気疲れはしなかった。

「カー君達はねえ。私達の家の前に倒れてたんだよ」

突然扉が開き、寝巻姿の姉貴が現れる。

寝不足の所為か妙に血色が悪い。

まるで病人の様な青白さになっている。

「華蓮っ！！　そんな体なんだ、まだ寝ていないと」

慌てて天羽が姉貴に近寄るが、手で制される。

そんな体。

大よその予想はつくが、もしかして何かあったのかもしれない。

「大丈夫………　なのか？」

「大丈夫だよ。ちよつと結界張るのに大量の霊力と血を700cc程使っただけ。それにこれだけ騒がれたらいやでも目が覚めるよお」
パタパタ手を振りながら何でもない様に装う。

そんな顔を真つ青にして言っても説得力ゼロだ。

それにしても700ccか。

魔術関連で血液を使う事は多々あるが、流石にこれは量が多すぎるな。

単純計算で姉貴の体内の血液量の5分の1位の量だ。

ショック症状が起きるギリギリまで使用した……と言った所か。

そんな状態で生命力とほぼ同一である大量の霊力を消費して大丈夫な訳が無い。

寧ろこうして起きているだけで驚嘆に値するポテンシャルだ。

「命が掛かってるんだもん。多少のリスクには目を瞑らなくちゃ。」

——で、話し戻すけど、まずは私達がカー君が出て行ったあとにした事を話すね。先も言った通り結界を張った訳だけど、時間も用意も何にもしてない訳だからそんな小難しいのは作れなくて隠密性が結構低いタイプになっちゃたわけ。想定している効果範囲はこの階全て、で期待する効果は領域の誤認、かな。こっちはおまけみたいなものだけど」

天羽に用意してもらったクッションにポフッと座ると、紙飛行機を何処からともなく取り出して俺に飛ばしてきた。

ゆるやかな曲線を描き、俺の手に収まる。

何の悪ふざけかと紙飛行機を広げてみるとうちのマンシヨンの設計図だった。

結構重要なものじゃないのか、と思いながらもパフェと共に目を通す。

別段変った事は書かれていない。

強いて言えばそう、赤ペンでぐるっと大きく丸が書かれ、『けっかい』と書かれている事くらいだ。

非常に馬鹿にされている気がするのは気のせいだろうか。

思わずくしゃくしゃに丸めて捨てたくなる衝動を抑え、姉貴に視線を戻す。

姉貴はたまにこれで本気の時があるから性質が悪い。

そして捨てた後さらっと重要な事が書かれている事をもらすのだ。

「その領域の誤認とはどの程度の精度なのじゃ？」

パフェは設計図を一瞥しただけで視線を外すと姉貴に問いかける。

「ん、この階の特定の個室に用が無いのならその一つ下の階が最

上階と認識される程度、かな。カー君達が普通に運ばれてきたから結構怪しいけど」

「俺達を運んだ奴は、どうやら俺の事を知っているらしい。だから引つかからなかった、かもしれない」
気休めかもしれないが一応言っておく。

この中にいる面子で誰も言葉の通りに信じた奴はいないだろう。だからと言ってネガティブになっていてもはじまらない。

「そっか……。まあ、その所為と言うかお陰と言うか、こうしてカー君が戻ってこれた訳か。不幸中の幸いとでも言うべきかなあ」
姉貴は俺だけに解る様にちゃんとウィンクして微笑んで見せる。

それを見て、ああ成程と納得した。

恐らく姉貴はわざと誤認の領域を甘くしたのだろう。

俺達が捕まり、人質となる可能性とかも考慮していたに違いない。そう考えなければこの結界はあまりにもずばら過ぎる。

如何に時間も準備も無かったからと言って隠匿効果を蔑にすることなどあり得ない。

発見されない以上に優秀な防御機能など存在しないのだから。

「で、カー君の方はどうだったの？ 状況から察するにかなり状況悪いと思うんだけど」

「ああ、それなんだが――」

校内での出来事、夢渡とやりあった事、覚えている限り詳細に伝える。

ノイズの事やもう一人のパフェの事は上手く説明できる気がしないので、誤魔化す事にする。

それに、パフェ自身ももう一人のパフェとの事を知っているとは限らない訳だし。

パフェに視線を送ると首を傾げて見つめ返された。

何れにせよ、今ここでする話題ではないだろう。

「ん、話を聞いてて思ったんだけど、別に手を組まなくてもそのカー君の友人の神様にパフェちゃんが追っている終焉神を退治し

てもらふ事は出来ないのかな？ パフェちゃんを脅威と見なすんだから、その終焉神もかなりの脅威となるはずなんだけど、どうなのかな？」

「恐らくこちらが頼まずとも排除しようとはしておるじやろ。じゃが、襲いかかってくるものを撃退するのは簡単じゃが、逃亡しているものを追撃するのは難しい。加えて彼奴らの目的は学校を護る事じゃ。大逸れた狩りなどするはずもない」

「結局自分の身は自分で守るしかない訳かあ」

「そう言う事じゃ」

一同はあ、と溜息をつき、物思いにふける。

事態は好転するばかりか、敵が増えただけという始末。

敵の敵は味方と言うが、敵は敵なんだから敵以外の何物でもない。たとえ一時手を結ぼうが互いの敵を倒せば残る敵は己らとなる。

相討ちになるか、消耗したところを漁夫の利としたいところだが、両方から狙われる身としてこれは現実逃避以外の何物でもないだろう。

いや、同時に俺達を攻撃させるようにおびき出せば不可能ではないか。

やるとしても取り敢えずまだ会話が成り立つ夢渡達から交渉を始めるか。

「ところで、さっきから気になってたんだけど……………それ何なのかな？」

姉貴は俺とパフェの格好を指差す。

当たり前の様にスルーしていたが、やはり姉貴でも気になっていたようだ。

「何って……………何？」

姉貴からパスされた質問をパフェへとトスする。

何なのかは俺が知りたい。

「じゃからジエノサイド……………って待て主様。デコピンはやめよと言っておるじやろ」

ジェノと言った辺りから左指をパフェの後ろへ持つていくがあと一歩のところで勘付かれ、ふよふよと逃げられる。

「だったら真面目に説明しろ」

「じゃから真面目に戦闘形態ジェノサイドと言っておるじやろうが。今は主様の治癒の為に非戦闘時にこの形態になっておるが、これが吾らが神と戦う時の本来の形態じゃ。吾らの心臓でもある主様を護るため、吾の体と主様の体を殆ど融合させておる。吾が斯様な姿をしておるのもその所為じゃ。ま、先の闘いでは同調がうまくいかずに中途半端な形になってしまったから驚くのも無理はないがの」

不機嫌そうに俺の心臓の上あたりを掌で突く。

「怪我と言っても主様の体はほぼ無傷じゃ。これは主様に与えている左腕と両足のメンテナンスの様な物で、主様の治癒が終われば自動で解ける故何の心配いらぬ」

それを聞いて仏頂面だった天羽が鼻を鳴らす。

天羽も多少は俺の事を心配していたのだろうか。

「……………」

そんな天羽をしばらく見つめていると殺意を込めた視線で睨み返された。

どうやら気のせいだったようだ。

それにしても治癒……ね。

何の違和感も無い左手を動かす。

夢渡によつて切り裂かれた左手も再生しているし、筋肉痛などの肉体の酷使後ダメージも無い。

起きた時に既にほぼ完治している様な状態だったから、てつきりも一人のパフェに体も魂も乗っ取られて今度は俺がパフェの体に寄生しているのかと思っていたが、そう言う訳ではないらしい。

しかし本当に戦闘形態だったとは。

何と言うか、形だけ感がして何とも気が乗らない。

漫画のキャラのコスプレをしている様だ。

とは言え、冗談ようだがこれが俺の覚悟に対するもう一人のパフェ

の答えなのだろう。

そうなるとパフェも何の疑問も無くこの形態をとっている事から、やはりあの時の事はパフェも知っているのだろうか。

「何にせよ、今夜はもう良いかな。細かい打ち合わせとかは明日の朝にでもすればいい訳だし」

あふつ、と可愛らしく欠伸をしながら姉貴は立ち上がる。

それに追従する様に天羽も立ち上がる。

何だかんだで結構長い時間話し続けたようだ。

それにしても欠伸の事とは言え実の姉に可愛いと言う形容詞を使うのはどうなんだろう、思う。

そんな事を考えていると視界に一瞬パフェが映る。

心なしかパフェが馬鹿にしたように笑った気がした。

「それじゃあ、カー君お休みい」

「ああ、疲れてる所起こして悪かったな」

間延びして小さくなっていく姉貴の声を聞きながら二人を見送る。

「ああ、そんなこと気にしないでいいよ。——あつ、それと……」

天羽を先に行かせ、首だけドアの間からひょこつと出すと。

「お帰り、カー君」

と言い、ちよろつと舌を出しながらすぐさま顔を引っ込めていった。

「ああ………ただいま」

俺が呟くように言くと、パフェは今度こそ馬鹿にしたように笑った。

その16（後書き）

どうでしたか、その16。

思った以上に時間が掛かってしまい、前話から1カ月近くかかってしまいました。

日常パートは書いて楽しいのですが語彙力と知識が無いので苦手です。

その所為で会話文だけで文章を作ってしまうがちになります。他の方はどうやって作っているのでしょうか、気になります。何はともあれ読んでくださりありがとうございます。

その17

「——主様、まだ起きておるか？」

町が寝静まり返る暗闇の中、俺はぼおつと天井を見つめていた。既に戦闘形態は解け、ただ漠然と今日起きた事を想起していた。パフェから声が掛かったのはそんな時だ。

「ああ、起きている。と言うより一向に眠気が起きない」

俺は部屋の片隅へ返事を返す。

そこには暗闇に慣れた目を以てしても見えない黒い闇があった。

「吾との同化がすすんでいる証拠じゃ。神に近くなればなるほど睡眠など必要とせんからの。今は恐らく緊張もあるじやろつが、あと数日もすれば眠気はおるか、疲れすら感じる事が新鮮に感じる様になるじやろつ」

今もなお影として俺と繋がっているが、現在パフェは普段の人型ではなく異形の闇へと身を変えている。

何でも休む時はその恰好が一番寛げるらしい。

「そうらしいな」

パフェに気取られぬよう極力抑揚を抑えて声を出す。

徐々に己の体の変貌していく事に恐怖が無いと言えばウソだ。

徐々に人をやめていく過程に後悔が無いと言えばウソだ。

人間をやめて不老不死で生きていくなんて想像もできないし、またそこまで生きてやるべき夢も目標も無い。

そう言った意味で俺はどうやら人生の分岐点、運命の分かれ道を間違えたのかもしれない。

だが、それでも俺は同じ分岐点に辿り着いたのならこの選択をするだろう。

他の誰でも無く自分で道を決めると誓ったのだから。ならばその道がどれほど険しかろうと進むしかない。

「——吾は、主様に謝らなければならぬ事がある」

普通の少し小馬鹿にした様な声音で無く、ある種の老人が出す様な疲労に満ちた声で告げる。

何のことだろうか。

思い当たる節が無い訳ではないが、こんなに思い詰める程の事ではないはずだ。

「第六神と戦った時の最後、あの時吾は第二契約を結ぼうとしてやめた」

「それがどうしたんだ？ 結果的にあの判断は悪くなかったはずだ」
そもそも夢渡はあの時俺達をすぐさま殺そうと思う気など毛ほども無かったはずだ。

そう思えるほどあの時俺達と夢渡の間には力の差があった。

だからベストじゃないにしてもパフェの判断はベターだったはずだ。
「そうじゃな。結果的には悪くなかった。寧ろ後から見れば最善の判断じゃったじゃろう」

「なら尚更謝る必要はないはずだが」
闇が身動きをするかの様に震える。

恐らく首を振っている意なのだろう。

「じゃが、これはその時すべき最善の判断ではないのじゃ。吾はあの時警告を無視してでも第二契約を結び主様を連れて離脱するべきじゃった。解るか主様、あの時吾は主様の生死を敵の手に委ねてしまったのじゃ。主様を護ると謳ったこの吾がじゃ。情けなくて腹立たしくて腸が煮えくりかえっても足りぬ。伴侶と、番と認めた者を敵に預けてしまったのじゃ。詫びても詫びきれぬ」

本当に済まぬ、と言いパフェは黙りこむ。

俺がこの部屋で目覚めた時から異様に明るく振舞っていたが、あれはコレを見せない為のから元気だったのだろう。

案外今のパフェの姿も顔を見せたくないがための嘘かも知れない。
言っちゃ悪いが、こんな事にここまで真剣になるパフェの純粹さに少し驚く。

戦闘に関して言えば結果良ければすべてよしだ。

結果俺とパフェ共に大した傷も無く帰ってこれたのだから、ここま
で謝るものではないだろう。

「そこまで解っていないがらどうして第二契約を結ばなかったんだ？」
終わった事にこんな事を聞いても仕方が無いのだが、思わず聞かざ
る負えなかった。

まさか、夢渡の言葉に恐怖した訳でもあるまい。

俺がそう考えているとパフェから意外な答えが返ってきた。

「…解らぬ。第二契約を結ぼうとして主様の姿が眼に映った瞬間契
約を破棄してしまった。こんな理由で満足できぬじやろうが、コレ
が吾にとって嘘偽りのない事実じゃ」

これは少し予想外の回答だった。

なぜパフェは俺を見て契約を破棄してしまったのだろうか。

目を閉じ、真剣に頭を捻る。

幾つもの考えが浮かんでは消えるが、どれも辻褄が合う考えとは言
いにくい。

俺の為、と自惚れたところだが、それならばパフェは第二契約を
結んで逃亡が最善と言っている。

ならばやはり恐怖なのだろうか。

それもまた己が死ぬ事すら恐れぬパフェが恐怖を感じるなど考えに
くい。

迷宮入りしかけている思考を一旦隅へ投げ飛ばし、現状の対応へと
思考を戻す。

俺はどう答えたものかと頭を捻る。

俺が気にしていない、謝らなくてもいいと言った所でパフェの気が収
まる訳でもないし、俺自身がパフェに負い目を感じている所を素直
に話しても傷の嘗め合いにしかない。

そんな事俺もパフェも望んじやないだろう。

「—— お前は俺がもう一人のお前と会った事を知っているか
？」

「会った事は知っておる。吾が許可を出さなければアレに会う事は

出来ぬからの。まあ、会話の内容までは知らぬが………それがどうかしたかや？」

突然の話題変換にパフェは困惑している……はずだ。真つ暗で前だか後ろだかわからないので確信は持てないがそれに近い感情を表している。

「あの時あいつは俺に自分たちが望むのは同じ対等な関係だと言っていた。ならあんたも俺を護るだけっていう対等じゃない条件は望んでないよな。だったらその誓いは無しにしよう。俺達は一心同体なんだろ？ 己の体を護るのに誓いなんていらぬはずだ」

「それは……そうじゃが」

パフェはバツが悪そうな口調で言葉を濁す。

理解は出来るが納得はできないのだろう。

「贖罪と言つてはなんだが、一つ答えてほしい事がある」

俺がそう言つとパフェは意外そうな顔で俺を見た。

そんなにらしくない質問だったのだろうか。

「吾に答えられる事なら」

一応納得した顔でパフェは答える。

ならばこの機会に聞きたかつた事を聞いてみよう。

今ならパフェの本音が聞けるはずだ。

「なんであんたは終焉神を追っているんだ？ 間引きとか言つ終焉神の目的じゃないあんたの答えが聞きたい」

もう一人のパフェとか、第二契約の事とか、今の俺の体の事とかいろいろ聞きたい事はあるが、俺はこれをまず聞かなければならないと思つた。

普通に少し考えればわかる話だが、こいつがこんなになつてまでこの世界に留まる理由が無い。

間引けなければ己が死ぬようなことも無いと言つていた。

恐らく大した強制力も無い義務に従つてやっているという上から目線な感じだろう。

そんな中、自分の命を分の悪い賭けへと賭す必要など何処にもない

のだ。

俺がいなければ生存できないとしてもだ。

死にたくないのであれば俺だけを連れてどこかに隠れた方がずっと効率が良いだろう。

そうしないのはなぜか。

それは恐らくパフェにも俺と同じで引けない理由があるのだろうと推察する。

夢渡はこいつを世界を喰らう悪魔だと言った。

確かにパフェには世界を喰らう悪魔になれるだけの能力があるかもしれない。

でも、俺にはパフェの目的が結果問わず本当に世界を喰らおうとしているとはどうしても思えなかった。

戦いの神と謳いながら妙に馴れ馴れしく、そしてこんな事で落ち込むほど純粹だ。

老獺で残酷な神かと思えば、慢心して殺されかけたり、殺す事を歯牙にかけないと思えば子供の様に己の行為を悔いる。

まるで子供のまま老人になったかのような移り変わりの激しさだ。

「目的………か」

パフェがいる辺りの闇が凝縮すると人型を模る。

「主様は『神』をどう思う？」

「神？ 天羽の様な存在か？」

突然出た質問にそのまま頭に浮かんだ天羽の存在を出す。

なんせ幼少から身近にいた存在だ。

俺にとって神のイメージは天羽抜きでは語れない位の影響力がある。

「そうじゃの、アレの様な存在でよい」

「どう思うか………か。」

考えた事も無かったな。

お家柄からか、それはただ漠然と生まれた時からそこにいる当たり前
前の存在。

超常現象と変わらぬ上位存在。

いつ生まれいつ消えていくかもわからないほぼ完璧に近い不死者。それとパフェの目的と何の関係があるのだろうか。

適度に疑問を織り交ぜながら連想ゲームの様に思考していく。

「この世で最も完全に近い存在で災害に近い、と言う感じだな」

俺は暫らく顎に指を当て、思案した言葉を簡単に整理しながら紡いだ。

「災害か。成程言い得て妙じゃの」

「それがどうかしたのか？」

パフェは俺の答えに僅かに笑みを見せると、片目を閉じた。

俺の言葉に対する答えを頭の中でまとめているのだろう。

こんな普通の友人同士がするような会話に知らず心が和む。

こうしている分には本当に人間と変わりが無いのだなと感じる。

この一件が片付いたら、これが日常になる日が来るかもしれない。

そんな日を夢想しながらパフェの言葉に耳を傾ける。

「主様達には間引きの話はしたじやろ。あの間引きは何のためにあると思う？ 神が間引く以上神の為に思えるかもしれぬが、あれは

寧ろ逆で神以外の生き物の為にある」

「どう言う事だ？」

「あの場にはあの小娘がいたから詳しくは言わなかったが、終焉神が殺すのは神だけじゃ。腕をふるい暴風を起こし、それに巻き込まれて人が死ぬ事があっても、まず終焉神にそれを起こす際に人を殺そうと思う思考は無いのじゃ。いやそんな事は関係なかったの。まずは神を間引く必要性から説明しよう」

パフェは窓辺まで歩いて行くと、カーテンを少しずらし、僅かに毀れ出る月明かりに手を晒す。

月明かりを受け普段よりもさらに白く見えるパフェの指は蛍雪の功にある、雪で集めた明かりの様に優しく反射していた。

「主様の言った通り神とは寿命の概念から解放された理想に最も近い生命体じゃ。通常生き物は強く長く生きる物ほど増えにくくなっている。食物連鎖でそうなるように調整されておるからの。数が

強さに比例するのならば、その生態ピラミッドの頂点に位置するのは何か。それは最も増えにくく最も死にくい神に他ならない」

「さて、ここでもう一つ先に説明しなければならぬ事がある。この世界のシステムは所謂『全は一、一は全』で構成されていると言う事じゃ。この世界の全ては方程式によって成り立つ。もつとわかりやすく言うと等価交換と言う奴じゃ。人が死ねば新たに人が生まれ、新たに人が生まれれば別に人が死ぬ。有り得ないと断ずるかや？ それが有り得るのじゃ。主様はこう考えておるのじゃろう。消えるのは幾らでも出来るが、増えるのが任意でない以上成り立たない。確かにそうじゃ、無から発生する生命体を考慮しなかった場合の話し、じゃが」

パフエは掌から墨で書いた様な蝶を出現させる。

その蝶はまるで生きているかのようにパタパタと飛び、俺の膝の上に停まった。

「それが神つてわけか」

ゆっくりと翅を動かし休む様を表す蝶を横目に返答する。

「まあ大規模な場合はそうじゃ。神や精霊は大量の生き物が死にその帳尻を物理的に合わせられなくなった時、その差分で発生するシステム構じゃ。ここで言う神は肉体を持たぬ神じゃが、その違いは割愛させてもらう。そのくせ生命が大量に発生した時にその神を消滅させる機構が存在しないと言う欠陥構造じゃ。まあ、当然じゃな。人は神の為にあるが神は人の為が無いのじゃからの。その結果死ぬ可能性のある精霊はともかく神ばかりが増える事になる。増える量など他の生命体に比べたら無いに等しいがそもそも減る量など更に皆無に近いからの」

ただ静かにパフエは語る。

まるで忌々しいのはこれからだと言う様に。

この話には続きがあるはずだ。

そう、これだけでは終焉神が間引く必要性など無いのだ。

確かに神が増えるかもしれないが減らないとは言っていない。

彼らが放っておいても確かに神は減少する。

神殺しと伝承に残る神話の様に。

「ならばどうしてお前達が間引く必要がある」

思考のままに疑問をパフェにぶつける。

「言っただじやろ？ 生命が大量発生した時に神を消滅させる機構は無いと。ならば大量に増えたプラス分何処かで減らさなければならぬ。どうするか、答えは簡単じゃ。生まれさせない、又は死にかけの者をすぐさま殺す。世界を変化させ、飢饉や天変地異などで環境を劣悪にすればよい。『全は一、一は全』帳尻を合わせようと思うのなら馬鹿みたいに値の大きい神より値の小さい生物を大量に殺した方が帳尻が合わせやすいと言う訳じゃ。そうするとどうじゃ、環境の変化など意にかえさん神は残り続け、それ以外の生物は増えようとすればするほど環境が劣悪となっていく訳じゃ。解るか主様？ この世界はの、都合よく神を作り永らえさせるために出来ておるのじゃ。再び一なる創造主へと戻る為の」

パフェがギュツと握り拳を創ると膝の上の蝶は一瞬ねじれ、空気に溶けて消えていった。

「じゃあ、お前達終焉神はそれを阻止するために存在している訳か。それがお前の目的か？」

うすうす違う気はするだろうな、と思いながらも一応尋ねてみる。

「まさか。考えてみればわかるじゃろ主様。吾ら神を創ったのは誰じゃ、創れるとしたらだれじゃ。その創造主以外ほかならん。創造主にとっては神すら己の為の機関にすぎぬ。終焉神はの、詰んだ状況を作り出さない様にするための駒何じゃよ。そうじゃの言ってしまえば具を焦げ付かさない為のお玉の様なものじゃ」

と皮肉った笑みでパフェは空中で何かを掻き混ぜるジェスチャーをする。

「そこまで解っているのならなぜ……」

「言っただじやろ？ 創造主が創りだした機構じゃと。それはあらゆるものがいつか滅びる様に何をどうしようも結果に変わりはないか

らじゃ、なぜならその滅びこそが主の復活なのじゃから。ならば諦めるか、主様がしたように吾も否じゃ。何をしても無駄、何もしくても無駄なら好きなように足掻くだけじゃ。目的と言ったな？

吾の望む目的は一つ」

パフエは息を吸い込み、一瞬だけ照れくさそうに視線を外すが、直ぐに俺へと視線を戻した。

「自由な世界を生きとし生ける物に。好きに生まれ、好きに死に、機構など関係ない自然の生命の在り方を、愛する自由を渡したい」
遠い眼をした綺麗な笑顔でパフエは目的を口にした。

「じゃからその為にもより多くの神を、終焉神を狩らなければならぬ。応急処置にもならんかもしれぬ、吾自身が世界を脅かす厄災と見なされるかもしれぬ。それでも吾は吾なりのやり方で世界の自由を護りたい。これでも元々は自由の神じゃからの、吾は」

これで自分の話は終わりだとも言う様にパフエは俺に背を向け、ベットに腰かけた。

やはり照れくさいのだろうが、何処か清々しい印象も受ける。

そんなパフエの少女じみた言動の所為か、ちよつとからかいたくなつてしまった。

「その割に随分と束縛する様な事を俺に言ってるよな。随分二重規範ドな神だな」

今までのパフエの言動はどちらかと言うと平等といった感じの言葉が多い。

よく自由、平等と並べて理念を掲げているが、この二つは本来対義語に近い関係ではないかと思う。

自由は拘束や強制などの戒めからの解放の意味をあらわしているのに対し、平等とは公正さ、つまりルールや条件の順守を前提としている。

まあ、何が言いたいかと言うと自由の神でありながら俺に対等を願うのは矛盾してないか、と言う事だ。

「何も可笑しな事ではないぞ。吾は世界の自由以上に己の自由を愛

しておる、ただそれだけじゃ。じゃから、吾は好きであれば好きである程そのモノの自由を奪ってしまうだけじゃ。お解りか主様？」くるりとこちらを振り向きながら犬歯を見せてながらパフエは意地悪く笑う。

俺は額を押さえながら大仰に溜息をつく、改めて自分がとんでも無いものと契約したのだと再認する羽目になった。

その18

道行く人々の視線が突き刺さる。

目を細め、険かな雰囲気でこちらをちらちらと見ながら俺の横を通り過ぎていく。

時刻は午前十時ごろ。

通勤ラッシュに鉢合わせなかったただけましと言えるが、それでもやはりこれは何の罰ゲームだろう。

ゲームや漫画に出てきそうな黒い東洋風の衣装を身に纏い、街中を闊歩している。

そして呪詛の様な刺青の入った右手を真剣に見つめ、眉間に皺を寄せ唸っているのだ。

誰が見ても変人だ。

俺も同じような奴がいたらお近づきになりたいとは思わないだろう。そして極めつけはそばに誰もいないのに何かと会話するように言葉を発しているところだろう。

もうここまで行くと警察に通報されるかもしれないレベルだ。

そんな事を考えながら右手に霊力……マナを循環させる。

ぐるぐるマナが回るだけで一向に心具が出来る気がしない。

「主様、雑念を捨てよ。そんな事ではいつまでたっても先に進まぬぞ」

と左肩辺りから声がする。

「解っている」

辺りに聞こえない様にぼそっと呟きながら俺はマナの循環を止め、息を大きく吐き出す。

どうしてこうなったのか状況を整理しよう。

朝、俺は先輩と学校へ向かった。

やはり夢渡達に目をつけられている状況は拙いという意見が俺達の中での総意だった。

現状交渉の材料が零に等しいので和平は難しいかもしれないが、それでも会う事によって何らかの糸口が見つけられるかもしれない。昨日の今日で夢渡を挑発するような行為もどうかと思うが、一応これでも俺は学生だ。

学生が学校に行って何が悪い、と言う逆切れに近い理論で踏ん返り、とまではいかないが夢渡に咎められたとしてもいい訳が立つ。とまあ、意気揚々と向かった訳だが。

「まさか俺まで入れなくなっているとはな
そつと溜息を吐く。

校門を抜けようとするなりあの時のパフエと同じように先輩にパントタイムショーを晒す事となってしまった。

予想外と言えば予想外だが、当然と言えば当然の結果だった。で、入れなくなってしまうた俺達は学校の件は先輩に任せて、街中で囷作戦兼修行中と言う訳だ。

街中で力も隠さずに力の放出の練習をしていればいやでも目につく。それで夢渡達を釣れるのなら、それはそれで最初の目的通りだし、パフエの追っている終焉神が喰らい付くのならば予定通りと言う訳だ。

問題があるとすれば今襲われたら俺は対処できずに忽ちやられてしまっただろうと言う事だ。

だからこそ囷として機能しているのだが、如何せん綱渡りが過ぎる。鴨葱どころか、刺し身が醤油と山葵を持ってうろつろしている様な美味しいと言うより胡散臭い状況だ。

まともな神経の奴ならば罨を警戒して逆に手が出せないレベルの無防備さだ。

罨を警戒して襲ってこないで、見張っている時間を利用して戦えるレベルまで強くなる。

有り得ないからこそ出来る心理をついた作戦だと思う。

実際はまあ時間が無いので全部同時進行すればよい、と適当なパフエの言葉から出た作戦なのだが。

「主様も意外と抜けておるの、まさかこんな体になってもまだ人間の扱いを受けれると思っておったとは」

にやにや笑いながらパフェは俺のほつぺたを突いてくる。

先程の俺の呟きをすっかりと拾っていたようだ。

何処にいるのかと言うと深夜の時と同じくデフォルメ化されておりアニメにいる妖精の様に俺の周りを漂っている。

周りの人間には感知出来なくなる様に術を施している所為で本当に妖精の様な存在になっている。

いい意味でも悪い意味でも。

「……当たり前だろ。こんな体も何もそう実感できるほどの時間はたつてない」

今現在戦闘形態とやらになっているが、体が軽くなり、感覚が鋭くなっている、程度にしか今のところ感じない。

恐らく統合がまだ取れてなく正しくやり取りが出来ていないのだろう。

「あまりちんたらしておる時間は無いぞ。いくら相手が警戒するからと言っても獲物が強くなっていくのをただ眺めている阿呆はおらぬ。また、罨が無い事を早々に見破った場合、ただちに襲いかかれる。焦る必要性はゼロじゃが、時間は無駄に出来ぬ。――

それでどこまで話したかの？」

「概念は原則一人一つと言った所だったかな」

俺は再び右手に力を込めながら返事をする。

心具を出す修行をしながら同時並行で概念心具についての講義もやっている。

耳を傾けながら意識を心具へと集中させると言うことらしい。
無茶を言ってくれる。

「そう、原則一つじゃが稀に二つ以上持つておる奴がある。かなり稀じゃが。で、話を戻すが概念^{コンセプト}にはただ一つの例外も無く完全上位互換が存在しない。どれも部分上位か相互互換になっておるだけで全てにおいて上と言うのはありえないのじゃ。ま、飽くまでこ

れは比較対象が同じ実力という前提じゃが。つまりじゃ、実力が拮抗しやすい終焉神クラス同士の争いになると何が優劣を分けるかは概念の相性となる訳じゃ」

パフェはグー・チョコキ・パーの書かれたプラカードを取り出すと右手と左手でじゃんけんをし始める。

「そこで重要になってくるのが求心型と遠心型。簡単に説明すると概念の掛かり方の分類の事じゃ。概念の掛かり方には二種類あって遠心型と求心型に分けられておる。字の如くじゃが遠心型は心具の外側に向かってルールを及ぼすタイプじゃ。対して求心型は心具の内側にルールを及ぼすタイプじゃ。こう、言葉で説明すると解った気になるかも知れぬが、実際に相手の型を判別するのは意外と難しい。相手の概念が解らないとそれが内にかかっているのか外にかかっているのか、全く判別がつかない場合が多い。例えば主様、吾はどっちだと思う？」

急に質問を振られ、半ば無意識に動かしていた足を止める。

パフェの概念は『浸蝕』だ。

パフェの心具であるあの闇に触れる物を全て飲み込む。

パフェの概念が作動するには何かに心具を触れさせる必要がある。つまり外に干渉して取り込んでいる訳だ。

だから心具の外に向かう遠心型のはず。

「遠心型か？」

「まあ、そう思うじゃろうな。実際吾に概念心具で体を無くした主様でさえそう思うのじゃからよっぽど何じゃろうが、外れじゃ」

×と書かれたプラカードを取り出し、掲げる。

用意周到と言うか、いつこんな物を用意したのだらう。

愉快そうに俺の周りをぐるぐる回るパフェを見て軽く息を吐く。本当にコイツいけると緊張感と言うものが無くなってくる。

「二択なので外した時点で答えは解っておるじゃろうが、こほん、一応言っておくと、正解は求心型じゃ」

「照れを咳で誤魔化す位なら始めから言わなければいいだろ」

「煩いぞ主様。吾はこうしてクイズを出すなど初めての機会なのじゃ。少しは堪能させてもらってもいいじゃろ」

口を尖らせながら のプラカードで顔を突いてくる。
今のパフェサイズに合わせたプラカードなので先が尖っていてちくちくする。

「え、主様が間違えた通り、二種の違いは解りにくい。それでじゃ、求心型、遠心型の違いが解る様図にしてみた」

パフェは新たにプラカードを出す。

そこには頭：正常 体：正常 腕：正常 足：正常

と簡単な人体の絵とその個所に呼応して書かれた表があった。

「例として『燃烧』と言う概念を用いる。まずは遠心型からじゃ」
そう言うのとパフェはプラカードを一枚めくる。

何処か紙芝居の様になってきた。

『燃烧』と書かれた人型が先の人体の絵の腕に触れている。

新たに出てきた人体にもそれぞれの状態が書かれており、頭：正常

体：正常 腕：正常 足：正常

となっていた。

「これで接触。これから概念による干渉が始まる」

更に一枚プラカードをめくると、そこには腕が燃えている人体の絵があった。

そしてその人体に呼応する表は…。

頭：正常 体：正常 腕：燃烧 足：正常

となっていた。

もう一つの『燃烧』と書かれた表は変わらず頭：正常 体：正常

腕：正常 足：正常

のまま。

「次は求心型じゃ」

再びプラカードのめくられたページを戻す。

先程と同じく頭：正常 体：正常 腕：正常 足：正常
とある。

ぱらっとパフエがページをめくる。

そこには先程の二枚目と殆ど変らないページがあった。

ただ、一つだけ変化している場所があり、『**燃烧**』と書かれた人型の表の腕が

腕：**燃烧**

となっていた。

そして接触。

腕が燃えている人体の表は

頭：正常 体：正常 腕：火傷 足：正常

となっていた。

そこでパフエはプラカードをしまい込む。

「つまりじゃ、遠心型は己の概念ルールに触れた場所に上書きする事で相手に干渉して直接変化させる。求心型は己の概念ルールによって変化した己の体が触れた部位が物理法則にしたがった結果、変化した。と言う訳じゃ、理解出来たかの？」

眉間に中指を当て、パフエの言葉を反芻する。

「えーっと……あんたの言った言葉に当てはめるなら……あんたの概念ルールはあの闇にその性質を持たせる事によって触れたものをバラバラにしているのではなく、取り込んだものが結果バラバラにされている。と言う事なんだな？」

心具を出す特訓を忘れて回答する。

何となく言っている事は解る。

要するにこの二つは結果が同じでも目的は違うと言う事だろう。

パフエの例にあった『**燃烧**』で考えると遠心型は相手の状態を『**燃烧**』にさせることが目的で当然相手は燃える。

求心型は自分の状態を『**燃烧**』にさせる事が目的であって相手を燃やす事は副産物的なものでしかない。

と言った所だろうか。

パフエの概念『**浸蝕**』で考えてみても。

相手の状態を『**浸蝕**』にするのか、自分の状態を『**浸蝕**』するのか

の違いで、パフェは後者であると言っただけだ。

「……………」

相手の状態を『浸蝕』

相手は削られる。

自分の状態を『浸蝕』

自分が削られ続けている状態。

つまりミキサーの様な物、か。

しかし外から見ればどちらも黒い布。

触れれば削られる。

少なくともパフェの概念を見分けるのは無理じゃないか？

「取り敢えず解ったと、思う。だからこの二つを見分けて何のメリツトがあるか教えてくれ」

迷宮入りしそうな思考を放棄し、役に立つであろうかどうか先に選別する事にする。

真面目に考えて理解し、判別出来る様になったところで

『いや？ ただ二種類あるだけじゃが？』

とか言われた時には目も当てられない。

「そうじゃな、まず遠心型と求心型の特性は先に話した通りじゃが、神に対する影響は話しておらんと思う。その前に契約の話になるのじゃが何処まで聞いておったかの？」

「契約を結んだ者は概念心具以外の攻撃を殆ど受け付けなくなる。

一応物理攻撃も効くが、異常なレベルで硬くなる。あと記述、世界の法則の改竄、くらいか」

「ふむ、その記述についてまずは述べるか。契約を結んだ時の記述の改竄についてじゃが、前にも述べた様にこの世界の事柄は万事が式で成り立つ。もっと言えば全ての事象はこの式を経由しなければ起こり得ない。これは例え終焉神であろうとも完全に突破する事はほぼ不可能じゃ。どれだけ強い神であろうとも『理』による補正をかけられては規模の大きい怪物程度まで下がり下がつてしまう。じゃが、主様も見た様に神は凡そ物理法則を無視している。先程式を突

破するのはほぼ不可能と言っておきながらじゃ。その理由が記述にある。この世は式で成り立つと言ったが、それにはまずその式に代入する為の情報、記述が必要じゃ。それが所謂アカシックレコードなどと呼ばれる情報世界の事じゃ。そこには全ての存在の記述の情報^ルが詰まっておる。世界はそれをもとに種族や環境、血統や物理法則の補正をかけて式に代入する。実はここに付け入る隙が存在する。式の改竄や無視は難しい、が、代入する己の値ならばまだ干渉が出来る。それを安易に可能にしたのが契約じゃ。契約とはその情報世界の記述を無理やり固定し式に代入できるようにする神技じゃ。じやから神は物理法則には囚われんし、物理的に有り得ない耐久を持つ事が出来るのじゃ」

「で、それと求心型、遠心型と何の関係があるんだ？」

「せっかちじゃのう、それを今から説明すると言うのに。先も言った通り神は契約により記述を固定化している事から途轍もなく強固じゃ。それこそ普通の心具ですら殆ど傷が付かないほどのに。ここで概念心具によるダメージ^ルの与え方が重要となってくる訳じゃ。まずは遠心型、これは概念^ルを相手の固定化された記述に上書きしながら攻撃することが可能じゃ。即ち『燃烧』の場合、相手が氷であれ、不可燃物質であれ、またマグマや爆炎などであってもその上から『燃烧』する事が出来ると言う訳じゃ。次に求心型じゃが、こちらはそうじゃの……遠心型と比べて言うならば正攻法じゃ。遠心型が相手の記述を己のルールで上書きして攻撃するのに対して、求心型は己の概念^ルにより自身の記述の固定化をさらに強固にし、己の硬さで相手の記述を削る事によってダメージを与える。遠心型と比べそのダメージは微々たるものじゃが強固さで言うなら求心型が遥かに上じゃ。吾で言うならば全力時の吾は遠心型以外の概念^ルでは全く削れ無くなる程硬い、と言えはわかるじゃろうか？」

パフェは今現在^ルは求心型でも普通に削れるがの、と付け加えた。パフェの硬さの秘密はここにあった訳だ。

「ちよつと待て、昨日戦ったあいつ……第六神はどつちなんだ？」

純粹な疑問と言うか、今後の単純な問題。

もし夢渡が求心型、第一契約の時点でパフェがあれば、この先遠心型の第二契約状態と会った時、攻撃を耐えられるのかと言う疑問だ。

今俺達が一番掘り所に行っているのはパフェの耐久力の高さだ。

下手な攻撃では死なない以上粘り勝ちと言う選択肢が生まれる可能性がある。

「主様よ、あの時吾が言った言葉を忘れたかや？ あの時吾は」

パフェが言葉を言いきる前にあの時の言葉が脳裏に過る。

『奴のルールは自身を最強にするタイプじゃ』

そう言えばそんな事を言っていたな。

夢渡のあれは求心型と言う意味だったのか。

「主様よ、心配になるのは解るが、相手が遠心型であろうとも求心型であろうともさして脅威は変わらぬ。遠心型ならば一発逆転のチャンスが生まれ、求心型ならば粘り勝ちが狙えるだけじゃ」

「それはつまりネガティブに考えれば遠心型なら一発でやられる可能性が出て、求心型なら一発も通らない可能性もあるってことだろ？」

俺がそう言うつとパフェは渋い顔をする。

「解っているさ、恐れて対策ばかり考えても勝てない事くらい。相手の獲物にばかり気にして護りに目を向けるだけじゃ勝機は見えてこない。あんたの言いたい事はそう言う事だろ？」

「う…む。そうじゃが……」

パフェは何所か納得いかない顔で歯切れの悪い言葉を残す。

「次は第二契約について教えてくれ。この先相手が本気になればそれと見える事になるんだろ？」

「ああ、なる。どううまく立ち回ろうが第二契約を結ぶ／結ばれる事になるじゃろう」

パフェは顎に手を当てて俺の目と鼻の先で円運動を開始し始める。目の前でぐるぐるとやられて目障りなことこの上ないが、邪魔をせ

ずに俺も意識を心具の方に戻す。

ついでに止めていた足を動かし始める。

しばらくするとパフエがピタツと止まる。

「簡潔に説明するとじゃな。第二契約と第一契約の違いは戦術核と戦略核の違いと同じようなものじゃ。」

戦術核と戦略核の違い。

この二つを明確に区分出来る人間などいないだろう。

そもそもの戦術と戦略の違いが規模の大きさの違いと言う曖昧な定義しかない言葉だ。

何処から何処までが戦術で何処から何処までが戦略と言った境界線が無い以上曖昧になるのは当然だ。

詰まる所パフエは第二契約は規模が大きくなっただけと言いたいのだろうか。

「概念心具第一契約『SIN』は吾らに言わせれば対神兵器、普通の神の感覚から行くと対神軍兵器と言った所じゃ。じゃが、概念心具第二契約は違う。明確に対国兵器として存在する。主様は不思議に思わなんだか？ 触れれば概念干渉出来る概念心具がなぜこんなにも小さいのかと。心具の重さの差など大したものではない以上どうやっても馬鹿でかい獲物を振りまわす方が有利じゃ。ならば何故しないのか、心具の濃度が薄くなるデメリットもあるが、一番の理由は対神兵器じゃからじゃ。『SIN』は一度に数体の神と戦う様にしか想定されておらん。国と戦える様想定された概念心具である第二契約があるのじゃ。無駄に大きくする必要はない。それと勘違いしてほしくないのじゃが、光の巨人の様に戦闘の規模が大きくなるだけではないからの？ 第二契約の最大の利点は記述干渉の領域の拡大じゃ、干渉の速度も深度も範囲も段違いに上昇する。理解出来たか？」

「要するに第一契約のパワーアップ版と言う事だろ。用途、用法は違うけれど根本的な部分は変わらない。詳しく説明してくれるのはありがたいが、やはり回りくどすぎる」

自分で訊いててなんだが、いい加減げんなりしてきた。

先程の求心遠心のように聞いてて今後の戦い方に影響しそうな事柄は兎も角、今回は聞いて納得するだけの事柄だ。

大部分カットでもいい気がしてならない。

説明を受けれている側で我が儘極まりないが、なんせ俺達には時間が無いのだから。

「――主様。少し待て」

そう文句を言おうとした俺をパフェが低い声で止める。

その声は先程の様な浮かれた調子は一切無く、警告の色合い濃い声だった。

慌ててパフェを見、その視線の先に焦点を合わせる。

『KEEP OUT』

目の前の路地裏の入り口にはそう黄色いテープで張られていた。

夢遊病の様に目的も無くふらふら歩いていたせいで気付かなかったが、ここは昨日夢渡と戦った場所だった。

あれだけ派手にぶっ壊したのだ。

事件にならない訳が無い。

今朝の新聞に『水道管破裂か？』

と小さく乗っていた。

どう考えても水道管が破裂して出来る傷跡ではないが、そこら辺は恐らく夢渡達がうまくやったのだろう。

話題性としては薄いかもしれないが、昨日の今日出来た現場をこんなテープだけで放置しているのだろうか。

警備が杜撰すぎるのが気になるが、それがパフェの気にしている事ではないだろう。

「どうした？」

出来るだけ自然な動作で黄色いテープに近づきながら、パフェに小さく尋ねる。

「今、主様が昨日あったという教師が潜っていた。ほんの一瞬視界に入った程度じゃが、まず間違いないと思う」

パフェには昨日学校で会った人物の写真を見せてある。

夢渡以外には見たことが無い、と首を振っていたがそれだけで安全だと除外するのは早計だろう。

「怪しすぎるな。畏じゃないのか？　こんな時間に教師が歩いていたらまず間違いなく怪しまれる事は解っているだろ」

夢渡の仲間で後処理中、と考えられなくもない。

校内で会った3人の中でもあの教師が一番怪しかったのだ。

かなりの確率で終焉神の関係者と考えていた方がいいだろう。

夢渡達と関連性がある可能性は高い。

が、迂闊に近づくのはどうかと思う。

夢渡の仲間なら俺の存在に気付かずに、わざわざパフェに見られるという失態を晒すだろうか。

奴がパフェの追っている終焉神だとしてもそうだ、わざわざ姿を見せる理由なんて一つしかない。

だがもしこれが単なる失態であるのなら、俺達は絶好の好機にいる事になる。

難しい顔で考えているパフェの様子を窺う。

「……………畏か。いや、それは解っておる。問題なのはコレを追う事が畏なのかコレを追わない事が畏なのか、と言う事じゃ。単純に考えて自分を囷にして畏を張っていそうな人物を釣って畏にかける時、己を追わせて畏にかからせようとするかや？　もっと言うとな張る張りそうな人物がこんな安易な畏に引っかけり、のこのこついていくと考えるか、と言う事じゃ。畏とは相手の思考を読み、その先にかけるものじゃ。じゃから寧ろこの場合、こうして考え込むこと自体が……………」

と言いかけてパフェは止まる。

その視線の先は新たに現れた二人組に目が向けられていた。

そう、俺達はまんまと嵌められたのだ。

パフェが奴の姿を確認してしまった時点で最早畏にかかったも同然だったのだ。

その18（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

今回は説明回でした。毎度毎度四千字くらいに収めようと思うのですが、あれやあれやと書いているうちに話しの閉じ方が解らなくなり、六千とか八千になって時間が凄く掛かってしまいます。ええ、これは大体パフェの所為です。

皆さんはどのくらいの字数が話しごとに読みやすいのでしょうか。筆者は四千字くらいが読みやすいのでそのあたりを目安にしていますが、どうなのでしょう。

なお、感想などがあれば筆者のモチベーションが上がるので、どんなことでもいいのでよろしく願います。

その19

「こんな所でなにしてるん、パフェ？ そんな状態でこの街歩いとつたら死ぬで」

散歩でもするかのように片割れの少女がこちらに歩いてくる。
アイスブルー薄氷色の髪に特徴的なウサギのロップイヤーの様な帽子。

それに同伴する男が一人。

「死ぬ？ 適当な事ぬかすんじゃないやねえーよ、殺されるの間違いだらうが」

男の方はスラリとした長身の体格に胸まで伸びる黄褐色の長髪、猛禽類の様な鋭い眼でこちらを睨んでいた。

脳裏にいつぞやの光景がフラッシュバックする。

こんな奴ら忘れようが無い。

紅天と一緒にいった店で見たあの時の二人だ。

前回と違い能力が中途半端に神に近づいた所為で、二人から漏れ出す神気が痛いくらいに感じる。

特に薄氷色の髪の少女の方。

コイツはやばい。

何がやばいかよく解らないが、こいつの攻撃は喰らいたくない。

こんなに膨大な存在圧を示しているのに、ここまで近づかなければその存在を感じる事が出来ない。

存在がでかすぎて常に『世界』から修正が入る所為で、直接でしか情報を感知する事が出来ないのだ。

間違いなくこいつらは終焉神だろう。

一人相手にするだけでもラスボスの様な大変さなのに次から次へと終焉神が出てくるのはどう言う事だ。

まるで趣味の悪い物語の生贄に選ばれたような気分だ。

そう『どうあがいても絶望』と銘を打たれて。

『――』

——っ！？

そんなバカの事を考えた瞬間、ノイズと共に脳裏に一瞬一本の槍が映る。

何だ今のは？

心臓が刺されたかのように痛みを伴って激しく鼓動する。

無意識のうちに距離を取ろうとしてか、後ずさる。

「おいおいおい、何シカトして逃げようとしてんだ？ 斬り殺されてえのか、餓鬼」

「っ！？」

いつの間にか男が左横に出現しており、胸倉を掴まれる。

そしてそのまま宙づりに持ちあげられる。

その瞬間意識は現実へと舞い戻る。

何だ？

今どうやって俺の横に出現したんだ？

動く素振りはおるか、視界から消えた事に真横から声をかけられて初めて気付いた。

「くっ！！」

男の手を解こうと両手で掴むが、ビクともしない。

幾らまだ力の使い方が慣れていないとはいえ、この差は冗談じゃない。

「ふっ！！」

両腕の筋肉を限界まで膨張させ、腕を引きはがしにかかる。

が、万力の様な力で締めあげられていないのにも拘らず、男の腕は空間に固定されているかのように僅かな震えすら起こさない。

「おい餓鬼、病人じゃねえんだからもつと力籠めろや。こんな程度じゃ……」

と男が言いきろうとした瞬間、俺の服からウ二の様に黒い刺が無数に突き出る。

長さにして2、3mだが初速は眼で追えないくらい早い。

この服はパフェの心具で出来ているので伸縮自在で盾にも槍にも使

える優れ物だ。

俺も一応操作できない事はないが、今回は俺ではない。

「何の用じゃ、第七神ベイグウォード、第三神ミュールヒル」

パフェが少女とその隣にいつの間にか戻っていた男を睨みつける。

俺は胸元に手を当てながら呆然と縮んでいく刺を見つめていた。

まただ。

また男の行動が見えなかった。

いつ胸倉を放されたのかもわからない。

気が付くと解放されていた。

あんな至近距離でパフェが攻撃したのにも拘らず、男の服にすら掠った様子はない。

ますますもって厄介だ。

コレを見た今でさえも俺は男と少女どちらと戦いたくないかと言え
ば、少女の方だからだ。

だからと言って男の方も現状勝てる気はしない。

どうしたものかと悩みながらも、注意深く二人の仕草を観察する。

「ああ？ 用？ なんもん必要あんのか？ —— 終焉神おれらの闘いに理由がいんのか？」

「用なあ……、ここらへんで結構大きい神気感じて追つてみたん
やけど、失敗やわ。出しに使われて逃げられたし」

二人とも同時に返答しようとして声が重なる。

お互いがお互いに好き勝手に喋ってるせいで所々しか言葉を拾えない。
い。

「むっ！」

「あ？」

一瞬静寂。

——そして。

「っっ！……！！！」

ベイグウォードとミュールヒルはお互いにぎろりと睨むと額と手を
擦り合わせる様に掴み合い、ぎりぎりと錨迫り合いを始めた。

あまりの突然さに呆然とする。
仲間割れ……なのだろうか？

パフエの横顔を盗み見る。

腕を組み、難しい顔をしている。

何か考え事をしている様だ。

視線を二人に戻す。

「なあ、今うちが喋ってる途中やったよなあ？！　なんでそこに声被せるん？！　アホちゃうか、レディーファーストって言葉知らんのか、ボケっ！！」

「レディーファーストだあ？　虚偽も大概にしるや婆っ！　乾物や干物より皺くちやで雄雌判別できねえ前時代のオーパーツの癖に適當な事ぬかしてんじゃねえよっ！！」

「ああっ？！！　もう一遍言ってみるや、犬っころっ！！」

神気と神気がぶつかり、大気を震わせている最中、俺は呆然とパフエは思案顔で観戦していた。

今にも殺し合いを始めそうな勢いで、逃げる絶好の機会に思えるが案外そうではない。

それと言うのも二人の罵倒はヒートアップしているが、場の空気は反対に研ぎ澄まされて嵐の前の様な状態になっている。

今一步でも動けば二人の矛先はこちらに向く事は目に見えている。

もし逃げるとしたら殺し合いが始まってからだろう。

それにしても……。

「終焉神ってどいつもこいつもこんな馬鹿なのか？」

パフエにだけ聞こえる様に思念を飛ばす。

原理については省略するが、パフエ専用のテレパシーだと思ってくれればいい。

それはそうとして、呆然と観戦して出た感想がこれだった。

仮にも敵を前にしてこれは無い。

パフエの時もうつすらと思っではいたが、慢心し過ぎなのではなからうか。

「まあ、馬鹿で愚かなのは認めるが間抜けではない。このまま放っておいても逃げられるとは思わぬ方がいいぞ。特に第七神……男の方じゃ。概念^{ルル}が厄介なのは第三神の方じゃが、事逃げるにおいては第七神ベイグウォードを相手にするのは酷く分が悪い」

「さっきの突然現れたあれか？ ワープでも出来るのかこいつは」
手品の様に突然現れ、消えた光景が思い出される。

間近で二度見ても解らなかった第七神の出現。

見えなかった以上考えられるのは時間を止めれるか、ワープできるか、超速で動けるか。

変則としては相手に記憶させないつてのも考えられる。

が、求心型のパフェと共有する体を持つ俺に全く気付かれずに概念干渉出来るとは思えない。

ならば、残るはワープできるか目にも止まらぬ速さで動けるかの二つ。

どちらが関知しにくいかと言えばワープなので、一先ず聞いてみた。
「空間跳躍とは違うの、あれは簡単に言えば超加速の部類^{ルル}の概念じゃ。最も先程のは概念など使ってはおらぬかの」

「どう言う意味だ？」

「そのままの意味じゃ。先程の空間跳躍に見えた移動速度がこやつ
の素の速度じゃ。なんせまだ吾が眼で追える速度じゃったからの。」

———
なににせよ、ここは上手く交渉して潜らねばなるまい。何れ戦うにせよ今はまだこやつらとは戦える時期ではない」

相も変わらない無力さを苦々しく思いながらもパフェの言葉を聞き、二人へとフワフワ近寄るパフェを見送る。

それにしても概念抜きであの速力か。

あれから更に加速すると言うのであれば、概念ありで追いかけれれば地平線の先であろうとも追いつかれてしまっただろう。

如何に自分の認識が甘いかを再確認する羽目となった。

「痴話喧嘩もそれくらいにしたらどうじゃ」

「「あ？」」

二人にパフェは同時に目線と殺気と言葉を投げかけられる。

火に油を注いでいるのだが大丈夫なのか。

俺は一拳一動見逃さない様に3人を見つめる。

「別に何も何もないのじゃろ？　ならば吾らはこれで帰らせてもらう。後は好きに二人で乳繰り合っておれ」

そうやってパフェが踵をかえす。

いや、かえそうとしたその時。

「なあ、何をそんなに焦ってるんパフェ？　——　そんなに

その子が大事なん？」

激情していた顔は何所へやら、そこには妙に冷めた目をした第三神がいた。

その眼を見た瞬間、心臓が鷲掴みされた様に不規則に動き出す。体があれと向き合う事を忌避している。

けれど心はあれと戦う時を愉しむかのように凪いでいる。

この自己矛盾はなんだ？

何がそうさせるんだ？

増えるしこりを振り払い、パフェの返答を静かに待つ。

「……………」

パフェは答えない。

答えを悩むような素振りでも無く、黙秘が答えだと言わんばかりの勢いだ。

「……放せボケ」

一方的にミュールヒルはベイグに言い捨てると、弾く用に手を振り払った。

「わざわざうちの事挑発気味にからかって、戦う雰囲気にしたくなかったんやろうけど、何なん？　第二神様がその子にそこまでする価値があるん？」

「止むに止まぬ事情があるのじゃ」

パフェの言葉を聞き、ミュールヒルは真横に拳を突き出す。

突き出した手は何もない空を殴り、静止する。

が、粉碎音と共にその先にある建物が崩壊した。

「へー、それって自分と命共有してるから護らなあかん、みたいな戯言ちゃうよな？　——　そんな必要無いもんなあ。そんな状況なれば、あんたならその子の存在もろとも吸収すればええねんから」

薄く笑みを浮かべると、ミュールヒルは俺へと視線を合わせる。

道端の雑草を見るような眼つき。

お前は騙されているんだと暗に言いながらも、憐憫も侮蔑もその表情には無かった。

まるで騙されているのが当然とでも言いたい様だ。

確かにパフェの概念から考えれば出来る可能性が高い。

だが、俺は自分でも驚くほどに動揺しなかった。

何故だかは分からない。

相手の言葉を全く信用してない訳でも無い。

それでも尚それがどうしたと思えるくらいの余裕が俺には合った。

「ふーん、全然動揺せえへんか。よく躡が行きとどいてるって褒めたいとこやけど……」

薄ら笑いをやめてミュールヒルは一步また一步と俺に近づく。

「お前誰や？　いや、ちゃう。お前なんや？　なんでそんな眼でうちを見れるねん。ちょっと才能のあるだけの餓鬼かと思ってたけど、お前ちゃうな。何かもつと別の……」

敵意とも殺意とも言えない視線で第三神は俺を刺す様に見据えてきた。

そんなミュールヒルの視線を遮るようにパフェは俺と奴の間に移動する。

「ああそうじゃ。吾が愛しの主様は違うぞ。そこらの那由他の雄とは違う。なんせ吾に見染められたのじゃからの。——　のう主様」
パフェはにやつと笑い、首だけ軽く振り向きこちらを見た。

その瞬間間違はなく世界は静止した。

何言ってるんだこいつ？

パフェの言った言葉と言うより、この状況で何故それを言い出したのか理解できずに視線が左右にゆっくり泳ぐ。

パフェが何か反応してほしそうにじっとこちらを見ているのが視界の隅からでも解る。

でも俺にどうしろと。

『オレノホウガイシテルヨ、ハニー』

とでも言えと言うのか？

何と言っていいか解らず、反応に困った末にパフェから視線を逸らしながら頬を搔く。

すると。

『b』

と言う思念が伝わってきた。

何だ『b』って。

どう言う意味だよこれ。

そしてどうやったらそんな思念送れるんだ。

頭が痛くなるやり取りをそのままに、取り敢えず視線をミュールヒルに戻すと。

第三神は俺とパフェの間に視線を彷徨わせていた。

そして暫らく斜め上に視線を飛ばしたのち。

「……………は？」

と言う言葉を発した。

言葉と言うより動物的な感嘆詞。

今さっきまで刺すような表情をしていたミュールヒルの顔が完全に啞然の表情に変わっている。

そう、啞然。

微妙に口を開けて呆けている様は正しく啞然と言うべきだろう。

恐らく彼女は今頭の中が真白になる位呆然としてるだろう。

俺も同じようなものだから手に取る様に解る。

「理解できぬか第三神。一言で言うならば一目惚れの恋じゃ。愛する者を護りたくなるのは当然じゃろ？」——— あー、そちは生

娘じゃったか。ならば理解できぬのも当然じゃったか、すまんの」
謝りながらも悪びれる様子の無いパフェ。

それどころか更に燃料投下している。
本当に大丈夫なのだろうか。

最早空爆レベルの挑発をしているのだが。

パフェの言葉で今まで黙秘していた第七神が爆笑する。

それはもう腹のよじれる様な勢いで。

本当に何なのだろうこいつら。

「はっ！！ き、生娘ちゃうわ。な、何周期生きてると思ってるねん、もう経験豊富のバリバリのお姉さんや」

「ならば吾が主様を護る理由も解るじやろ？ 経験豊富のお姉様」
しどろもどろになるミュールヒルを見て笑いながらパフェは『経験豊富のお姉様』を強調して言った。

「あう……………」

反論の言葉も出ないのか、赤くなりシユンとなる第三神。
いいのかそれで。

これで丸め込まれていいのかあんだ。

神がこんな高校生レベルの口論で騙されていいのか。

と突っ込みたくなったが、流石に口に出す事は無かった。

「ベイグう……………」

ミュールヒルは物を強請る子供の様な眼で第七神を見る。

先程までのカリスマ性は何所へやら、子犬、いや兎？の様な愛玩動物みたいになつてしまった。

彼は未だに低く唸る様に笑っていたが、ちらつとパフェを見るとミュールヒルに向き直った。

「諦める、口論の挑発に乗った時点でめえの負けだ。今手を出せば完全に生娘の嫉妬にしかならねーよ。自称経験豊富のお姉様名乗りたいなら諦めるこつたな。にしてもこんな手段を使ってまで戦意喪失させてえとなると、よっぱどその餓鬼の事が必要らしいな」

第七神は慰めてるとも馬鹿にしているともとれるような叩き方で第

三神の頭をポンポンと叩く。

その眼は先程までの獲物を求めるギラギラした目ではなく、何処か鬱陶しそうな眼になっていた。

「そりゃあ。吾の大切なパートナーじゃからの」

「はっ、そのパートナーが生物兵器にかわらねえ事を祈るよ」

祈る先はその兵器を創り出したとこだがな、と言いつつ残り興味が無くなったかのように踵を返し消えた。

何が何でも戦わなければいけない人種に見えたが、案外交渉？も役に立つのだなと思った。

特にその時のテンションで生きている様なタイプには。

俺は第七神が消えた辺りを見ながら感慨にひたった。

後には納得いかない顔のミュールヒルが残されただけだった。

「…相方に取り残された方がいいのかや？」

パフェは俺と同じように第七神が消えた辺りを見つめていたが、思いついたかのように第三神に目を向ける。

「あゝ、ええねん。野良犬気質な野郎やからそこのゴン箱でも漁ってるやろ」

ゴン箱？

文脈からゴン箱の事だろうか。

と言うより今更ながらなんで神が関西弁。

いやまあ、どうでもいい事なんだろうが。

「ではまだ何か用でもあるのか？」

「用って言うか、んゝ、ほんまは始めっからちよつとからかうだけで戦う気なんてなかったんやけど、ちよつとその子に興味が湧いた

わ。———キミ名前、なんていうん？」

にこつと可愛らしく笑いながら上目遣いでこちらを見つめてくるミュールヒル。

こうして色眼鏡無しで見ると結構…いやかなりきれいな顔作りをしている。

一般的な男子ならばこの笑顔一発で堕ちるだろう。

喋らないでジツとしていれば、の話だが。

ちらりとパフエに視線を送る。

パチンとウインクしながら可笑しそうに笑っていた。

答えてもかまわないと言うことだろう。

「——輪廻架音だ」

「カノン、かあ。うちは第三神ミュールヒル＝ドレイクラン＝フレイズヴァール。親しみを籠めてミュウと呼んでや」

「はあ……」

第三神のペースに押されながらも生返事をする。

何なのだろうか一体。

「それで交渉やねんけどカノン、うちと腕試しせん？ 条件は……うちは契約も概念も使わん、そっちは契約だろうが概念心具だろうが好きに使ってかまわん。殺す気はないけど当たりどころが悪くて死んだら勘弁してな。代わりにそっちは殺す気出来てかまわん。どうや、そっちにとっても美味しい話やと思うねんけど。——練習相手ほしいんとちゃう？」

ミュールヒルはその場でくるりと回転すると、両腕を後ろで組み、首を掲げてこちらを窺う。

「……確かに悪くない話だが『こちらにとっても』と言う部分が腑に落ちない。あんたに何のメリットがあるっていうんだ？」

「あんたじゃなくてミュウ。いや、まあそれはええか。メリットならあるで、あんたらを強くするっていうメリットが」

俺達を強くすることがメリット？

一体どういう意味だ。

仲間や共同戦線を張る前提なら解る。

だが、こいつらにそんなつもりはないだろう。

ならば、俺達を強くする事によって間接的に得をすることだろうか。

例えば敵の排除や罠に使ったりする、などで。

「あゝ、勘違いせんというてな。別に裏でこそそそしたいからこんな

こと言うわけちゃうで」

俺の心の声を読んだかのように俺の考えはミュールヒルに否定される。

「じゃあ、なぜ？」

「ん」とさ、正直言うて今のあんたら弱過ぎるねん。うちもベイグも今のあんたらは殺す価値も無いってのが本音。だから今回はからかって次回上手い事生きて強くなったら美味しく頂くと思ったんやけど」

そこでミュールヒルは言葉を切り、ちらつと俺を見る。

「カノン、あんたをこの目で見て気が変わった。いや、次回会ったが楽しみになったと言っべきやな。だから次にあんたらと会える倍率を今ここで上げる。要するにうちは次あんたらと戦う為にあんたらを強くする。敵に塩を送るやつけ？ 何か微妙に違う気がするけど、まあそう言う訳や」

ミュールヒルは掌の上に白い立方体を浮かべる。

微かに光るそれはゆっくりと回転し続けていた。

「空間断絶結界か」

俺が疑問に思うよりも速くパフェはそれの答えを口にした。

「簡単な奴やけどな。それでもまあこん中に入ってれば三十分位は邪魔されずに持つやろ。だからうち以外に能力や今の実力がばれる事はない。——それでどうする？ やるかやらんか」

俺とパフェは一瞬視線を交わす。

思念を交わすまでも無い。

俺達は力強く頷いた。

その19（後書き）

バトル回と見せかけ、バトル回ではありません。
バトル回を期待した人がいるならすみませんでした。

今真面目に戦っても無様に負けるだけなので主人公補正を使って回避させています。

勝てる相手だけと戦ってそれでいいのか主人公、という気がしないでもありませんが、元々主人公はそう言う立場ですしいいかな、と自分で書いてて思いますがこの作品の敵キャラは随分有情です。

主人公に自分の能力をわざわざ教えてくれる敵キャラ並みに有情です。

有情にしなければ勝てないせいですが…。

それはそうとして、その19読んで頂きありがとうございました。
次話もよろしく願いします。

その20

『KEEP OUT』と黄色いテープの貼られた入口を越え、更に奥。

路地裏であつただろうその場所は瓦礫により所々唯でさえ狭い道が狭められ、また建物が崩壊しているお陰で太陽が差し込み路地裏特有の暗所が取り払われていた。

震災後かはたまた紛争後か。

コレを見た者はそのどちらかを想起するのではなからうか。

兎にも角にも凡そ街とは言い難い風景の中に長身長髪の男が比較的に損壊の少ない壁を背に立っている。

何をする訳でも無くじつと佇み、空を見上げている。

その眼には狂気やだるさなど無く、何かを待つ様に雲の移ろいを眺めている。

彼を知る者がいるならこう言うだろう。

「似合わない」

——と。

彼の形のよい眉目が微かに歪む。

視線を空から戻し、真正面へと見据える。

何の変哲もない空間。

少なくとも見かけ上は何の変哲もない空間。

そこからにゅつと手が二本生えてくる。

その手が左右それぞれに何かを開ける様に動くと、何もない空間か

ら一人の少女が出てきた。

アイヌ
薄氷色の髪にロップイヤーの帽子。

第三神ミュールヒルだ。

「なんや？ わざわざ待つなんて珍しいな。あんたそんな立派な忠犬やったっけ？ —— つと、そんな訳無いか」

腰に手を当ててあたりをきよろきよろ見回すミュールヒル。

壁が瓦礫の山しかない事は一目瞭然。

しかし、彼女はそれを踏まえたうえで何かを探している。

その茶番じみた行動に何かの意味を見出したのか、ベイグウォードは重く閉ざしていた口を開ける。

「客ならさつき逃げ帰ったとこだ」

ベイグウォードはミュールヒルと目線を合わせずにぶつきら棒に咥く。

その言葉に興味を引かれたのか、ミュールヒルはベイグウォードの正面に立ち、無理やり目線を合わせた。

「逃げ帰った？ あんた相手に？ 一体全体どうやって？ ワープするくらいしかあんたから逃げられへんはずやねんけどな」

と訝しがるミュールヒル。

その口調には本当に逃げだしたのか、というニュアンスが含まれている。

もつと言えば、ミュールヒルは十中八九ベイグが取り逃がしたのではなく追わなかったと思っていた。

それは今までの経験則からなるものであり、事実同じ様な事が何度かあった事があるからだ。

そこまで解っていないがわざわざ問い詰める辺り、彼女の意地の悪さがうかがえる。

じろりとミュールヒルを一瞥するとベイグウォードは顔を背けた。

「さあな、煙の様に掴みどころなく消えた」

「へー、煙の様に……なあ。そりゃあ捕まえられへんなあ」

「ああ、そうだな」

二人はやる気の無さそうな声で空を見上げる。
空にははぐれ雲が一つ、ゆっくりと流れていた。

—— 静寂。

安穩とは言えないが沈黙は美德なりとでも言うかのように二人は黙った。

黙ったと言ってもほんの数秒だが。

「——で、結局誰やったん？」

僅か数秒で痺れを切らしたミュールヒルは足元の小石を蹴り飛ばしながら尋ねる。

我慢や忍耐と言ふ言葉と無縁の彼女にとってこれが限界なのだ。

恐ろしく堪え性が無く我が儘と思われるかもしれないが、神などどれもこれも自己中心的な存在なので、彼女が特別という訳ではない。寧ろ終焉神内であれば、彼女は多少子供っぽいかもしれないが、かなり道徳的な部類だ。

飽くまで終焉神内の話しだが。

「……知るか、俺が日々同胞の名前と顔を覚えてる訳ねーだろうが。脳味噌ウジ湧いてんのか」

「なんで記憶力の無さを盾にうちが貶されてる訳？ 意味解らんねんけど」

眉間にしわを寄せ、足元の小石をミュールヒルはベイグウォードに向けて蹴飛ばす。

放物線を描き、彼らにしたら龜の様な遅さだが、それは正確にベイグウォードの顔面へと飛んで行った。

「てめえが気にする必要はねえよ。アレは俺の獲物だ。——

んな事よりもてめえこそ俺に言う事があるんじゃないのか？」

「さあ、うちの頭に虫湧いてるらしいんで何の事がさっぱりや」

スキップでもするかのようにミュールヒルは正確にベイグウォードの顔へ向かって小石を飛ばし続ける。

始めは手で遮るだけだったベイグウォードも一向に終わらない小石の雨に業を煮やした。

ベイグウォードは飛んできた小石を瞬時に掴み、ミュールヒルに投げ返す。

弾丸などよりも遙かに速い速度で速射された小石は、見事にミュールヒルの額とぶつかり砕け散った。

勿論ミュールヒルには傷一つ無い。

どれだけ速かろうと終焉神である彼女に小石程度で傷など付くはず

が無いのだから。

「痛ったあ……いや、痛くないけど。何すんねん!!」

クリーンヒットしたおでこを左手で撫でながら睨み返す。

「見え見えの言い訳してんじゃねえよ。——てめえ、その右手どうしたんだ」

ベイグウォードの言葉にミュールヒルは右手を一瞬だけ震わせる。

直ぐに先程の通り楽観的な態度に戻るがもう遅く、諦めて溜息をついた。

「何時から気が付いたん？ 一応できる限り両手使ってたつもりやねんけど」

右手を開いたり閉じたりしながらミュールヒルは尋ねる。

よどみなく動いているが、注意深く見ると僅かばかりの違和感に気付ける。

動作動作の合間にコンマ1秒すら短くだが完全に停止しているのだ。

「最初からだ、両手で空間を開けるなんていつからそんなにお行儀よくなったんだ？」

あゝ、そう言えば、などと言いながらミュールヒルは遠い目をする。思い当たる節しかないようだ。

が、それもやはり数秒で再び視線をベイグウォードに戻すと、眉間に皺を作り咎めるような顔つきになった。

「しかし、男のくせに細かいこと気にしてんなあ。ちよつと気持ち悪いで」

「ご託はいいからとつと話せ。幾ら『慈悲深い破壊の君主』様でも本当にあの餓鬼を強くするために三文芝居してたわけじゃねえだろ」

その言葉を聞いてミュールヒルはキョトンとした表情をする。

そして『あゝ』とか『うゝ』とか言いながらバツの悪そうに頬を掻く。

それを見たベイグウォードの目尻が攣り上がる。

どうやらミュールヒルは本当にカノン達を強くする為に修行を持ち

かけたようだ。

乾いた笑みを浮かべるミュールヒルを見ながらベイグウォードは盛大に舌打ちした。

「ま、まあええやん。お陰であの子の事少しわかったし」

ミュールヒルを視界の隅に収めたままベイグウォード目を細め、先程とはまた別の路地裏でのパフエとカノンの事を思い出していた。

あの時、ベイグウォードはカノンの概念心具に何ら脅威を感じなかった。

直に食らった訳でもないが、あの程度の距離ならば自身の勘はまず間違いないだろうとベイグウォードは自負している。

それは幾星霜も戦いに明け暮れた自身の経験にも基づくものであり、絶対ではないにしろかなりの精度を誇っている。

同じ様にミュールヒルも何の脅威も感じず二人の意見は『あれは第二神の茶番』で一致していた。

今でもベイグウォードの意見は変わらず『何ら脅威でない』のままだ。

ならば何故わざわざ二人の修行が終わるまで見張り紛いの事をしたのか？

「茶番にしては衰弱し過ぎている」

ベイグウォードの心を読んだかのようにミュールヒルの鈴を転がす様な声が響く。

「『闇夜の姫君』と謳われてるあいつがあんなに希薄になったん初めてみた。何時も倒せそうで倒せない深淵の様な女やったけど、今のあいつは向こう側が透ける位薄い影になっとった。それを見た時ひよっとしたらほんまにやられたんとちゃうんかってな」

ベイグウォードに背を向けてとことこ歩きながらミュールヒルの言葉は続く。

「あの子、カノンって言ったかな。あの子の目を見た時にそれが現実味を帯びた。やから修行を持ちかけた訳やけど。どくにもややこしい事になっててな」

「あ？」

「結果から言うとなの子の概念^{ルル}ではパフエにあそこまでの傷を負わせる事は出来ん、と思う。碌に契約も結べんし最後の一撃にちよろつと概念らしきものが混ざってただけやから、自信はあんま無いけど。かと言つてパフエの方も演技で無くほんまに弱ってる感じやつた」

ミュールヒルは瓦礫の山の近くまで歩いて行くとそこに座り込む。そして何処から出したのか、ピコピコハンマーを片手に瓦礫を叩き始めた。

えい、えい、と言いながら一生懸命に見える様は彼女を知らない者から見れば頬笑みを誘う光景だ。

コミカルな音を立てながら振り下ろされるピコピコハンマーだが、瓦礫には何の傷も付かない。

正常と言えば正常だが、彼女の膂力からすれば異常も甚だしい。

「はっ！　なら誰にやられたって言うんだ。第一神や第十三神でも来たって言つのか？」

ベイグウォードはミュールヒルの言葉を鼻で笑い一蹴する。

ミュールヒルは振り向かず、手を止めた。

「……これは推測でしかないけど、多分あの子生まれ変わったわ。概念つてさあ、基本一人に一つやん？　これは生き物に一つしか魂が無いせいで、概念は魂とⅡやからやねんけど。だからまあ、概念は1つで不変つてのが不文律やねんけど、概念を変える方法が一つだけあるねん。それが生まれ変わり、と言つても突然変異や改造手術と違って、魂を変更しやなあかんから簡単に出来るもんちゃうし、仮に出来たとしても、そもそも別の生命体になるんで、生まれ変わろつとする奴にとっては自殺と何ら変わらんけどな」

「…それがどうした？」

ベイグウォードは興味なさそうに空を見上げながらも、ミュールヒルに続きを促す。

やはり彼も軽く引つかかる何かが気になるのだろう。

「つまり、あの子、輪廻架音はもう既に死んで今動いてるのはその遺志を継ぐ形骸ってことや。涼しい顔してえぐいことようするわ。だってそうやる？ あんな風になっても自我を失ってないねんであの子。意思が強いとかそういう問題じゃないレベルや。心具の強さは感情で決まる。だから次会う時楽しみにしとき。」

右手を太陽に翳しながらミュールヒルは薄く笑った。

その笑い声は暫らく路地裏に響いていた。

その21

インターホンを押し、付属しているカメラに映る様に数歩下がる。
ここはマンシヨンの最上階である13階の部屋だ。

第三神の修行と言う名の一方的な暴行に耐え、ようやく帰宅したところだ。

蓄積したダメージは疲労へと変わり、インターホンの硝子に不機嫌そうな己の姿が映っていた。

魂と肉体を共有しているパフェも例外ではなく疲弊して、俺の首筋に背中を合わせる形で座り込んでいる。

この戦闘形態で戦闘状態を維持するのは思った以上に疲れるみたいだ。

そんな事を考えていると、ややあつてインターホンから間の伸びた声が返ってくる。

『はあゝい、どちら様ですか?』

「——俺だ」

どこか、裏社会の人物の様なセリフで答える。

霊能力者も分類的には裏社会の様な物なのであながち間違いではない。

間違いではないが、場違いではあるだろう。

『……………』

インターホンからは無機質な音が途絶え、何も聞こえない。

やはりダメか、と溜息をつく。

自宅を出る前に予め暗号を決めており、その言葉を口にしない限り開かない様に取り決めたのだ。

それが解っていないがなぜ別の言葉を口にしたのか。

理由は簡単である。

「……………どうしたのじゃ。はよう暗号とやらを言わんのかや」

何時まで経っても無言でいる俺を疑問に思ったのか、パフェが急か

し始める。

どうあっても俺はコレを口にしなければならぬ運命らしい。

「……………すう」

大きく息を吸い、吐き出す。

もう一度大きく吸い込み、更に少し吸い込む。

この暗号にはこの前準備が必要なのだ。

よし、と気合十分で凹みや傷一つ無い平らなドアを見据える。

二度目のインターホンの音と共に俺は言葉を吐き出した。

「海軍機関学校機械課今学期学科科目各教官協議（かいぐんきかんがつこうきかいこんがつきがつかかもくかくきょうかんきょうぎ）の結果下記のごとく確定、科学幾何学機械学国語語学外国……っ！

！」

当然の事ながら噛んだ。

パフエが肩から転がり落ちながらも爆笑した。

+

冷蔵庫からペットボトルのアイスコーヒーを取り出し、ステンレス製のマグカップに注ぐ。

普段はコーヒーマーカーからドリップして淹れているが、現在使用不可と言う事なので備蓄のコーヒーを使用している。

ペットボトルのキャップを握りしめ、肩口からそっとパフエの様子を窺う。

戦闘形態を解いた事により普段のサイズに戻っており、袖で口元を隠しながら肩を震わせていた。

あれから何回かのトライの末、漸くクリアした訳だがその間パフエはずっと爆笑しており、今も突発的に嘔き出している。

ム力つかないと言えは否だが、誰が悪いと言えはこんな暗号にした姉貴が悪い。

少し肩を竦め、ペットボトルのキャップを閉めると冷蔵庫へと戻す。両手でそれぞれマグカップを持つと、パフエの横まで歩いていく。パフエは俺を視界に収めるとニヤツと笑う。

からかう気満々の様子だ。

パフェの目の前のテーブルにコーヒーを置くと、俺も斜め前の場所に腰かける。

そしてそのままコーヒーを口に含む。

乾いて張り付きそうな喉を通り、胃に流し込まれる。

ここで感嘆詞でも漏らせばおっさんなどと揶揄されるだろう。

そういう習慣が無いので精々溜息だけだが。

背中を深くソファに預け、目を閉じる。

生き返る思いだ。

「ふむ、コーヒーか。取り込んだ知識によると美味しいらしいが……」

片目を開けてみると、パフェの興味は目の前の黒い液体に移ったらしく、両手の指先でマグカップを抱えていた。

そしてちろりと舐める。

「苦味、酸味、そして微かな甘味。と言った所かの」

美味しい、不味いではなくある種機械的を感じる評論を下す。

「口に合わないか？」

すんすんと今度は匂いを嗅いでいるパフェに質問してみる。

この際美味しい不味いは然して問題でなく、この神が何故このような感想を漏らしたかが気になったからだ。

パフェはキョトンとすると、静かにカップをテーブルの上に置いた。

「……………如何ほどでも飲めると言う意味ならば口に合っておる。が、習慣的に飲みたいかと言う意味でなら口に合ってはおらぬ。しかし主様よ、吾の形を見て人扱いするのは構わぬが、同じ反応をしないからと言ってガツカリするのはやめてくれんかの。主様の前では在りのままでいたいのだが、そう残念そうな顔をされると秤が傾いでしまいそうになる」

眉を八の時に変えながら困った顔をするパフェ。

照れからか、白い頬にほんのり朱が浮かぶ。

「———そんなに残念そうな顔をしているか？」

己の頬を指でなぞり確認するが、全く解らない。

確かにお気に入りブランドのコーヒーだが、好みは人それぞれであり自分の趣味趣向を押し付けようとは思わない。

共感を得たいという気持ちは無きにしも非ずだが、落胆はないはずだ。

……………恐らく。

「今はしておらぬが、先程捨てられた飼い犬の様な眼をしておった。犬は嫌いではないが、吾は猫の方が好きじゃ」

真面目な顔でこちらに迫るパフェ。

もしかするとこいつは…。

猫派で犬派に傾きたくないからやめてくれと言っているのか。

「冗談じゃ。そんな塵溜めを見る様な眼をするでない、流石の吾も傷付く」

俺の視線を飄々と受け流しながら、パフェはカップの中身を一気に流し込む。

「本来神に食事など必要ない。食物からとれるエネルギーなどたかが知れておるし、何より本来の身の丈に合う量など食せば忽ちその星は食い尽くされてしまう事になる。だからという訳ではないが吾らには美味い不味いと感じる事はない。———これで主様の疑問は解けたかや？」

手で空になったマグカップを弄びながらいつもと同じ意地の悪い笑みを浮かべる。

そこでやつと俺は自分がからかわれていた事に気付く。

俺は溜息をつき、カップに口付ける。

「処で、お義姉様は何所へ居るのじゃ。敵襲に遭えばまず護らねばならぬのじゃから、ある程度の場所を把握しておらねば面倒な事になると思うのじゃが？」

俺はカップから口を離し、天井を見上げる。

それに釣られる様にパフェも上を見る。

「……………自分の部屋にでも引きこもっているだろ。今朝がたも色々や

つてみたいだしな」

「なるほど、納得じゃ」

俺が再び目線を戻してもパフェは上を黙って見つめたままだった。俺とパフェは互いにそれ以上口を開かず、無言となる。

30分か、1時間か、或いはもっと長くか。

息遣いと身動きばかりが部屋を支配する。

そんな永久とわに続きそうな時間に終止符が打たれる。

無機質な音のインターホンが鳴り響いたのだ。

俺はパフェと視線を交差させる事無く立ち上がる。

「……はい」

『カノン？ 今日のプリント持ってきたんだけど』

そこには煌びやかに揺れる橙色のショートヘア！。

金色の瞳を持った紅天が立っていた。

「ちよつと待つてろ、今出る」

手短かに会話を終わると玄関へと向かう。

その際に一瞬パフェへと視線を向けるが、既に姿は全く消えていた。俺は大して気にもせずに進む。

「悪いな、態々届けてもらって」

扉を開けると所在なさそうに前髪を弄る紅天の横顔があった。

それも一瞬の事で、俺の姿を確認すると肩を竦めて見せた。

「それは別にいいけどさ、二日連続で休みって大丈夫なの？ 別に学力や出席日数なんかは心配しなくても大丈夫だろうと思うけどさ、昨日放課後学校に来てみたいじゃない。そんな時に何か厄介な事に巻き込まれてないかなあゝって思って」

はいこれ、と無造作に差し出されたプリントを受け取る。

序でに体を半分だけ出してドアの外側を確認する。

紅天の姿を確認するために使用したドアスコープの調子があまり良くないのでその為の確認だ。

「厄介なことと言うか、何処かの銀細工馬鹿の所為で喧嘩に巻き込まれて休みが一日追加されただけだ。大したことじゃない」

「いや、それ大したことですよ。色々大丈夫なのあんた?」――

――どうしたの、突然ドアの外側を確認しだして」

俺の行動を見咎めると、同じ様に扉を見つめる紅天。

「……………ドアスコープの調子が悪くてちよつとな。立ち話もなんだし、うちに寄っていくか? 珈琲くらいは出すぞ」

見た限り外側には異常はなかった。

となると問題は内側なのか。

俺が扉から目を離しても見つめ続けていた紅天が此方へ向き直る。

扉を見つめていたときから顔は思案顔に変わっており、扉には何ら興味の無い、フリの行動だったことがよく解る。

「ん、そうね。ほんの少しお邪魔しようかな。ちょうど喉も乾いてたし」

アンティークなデザインの金色の腕時計を確認しながら紅天は了承した。

+

「それにしても随分早い時間に来たな。まだ最後の授業終わってないくらいだろ、この時間だと」

紅天の前に洋菓子とコーヒーを置くと、青い空に視線を送る。

今リビングには俺と紅天の二人しかない。

「そうね、普段通りだったらそんな時間ね。でも今街を騒がせる狼^{アレ}の所為で短縮授業中でしょ、忘れたの?」

「ああ」

そう言えばそんな事もあったなと納得する。

最近と言うか24時間以内に色々な事があり過ぎてすっかり忘れていた。

「ホントに大丈夫? その様子だと色々参ってるみたいだけど。あたしで良ければ相談に乗るけど」

洋菓子を一口で口に入れながらこちらを見つめる。

珈琲と一緒に味わって……、と思わないでもない。

「悪いが今回は気持ちだけ受け取っておく。参ってないと言えば嘘

だが、本当に参っているなら形振り構わず助けを求めているさ。だからその時はよろしく頼む」

「あはは、そーかもしれないね。でも明日期限だから今日何とかしてくれ、つてのは無しね。そう言うのなら初めから頼んでね」

「それは無理だと思うがな。期限ぎりぎりまでやらない奴はそもそも初めに頼むと言う選択肢が無い。何せその初めと言う所が余裕という状態だからな」

「あゝ、いるいる、夏休みの最後の日に焦って宿題やるタイプ。夏休み遊び呆けて結局最後の日に『夏休みの最初の日に戻りたい』とかいいながら泣く泣く徹夜する羽目になるのよね、あれ」

ソファで他愛もない雑談をしながら紅天が持ってきたプリントを手にとってみる。

今日はやたらとプリントを配る先生の日だったか。

ちよつとした広告雑誌程度の厚さと重みがある。

これを学年全員の分用意するとなるとちよつとしたタワーが出来るに違いない。

そんな事を思いながら一枚一枚ページを捲っていく。

別段目立ったものはない。

うちの学校は校則もそうだが教育についてもかなり適当で、受験のための勉強ではなく教育規定を曲解した教師によるマニアックな授業が行われている。

それでいいのかと思うかもしれないが進学率は悪くなく、大学で役に立ったと言うOBからの意見もあるので賛否両論だ。

何が言いたいのかと言うと俺のしているプリントもそう言う類と言う事だ。

例に挙げると日本史で授業の8割が戦国時代を占めていると言えば分って頂けるだろうか。

教育者の好みが出ているとかそういうレベルじゃない。

隠す気の無い依怙贖負が蔓延している学校なのだ。

「えーっと、それわかる？」

ばらばらと捲っていると紅天が苦笑い気味に覗き込んできた。

「――解っていたら俺はきつと学校へは来ないだろうな」

「まあ、そうだよな。んゝ、あたしも夢渡や沙良紗ほど自信はないけど一応今日の授業のさわり位は教えられるけど、どうする？」

肩が触れ合うほど近くに寄った紅天が俺の目を覗き込みながら尋ねてくる。

謙遜してはいるがそれでもコイツは学年上位の学力を持っている。比べた相手が学年トップの二人だったただけだ。

うちは校則やらなんやらが緩い分、試験に対する慈悲が一切ない。結果がすべてであり、補修や課題などの救済措置が全く設けられていないのだ。

だからこの申し出は渡りに船と言った所だ。

「悪いが頼めるか？」

「もち、まかせて」

笑顔でウィンクすると自分の鞆を漁り始める紅天。

その間に全てのページに目を通そうとパラパラ漫画を見る様にプリントを捲る。

「ん？」

ふと目に入ったページに変な記号の様なものが書かれている。手を止め、目を凝らしてみている。

子供が適当に記号を書きなぐった様な、そんな字面に見える。

そのプリントだけを抜き出し、紅天に悪戯かどうか確認しようと首を向ける。

瞬間、胸部に衝撃が走る。

「がっ！！ あっ？！！」

口から血飛沫が飛び出す。

同様に胸からも血が毀れ出る。

呼吸さえままならない状態で必死に原因を見止める。

そのプリントのちょうど記号があったページから漆黒の槍が突き出していた。

——油断。

結界の貼られた自宅では攻撃されないとはいこんでいた致命的な油断。

学園の教師が敵かもしれないのにそのプリントに何の警戒もしなかった俺の責任。

体の内側からミキサーで無理やり攪拌しているかのような激痛が走る。

「天の……瓊矛か……」

ノイズによって齎もたらされた光景がよみがえる。

全力状態のパフェを傷付けた神器。

それが今の弱体化したパフェに、パフェと同化している俺に対して使えばどうなるか。

答えなど考えるまでも無く最悪だ。

終焉神を殺すには何よりも相性が重要。

互いに能力が高過ぎて千日手になるからだ。

その相性という点においてこの天の瓊矛と言うものは俺達にとって最悪の相性だ。

契約も結んでいない体の記述が見るうちに書き換えられていく。

「おおおおおおおおお——っ！……！！！」

咆哮と共に胸に突き刺さった槍を引き抜く。

傷口自体は闇の衣が覆い、塞がるがダメージが無くなった訳ではない。

体内のマナを胸部に集中させ、契約を結ぼうとする。

「か、カノン………それ…。あの…何…それ？ どう、なって…るの？」

混乱しているのか、それとも何かしようとしてか紅天が近づいてくる。

忘れていた、ここにはコイツもいたのだった。

手の中の槍が消える。

——次が来る。

「いいかつ!! 俺の後ろ…から動くな!!」

振り向きもせず紅天を背中中に引つ張り込むと臨戦態勢をとる。
息を吸い込み深く違う次元へと接続する為に意識を深層へ潜り込ませる。

ぶつつけ本番に近いものだがそんな事は言ってられない。

第三神の時とは違う、これを失敗すればすべては終わりなのだ。
結べるかどうかではなく結ぶ。

決意と共にアザトースの笑い声が甦ってくる。

『概念心具第一契約…』

平衡感覚が無くなり、その場に居ながら別の空間に飛ばされたかのような酩酊感が起こる。

が、その時冷たく憐れみを籠めた声が俺の詠唱を遮った。

「ええ、永遠にあなたの後ろにいてあげるわ」

風切り音と共に俺の視界が斜めへと滑っていく。

——何が……。

ごろりと首が落下し、フローリングの床を転がる。

そして噴水の様に首から血飛沫が上がり、雨の様に俺の顔を濡らす。

——なにが……。

「ゲームオーバー。これにて閉幕」

顔についた血を舐めながら機械の様な冷たさで笑う紅天がそこに立っていた。

その手には見覚えのある槍が一本。

天の瓊矛だ。

——どう……して…?

俺の疑問を無視し、紅天が天の瓊矛を俺の顔めがけて振り上げた。
俺は何かを言おうと口を開けるが、血泡しか出てこない。

「ばいばい、カノン。お友達ごっこ楽しかったよ」

紅天はそれを虫けらの様に突き刺した。

その22

水気を帯びた生ものが床に叩きつけられる様な音が部屋中に響く。フローリングの床は鮮血で浸され、ミキサーにでも掛けられたかのように男の頭部はスタスタに切り裂かれていた。

血が混じりピンク色に染まった脳髓。

最も強固な部位であるはずの頭蓋は切り刻まれた消しゴムの様。ボロ雑巾の様に残っている皮膚は最早彼が誰だか判別が不能なレベルだ。

何故ここまでするのか。

首を刎ねた時点で即死ではないのか。

と思うかもしれないが、それは彼がまともな人間だったらの話だ。例えばまだ契約が結べない成り損ないの神であつたとしても、十分化物に値する。

何故ならその化物に力を与えたのは神の中でも化物と恐れられる一角なのだ。

「——怖いかな？」

突然の声に紅天は弾かれる様に構える。

「……………誰？」

「——恐ろしいかな？」

「……………第二神様かな？ 大事な下僕が殺されて悔しい？」

「くつく、吾が何に対して悔しがると言うのじゃ」

のっそりと、血塗れた部屋の影と言う影が集まり、形を創る。

やがてそれは一人の少女を創り上げる。

第二神パフェヴェデイルム。

決して霞む事無く存在する少女。

その気配はこのスプラッタ染みた部屋でも遺憾なく発揮された。黒より濃い闇。

それを纏いながら少女は紅天を見下す。

カノンには露ほども見せぬであろう無垢なる非情の瞳。

それは彼女にとって紅天は如何なる価値も見いだせなかったことを意味する。

服についた塵を振り払う事こそすれ、齒牙にかけるなど有り得ないのだから。

「ならそんな怖い顔しないでよ。オンリーワンかもしれないけど似た様なのはそこらにごろごろ転がっている訳だし。別に一つ無くなつたところでどうでもいいでしょ？」

そんなパフェに対し、紅天は僅かに後ずさりながら嗤う。

まるでお気に入りへのペンを無くした友人をたしなめる様に。

だが彼女は気付いていない。

己が行った事は羊の生贄に自ら志願した事と同じと言う事に。

代えの効くものが無価値であるならば、その代えのスペアも同じく無価値である。

カノンが代えの効くものであるならば、スペアは何所にあるのだろう。

『そこらにごろごろ転がっている』

確かに紅天はこう言った。

それは即ちパフェに最も近い無価値な存在をスペアにすればいいと言っている様なものだ。

「ふむ、そうじゃの。使い捨てれるのがちょうどよく居るの」

一步、また一步と遅々と、それでいて優雅に紅天に近づいていく。

パフェは紅天を見ている様で全く見ていない。

交換が必要だと解りながら無価値と断ずるのだ。

それは人にとって酸素の様な物。

必要ではあるが有り過ぎて態々遠くの物を交換しようとする物。

そんな様子のパフェに紅天は槍を向ける。

「今度はあたしに寄生する気？ 残念だけど今のあなたなら返り討ち遭っただけよ？」

「返り討ち？ これは可笑しな事を云うものじゃ、ならば何故逃げ

る。吾より強いと自負しているのであろう、何故すぐに仕掛けよう
としない。そこまで解っているのなら何故初めに話しかけた。ち
と無駄が多すぎるのではないかな？」

パフェの言葉を受け、じりじり後退していた紅天の足がピタリと止
まる。

その時初めて彼女は己が後退していた事に気付く。

このあたしが後退？

何者かに寄生しなければ生きられない今の第二神に？

冗談じゃない。

そう激昂するように足を踏み鳴らす。

当然の様にフローリングの床は粉碎され、破片が辺りに飛び散る。

「あっそう、OK解った。そんなに殺してほしいのなら、望み通り
……死ね」

先程までの後退していた態度が嘘の様に晴れ、殺意の籠った声と共に
に槍を突き出す。

「？」

パフェは見当違いの方向に突き出された槍に眉を潜める。

が、それも一瞬の事、直ぐにその表情が平時に戻る。

もしここに第三者が存在し、パフェの表情と槍の軌道を目で追えた
のなら感嘆の言葉を漏らしたであろう。

それだけパフェの認識能力は優れていた。

右下から直角に折れ曲がる様にしてパフェの心臓めがけて穂先が突
き上がる。

いや、折れ曲がる様ではない。

確かに直角に曲がっている。

それもある地点から空間がねじ曲がる様にその場所を通った部分が
次々と曲っていくのだ。

故にそれを目にして目を僅かに細めただけのパフェの行動は大した
ものだろう。

そしてそれを確認しておきながら一切の回避行動を取らなかったこ

とも含めて。

「……………何故避けないの？ 本当に死にたいの？」

一見自殺行動としかとれない行動を前に紅天は止まる。

その穂先はヒトの心臓の場所に数センチ突き刺さっていた。

敢えて避け様としなかったパフェの行動に釈然としないものを感じたのだ。

だがそれでも優位は変わらないと固辞する様に紅天は穂先を挟る様に少しづつパフェの体へと進めていく。

「——くつく、ああ…解るぞ、その恐怖手に取る様に解る『100%勝てる保証が無い』『得体の知れぬものに攻撃し、無駄な犠牲を出したくない』実に小賢しい思考じゃ。その思考こそが吾らを恐れている証左だと言つのに。解っているのであるう、童…いや第九神」

虚空を、更に奥を見るような眼つきでパフェは語りかける。

まるでその場にいない存在に語りかける様に。

「はあ？ 誰が第九神よ。——いやもういい、ご託はたくさん。とつと殺して終りにしましょ」

流れる様に紅天の力が槍へと伝わる。

何の躊躇も無く穂先がパフェの心臓へと突き刺さる。

…はずだった。

「はあ？」

1ミリたりとも進まなくなつた穂先に眉を潜める。

彼女が先程床を叩き割つて見せた様に彼女の膂力は人の範疇ではない。

とするとここでそれを止めたのは目の前の化物でしかない、と紅天は瞬時に判断した。

こんなあつさり第二神がやられるはずが無い。

その思い込みが彼女の思考を単純化させた。

真つ当に考えれば後ろから誰かが槍を搦んで止めたと考えたはずなのに。

この一瞬の判断の誤りが彼女の幕引きだった。

「——その通りだな。とつと追いついて俺の平穏な生活を取り戻したい。いい加減に範疇外の幻想とこれ以上出会うのも勘弁したいな」

紅天が振り向こうとした瞬間軽く首元に手刀が叩きこまれる。

「あ……！」

小さく悲鳴を上げると、紅天の体は弛緩し崩れ落ちていく。

手刀をした人物は崩れ落ちゆく紅天の両腕を黒い紐で瞬時に縛り、床に横たわらせた。

「遅すぎるぞ主様、若しや計画がばれていたのではないかと幾度冷や汗をかいた事か」

そこには先程紅天によって斬首されたカノンが立っていた。

+

時は遡り、数十分前。

俺とパフェは表面上は会話していなかったが、思念で会話は続いていた。

「狙い通り第九神につけられたと思うか？」

俺達はここまで尾行を撒く様に大幅に遠回りして帰ってきた。

尾行を狙っているのに尾行を徹底して撒くような真似をするなど矛盾していると思うかもしれないが、これには理由がある。

追跡者と言うものは尾行する対象が警戒すれば警戒するほど、その目的地が対象のアキレス腱だと考えるからだ。

だから俺達はこの部屋が襲撃されて困る場所と思いこませる為に疲れた体を引き摺り、結構な時間をかけた。

が、徹底して尾行を警戒していた分、全く反応が無いと本当に撒いてしまったのでは、と不安になる。

俺の疑問は不安を載せてパフェへと伝わる。

「十中八九跡をつけてきておるはずじゃ。態々吾らを第三神共と鉢合わせてそのまま放置とは考えにくい」

俺の不安をかき消す為か、普段よりゆっくりとした口調で声が返っ

てくる。

「……そうか」

絶対にそうと決まった訳ではないが、パフェの言葉により幾ばくかの安堵を得て溜息をつく。

俺達は家を出る前の時点から尾行される事を前提で街を歩いていた。弱ったパフェを見てまず相手がする事と言えば罠かと疑い、尾行し根城を突き止める事だと簡単に予想できるからだ。

その為本当の自宅に連れてこない様、姉貴には一つ下の階、つまり13階。

そこのある部屋の一つに自宅と同じような結界を張ってもらった。

自宅の結界の認識誤認効果も相俟ってここは今普通の人には完全に輪廻家に見える様になっている。

俺とパフェはここで第九神を討つつもりだ。

その為にはこの場所に誘き出す必要があったのだ。

因みにだが輪廻家にはいざという時の為に所持している隠れ家が幾つかある。

この部屋はその内の一つで人が住めるよう手入れが行き届いている。決して空き家に不法滞在している訳ではない。

「来なかった場合は今は置いておいて、きた場合。俺が契約を結べるか結べないかが戦局を左右すると思う」

「まあ……の、地力に差がある以上相手の無い部分で強化を図らねば勝機は薄いが。して、どうやって戦闘中に契約を結ぶのじゃ、第三神との模擬戦ですら最後までまともに結べなかったのじゃ。まさか相手がこちらの詠唱を無視してくれる事を期待しているとは言わんじやろうな？」

「それこそまさかだ。そんな状況を期待するくらいなら俺は何も起こらない事を期待するさ」

俺の冗談めいた口調にパフェは微笑の思念を送ってきた。

表面上は瞑想しているかのように黙っているパフェの器用さに関心する。

「第三神の時に気付いたんだが、あんたが契約を結べば恐らく俺も契約を結べる。共鳴だが高んだか知らないが、恐らく引つ張られるのだろう」

「知っておる。寧ろ一体化しておる吾に引つ張られて尚契約を結べぬなど論外じゃ。じゃから結べる事には対して疑問を持つてはおらん。問題は……」

「結ぶまでにかかる時間、だろ？ 解っている、失敗も含め数分も掛かる代物を敵前でどうやって結ぶか。第三神の時は蹴られたり殴られたりしただけでまともに結ぶのも怪しくなつたからな」

思い出すだけで苦笑いが浮かびそうになる。

いや、今それを思いかえすのは止めよう。

一度瞬きすると若干ずれた会話を元に戻す。

「そんな訳だから何者かがここに来た場合、俺達は何とかして時間稼ぎをする必要がある」

予め契約を結んでおくという方法もあるが、何時まで連続して使用できるのかもわからないし、何より24時間襲われる事を警戒して結び続けるなんて事を出来るとは思えない以上取るべき策ではない。

「方法は考えておるのか？ アレは終焉神であると同時に優秀な魔術師でもあると聞くぞ。能力だけで押し切らず小細工を使う側故小細工が効きづらい。終焉神としては対して強くないが、ゆえに第三神や第七神と違って慢心や油断と無縁の輩じゃからの。じゃからこう言った手合いは窮鼠の危険性をよく知っておる。逆転の芽は見つかればすぐさま摘み取られると思っておいた方がよい」

最も慢心し、油断していたであろうパフェが己と逆の輩の危険性を語る。

こうして弱体化したパフェが言うのだから説得力としては十分だろう。

ならばどうするか。

逆の立場で考えてみよう。

俺ならどうするか。

まずは結界の種類を見極めようとする。

常人に見えないタイプならば誰か尋ねた時点ではば敵だと決定する。幸いここの結界はそう言うタイプではない。

けれどまったく違う訳でもなく、形式としては極限まで結界と解らない様なタイプ。

日常生活を大事にする魔術師がよく張るタイプだ。

つまり、この結界に気付いて不審な行動する奴が敵。

と言いたいところだが、そんな迂闊な行動をとる相手ではないだろう。

常人に場所が見えるのだから普通の人間が尋ねてくればどう対応するのか、と様子を見るのが普通だろう。

その上で一番尋ねてくるのが有り得そうな人物。よって……。

「敵の能力がいまいち未知数である以上推測だが、うちのクラスメートの誰かを操るか、成り済ますか、して侵入しようとしてくるはずだ。強行突破もあり得るはずだが、そんな事をする奴が態々ここまで手の込んだ行動をしてくるとは思えない。正攻法って言うのはある意味最終手段だ。正規のルートを進る訳だから当然相手に読まれてしまう。それすらも関係なくゴリ押し出来るのなら最良の一手だが、出来ないのであれば相手と真っ向から削りあってしまう羽目になる。俺もそうだが慎重な奴ほど裏道を探す。だから最もリスクのかからない洗脳操作で来ると思う」

「ふむ、ありそうな手じゃが、流石に今の吾らでも洗脳されただけの人間に負けるほど弱くはないぞ？ 確かにリスクはないがその分のメリットも薄い、吾らを殺そうとするのであれば少し甘い手ではないかの？」

確かにパフェの言うとおり罠を警戒するだけならまだしも、奇襲の有利を捨ててまでする手ではない。

殺すという目的であるのなら成り代わりの方が確実だ。眠る様に目を閉じる。

思い出せ。

ノイズが見せた光景が正しいのなら、あの時あいつはどうしてた。どう言う類の概念を使用していた？

パフエを貫く黒い槍、突如現れた男。

ハザードランプの様に現れては消え、消えては現れた。

ここで俺はあのベイグウォードと呼ばれていた男を思い出す。

あの男も確かに同じ様に消えた。

だが、ベイグウォードと第九神は少し毛色が違う気がするのだ。

「疑問なんだが、第九神の概念は第七神と同じタイプなのか？」

俺がそうパフエに質問すると、考え込む様な気配が伝わってくる。

「実際に見た訳ではないが、恐らく違う筈じゃ。少なくとも高速で動けるだけではあそこまで逃げ回れるとは思えぬ。それこそ主様があの時間いた様に空間跳躍でも出来ぬ限り、の」

空間跳躍。

そう言えば第九神は己だけでなく黒い槍……そう、天の瓊矛も何処からとこなく出現させた。

これを可能にする概念を考えれば空間操作系か時間操作系……、少し苦しいが隠密や迷彩関係の能力だろう。

「空間跳躍以外であり得るとしたら時間操作系か？」

「理論上は可能じゃが、現実的ではないの。他人の時間を遅延させると言う事は必然的に遠心型じゃ。他の者ならいざ知らず、吾を数秒止めるとなると生半可な神性では出来ぬ筈じゃ」

「となると空間操作系が一番妥当な線、と言う訳か」

普通に考えれば空間操作の可能性が一番高い。

だからと言って決め付けていいものだろうか。

可能性が高いからと言って完璧にそれと決まった訳ではない。

違いましたでは済まないのだ。

どうする？

時間は有限どころか、いつ襲ってきてもおかしくはない状態だ。

「……主様よ。対等と言う契約を忘れたのかや？ 吾らはパートナ

「じゃ、吾の力に知力が無いと思ってくれぬなよ」

今まで無表情だったパフェがふっと笑うとウインクする。

そこで初めて俺は少し焦っていた事に気付く。

必ず自分の思い描くシナリオ通りに事が進まなければならない、と思いつめてしまった。

そこで生まれる完璧な計画と言うものこそ最も脆いと言う事を知っていたのに。

軽く頭を振り、思考をリセットする。

「取り敢えず一番確率が高そうな知り合いが尋ねてくるパターンで想定したい。その場合の足止めなんだが、心具で俺の偽物とかを創り出せたりしないか？ 作り出せる部位によってはかなりの時間が稼げる」

「心具では無理じゃが……」

パフェはそこで一旦言葉を切ると、何処からともなく扇子を出す。

普段……と言っても最近だが、よく取り出している謎の扇子だ。

「ある方法を使えば出来なくもない。——主様も疑問に思っている様じゃが、コレは心具ではなく、普通の扇子じゃ。何処から取り出しているのかと言うと……」

パフェは掌を天に向けるともう一方の手をその上に重ねる。

何をするのか横目でじっと見ているとそのままゆっくり重ねた手が持ち上がってくる。

まるで手品でも見ている気分だ。

「この通り、吾の体の中から出している」

と、見覚えのある筒を取り出して見せた。

「あの時の湯呑か」

パフェが概念心具の実演をした時に飲み込まれた湯呑だ。

確かにあの時パフェに取り込まれたとはいえ、何故取り出せるのだろうか。

「吾の体はちと特殊での、ある期間以内に取り込んだものはこうして取り出す事が出来るのじゃ」

と言いながら再び沈んでいく湯呑。

しかし、コレと俺の偽物を創り出す事とどう言う関係があるのだろうか。

まさか等身大人形に顔写真でも貼り付けて完成、とでも言うつもりではないだろうな。

パフエに訝しげな思念を送る。

「案ずるな、ちゃんとリアリティを追求した逸品を創り出して見せる」

自信満々なパフエを前に一抹の不安を感じながらも何時交替するかを話し合った。

十

——その結果がこれか。

俺はスプラッタな光景になった自分の頭部を視野に入れる。

紅天に茶菓子を出す際に偽物と交替し一度見たが、見れば見るほど出来の良さに気味が悪くなった。

何なのだろう、これは。

取り込んだものを取り出せるとは言っていたが、俺の体がここにある以上何か一工程省かれているとしか思えない。

取り敢えず今は時間稼ぎが成功した事を喜ぼう。

右手にはずしりと質感のある天の瓊矛が握られている。

コレがあると言う事は即ち第九神が来たと言う事だ。

「悪い、契約を結ぶのに思った以上に手間取ってしまった」

パフエと同じ黒い布を体の周りに揺らめかせながら、俺は謝罪する。

「それになんじゃ？ 気絶させるだけなどと生温い手を使いよって

乗っ取られているにせよ、操られているにせよ、そこまで支配を許しておる時点で其奴はゲームオーバー、生かしておいても次の搦め手に利用されるだけじゃ。殺せとは言わぬがせめて四肢の腱と骨を破壊する位の事はしてもらわねば困る」

折りたたんだ扇子を棒の様に俺の鼻へ突き付けるパフエ。

頬を膨らまし、子供っぽく怒るパフエに俺は苦笑しながら只管謝罪

するしかなかった。

「——で、何時までそこに隠れておるつもりじゃ？」

俺達は同時に部屋のある一点を睨みつける。

「これはこれは……、何時からお気付きで？」

ゆらりと厩気楼の様に白いスーツの男が現れる。

男は礼儀正しく一礼する。

その間殺気に近い視線を受けていながら、男は人のよさそうな笑みを顔に張り付けていた。

間違いない、こいつだ。

ドクン、と心臓が高鳴り、こいつがあの中の時の第九神だと告げる。

パフェを含め今までであった終焉神と比べるとやや劣るものの、それでも超然とした神気を放っている。

疑い様が無く終焉神だ。

こいつも偽物フェイクと言う線はこれで消えた。

「確信が持てたのはつい先ほどじゃ。如何に終焉神と言えど認識外の結界の外から概念を中へ発現させれば精度が落ちるからの。それを動く槍の通過点にピンポイントで発現させれば室内にある事を疑うのは当然じゃろ？」

「なるほどなるほど……、これは迂闊でした。しかし、一つ腑に落ちない事があります。どうして私が来ると解っていたのでしょうか。」

普通は私、或いは別の人物が成り済ましている、と考える所ではないのでしょうか。あなたの推論だと私を含め何者かが成り変わっている可能性が初めから考慮されてないように見受けられますが。なにぶん若輩者である私に後学のために御教授してくださいませんか」男はもみ手をしながら再び頭を下げる。

敬っている様でその実空虚な笑みには空恐ろしさを感じる。

やはり厄介だ。

この状況においてもコイツは冷静に戦況を見極めようとしている。当初の予定としては俺の契約の精度を上げる為少し時間稼ぎをする予定だったが、コレは逆効果だったか。

パフェに思念で覚悟を送る。

これ以上の時間稼ぎは向こうを有利にするだけだと判断したからだ。
「――考慮されてないんじゃない。どちらも考慮し、結果あんたが釣れただけだ。足元のコイツが第九神の可能性もあんたが最初の奇襲のドサクサにまぎれてこの部屋に入ってくる可能性も考え付く限り色々とな。――態々一つの可能性にける理由なんてどこにもないだろ？」

俺は一步前へ出て、相手からパフェの体が隠れる様に立つ。

震える指を隠す様に拳を握りしめ、第九神を正面から見据える。

怖くない訳が無い、逃げたくない訳が無い。

俺は正義の味方でも英雄でも無い。

それでも尚ここに俺が立つのは俺が強いからじゃない。

寧ろその逆、弱いから俺はここに立っている。

右手が千切れる痛みを知っている。

左手が割かれる痛みを知っている。

そんな耐えがたい苦痛を味わう位ならいつその事楽に首を潰された方がましだ。

俺はこの道が一番楽であると知っているがゆえにこうして立っているのだ。

「確かに、その通りですね。思った以上に聡明な方だ、流石第二神様を選ばれただけの事はある。ところで……」

連続する銃声によって男の声はかき消される。

男の姿は掻き消え、そこにいた痕跡を表すかのようにその後ろの壁に6発もの銃弾が減り込んでいた。

「時間稼ぎは構わないが、俺達はあるに能力自慢しに来たわけじゃないのでな。本気で殺しに行かせてもらおう」

俺はゆつくりと体の向きを変えると、いつの間にか再び現れていた男に銃口を向ける。

先程の銃声の隙にパフェと融合し、姿は既に戦闘形態となっており、黒い衣に包まれている。

震えは止まった。

後は全力疾走するだけだ。

「……いい顔じゃ主様」

デフォルメ化されたパフエがちょこんと俺の肩に座る。

楽しそうなその顔が心強い。

「——解りました。そこまで言われると仕方ありません。私も本気で対応するとしましょう」

俺とパフエの様相を見て第九神は笑いを嗤いへと変える。

そして高らかに宣告じみた詠唱を始めた。

『概念心具第二契約？^{セカンド}nd - K A R M A - 』

罪より業へ——^{ルール}概念はシン力する。

その22（後書き）

久しぶりの後書きです。まさか更新に1カ月もかかるとは思いませんでした。

その22はどうでした？

やっと中盤（予定）にさしかかったところです。

そろそろ矛盾が発生しそうなのでびくびくしながら見直しをしています。

出来るだけ発生しないように心掛けてはいるのですが、その時のノリとテンションで適当な事を書き、後々後悔する事もしばしばあります。

第六神夢渡の正体とかもう少し引つ張ればよかったorz

そんなこんなで結構ずばらであるので矛盾や誤字を見つけたら感想なり、活動報告なり、メッセージボックスなりによりしくお願いします。

その23

『概念心具第二契約？セカンドnd - KARMA - 』

その言葉を耳にした瞬間、俺の思考は一瞬完全に停止してしまった。溢れだす神気。

発光などしていないのに歪み、真白になる視界。

夢渡が第一契約をこの程度で行った理由が解る。

今俺は契約を結んだ余波で意識を持って行かれかけた。

威力がどうか、範囲がどうか、そう言う問題じゃない。

存在するだけでコレは世界の悪夢となり得る。

さながらルルイエの浮上の様。

このマンション……いや、ここから半径数キロメートルに存在する生き物が良くて失神、最悪精神崩壊した。

そう確信できる程の神気が純真な邪気として満ち満ちた。

「くっ——！！」

何とか体勢を立て直そうと体の周りの漆黒を濃くする。

「避けるんじゃっ、主様っ！！！」

この無意識に行った行為がパフェの声に最速で反応する事に繋がり、結果として初撃を耐えきる事に繋がった。

「——っ！！？」

歪む視界で捉えた光景はサーフボードの様な太さの剣けんだった。

あまりにも長すぎて視界内では収まりがつかないほど。

それが閃光の様に奔ったと解った時、俺は13階マンションから弾き飛ばされ、上空数十メートルを飛んでいた。

無意識に漆黒の闇と共に盾にした天の瓊矛は弾き飛ばされたのか、粉碎されたのか、跡形もなく消えている。

真一文字に裂かれた体から血が迸る。

漆黒の楯を貫通し、僅かに掠ったのだ。

あと数秒遅れていたら肺と心臓が上下に分割されていたことだろう。

ぞつとする想いで傷口を凝視する。

すると、今し方进った血が目の前で煙の様に消えていった。

「――痛っ」

皮膚を針で縫われている様な痛みが新たに走る。

傷跡自体は大して深くないがコレは……。

ぶちり、ぶちりと喰われ逝く胸部を苦々しく一瞥する。

「遠心型じゃ。あの剣にはあまり触れぬ方がよいぞ。――なに、

この程度の掠り傷ならば吾に任せよ、直ぐに治す。じゃから主様は主様の役割を果たせ」

俺に付随して飛ばされながらもパフェは手を翳し、俺の胸部へ向ける。

『喰い合いならばどちらか上かの？――喰らえ！』

見えない蟲の大群に食い散らかされているかのような傷跡に漆黒の闇をぶつける。

概念による更なる上書き。

干渉されてる部位ごと漆黒の闇で包み、相手の概念ごと『浸蝕』する。

求心型でありながら、遠心型に見えるのはひとえにこの『浸蝕』と言う概念の性質の所為だ。

この特性故パフェの体の傷は即死でない限り致命傷とならない。

人間で言う急所が存在しない為文字通り肉片の一欠けらまで戦う事が出来るからだ。

踏鞴を踏みながら空中で何とか留まる。

続いて消滅していく結果。

逃がさぬ様牢獄として使う予定だった結果は硝子の様に砕け散っていた。

時間稼ぎどころか楯にすら足り得ない。

当代最強と謳われている姉貴が作った結果がだ。

最早人間が抵抗できる次元ではないのだ。

アレは核を何発撃ち込もうが破壊できる代物ではない。

「アレが概念心具第二契約、要塞系統の概念心具じゃ」

パフェの言葉を半ば受け流しながら、左手のナハトを構えようと
して気付く。

先程までマンションから突出していた剣^{ツルギ}が見当たらない。

「——ッッ!!」

曲がりなりにも契約を結んだ化物としての本能が背後に迫る殺気
を感じ取った。

——回避、否……間に合わない。

「「ならばっ——!!」」

俺とパフェの同じ思念^{こゑ}が重なり合う。

それと同時に背中から翼の様に刃が生える。

思考と動作のシンクロにより、予想を遥かに上回る速度と精度で完
成した。

この条件、このタイミングでの最高のカウンター！

もう一度同じ事をやれと言われても出来ないであろう絶妙の妙技。

突発的に生えた翼の鎌は背後にいる敵を攻撃ごと切断しようと撓む。
迫る攻撃と刃がぶつかり合う。

「……ふっ」

嘲笑かただの呼吸かそれすら判別できぬ刹那の中、まず背中に焼か
れたような痛みが走る。

そして次の瞬間、爆風のような大気をその身に浴びながら流星の様に
地面へと落下していた。

「——ぐッ!!」

即興とは言えかなりの精度で作りだした翼は背中ごと切られ、その
まま叩き落とされたのだ。

それも羽虫の様に。

音より速く地面へと落下する最中——。

「——主様っ、下じゃ!!」

パフェの叫び声が聞こえるが、とても下など見る余裕はない。

だが、まだ見ぬ脅威が下で待ち構えている事ははっきりと感じ取れ

た。

パフェの言葉と見えない恐怖も相俟って必死に漆黒の闇を操る。漆黒の闇を蜘蛛の巣の様に展開し、強制的に体を空中で静止させた。恐怖のお陰で恐らく俺は先程の同調を除けば今まで一番うまくこの漆黒の闇を操れた事だろう。

「はあ……はあ……」

体を反転させ、息を整えようとした瞬間眼前に再びあの剣つるぎが迫っていた。

「ぐッ!!」

運動を停止しようとしていた体を無理やり捻り、無様に転がる。

先程まで俺がいた地点を刃が通過する。

掠る事すら油断できないと言つのに神出鬼没の概念ルールを相手取らなければならぬのか。

ジワリジワリと実感してくる絶望感に呼吸が荒くなる。

漆黒の巣は切られると同時に消え、影となって俺達の周りに戻ってくる。

反撃はおろか、今一瞬一秒生き残る事すら危うい。

こんな事でともパフェの言った事を実行できるとは思えなかった。

——そう、第二契約を使わずに持ち直す事なんて。

十

「第二契約を使用しないとはどういう事だ？」

大まかに作戦を立てた後、俺は最後の確認をしようとしていた。

最終局面、第九神が第二契約を結んできた時の対処法だ。

俺が第一契約を結んで幅が変わるのは相手が第一契約の時のみだ。

流石にそこまで行けば後はそれまで与えたダメージに縋るよりほかはない。

と言うよりもパフェも同じように第二契約を結ぶしか選択肢がないので、形式上の確認でしかないはずだったのだが。

パフェから珍しくまじめな顔で思念が送ってきたのだ。

『第二契約は使わぬ』と。

流石にこの言葉には難色を示さずにはいられない。

「落ち着け主様、使えぬとは言っておらぬ。彼奴が第二契約を結んでも直ぐには使わぬと言っておるだけじゃ」

思わず口に出してしまいそうになった俺を一瞥しつつ、思念で咎める。

色々言いたい事はあつたが、無理やり溜飲を下げた。

「——それで、使わずに勝ち目はあるのか？」

一抹の期待を込めて、パフェを見つめる。

「まずそこが勘違いじゃ。勝ち目があるから第二契約を使わない、ではなく勝ち目が無いから第二契約を使わない、が正しい。主様よ、吾と彼奴を互角だと思つてはおらぬか？ 前に言つたじやろ、『今の吾ではどうあがいても勝てぬ』と、アレは誇張でも何でも無い単純な問題なのじゃ。何故なら、吾の第二契約を維持できる時間と吾の概念のみで第二契約状態の彼奴を削り殺せる時間とでは後者の方が圧倒的に長いからの」

「だったらどうしろと？」

第二契約でも勝てないのに第一契約状態で何をすればいい。

より死期が早まるだけにすぎない。

「珍しく思考停止かや？ 結ばれて詰むのであれば結ばせなければよい。——まあ、無理じゃろうがな。さて、問題じゃ主様、第

二契約を結ばれてしまったらどうすればいい？」

幼子を見つめるかのような瞳でパフェは俺へ問いかける。

まるで答えを既に己が口にして気付くのを待っているかの様。

「それは——」

パフェの言葉を思い出しながら、彼女が何を言わせたいのかを考える。

そして俺は二、三言い淀みながらもある選択肢を口にした。

+

「思った以上に反応が良いですねえ。元人間とはとても思えませんか」

宙に出現した第九神は電柱の様な長さの剣を片手に佇んでいた。

口元に相変わらずの嗤みを浮かべながら眼は静かに俺のダメージ具合と身体能力を観察している。

これだけの差があってもコイツは油断も慢心もしていない。

強すぎず弱すぎず、確実に抗い様の無い性能差を押しつけて殺すつもりだ。

ここで俺に求められているのは一発逆転の奇策ではなく、背水の陣による飛翔。

レベル1の勇者にそれでは魔王に勝てないから魔王と戦いながらレベルを上げると言うのだ。

無謀にも程がある。

小細工を弄さず、ただただ奇跡を願う。

必要なのは祈りではなく時間。

どれだけ粘って経験値を稼ぐかと言う事。

コイツの概念は空間転送だ。

あの心具に触れたものを何処か別の地点に消し飛ばしているのだ。

本来であればその特性故触れた部位は裂ける様に、真つ二つに消し飛ばなのであろうが、漆黒の闇とルールが競合する所為でこの程度ですんでいる。

二度も喰らったのだ、まず間違いないだろう。

「終焉神であるお前にそんな事を言われても嫌味にしか聞こえないな」

「敵同士とはいえ、称賛を受け入れて貰えないとは存外に悲しいものです。——まあ、いいでしょう。ならばこれならどうでしょうか？」

第九神は剣を地へと突き立てる。

突き立てた場所から大量のマナが溢れだし、辺りに循環し始める。パフェの情報共有からコレが何をしようとしているか理解する。

空間転移の醍醐味。

即ち、全包围からの大量召喚。

高音のハウリングと共に大気が震える。

「——来るぞ」

パフェの声と共に全力で後方へ跳ぶ。

一度に使えるマナと漆黒の闇を総動員させ、背中へと集中させる。それにより出来上がった巨大な外套が俺達を覆う。

——これで不意打ちによる正面以外からのダメージを激減させる。

安堵するもつかの間。

一瞬遅れて俺達を追尾する様に雪崩の様な大量の武器が発射される。それぞれの武器がかち合い、ぶつかり合おうとも物ともせずただただ対象を圧殺するかの如く矢次に飛び交う。

後方へ加速していたベクトルを捻じ曲げ、足場代わりに創り出した漆黒を踏み、跳躍する。

急な方向転換の余波により辺りの景色は弾け飛ぶ。

外套をはためかせ、飛翔する様に上へと逃げる。

幾ら離れていようが空間を自由に行き来できる存在を相手に油断はできない。

そもそもそれは法外の化物である終焉神には決してしてはいけない事だ。

普通の人間の感覚で俺が跳躍してから数瞬後。

爆発を伴う大地震。

例え地に足が付いていなくてもアレは地震だと解る。

ミサイルが落ちたかのような衝撃と共に巨大な谷を街に現出させた。

「……ちっ」

——どくん、と心臓とは別のナニかが波打つ。最悪だ。

なんて不愉快な気分なのだろう。

俺は今あの地点にいたであろう何十人、何百人の命を見捨てたのだ。もしかしたら奇跡的に誰もいないかもしれない。

そんな巫山戯た逃避を考える間もなく、俺は本能的に多くの魂が散

華した事を察知した。

これが契約を結んだ特典なのか、パフェからの歳暮オマケなのかは判断はつかない。

重要なのは今、この瞬間化け物同士の理不尽な争いで大勢の人が死んだ、と言う事だ。

防げる攻撃を消耗したくないと理由で俺は避けたのだ。
許される行為ではない。

それは理解している。

緊急避難だと弁明もしない。

もつとはつきり言おう、俺は見殺しにした。

だが、俺は後悔も謝罪もしない。

俺は英雄や勇者じゃない。

他人の大切なものまで抱え込めるほど大きな腕は持っていない。
だから優先順位をつける。

腕から零れ堕ちたモノは取り戻せないと知っているがゆえに。
どれを零れ落したくないか解っているがゆえに。

俺が死ねばパフェや姉貴たちが危険にさらされるのだ。

俺はこんな罪悪感で本当に大事なものを失う訳にはいかないのだ。
例え何人を見殺しにしたとしても。

——だからせめて……。

空へと上昇する中、僅かな時間に黙祷する。

一瞬とはいえ致命的な隙だったが、パフェは何も言わなかった。

「——ッ」

再び大気の震えを感じ取る。

それも今度は俺を中心に球状に展開されている。

360度全包囲死角なしの一斉射撃。

文字通り逃げ場無しの死地で俺は第九神の位置を確認する。

——思った通り動いている。

どの程度のレンジかは解らないが、少なくともこの街全てを覆える
範囲ではないと言う事だ。

一瞬思案すると、斜め上後方へ跳躍する。

それと同時に機関銃の様に次から次へと360度全包围から此方へ向けて一斉に発射された。

「――捻じれろっ!!」

外套の一部をドリルの様に螺旋を描かせ、進行方向へと覆つ。

狙うは一点突破。

「――つうツツ!!!!!!」

衝撃。

漆黒と神器の雪崩がぶつかり合い、弾け飛んでいく。

『浸蝕』とは他を侵し、削る事。

即ちこの場においてパフエの概念は最大限に効果を発揮する。

轟々と竜巻じみた風を纏いながら漆黒は進んでいく。

幾重にも砕け、弾け飛ぶ数多の神器。

しかしそれよりも遥かに多い数が次から次へと押し寄せてくる。

傘を差しても雨を全て遮れないと同じ様に、俺達の体にも次々と小さな打撲や裂傷が生まれる。

コレは俺達を殺す為の攻撃ではない。

消耗させる為の攻撃だ。

それでも、いやだからここで止まる訳にはいかない。

総力での消耗戦ならば圧倒的に相手に歩があるからだ。

「づおおおおおおッ!!!!」

はち切れそうな位に全身に力を込め、一步一步宙を踏み抜いていく。濁流を逆に進みながらも僅かずつ加速していく。

パフエは俺の背後からたまに來る神器を叩き落としていた。

――このペースならあと数秒で……。

そんな事を思い浮かべた矢先だった。

「……………え？」

不意に漆黒から圧力が消える。

顔を上げた俺の目に飛び込んだのは球の表面状に展開された複数の魔法円。

後悔ではない。

俺の選択した道と今現在歩いている道に齟齬を感じるのだ。
今のままでは絶対に勝てない。

これは必然だ。

契約の深度が違う。

心具の性能が違う。

概念の純度が違う。

抵抗は出来るが対抗は出来ない。

俺はあいつに勝てる様に進化する必要があつて、その為には時間を稼ぐ必要があつた。

だから俺のしてきた事は間違ひではないはずだ。
ならばこの違和感は何所を源泉としている？

俺は何に戸惑いを感じている？

『SINとは――』

パフェの声が甦る。

――そうだ。

あの子の言葉をよく思い出せ。

字面ではなく言葉の意味を理解しろ。

俺が何を履き違えてしまったのかを。

その瞬間、時が止まったかのように停滞し、あの時の光景が脳裏に浮かぶ。

その24

「SINとは、概念・第一契約・心具の3つを束ねた状態を指す。神と呼べる状態になるだけならば契約だけでも事足りるが、それは飽くまで肉体だけじゃ。真の意味で神になるのであれば己の残りの部分である精神と魂の神化、つまり概念と心具の具現・具象化じゃ。第三神と戦った時、主様は契約と概念はまあ、ギリギリもギリギリの及第点じゃが、使えておる。じゃが、心具、これに関して言えば点でダメじゃ」

「ダメじゃ、と言われてもな。その『SIN』とやらが使えないと相手に概念干渉出来ないんだろ？」

時間が迫る中、俺はパフェに俺の選んだ道を実行する為のやり方を聞いていた。

俺の選んだ道、即ち第九神を倒す術。

パフェ一人では第九神を倒す事は理論上詰んでいると言う。

これは求心型という特性上仕方無の事であり、これを覆すには新たな攻撃手段が必要となる。

終焉神に効く最も有効的な攻撃手段は概念心具による概念干渉だ。

契約や終焉神と言う存在もアレだが、正直に言うと概念干渉が一番反則技と言えば反則技だ。

競技でも試合でも殺し合いでも、概念^{ルール}の押しつけに勝る攻撃手段はない。

要するにパフェとは別の概念干渉で第二契約が切れる前に敵を塗りつぶす事。

この選択をパフェは俺に言わせたかったわけで、その別の概念とはすなわち俺の概念^{ルール}になる訳だ。

ここで問題が一つ浮上してきた。

手段が解っているなら後はご都合主義の気合で何とかしろ、普段ならば言われそうなのだが珍しくパフェは俺がそれを今現在出来ない

理由を教授してきた。

それが冒頭のあれに繋がる訳である。

「出来ぬ。そも概念は魂の指向性を表すものであり、それ単体では武器になり得ぬものじゃ。契約により心具に概念を同化させて初めて概念干涉出来るのじゃ、ここで何れかが欠け、三位一体で無くなると各々とのバランスに支障をきたし仮に扱えたとしても『S I N』の力の数割も引き出せんようになる。じゃから吾は先に心具から練習させたのじゃ。主様が心具を創れない事は目に見えていたのので、俺は契約さえ結べば概念干涉出来ると思っていた。

なので第三神との模擬戦では第一契約が結べるよう心がけていた。しかしパフェは心具・契約・概念の三つの独立した要素を高めた状態『S I N』と言うものを使わないと出来ないと言う。

おまけに俺が心具を創れない事をあらかじめわかっていたみたいだ。……どう言う事だ？」

純粹な疑問としてパフェに尋ねる。

また思考放棄と詰られそうだがとにかく今は時間が無い。

「幾ら主様に潜在能力があろうとも、昨日今日の切羽詰まらぬ鍛錬で出来るはずが無いじゃ。概念と第一契約が及第点なのは主様の魂と体が吾と半ば同化しておるからじゃ。故に心具さえ完成できれば形上『S I N』が使えると言う事になる」

「だったら俺は第九神との戦いの中で心具を創ればいいと言う事がパフェはY E Sと言う様に片目を閉じる。

「一度言ったかもしれないが心具とは心象風景を具現化させたものじゃ。即ち心具として出てくるものはその者の心象風景にそれが存在すると言う事じゃ、剣ならば剣、槍ならば槍、銃ならば銃とな。それは……そうじゃな、主様らで言う祈りに似ておる。宗教の神の正体が何であるか知っておるか？ 信仰者の祈りじゃよ。アレは主様らの様々の思いの混ざり合った集合体じゃ。だからここまで人にとって都合のいい存在なのじゃ。もちろん全てが全てとは言わぬが、幾つかの神は主様らが作り出した心具なのじゃ」

パフエはもう一度俺へ心具の説明をする。

よく考えるとんでもない事を言っている。

場所が場所なら火刑にされても仕方が無い位の事は言っている。
だいたい、神は魂の差分の帳尻合わせで出来るのでは……。

と思った所である事を思い出す。

その差分で生まれる神は肉体を持たぬ神だとパフエは言った。

肉体を持たぬ神。

雑霊、妖怪、精霊、そして神などが信仰により『幻想』から『現実』へ定着した存在。

それが俺の知るこの世界の神の定義。

だが、パフエたち終焉神を見て思い知った。

なんだ、コレと比べたら塵屑じゃないか、と。

だが、よく考えてみるとパフエはそれらを一度も神ではないと否定しなかった。

言った言葉は一つ、肉体を持たぬ神。

言わばそれはパフエがそいつらの事を神として認めていると言う事。
つまりその力はパフエたちの力と同種だと言う事。

その身に刻まれた歴史の数で強さが決定する何とも他人任せな能力が、だ。

ならばその歴史とは何か。

それは宗教とは何か、人々は何のために祈るのか、を考えればわかる。

宗教とはすなわち人を救う為にある。

祈りとはすなわち人を救ってほしいから行う。

大前提、この二つは窮地に立たされない限り発生し様が無いのだ。

極論、人が大勢死ななければ発生しないのだ。

救ってほしい、幸せになりたい、助けてほしい。

神の歴史とは奇跡の御業に他ならない。

詰まる所真偽偶然関係なく、救われた、幸せになった、助かったと祈った本人が思えば、それは神の御業、即ち奇跡となる訳だ。

俺は肉体を待たず、物理法則を無視してこの世に存在できるがゆえにそいつらは神なのだと思っていた。

だが違うのだ。

パフエは俺に契約は身体のみしか神にならないと言っていた。ならば何がこいつらを神としているのだろう。

たましい概念・契約・からだ心具。

この三つを神格化させてこそ『SIN』が使えると言ったのだ。即ちそれぞれの神格化があるはずなのだ。

そう、パフエが言った様に祈りで生まれる神とは精神の神格化。つまり心具の具象化なのだろう。

一人では創れぬ心具も、何十何百何千何万と言う人が同じ事を祈れば真となる可能性が出てくる。

問題はこれを俺一人でやらねばならないと言う事だろう。つまり――。

「つまり、心具を創り出す最大の鍵は『祈り』と言う事か？」
やや興奮気味の思考を落ちつけて、パフエが俺に伝えたかったであろう言葉を確認する。

先程達した結論は胸の奥底にしまったままで。

この時の俺は迫る時間との焦りで結論を急いってしまったのだ。

だからこそ次のパフエの言葉を履き違えてしまった。

悟るのではなく理論的に解釈してしまった。

窮地に陥った時の祈りこそ心具へと昇華するのだ、と。

「そう『祈り』とそして『覚悟』じゃ。言葉で詳しく説明できるものではないが……祈りとは刹那で永遠じゃ。次がある、まだ時間がある、何とかなる。――そんな覚悟で臨んでくれるな、高根の花は手が届かぬから高根の花なのじゃ、それを摘み取ってしまったはそのらの野花と変わらぬ。己が祈りを卑下するものに心具は創れぬ、そこだけは覚えてほしい」

――そうだな、要はそう言う事だよな。
パフエの言葉を臆けながら理解する。

俺が思った事もあながち間違いではない。

行動には変わりはないだろう。

ああ、行動は間違っではない。

だが、自分を追い詰め、時間を稼いだところでそれは結局逃げでしかない。

何時か出来るが、今は出来ないと言っている様なものだ。

『SIN』を使える可能性を極限まで上げる？

そんなもの掴み取れなかった者の言い訳に過ぎない。

一度失わなければ、失いかけなければ覚醒出来ない主人公など偽善で欺瞞以上の何があるのだろう。

『祈り』とは神聖視する何かと対話する行為だ。

先程までの俺の困った時の神頼みと一緒にすること自体烏滸おしがましい間違いなのだ。

何故『SIN』を使おうとも使わなくても俺が倒すと思わなかった？

実力差？ 契約の差？

そんなもの言い訳に過ぎない。

精神ですら奴に勝てないと思っている俺の『祈り』が高尚な訳が無い。

それこそ結局最後はパフェが何とかしてくれるだろうという甘えに他ならない。

俺一人では奴を倒せないと信じ切っている心象こそが、俺の『祈り』を邪魔しているのだ。

だから俺が祈るの対象はご都合主義の神様ではなく、心の中の神。

良心、善意、正義、丹心、信義、心奥。

どれでもいい。

どれに該当するかなどに意味はなく、該当しなくてもかまわない。見方など千差万別なのだから。

重要なのはそれを『幻想』と烙印を押されても揺るがぬほどの妄信をする事。

『現実』を跳ねのけて俺の心象領域は存在できるのだと信仰する事。

故に時も風景も匂いも音も攻撃も……。

——見えぬ聞こえぬ感じぬ効かぬ。

己が祈りこそが至高と信ずるがゆえに、それらの事象は俺の中で意味を為さない。

その瞬間、何かパズルの様に力チリと嵌った。

思えば始めからパフエは解っていたのだ。

自分一人ではどうあがいても勝てない事に。

冗談めかして何度かそれらしい事を言っではいたが、パフエは一度だって俺に行動の強制はしてこなかった。

有無を言わさぬ言葉遣いも多々あったが、それでも最終的には俺の自由意思に委ねていた。

それはなぜか？

パフエの性格的なものもあるのだろうが、そうじゃない。

俺が他人の『祈り』に共感しても意味はないのだ。

それでは心具は創れない。

所詮借りものにすぎない心象領域など不確かで具現できるものではないのだから。

だからお前はそれを言わずに黙って見ていたんだよな。

ありがとう、もう迷いはしない。

「必ず俺自身の腕で護りきってみせる」

誓いの言葉を口にする。

その瞬間景色は太陽が織りなす大灼熱地獄の最中に戻ってきた。

——それを実行する為にまずは……。

全マナを動員して周りの爆炎を弾き飛ばす。

その代償として漆黒の外套を殆ど失う。

俺達を護る楯はもうない。

「——何を……ですか？」

案の定球の外で待ちうけていた第九神が無防備となった俺へ神器を射出する。

「——ッッッッッ！！！！！」

針鼠の様に俺の体を神器が貫く。

一つ一つが部位を破壊する為ではなく、俺をその場に繋ぎ止める楔の様に打ち込まれている。

「——主様っ！！？」

パフエの悲痛な声が聞こえる。

痛みで体が傾いていきそうになるのを、踏みとどまる。

倒れはしないが、今折れれば二度と立ち上がれなくなる。

これで『次への道』は？がれた。

次に来るアレを防ぐにはもう飛翔^{シン}しかない。

——天の瓊矛。

混沌を殺す為の神器。

パフエの概念でアレを防いではだめだ。

飲み込めば飲み込むほど猛毒の様にアレの概念^{ルール}が体に染み込んで混ざり合ってしまう。

相討ちかそれ以上には出来るが、その先に未来はない。

故に俺の概念で止めるより他はない。

極限にまで停滞した時の中、天の瓊矛が迫る。

掴みかけてはいるが、心具は未だ完全に具現化してはいない。

その上で俺は『S I N』を使わねばならない。

結局、ぶつつけ本番しかないのだ。

努力で辿りつこうとするのなら時間がかかり過ぎるから。

「——」

と、俺は一抹の不安がよぎる。

祈りは今も揺るぎなくある。

『S I N』を使う事に疑念も一切無い。

ただ、何かが足りないのだ。

この心象^うを世界に流れ出させる何か。

『そうやってギリギリまで延ばして死にかけて覚醒、の。出来なければ出来ないで死ぬだけ。やはり夢を見過ぎじゃろ。守りたいんじゃない？ 力が欲しいのじゃろ？ ならばその為^うに何を捨てれる、何

を捧げれる。吾が見たいのはそう言う覚悟じゃ』

ふと『混沌の闇』の言葉が甦る。

そうだ、パフェも言っていた、必要なのは覚悟だと。

あの時は意味が解らなかったが今なら解る。

心の壁を開き心奥を晒す覚悟。

俺の心具がここに存在するのだから触るな、穢すな、邪魔するな、見る、讃える、評価しろ、と。

誰も触れさせたくない、でも誰か見てほしいと言う相反する感情。

傷付けられたくはないが、見もしないで無価値だと断じられたくも無い。

人の根源に存在する潜在的欲求。

即ち自己顕示。

これこそが心象具現礼装への最後の一步なんだと。

最後のピースが嵌り、絵が完成する。

——取り零したくない、掬いあげたい、この腕で掴みたい。

己が腕が取り零すのを知っているから。

己が腕が小さく、誰も彼もに届かぬと知っているから。

故に——大きく取り零さぬ腕が欲しい。

『概念心具第一契約？ファーストst-SIN-』

『祈り』と共に罪^{シン}へ繋がる詠唱を口にする。

刹那、俺の伸ばした腕が天の瓊矛を捕らえた。

+

静寂——。

カノンが伸ばした腕は確かに天の瓊矛を捕らえていた。

空間から転移した場合であれば間違いなく受け止められたであろう。

彼は間違いなく奇跡を起こしたのだ。

彼らに唯一誤算があるとすれば、第九神もまた奇跡を信じていた事だろう。

神の御技を彼が使うと読みきったのだ。

槍自体を転移させるのではなく己自ら転移し、貫きに行った。

幾ら概念心具を創ろうとも、契約の差により身体能力が違う。単純な力比べで第二契約に第一契約が勝てる道理はない。

故に槍はカノンの腕を振り払い、目標を貫いた。慢心しない強者とは斯くも強い。

弱者の知恵と強者の力を兼ね備えているからだ。

それは第九神の微妙な立ち位置の所為だ。

終焉神ではあるが終焉神の中では下から数えた方が速い部類。

どんな敵でも圧倒する強さも無く、かと言って弱い訳でも無い。

必然的に第九神が戦う為には創意工夫と不測の根絶が必要であった。

その二つの要因が第九神ティルロイン「コミットを九と言う数字を維持できている理由だ。

だからティルロインが違和感に気付いたのも当然のことだった。

「——第二神が……いない？」

先程まで妖精の様にカノンに付随していたパフェの姿は何処にもいない。

僅かに視線を周囲に向けたティルロインが出した答えは再び『偽物』^{ダメージ}だと言う事。

室内で人間を操っていた時は気付けなかったが、同じ手は喰らわれない。

そう思い、ティルロインは天の瓊矛を抜こうとする。

「——っ!？」

心臓めがけ突き出された腕を体を捻り、肩へと逸らす事でダメージを軽減する。

ソレを逸らせたのは勘、と言うよりも幾度も繰り返してきた反復ゆえの反射行動。

心臓を天の瓊矛で貫かれたままのカノンが攻撃を行ってくるなど、ティルロインの思慮外の事だった。

何故——。

と思うよりも速く、ティルロインはその場を離脱する。

肩へのダメージは僅かに裂け、血が滲む程度。

その油断が命取りと言う事ティルロインはいやと言うほど思い知っている。

故に一時離脱。

その慎重な選択は時として読まれ、相手に踏み込まれる悪手となり得る。

『吾が業を写し取り、現世へと再現せよ。——アクセス』

嬉々とした声と共に躍り出るのは漆黒の髪を揺らす少女。

妖精と揶揄される程の大きさが辺りに渦巻く神気は今までの比ではない。

何故なら今、このタイミングで彼女は第二契約を結んだのだから。

第二神パフェヴェエイルムⅡヒアスⅡファノレシス。

ティルロインが離脱する事を解っていたかのように出現し、渦巻く漆黒を叩きこむ。

それを防ぐため、反射的に右手に持った概念心具で斬りつけようとする。

「は？」

その瞬間ティルロインは完全に思考が停滞した。

カノンが生きていた事が意表であれば、それが反撃した事もパフェが待ち構えていた事も立て続けに意表を突いた形となる。

だからこれが極め付けだった。

突然の事態に右肩が動けなくなるなど、彼にしてみれば完全に想定外の出来事であろう。

「こんなはずじゃなかった、かや？ 解っていたはずであろう？」

吾らが今この瞬間だけを狙っていた事に」

押し寄せる漆黒の波をギリギリのところで転移が間に合い、回避する。

ここでやっとティルロインはこの逆転劇は天の瓊矛を掴んだ所から始まっていた事を理解した。

動かない右肩、混沌殺しの役目を果たさなかった天の瓊矛。

それら全てカノンの右手に触れたモノばかりがこの異常を引き起こ

した。

即ち概念干渉。

つまり彼は己の概念を知っていたのだ。

その上で、まるで奇跡の様に間一髪で発動した様に見せかけた、と言う事。

相手が慢心しないのであれば、己を過小評価させ、見誤らせる。

見事な演技だとティルロインは感心せざる負えなかった。

勿論ティロインはそれらの可能性も考慮していた。

事実ティルロインは彼を成り上がりの神では有り得ないほどに過大評価していた。

ならば何故見誤ったのか。

何が命運を分けたかと言えば数時間前の第三神、第七神との遭遇である。

もし、カノンが第三神と模擬戦をしなければ結果は変わっていただろう。

模擬戦が彼に概念の性質を理解させる手助けとなった。

結果彼がここまで出来るだろうと大きく見積もっていたティルロインの予想を超え、この逆転劇を生み出したと言う訳だ。

「これは——っ！——」

迫りくる漆黒の波を次々とかわしながら己がワンテンポ遅れた事に気付くティルロイン。

『皆既日食————朔夜の姫』
プリンセスオブイクリプス

パフェの声と共に辺りの空間全てを漆黒の闇で覆い尽くされる。

歪んだ表情を直そうともせず、ティルロインは僅かな光すら許されない空間での戦況を再演算し始める。

「随分待たせてしまったな」

ゆらりともう一人の気配が出現する。

空間転移などではない。

当たり渦巻く混沌の闇でこの距離まで近づかないとティルロインは感知できなくなったのだ。

闇とは視覚を奪うだけのものではない。

ましてや影と混同するものでも無い。

闇の本質とは全てを覆い隠し、認識不能にするところにある。

箱の中身を見なければ猫が生きているか死んでいるか解らない。

確認しなければ物事の正誤は解らない。

即ち確認さえさせなければ幾らでも自由に想像することが出来ると言う事。

この闇の本質と言うのはつまるところそう云うモノだ。

「――逃がしはしない。妥協はしない。取り零しはしない。俺達とお前はここで死ぬか生きるかのどちらか一つだ。さあ、ここから本番と行こうじゃないか」

光の絶えた空間の中、右腕だけが陰影を浮き彫りにし、カノンは第九神をパフエと挟む形で佇んでいた。

その右腕の形状はいつか見た純白の腕を彷彿させ、またソレとは相違である事を示していた。

異形でありながら漆黒の美しい装甲に包まれてソレは存在している。

概念心具第一契約？ファーストSet-SIN-。

たましい概念、せいしん心具、からだ契約。

全てを組み合わせ、創り出される対神兵器『SIN』

ここに舞台は整おり、第二幕が幕を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5232n/>

Demise

2011年11月14日23時11分発行